

京都府遺跡調査報告集

第149冊

1. 京都第二外環状道路関係遺跡
長岡京跡右京第946・969・1006次、鈴谷遺跡
2. 長岡京跡右京第1031次(7ANKSM-17地区)・開田遺跡
・開田古墳群
3. 長岡京跡右京第1027次(7ANSMD-10地区)・松田遺跡
4. 長岡京跡左京第547次(7ANYHD-1地区)
5. 椿井遺跡第5次

2012

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



長岡京跡 調子地区全景(合成写真、上が北)



鈴谷遺跡 高山地区Aトレンチ全景(南東から)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは昭和56年4月に設立され、昨年度で創立30年を迎えました。また、昨年4月1日には公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターと法人名を変更いたしました。この間、当調査研究センターでは京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成21～23年度に国土交通省近畿地方整備局、西日本高速道路株式会社関西支社、京都府建設交通部、京都府流域下水道事務所、京都府山城土地改良事務所の依頼を受けて実施した、長岡京跡・鈴谷遺跡・開田遺跡・開田古墳群・松田遺跡・椿井遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・京都市文化市民局・長岡京市教育委員会・木津川市教育委員会・大山崎町教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 上田正昭

例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりである。

1) 京都第二外環状道路関係遺跡

長岡京跡右京第946・969・1006次、鈴谷遺跡

2) 長岡京跡右京第1031次(7ANKSM-17地区)・開田遺跡・開田古墳群

3) 長岡京跡右京第1027次(7ANSMD-10地区)・松田遺跡

4) 長岡京跡左京第547次(7ANYHD-1地区)

5) 椿井遺跡第5次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第946・969・1006次・鈴谷遺跡	長岡京市調子2丁目、友岡、奥海印寺高山・原田・鈴谷	平成20年6月17日～平成21年2月17日・平成21年4月8日～12月22日・平成22年8月23日～11月10日	国土交通省近畿地方整備局	中川和哉・黒坪一樹・戸原和人・竹原一彦・奈良康正・古川 匠
2.	長岡京跡右京第1031次(7ANKSM-17地区)・開田遺跡・開田古墳群	長岡京市開田2丁目	平成23年10月24日～11月25日	京都府乙訓土木事務所	奈良康正
3.	長岡京跡右京第1027次(7ANSMD-10地区)・松田遺跡	乙訓郡大山崎町宇円明寺小字松田	平成23年8月1日～10月6日	西日本高速道路株式会社関西支社	石尾政信
4.	長岡京跡左京第547次(7ANYHD-1地区)	京都市伏見区淀大下津町	平成23年8月17日～10月27日	京都府流域下水道事務所	田代 弘
5.	椿井遺跡第5次	木津川市山城町椿井松尾・松尾崎	平成23年7月11日～8月19日	京都府山城広域振興局	奈良康正

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。なお、現地調査及び過去の調査との整合性のため日本測地系を使用している場合もある。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。

5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 京都第二外環状道路関係遺跡発掘調査報告	1
2. 長岡京跡右京第1031次(7ANKSM-17地区)・開田遺跡・開田古墳群発掘調査報告	117
3. 長岡京跡右京第1027次(7ANSMD-10地区)・松田遺跡発掘調査報告	125
4. 長岡京跡左京第547次発掘調査報告	137
5. 椿井遺跡第5次発掘調査報告	141

挿図目次

1. 京都第二外環状道路関係遺跡

第1図 調査地位置図及び周辺主要遺跡	2
第2図 調査地位置図	6
第3図 b地区調査地位置図	8
第4図 b1地区 位置図	11
第5図 b1地区 土層柱状図	11
第6図 b1地区 遺構配置図	12
第7図 b1地区 井戸SE01 平・断面図	13
第8図 b1地区 出土遺物実測図	14
第9図 b2地区 遺構配置図	15
第10図 b2地区 遺構配置図	15
第11図 b2地区 平・断面図	16
第12図 b2地区 出土遺物実測図(1)	17
第13図 b2地区 出土遺物実測図(2)	19
第14図 b2地区 出土遺物実測図(3)	20
第15図 b2地区 出土遺物実測図(4)	21
第16図 b3地区 位置図	22
第17図 b2地区 平・断面図	23
第18図 b3地区 出土遺物実測図	24
第19図 b4地区 位置図	25
第20図 b4地区 平・断面図	25
第21図 b5地区 位置図	26
第22図 b5地区 平面図	26

第23图	b 5 地区	出土遺物実測図	26
第24图	b 6・7 地区	位置図	27
第25图	b 6 地区	遺構配置図	27
第26图	b 6・7 地区	出土遺物実測図	28
第27图	b 7 地区	平・断面図	29
第28图	b 8-1 地区	位置図	30
第29图	b 8-1 地区	遺構配置図	30
第30图	b 8-1 地区	池状遺構 S K12 平面図	31
第31图	b 8-1 地区	池状遺構 S K12 土層断面図	32
第32图	b 8-1 地区	土坑 S K35・37・38 平・断面図	33
第33图	b 8-1 地区	土坑 S K40 平・断面図	34
第34图	b 8-1 地区	土坑 S K55・56 平・断面図	35
第35图	b 8-1 地区	土坑 S K63 平・断面図	36
第36图		出土遺物実測図(1)	37
第37图		出土遺物実測図(2)	38
第38图		出土遺物実測図(3)	39
第39图		出土遺物実測図(4)	41
第40图		出土遺物実測図(5)	42
第41图	b 8-2 地区	位置図	43
第42图	b 8-2 地区	南壁断面図	43
第43图	b 8-2 地区	第1 遺構面遺構配置図	44
第44图	b 8-2 地区	第2 遺構面遺構配置図	45
第45图	b 8-2 地区	井戸 S E152 実測図	46
第46图	b 8-2 地区	土坑 S K108・153 実測図	47
第47图	b 8-2 地区	S B110・138 実測図	47
第48图	b 8-2 地区	池状遺構 S G146 実測図	48
第49图	b 8-2 地区	第3 遺構面遺構配置図	49
第50图	b 8-2 地区	土坑 S K184・188 実測図	50
第51图	b 8-2 地区	出土遺物実測図(1)	51
第52图	b 8-2 地区	出土遺物実測図(2)	52
第53图	b 8-2 地区	出土遺物実測図(3)	53
第54图	b 9 地区	位置図	54
第55图	b 9 地区	遺構配置図	54
第56图	b 9 地区	断面図	55
第57图	b 9 地区	出土遺物実測図	56

第58図	b10地区	位置図	56
第59図	b10地区	平・断面図	57
第60図	d1～3地区	位置図	58
第61図	d1地区	平・断面図	58
第62図	d2・3地区	平・断面図	59
第63図	b8-3地区	位置図	60
第64図	b8-3地区	上層遺構平面図	61
第65図	b8-3地区	下層遺構平面図	62
第66図	b8-3地区	掘立柱建物跡SB271・272、井戸SE204実測図	63
第67図	b8-3地区	土坑SK238、柱穴SP227・235・236実測図	65
第68図	自然流路NR54	変遷図	66
第69図	b8-3地区	西壁断面図	66
第70図	b8-3地区	自然流路NR54a～c平面図	67
第71図	b8-3地区	自然流路NR54土層図(1)	68
第72図	b8-3地区	縄文・弥生時代遺構平・断面図	70
第73図	b8-3地区	出土遺物実測図(1)	73
第74図	b8-3地区	出土遺物実測図(2)	77
第75図	b8-3地区	出土遺物実測図(3)	78
第76図	b8-3地区	出土遺物実測図(4)	80
第77図	b8-3地区	出土遺物実測図(5)	82
第78図	調子地区	旧流路配置図	85
第79図	調査地	位置図	89
第80図	調査区	位置図	91
第81図	鈴谷地区	トレンチ配置図	92
第82図	高山地区	トレンチ配置図	93
第83図	Aトレンチ	平面図	93
第84図	Aトレンチ地区	割り図・土層位置図	94
第85図	Aトレンチ	南西壁土層図	94
第86図	Aトレンチ	北壁・北東壁①・②土層図	95
第87図	Aトレンチ	遺構配置図	96
第88図	横穴式石室SX01	実測図	98
第89図	横穴式石室SX01	土層図	99
第90図	ビットSP170	実測図	100
第91図	土坑SK90	および周辺遺構平面図	101
第92図	ビットSP130・150・160・175、土坑SK140・200	実測図	102

第93図	高山A・鈴谷Cトレンチ出土遺物実測図	104
第94図	横穴式石室S X01出土遺物実測図	104
第95図	土坑S K90出土遺物実測図	105
第96図	土坑S K90周辺出土遺物実測図	106
第97図	土坑S K140・160、不明遺構S X105、ピットS P96・133出土遺物実測図	107
第98図	ピットS P185・187、溝S D198、土坑S K200出土遺物実測図	108
第99図	第13層出土遺物実測図	109
第100図	縄文土器実測図	110
第101図	石器実測図	110

2. 長岡京跡右京第1031次・開田遺跡・開田古墳群

第1図	調査地周辺主要遺跡配置図	117
第2図	トレンチ配置図	118
第3図	1・2トレンチ遺構配置図	119
第4図	各トレンチ土層断面図	120
第5図	3・4トレンチ遺構配置図	121
第6図	溝S D01遺物出土状況図・土層断面図	122
第7図	出土遺物実測図	123

3. 長岡京跡右京第1027次・松田遺跡

第1図	調査地及び周辺遺跡位置図	126
第2図	調査地配置図	127
第3図	1・2トレンチ遺構配置図	128
第4図	1・2トレンチ土層断面図	129
第5図	2トレンチ 集石1実測図	130
第6図	2トレンチ S D01実測図	131
第7図	出土遺物実測図(1)	132
第8図	出土遺物実測図(2)	133
第9図	周辺調査地遺構配置図	136

4. 長岡京跡左京第547次

第1図	調査地位置図	137
第2図	調査地平面図	138
第3図	土層断面図	139

5. 椿井遺跡第5次

第1図 調査地及び周辺遺跡位置図	143
第2図 調査トレンチ配置図	144
第3図 1トレンチ 平・断面図	145
第4図 2～5トレンチ 土層断面図	146
第5図 出土遺物実測図	147

付 表 目 次

1. 京都第二外環状道路関係遺跡

付表1 調子地区調査次数・地区一覧	7
付表2 出土遺物観察表(土器)	113
付表3 出土遺物観察表(石器)	116

2. 長岡京跡右京第1031次・開田遺跡・開田古墳群

付表 開田古墳群東羅支群一覧	124
----------------	-----

図 版 目 次

巻頭図版1 京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡 調子地区全景(合成写真、上が北)	
巻頭図版2 京都第二外環状道路関係遺跡 鈴谷遺跡 高山地区Aトレンチ全景(南東から)	

1. 京都第二外環状道路関係遺跡

図版第1 (1) b 1 地区空中写真(上が北)	
(2) b 2・3・4 地区空中写真(上が東)	
図版第2 (1) b 2 地区井戸SE01検出状況(北から)	
(2) b 2 地区井戸SE01掘削状況(北西から)	
(3) b 2 地区溝SD05(東から)	
図版第3 (1) b 2 地区流路跡(南から)	
(2) b 2 地区流路跡完掘状況(南から)	
図版第4 (1) b 2 地区流路跡土層断面(北西から)	
(2) b 2 地区流路跡土層断面(南西から)	
図版第5 (1) b 2 地区流路4(南東から)	

- (2) b 2 地区流路 4 内弥生土器出土状況(南から)
- (3) b 2 地区流路 4 最下底掘削状況(北東から)
- 図版第 6 (1) b 3 地区中世水田跡検出状況(東から)
- (2) b 3 地区水田跡 1 (東から)
- 図版第 7 (1) b 4 地区完掘状況(北から)
- (2) b 5 地区完掘状況(北から)
- 図版第 8 (1) b 1 地区出土遺物
- (2) b 2 地区出土遺物
- 図版第 9 (1) b 2 地区出土遺物
- (2) b 1・2 地区出土遺物
- 図版第 10 b 1・2・3 地区出土遺物
- 図版第 11 (1) b 6 地区全景(西から)
- (2) b 6 地区全景(南から)
- (3) b 7 地区全景(東から)
- 図版第 12 調査地全景(上が北)
- 図版第 13 (1) b 1 地区 S K 12完掘状況(上が東)
- (2) b 1 地区 S K 12完掘状況(北から)
- (3) b 8-1 地区 S K 12完掘状況(南東から)
- 図版第 14 (1) b 8-1 地区 S K 12北側土層断面(北から)
- (2) b 8-1 地区 S K 12南側土層断面(北から)
- (3) b 8-1 地区 S K 12南端溝状遺構(南から)
- 図版第 15 (1) b 8-1 地区 S D 33・34全景(北西から)
- (2) b 8-1 地区 S K 35・S P 61完掘状況(南から)
- (3) b 8-1 地区 S K 37完掘状況(南から)
- 図版第 16 (1) b 8-1 地区 S K 38完掘状況(北から)
- (2) b 8-1 地区 S K 40完掘状況(北から)
- (3) b 8-1 地区 S K 40遺物出土状況(南から)
- 図版第 17 (1) b 8-1 地区 S K 55遺物出土状況(南東から)
- (2) b 8-1 地区 S K 56完掘状況(北東から)
- (3) b 8-1 地区 S K 56遺物出土状況(北西から)
- 図版第 18 (1) b 8-1 地区 S K 57・58完掘状況(南から)
- (2) b 8-1 地区 S K 63完掘状況(南から)
- (3) b 8-1 地区 S K 63遺物出土状況(西から)
- 図版第 19 (1) b 8-1 地区出土遺物 1
- (2) b 8-1 地区出土遺物 2

- 図版第20 b 8 - 1 地区出土遺物 3
- 図版第21 (1) b 8 - 2 地区全景(上が東)
(2) b 8 - 2 地区全景(上が南)
- 図版第22 (1) b 8 - 2 地区全景(上が北)
(2) b 8 - 2 地区全景(上が西)
(3) b 8 - 2 地区第 1 遺構面(東から)
- 図版第23 (1) b 8 - 2 地区南西部(北から)
(2) b 8 - 2 地区南半部(西から)
(3) b 8 - 2 地区南東部(南から)
- 図版第24 (1) b 8 - 2 地区池状遺構 S K 146(北から)
(2) b 8 - 2 地区南半中央部(東から)
(3) b 8 - 2 地区井戸 S E 152(東から)
- 図版第25 (1) b 8 - 2 地区井戸 S E 152下段検出状況(東から)
(2) b 8 - 2 地区井戸 S E 152曲物検出状況(東から)
(3) b 8 - 2 地区井戸 S E 152井戸底検出状況(東から)
- 図版第26 (1) b 8 - 2 地区井戸 S E 119検出状況(北から)
(2) b 8 - 2 地区土坑 S K 108検出状況(東から)
(3) b 8 - 2 地区土坑 S K 184遺物出土状況(南から)
- 図版第27 (1) b 8 - 2 地区井戸 S E 119完掘状況(南から)
(2) b 8 - 2 地区土坑 S K 185完掘状況(東から)
(3) b 8 - 2 地区土坑 S K 187完掘状況(南から)
- 図版第28 b 8 - 2 出土遺物 1 (番号は挿図に対応)
- 図版第29 b 8 - 2 出土遺物 2 (番号は挿図に対応)
- 図版第30 (1) b 8 - 2 出土遺物 3 (番号は挿図に対応)
(2) b 8 - 2 出土遺物 4 (番号は挿図に対応)
- 図版第31 b 8 - 2 出土遺物 5 (番号は挿図に対応)
- 図版第32 (1) b 9 地区全景(北西から)
(2) b 9 地区全景(南から)
(3) b 9 地区 S D 02断面(北西から)
- 図版第33 (1) d 1 地区重機掘削状況(南から)
(2) d 1 地区調査地全景(北西から)
(3) d 1 地区地境溝検出状況(北東から)
- 図版第34 (1) d 2 地区重機掘削状況(南東から)
(2) d 2 地区調査地全景(南西から)
(3) d 2 地区調査地全景(北西から)

- 図版第35 (1) d 3 地区重機掘削状況(南東から)
 (2) d 3 地区調査地全景(北東から)
 (3) d 3 地区南断面(北西から)
- 図版第36 (1) b 8 - 3 地区全景(北西から)
 (2) b 8 - 3 地区全景(南から)
- 図版第37 (1) b 8 - 3 地区自然流路 N R54(左が北)
 (2) b 8 - 3 地区南東部遺構分布状況(南から)
- 図版第38 (1) b 8 - 3 地区近世遺構面調査状況(北西から)
 (2) b 8 - 3 地区近世遺構面溝々群(南西から)
 (3) b 8 - 3 地区掘立柱建物跡 S B271(北から)
- 図版第39 (1) b 8 - 3 地区井戸 S E204調査状況(南から)
 (2) 井戸 S E204完掘状況(南から)
 (3) 井戸 S E204石組み状況(南から)
- 図版第40 (1) b 8 - 3 地区柱穴 S P227(東から)
 (2) b 8 - 3 地区土坑 S K238(東から)
 (3) b 8 - 3 地区柱穴 S P235(東から)
- 図版第41 (1) b 8 - 3 地区西部遺構検出状況(北東から)
 (2) b 8 - 3 地区土坑 S K225(東から)
 (3) 土坑 S K225完掘状況(北から)
- 図版第42 (1) b 8 - 3 地区土坑 S K226(東から)
 (2) b 8 - 3 地区土坑 S K258(西から)
 (3) b 8 - 3 地区ピット S P237(東から)
- 図版第43 (1) b 8 - 3 地区中央西部遺構検出状況(北東から)
 (2) b 8 - 3 地区土坑 S K228(北から)
 (3) 土坑 S K228北西部遺物出土状況(南から)
- 図版第44 (1) b 8 - 3 地区自然流路 N R54 b 調査状況(西から)
 (2) 自然流路 N R54 b (古墳時代)完掘状況(北東から)
 (3) 自然流路 N R54 c (弥生時代) (北西から)
- 図版第45 (1) b 8 - 3 地区自然流路 N R54 c 全景(南から)
 (2) 自然流路 N R54 c 横断面 B - B' 東岸(南から)
 (3) 自然流路 N R54 c 横断面 B - B' 西岸(南から)
- 図版第46 (1) b 8 - 3 地区自然流路 N R54東岸斜面遺物出土状況(西から)
 (2) 自然流路 N R54 c 弥生土器出土状況(西から)
 (3) 自然流路 N R54 c 石包丁出土状況(北から)
- 図版第47 b 8 - 3 地区出土遺物 1

- 図版第48 (1) b 8 - 3 地区出土遺物 2
(2) b 8 - 3 地区出土遺物 3
- 図版第49 (1) b 8 - 3 地区出土遺物 4
(2) b 8 - 3 地区出土遺物 5
- 図版第50 (1) b 8 - 3 地区出土遺物 6
(2) b 8 - 3 地区出土遺物 7
- 図版第51 (1) 高山Aトレンチ全景(南東から)
(2) 高山Aトレンチ全景(下が南東)
- 図版第52 (1) 横穴式石室 S X01 全景(南東から)
(2) ビット S P 170 土馬出土状況(南東から)
- 図版第53 (1) Aトレンチ横穴式石室 S X01 床面検出状況(南東から)
(2) Aトレンチ横穴式石室 S X01 左側壁検出状況(南西から)
(3) Aトレンチ横穴式石室 S X01 右側壁検出状況(北東から)
- 図版第54 (1) Aトレンチ横穴式石室 S X01 左奥隅角検出状況(北西から)
(2) Aトレンチ横穴式石室 S X01 右奥隅角検出状況(東から)
(3) Aトレンチ横穴式石室 S X01 奥壁検出状況(南東から)
- 図版第55 (1) Aトレンチ横穴式石室 S X01 遺物出土状況(南東から)
(2) Aトレンチ横穴式石室 S X01 床面断ち割り状況(東から)
(3) Aトレンチ横穴式石室 S X01 完掘状況(南東から)
- 図版第56 (1) Aトレンチ土坑 S K 90 完掘状況(西から)
(2) Aトレンチ土坑 S K 140 遺物出土状況(北西から)
(3) Aトレンチビット S P 150 遺物出土状況(南西から)
- 図版第57 (1) Aトレンチビット S P 160 遺物出土状況(南東から)
(2) Aトレンチビット S P 170 半截状況(北西から)
(3) Aトレンチビット S P 175 遺物出土状況(北西から)
- 図版第58 (1) Aトレンチ土坑 S K 200 遺物出土状況(南東から)
(2) Aトレンチ調査区南西壁(北東から)
(3) 鈴谷Cトレンチ完掘状況(南東から)
- 図版第59 出土遺物 1
- 図版第60 出土遺物 2
- 図版第61 出土遺物 3
- 図版第62 出土遺物 4

2. 長岡京跡右京第1031次・開田遺跡・開田古墳群

- 図版第 1 (1) I トレンチ遺構検出状況(東から)

- (2) 1 トレンチ完掘状況(東から)
- (3) 1 トレンチ西壁土層断面(東から)
- 図版第2 (1) 2 トレンチ遺構検出状況(東から)
- (2) 2 トレンチ完掘状況(東から)
- (3) 2 トレンチ西壁土層断面(東から)
- 図版第3 (1) 3 トレンチ遺構検出状況(南から)
- (2) 3 トレンチ北壁土層断面(南から)
- (3) 3 トレンチ東壁土層断面(西から)
- 図版第4 (1) 3 トレンチ完掘状況(南東から)
- (2) 3 トレンチ S D301土層断面(東から)
- (3) 3 トレンチ S D301北辺中央掘り残し部分(東から)
- 図版第5 (1) 3 トレンチ S K302遺物出土状況(北西から)
- (2) 3 トレンチ S K303遺物出土状況(北西から)
- (3) 3 トレンチ S K304遺物出土状況(東から)
- 図版第6 (1) 4 トレンチ完掘状況(西から)
- (2) 4 トレンチ S K401土層断面(南から)
- (3) 出土遺物

3. 長岡京跡右京第1027次・松田遺跡

- 図版第1 (1) 空中撮影写真(東から)
- (2) 2 トレンチ全景 空中撮影写真(南から)
- 図版第2 (1) 2 トレンチ 空中撮影写真(東から)
- (2) 2 トレンチ 空中撮影写真(北から)
- 図版第3 (1) 1 トレンチ全景(北から)
- (2) 1 トレンチ全景(西から)
- (3) 1 トレンチ東壁断面(西から)
- 図版第4 (1) 2 トレンチ全景(北から)
- (2) 2 トレンチ集石1(西から)
- (3) 2 トレンチ集石1北隣土器出土状況(西から)
- 図版第5 (1) 2 トレンチ溝 S D01(西から)
- (2) 2 トレンチ溝 S D01(東から)
- (3) 2 トレンチ溝 S D01アゼ断面(東から)
- 図版第6 (1) 2 トレンチ西部完掘状況(北から)
- (2) 2 トレンチ東部柱穴群(北から)
- (3) 2 トレンチ中央断面(北から)

図版第7 出土遺物 1

図版第8 (1)出土遺物 2

(2)出土遺物 3

4. 長岡京跡左京第547次

図版第1 (1)重機による表土掘削・除去作業の状況(西から)
(2)調査地内への基準点設置作業状況(東から)
(3)土層堆積状況の検討と実測図作成状況(南西から)

図版第2 (1)調査トレンチ土層の堆積状況(北東から)
(2)土層堆積層序の状況(南から)
(3)植物の生息痕跡とみられる断面の状況(南から)

図版第3 (1)掘削作業状況(北東から)
(2)トレンチ完掘状況全景(南東から)
(3)トレンチ完掘状況全景(北から)

図版第4 (1)重機による深部掘削状況(北西から)
(2)重機による深部掘削状況(西から)
(3)深部掘削断面の状況(西から)

5. 椿井遺跡第5次

図版第1 調査地遠景(北から)

図版第2 (1)調査地全景(上が東)
(2)1 トレンチ全景(南から)

図版第3 (1)1 トレンチ北端拡張区全景(南西から)
(2)1 トレンチ東壁土層断面北半(西から)
(3)1 トレンチ東壁土層断面南半(西から)

図版第4 (1)2 トレンチ全景(北東から)
(2)2 トレンチ西壁土層断面(北東から)
(3)3 トレンチ全景(北東から)

図版第5 (1)3 トレンチ西壁土層断面(北東から)
(2)4 トレンチ全景(北西から)
(3)4 トレンチ南壁土層断面(北西から)

図版第6 (1)5 トレンチ全景(北西から)
(2)5 トレンチ南壁土層断面(北西から)
(3)出土遺物

1. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成20～22年度発掘調査報告

(1) 長岡京跡(調子地区)

1. はじめに

今回の発掘調査は、京都南西部の交通渋滞緩和を目的として計画された京都第二外環状道路建設事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した。第二外環状道路は名神高速道路大山崎ジャンクションから小泉川沿いを北上し、山脚部を通過して京都市西京区大原野に至り、京都縦貫自動車道路に接続する。この計画路線のうち、大山崎町・長岡京市域にかかる範囲において、平成15年度から発掘調査を行ってきた。本報告では長岡京市調子地区所在の長岡京跡(平成20～22年度調査)の発掘調査について報告を行う。このうち平成21年度の長岡京跡右京第969次の現地調査は、西日本高速道路株式会社(NE XCO)が経費負担を行った。

調子地区の調査対象地は、長岡京跡の条坊復原では右京九条三坊一・二町(新条坊)にあたり、関連遺構の検出が予想された。調子地区の調査前の状況は水田や畠などの耕作地が広がっていた。調査対象地の中央付近を里道が走る。調査着手にあたり里道の北側を南から順にa地区・c地区・d地区とし、里道の南側をb地区と名づけた。このなかでd地区は、調子地区から友岡地区にまたがった位置関係にある。調子地区については既にa地区の報告を終えており(中川ほか2011)、今回は残るb地区とd地区(確認調査)について報告を行う。

本報告は、戸原・竹原・中川・黒坪・奈良が執筆し、竹原が取りまとめた。文責については文末に記した。国土座標は、過去の調査記録との兼ね合いから日本測地系(第VI座標系)を使用した。土層および土器の色調は、農林水産技術会議監修の『新版標準土色帖』を用いた。

現地調査ならびに報告については、京都府教育委員会をはじめ長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターなど関係諸機関の御指導・御協力を得た。また、調子自治会や地元の方々には、多大な御協力を得ることができた。記して感謝します。

各年度の調査体制は以下のとおりである。

[調査体制等]

平成20年度(長岡京跡右京第946次：7ANRHK-7)

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課調査第2係長 森 正

同 主任調査員 中川和哉・森島康雄

同 専門調査員 黒坪一樹

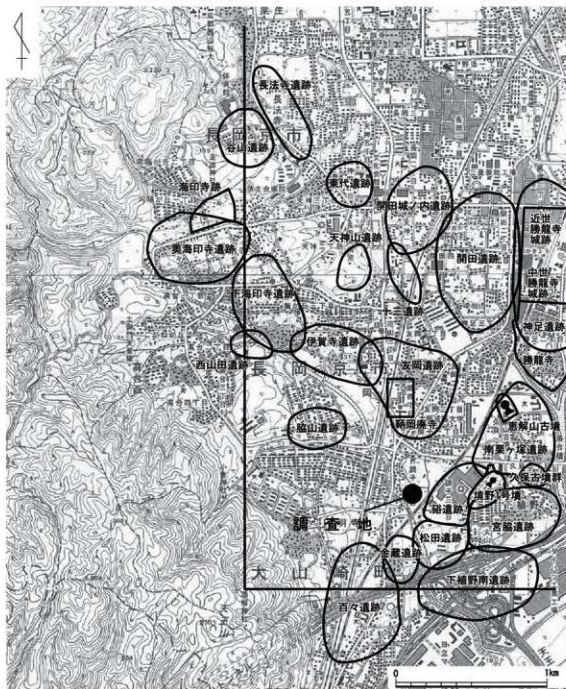
同 調査第1係主任調査員 竹原一彦

調査場所 長岡京市調子2丁目

調査地区 b1地区～b7地区

調査期間 平成20年6月17日～平成21年2月17日(a地区含む)

調査面積 3,220㎡(a地区含む)



第1図 調査地位置図及び周辺主要遺跡(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

平成21年度(長岡京跡右京第969次：7ANRHK-9)

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課調査第2係長 森 正

同 主任調査員 戸原和人

同 調査員 奈良康正

同 調査第1係主任調査員 引原茂治・竹原一彦

調査場所 長岡京市調子2丁目

同 友岡3丁目

調査期間 平成21年4月8日～12月22日(a地区含む)

調査地区 b8-1地区・b8-2地区・b9地区・b10地区・d1地区～d3地区

調査面積 2,230㎡(a地区含む)

平成22年度(長岡京跡右京第1006次：7ANRHK-10)

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課主幹第2係長事務取扱 石井清司

同 主任調査員 増田孝彦・中川和哉

同 調査第3係次席総括調査員 田代 弘

同 調査第1係主任調査員 竹原一彦

調査場所 長岡京市調子2丁目

調査地区 b8-3地区

調査期間 平成22年8月23日～11月10日(a地区含む)

調査面積 750㎡(a地区含む)

2. 自然と歴史

調査地は、京都盆地南西部に位置する長岡京市の南部にあたる地域にある。西側には、京都盆地を形成する山並みが迫り、この山並みは丹波方面へと連なる。この山塊は丹波帯と呼ばれる古生層から成り立っており、チャートや粘板岩などが分布している。この山塊に源を発する小泉川左岸に遺跡はある。現在の小泉川は、河川改修によって直線状に改修されているが、本来は大きく蛇行しており、それに対応するように川の両側に氾濫原も大きく広がっている。小泉川は長岡京市域から大山崎町を経て大阪湾に注ぐ淀川と合流する。

今回の調査区は、現在は小泉川の東側に位置しているが、調査地の西側も河川状の堆積があり、ちょうど中州状に残されていたと考えられる。この微高地については、沖積段丘面の削り残し、あるいは自然堤防の可能性が指摘できる。形成時期は出土遺物から縄文時代以前と考えられる。

小泉川流域では、後期旧石器時代から遺跡が認められる。南栗ヶ塚遺跡では、旧石器時代後期に属するサヌカイト製のナイフ形石器を含む石器群が検出された。この石器には、接合資料も認

められ、この地域では珍しく本来の包含層が残されていた。

縄文時代には小泉川流域で多くの遺跡が発見されている。最も古い時期の土器は、下海印寺遺跡から発見された早期のポジティブな押型文土器片である。早期に属するチャート製の、いわゆるトロトロ石器が甗遺跡から出土している。前期には南栗ヶ塚遺跡から北白川下層式の縄文土器が住居跡に伴って出土している。

調査地の北にある友岡遺跡(右京第325次調査)から、段丘斜面に投棄された状態で、中期の船元式土器が多量に出土した。友岡遺跡の北西にある伊賀寺遺跡では、中期末の北白川C式の時期の竪穴式住居跡6棟および遺物が検出されている。また、大山崎町臨山遺跡(高野1997)でも北白川C式土器を含む土坑が検出されている。

後期遺跡については、中津式土器が伊賀寺遺跡で、後期縁帯文土器は伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡で遺構・遺物が発見されている。後期後葉の元住吉山式土器を伴う竪穴式住居跡は、伊賀寺遺跡で確認されている。また、同時期の墓壙も発見された。そのうち2か所からは多量の焼骨が発見され、供献土器と考えられる注口土器が出土している。また、玉造りを行っていたようで、玉の未製品・破損品が出土している。

縄文時代晩期に入ると小泉川下流の大山崎町下植野南遺跡において、突帯文の甕棺が検出されている。

弥生時代前期の遺跡は小泉川流域では発見されていないが、甗遺跡や調査地の南の松田遺跡で土器が出土している。弥生時代中期前葉には南栗ヶ塚遺跡や下植野南遺跡で方形周溝墓が発見されている。両遺跡とも石製武器が出土した埋葬施設が確認された。中期後葉の土器は甗遺跡から発見されている。弥生時代末の竪穴式住居跡は伊賀寺遺跡や下海印寺遺跡で発見されている。伊賀寺遺跡(右京第902次調査)では、ベッド状遺構を持つ多角形の竪穴式住居跡が検出されている。

古墳時代には下流に境野1号墳と呼ばれる全長62mの前方後円墳が存在している。古墳時代前期に築造され、段築と埴輪列が確認されている。古墳時代後期に入ると多くの竪穴式住居跡が伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡の随所で確認されている。同じように下植野南遺跡・松田遺跡においても5世紀後半から6世紀にかけての竪穴式住居跡が多数発見されている。

飛鳥時代については鞆岡廃寺の存在が古くから知られていた。正確な位置は確認されていないが、飛鳥時代から長岡京期に至る瓦が発見されている。出土瓦には「田辺史牟他毛」と線刻されたものがあり、渡来系氏族である田辺氏との関係が注目されている。

奈良時代の遺構としては、掘立柱建物跡などが伊賀寺遺跡や下海印寺遺跡、下植野南遺跡などで発見されている。

長岡京期の平野部の大部分を占める長岡京は、延暦3(784)年に桓武天皇によって平城京から遷都され、延暦13(794)年に平安京に遷るまで都としてあった。長岡京は10年と短く、七条より南の地域で明確な条坊は発見されていない。今回の調査地点は、右京九条二坊一・二町にあたるため、条坊の発見が期待されたが、明確な長岡京期の遺構は検出されなかった。

中世に入ると今回の調査地は「調子庄」として登場する。この調子庄は調子氏の根本所領であ

る。調子氏は本姓を下毛野氏と言い、東国の土豪を祖先とする奈良時代末以降の宮廷武官の家柄である。10世紀には近衛府の下級官人を世襲し、源頼光四天王の1人である坂田金時のモデルとなった「公時」を排出した。後に院の随身を務め、摂関家の随身としても活躍する。調子氏がいつの時点で調子に住み着いたかは不明であるが、『近衛家所領目録』において、建長5(1257)年に「諸賢寺殿(近衛基通)の時、武守寄進する」とあり、13世紀に寄進されたことがわかる。

調査地域の旧小字名は「八角」と言い、地元では八角堂がかつて存在しその名にちなんだという話が語られている。しかしながら、至徳3(1386)年の「法皇寺知事某請文」に調子荘内の土地が法皇寺(乙調寺)に寄進され、法皇寺にあった八角堂の地下とされていた。これにちなみ地名が付けられたものと考えられる。

この地域の微高地上に古代から現代まで都から西国に通じる西国街道が通っている。交通の要になることから多くの歴史事象の舞台になってきた。その最も有名なものは山崎合戦である。天正15(1582)年6月2日、明智光秀が主君織田信長に対して京都本能寺において謀反を起こした。備中高松城において毛利軍と交戦中であった羽柴秀吉は講和し、6月13日には山崎の合戦が行われる。後の世に言う「中国大返し」である。調子地区は明智側の陣が敷かれた場所であり、『太閤記』に準拠した『長岡京史』本文編では、諏訪飛騨守・御牧三左衛門尉が着陣した場所として復元されている。

(中川和哉)

3. 調査概要

今回報告する調子地区は長岡京市の南西部で、大山崎町との市境に位置している。第二外環状道路が長岡京市の南西部から北西部に縦断して計画され、長岡京市調子付近では北北西から南南東に縦断している。

調子地区は、西側を府道西京高槻線、東側をJR西日本旅客鉄道株式会社東海道線に挟まれており、南に小泉川が北西から南東に向けて流れている。府道に沿った、やや小高い位置には調子の集落があり、集落の背後の東側は傾斜面となって緩やかにくだっており、現状は水田・畑地となっている。この地区は長岡京跡の範囲に含まれているが、これまでに発掘調査例がなく、その実態がよく分かっていないところであった。

まず遺跡確認調査を実施したところ、調子内にあつては遺構が稠密に分布していることが判明し、結果的に数年にわたってほぼ全面を発掘調査することとなった。そのため、便宜上、この地区を調子地区と呼称して発掘調査を進めた。

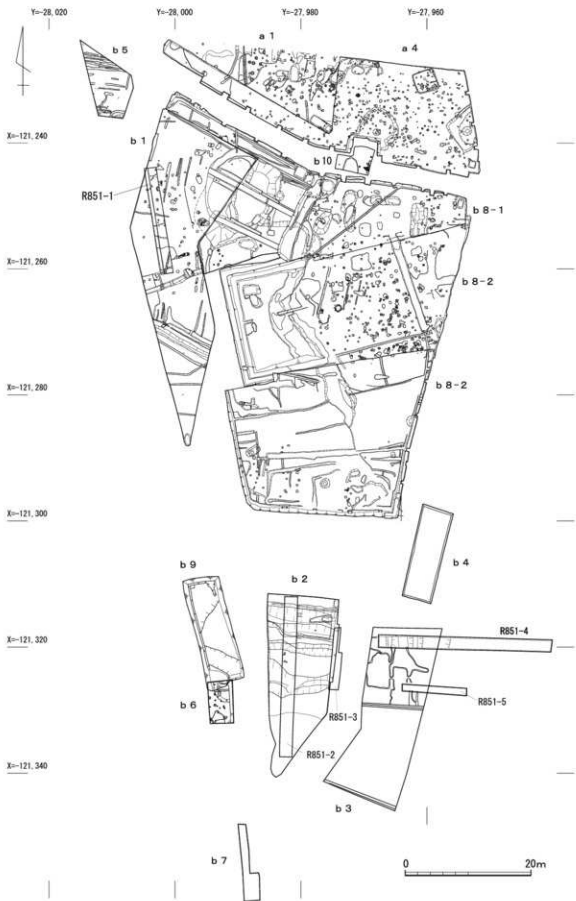
この地区の調査の経緯は以下の通りである。京都第二外環状道路の計画に先だち、平成16年度には調子地区の北半で右京第825次調査を実施し、平成17年度には調子地区の南半で長岡京跡右京第851次調査を実施した。

右京第825次調査では、5か所の調査区を設定し、中世以降の水田・畑作遺構とそれ以前の流路跡を検出した(岩松ほか2006)。

付表1 調子地区調査回数・地区一覧

調査年度	調査回数	調査地区名	面積 (㎡)	調査期間	現地担当者	報告	備考
平成16年度	R 825	10～14トレンチ	955	平成16年7月5日 ～平成17年2月25日	竹井	京都府七118	
平成17年度	R 851	1～8トレンチ	270	平成17年11月14日 ～平成18年2月10日	岩松	京都府七124	
平成19年度	R 902	1～3トレンチ	150	平成19年4月24日 ～10月19日	竹井	京都府七131	
	R 926	調子地区	150	平成19年11月19日 ～平成20年2月28日	竹井		
	R 928	調子地区	200	平成20年2月4日 ～2月29日	戸原		
平成20年度	R 946	a 1～3地区	3,220	平成20年6月17日 ～平成21年2月23日	森島 中川	京都府七145	本報告
		b 1地区			黒坪		
		b 2地区			中川		
		b 3地区			中川		
		b 4地区			中川		
		b 5地区			黒坪		
		b 6地区			中川		
		b 7地区			中川		
平成21年度	R 969	a 4地区	899	平成21年4月8日 ～12月22日	竹原 奈良	京都府七145	本報告
		b 8-1地区	488		戸原		
		b 8-2地区	663		中川		
		b 9地区	101		奈良		
		b 10地区	19		戸原		
		d 1地区	60		戸原		
		d 2地区			戸原		
		d 3地区			戸原		
平成22年度	R 1006	a 5地区	85	平成22年8月23日 ～10月28日	中川	京都府七145	本報告
		b 8-3地区	665		竹原		
平成20年度	R 938	1・2トレンチ	175	平成20年5月7日～ 5月27日	中川	京都府七133	府道大山崎大 枝線道路関係 調査
平成21年度	R 968	C 2・C 3地区	2,100	平成21年4月8日～ 11月27日	森島	京都府七141	府道大山崎大 枝線道路関係 調査

右京第851次調査では、長岡京市内の第二外環状道路の計画地内総長2.2kmの範囲にわたって調査を実施した。この調査では、奥海印寺から調子にいたる5つの大字にわたって、12地区で調査を行った。調子地区では、地区の南半に8本の調査トレンチを設定し、遺構の検出に努めた。その結果、弥生時代の遺構・遺物および同時期の流路跡、平安時代の遺物を確認し、同時期の集落が周辺に拡がっていることが想定された(岩松ほか2007)。



第3図 b地区調査地位位置図

これらの調査の結果、調子集落から南東方向に延びる里道を中心にした微高地上には弥生時代～中世に至る集落遺構が、そしてその北側のやや低いところには中世以降の畑作や水田遺構が、微高地の南側の約2m低い地点には弥生～中世にいたる流路跡・水田が分布していることが想定された。調査区は、里道の北側をa地区、南側をb地区とした。b地区の北側に位置し、地形がやや下り、畑地・水田が分布していると推定される範囲をc地区とした。さらに、c地区の北側、府道奥海印寺納所線と府道西京高槻線の交差点付近をd地区とした。c地区の現況が水田・畑地であるのに対して、d地区は調子集落が立地する宅地となっている。

b地区は、a地区と接する里道近辺が最も高く、南に向けて緩やかに下り、b2地区では平坦な低地となりb1地区との比高は約1.7mを測る。この高まりは南に向けて舌状に張り出しており、ちょうど、b8地区の調査範囲に合致している。東側は急激に地形が下り、b8地区の東辺では約1mの段差となっている。

a地区の調査は平成20～22年度にかけて、本格的な調査を実施した。その内容については調査報告を刊行したところである(中川・奈良・黒坪2011)。以下、a地区の成果を時代ごとに概述したい。弥生時代においては、中期の竪穴式住居跡や土坑を検出し、弥生集落の存在が明らかとなった。特に土坑内からは、鐸身の内部に舌が共存した銅鐸形土製品が出土し、注目を集めた。また、流路跡内からの出土ではあるが、平安時代前期～中期の遺物が多量に出土した。この中には凝灰岩や平城宮式軒瓦、風招などが出土しており、周辺に古代寺院が存在する可能性が窺われた。また、平安時代後期～中世にかけては掘立柱建物跡や井戸、柱穴、土坑を検出しており、集落として土地利用されたことが判明した。

b地区の調査は、平成20年度には右京第969次調査として、調子b1～7地区の調査を実施した。

b1地区は北西部にあたり、右京第851次調査の1トレンチの周囲を拡張した調査区である。中世の池状遺構、井戸、弥生時代中期の土坑を検出した。

b2地区は右京第851次調査の2・3トレンチの周囲を拡張した調査区である。ここでは弥生時代中期から古墳時代にかけての東西方向の流路跡4条を検出した。

b3地区は右京第851次調査の4・5トレンチの西半を拡張したもので、平安時代末から鎌倉時代にかけての水田跡を検出した。

b4地区はb地区の東側中央部にあり、b3地区の北側に設定した調査区で、中世段階の遺物を含む包含層を確認したに止まった。

b5地区はb1地区の西側に設定したトレンチで、b地区の北西隅に設けた調査区で、近世の耕作溝群を検出したに止まった。

b6地区は南西部に位置し、b2地区の西側に設定したトレンチで、土坑・小ピットを検出した。時期は不明である。

b7地区はb2地区の南側に設定したトレンチで、明確な遺構は検出できなかった。

このほか、平成20年度には、府道大山崎大枝線道路改良事業の関連調査で、右京第938次調査として調子b地区内で2か所のトレンチ調査を実施したが、顕著な遺構は確認できなかった(岩

松ほか2009)。

平成21年度には、右京第969次調査として、b 8-1・2地区、b 9・10地区、d 1～3地区の調査を実施した。

b 8地区はb 1地区の東側にあり、南北約50mを測る平坦面である。北から南に下る地形を有しながらも、b 2～b 7地区と比べて、0.5～1m程度高い位置にある。弥生時代をはじめとする集落が広がっているものと想定されたところである。調査着手時期の違いにより、1～3の枝番号を付した。

b 8-1地区はb 8地区の北1/3にあたり、中世段階の池状遺構、溝、土坑、弥生時代の土坑を検出した。池状遺構はこのトレンチの西側のb 1地区の北東部で検出した遺構と一続きになるものである。

b 8-2地区はb 8地区の南1/3半にあたり、中世の掘立柱建物跡、溝、井戸、池状遺構、土坑、弥生時代末から古墳時代の土坑・溝を検出した。

b 9地区はb 2地区の西側にあたる調査区で、古墳時代の自然流路跡を検出した。b 2地区の自然流路跡と同一のものと判断される。

b 10地区はa地区とb地区を分ける里道下の調査区である。土坑・ピットを検出したが、時期を決定づけるような遺物の出土はなかった。

d地区はc地区の北側にあたり、調子地区の現集落が立地する位置である。d地区では、1～3地区の調査を実施した。いずれも中世段階の包含層を確認し、その下位では流路内堆積の砂礫層を確認した。

平成22年度には、右京第1006次調査として、b 8-3地区の調査を実施した。b 8-3地区はb 8地区の中央部1/3にあたり、縄文時代から中世にかけての自然流路跡、掘立柱建物跡、ピット、土坑、井戸などを検出した。

以上のように、b 8地区を中心とした高まりを中心にして、縄文時代のピット、弥生時代および平安時代～中世の集落遺構を検出した。この微高地上の下では、弥生～古墳時代の流路跡、中世の流路跡を検出し、広範囲にわたって小泉川の旧流路が、時々流れを変えて分布しているのを確認した。

最終的には、調子地区a～c地区にかけて約320mの範囲についてはほぼ全域を発掘調査した。調査対象地は右京九条三坊一・二町にあたるが、長岡京に関する遺構は確認できなかった。しかし、弥生時代の集落跡や平安時代後期～中世にかけての集落遺構を確認し、今まで周知されていなかった遺跡が包蔵されていることが判明した。また、出土遺物の検討から、調査対象地の西側周辺に古代寺院の存在を窺わせる点は特筆できる成果の一つと考えられる。

(岩松 保)

1. 長岡京跡右京第946次(平成20年度)の調査

(1) b1地区の調査

1) 調査概要

b1地区はb地区の北西部にあり、里道を挟んで調子a地区に接する。平成17年度右京第851次調査の1トレンチを包括して設定した調査区である。このR851次調査では、主に北半部で中世から弥生時代に至る遺構・遺物が、南半部では流路跡が確認されている。

調査にあたっては、現代の畑作耕土を重機により除去し、その後、人力による掘削を行った。

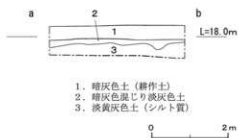
その結果、耕作土の直下で多くの遺構を検出した。検出面の標高は約18mである。



第4図 b1地区 位置図

2) 層位(第5図)

調査区西壁での基本層位は、第1層(右京第851次1トレンチ1層に対応):耕作土の暗灰色土、第2層(同6層に対応):暗灰色混じり淡灰色土、第3層(同29層に対応):淡黄灰色土(シルト質)となっている。今回の遺構はすべて第2層の上面で検出した。



第5図 b1地区 土層柱状図

3) 検出遺構(第6図)

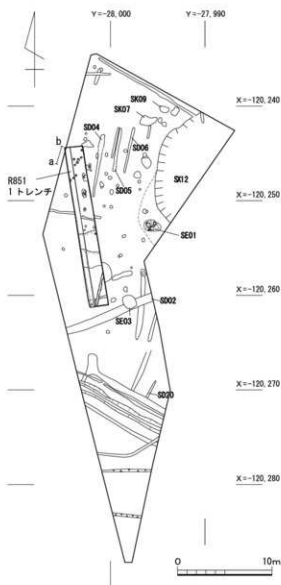
耕作に伴う近世の南北溝、柱穴、中世の井戸S E01、池状遺構S X12、弥生時代中期の土坑S K07・09などがある。遺構は調査区北半に集中し、南半は近代以降の新しい溝々や砂礫混じりの土砂が落ち込み、後背湿地となっていた。

①近世

南北方向の溝をおよそ10条検出した。検出の長さはそれぞれ違うが、幅・深さ・埋土の質はほぼ共通している。

溝S D02 調査区中央部で検出した北東から南西に調査区を横断する溝で、長さ9.5m、幅0.9m、深さ25cmを測る。埋土は灰褐色土である。

溝S D04・05・06 調査区北部中央で検出した南北方向の溝群である。S D04は長さ6.9m、幅0.25～0.35m、深さ5.5cm、S D05は長さ4.7m、幅0.3m、深さ3cm、S D06は長さ5m、幅



第6図 b1地区 遺構配置図

また、この井戸の検出面では礫が多くみられ、土師質羽釜、石鍋、平瓦の破片が出土した。本井戸は池状遺構 SX12の中に包括され、SX12より後出する。

池状遺構 SX12(第30図) 調査区北東部からb8-1地区西部に広がる池状遺構である。本調査区で確認したのは12×5m分である。最も深いところで1.65mを測る。縁辺部はやや緩やかに落ち込むが、下方は急傾斜で底まで掘り込まれている。出土遺物には、中世の中国製白磁碗、土師質羽釜、瓦質羽釜、奈良時代の須恵器杯蓋・壺などの破片がある(第8図7～13)。なお、詳細についてはb8-1地区で記述する(31ページ)。

③奈良・平安時代

当該時期の遺構としては、調査地北半部を中心に直径15cm内外、深さ10～15cmの柱穴群を検出した。埋土からは須恵器杯片や平瓦片などが出土している。柱穴は建物跡を復元するにはいたっていない。また、R851次調査において調査地中央部で当該期の流路が検出されているが、

0.4m、深さ4.4cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。各溝内からは土器片がわずかに出土しているほか、SD05の底から寛永通宝が1点出土している(図版第2)。

溝SD20 調査区南半部の東寄りに掘られた小規模の溝である。平安時代の須恵器壺の底部(第8図14)が出土しているが、規模・埋土(暗灰褐色砂質土)とも他の近世の溝と共通している。長さ2m、幅0.2m、深さ3～4cmを測る。

井戸SE03 調査区中央部で検出した近世以降の素掘りの井戸である。SD02埋没後に掘られている。径1.5～1.1m、深さ85cmを測る。近世磁器のほか土師器皿(第8図6)などが出土している。

②中世

井戸SE01(第7図) 東側のみを掘り広げて石を積み上げているため、洋梨形の平面形となる。長軸1.85m、短軸1.25m、深さは約1mを測る。径5～50cmを測る大小の石を一見無造作に積み上げているが、井戸内側は面を揃えている。底には、長さ53cm、幅47cm、厚さ23cmの石が礎石状に据えられていた。埋土の下層から瓦質の羽釜片(第8図3)が出土し

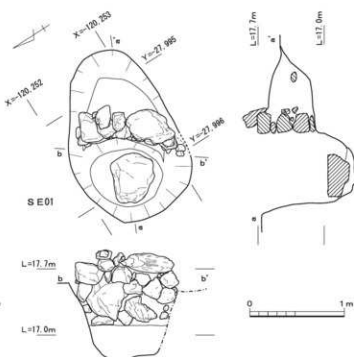
今回の調査では平面的に明確に検出することはできなかった。流路はb 8-1・3地区で検出した自然流路NR54aに対応すると考えられる。推定規模は幅8m、深さ1mで、奈良時代から平安時代にかけ埋没している。

④弥生時代

調査区北辺で土坑S K07・09を検出した。

土坑 S K07 不定形で、長軸1.8m、短軸0.9m、深さ15c mを測る。埋土は褐色砂質土である。弥生時代中期の甕の口縁部が出土した。

土坑 S K09 不定形で、長軸0.9m、短軸0.6m、深さ10cmである。埋土は暗褐色土である。弥生時代中期の甕の口縁部が出土した。



第7図 b 1地区 井戸S E01 平・断面図

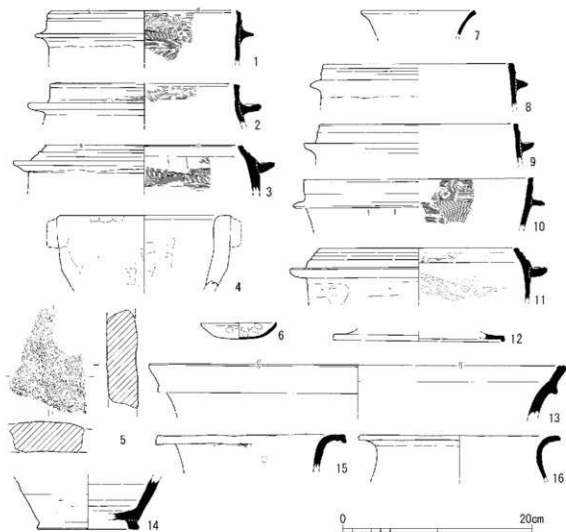
4) 出土遺物(第8図)

①中世

井戸S E01(第8図1～5、図版第8～10) 1・2は土師質の羽釜である。1は口径約19cm、残存高5.5cm、内面にハケ目がみられる。色調は内面が淡黄橙色(10YR8/3)、外面はにぶい黄橙色(10YR6/3)である。2は口径18.8cm、残存高4.4cm、色調は内外面とも灰白色(10YR8/1)である。3は瓦質羽釜である。口縁端部が内傾し、丸みを帯びた外形をもつ。3条のナデによる沈線がみられる。口径20.6cm、残存高4.8cmである。色調は内外面黒色(N2/10)で、外面にススが附着している。4は滑石製の石鍋である。口径18cm、残存高7.6cm、厚さ1.8cmを測る。外面の把手部は欠損している。5は布目瓦の断片である。残存長10.4cm、残存幅7.8cm、厚さ3.1cmを測る。色調は灰白色(2.5Y7/1)および灰黄褐色(10YR6/2)である。鉢は須恵質で口径27cmを測る(図版第8a)。

井戸S E03(第8図6) 6は土師器皿である。口径8.2cm、器高1.7cmを測る。色調は灰白色(10YR8/2)である。

池状遺構S X12(第8図7～13) 7は中国製白磁碗の口縁部片である。口径11.9cm、残存高2.7cmを測る。色調は灰白色(内面2.5Y7/1、外面2.5Y8/2)である。8～11は羽釜である。8・9は土師質、10・11は瓦質のものである。口径は20～24cmを測る。12は須恵器杯蓋、13は須恵器甕の口縁部である。12は奈良時代、13は古墳時代のもので、混入品である。



第8図 b1地区 出土遺物実測図

②奈良時代

溝SD20(第8図14) 14は須恵器壺の底部である。底部高台径10.8cm、残存高5.2cm。色調は灰白色(N7/1)である。溝の時期は近世であり、混入品と考えられる。

③弥生時代中期

土坑SK07(第8図16) 甕の口縁部片である。口径20.8cmを測り、色調は外面が褐灰色(10YR 4/1)、内面は灰白色(10YR 8/2)である。器面の摩滅が著しい。

土坑SK09(第8図15) 壺の口縁部片である。口径19.6cmを測り、色調は淡黄橙色(10YR 8/3)である。

5)小結

b1地区では、弥生時代中期から近世の遺構・遺物を確認した。これらの中で、弥生時代、奈良時代のものについては非常に断片的で、集落内での位置づけについては明らかにできなかった。

一方、中世のものには井戸跡SE01や治水・水利用に関係する池状遺構SX12などが確認でき、

集落内の一面を明らかにすることができた。また、近世は畑の耕作地が広がっていたようである。

(黒坪一樹)

(2) b 2 地区の調査

1) 調査概要

b 2 地区は b 8 - 2 地区の南に位置する調査区で、現在の小泉川から50mほどの距離にある。この地点は、右京第851次調査として報告している 2・3 トレンチを包括して広げた調査区である。以前の調査では 4 時期(弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代(2時期))の流路 1 ~ 4 が確認されている。今回の調査では、中世から弥生時代中期にいたる 4 条の流路を確認した。これらの流路が複雑に入り組む状況で、その他の遺構はなかった。調査区南半部ほど粗礫が厚く堆積しているので、洪水による流れが激しかったものといえる。

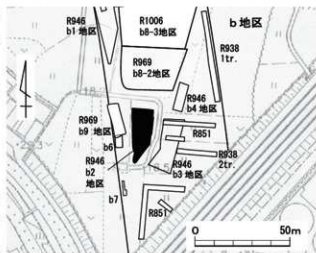
2) 層位および検出遺構(第10・11図)

耕作土直下は流路群(流路 1 ~ 4)の埋土である。以下、流路 1 から順に層位をみる。

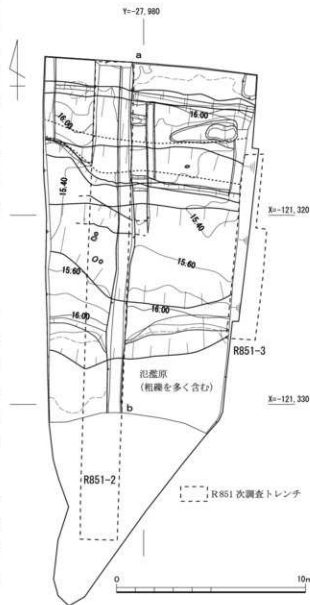
流路 1 幅8.25m、深さ30 ~ 45cmを測る。遺物の出土量は少ない。埋土は2層と3層である。弥生土器、土師器、須恵器に混じて瓦器破片も若干出土しており、中世まで存続していたようである。

流路 2 幅3.5 ~ 1.5m、深さ20 ~ 30cmの規模である。埋土は11・12層である。弥生土器の他、須恵器の出土もみられることから、古墳時代から奈良時代を通じて流れていたと考えられる。

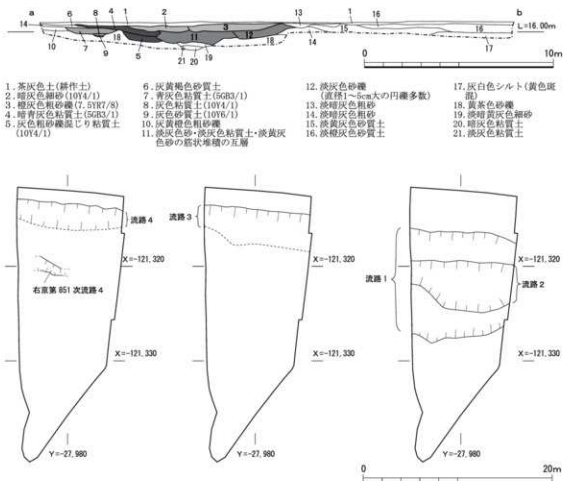
流路 3 検出面での規模は長さ4m以



第9図 b 2 地区 位置図



第10図 b 2 地区 遺構配置図



第11図 b2地区 平・断面図

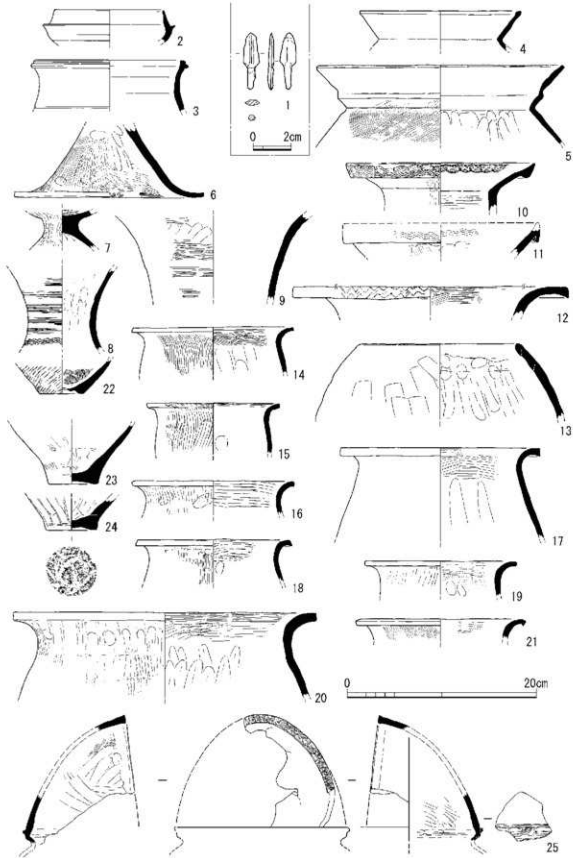
上、深さ20～45cmである。南側は流路・2で掘り返されているため、南岸は検出していない。埋土は4・5層となる。粘質土が勝っており、あまり激しい流れはなかったようである。弥生時代後期および古墳時代前期の土器がまとまって出土した。弥生時代後期のものがより多いことから、この時期のものと考えられる。

流路4 幅2.2m以上、深さ20～40cmの規模で、南岸は上面を流路3が切り込んでいる。埋土は7～9層である。また、東端のくぼみ内や調査区西壁付近から弥生時代中期の遺物が特に多く出土した。なお、R851次調査の流路4(弥生時代中期、19～21層)の続きを確認することはできなかった。

3) 出土遺物(第12～15図)

流路1(第12図2・3) 中世の流路であるが、弥生時代や古墳時代の土器も混在している。2・3は古墳時代中期の須恵器である。2は杯身で口径11.5cmを測る。3は壺の口縁部から体部にかけての断片である。口径は15.6cmを測る。端部を上方と横に肥厚させている。図示していないが、2・3層から瓦器椀が出土した。

流路3(第12図1・4～17・22～25)



第12図 b2地区 出土遺物実測図(1)

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての流路であるが、土器資料は、弥生時代中期前半(6・8・12～17・23・24)、弥生時代後期後半～古墳時代前期(4・5・7・10・11・22・25)のものが混在する。土器以外では銅鏡が1点出土した。

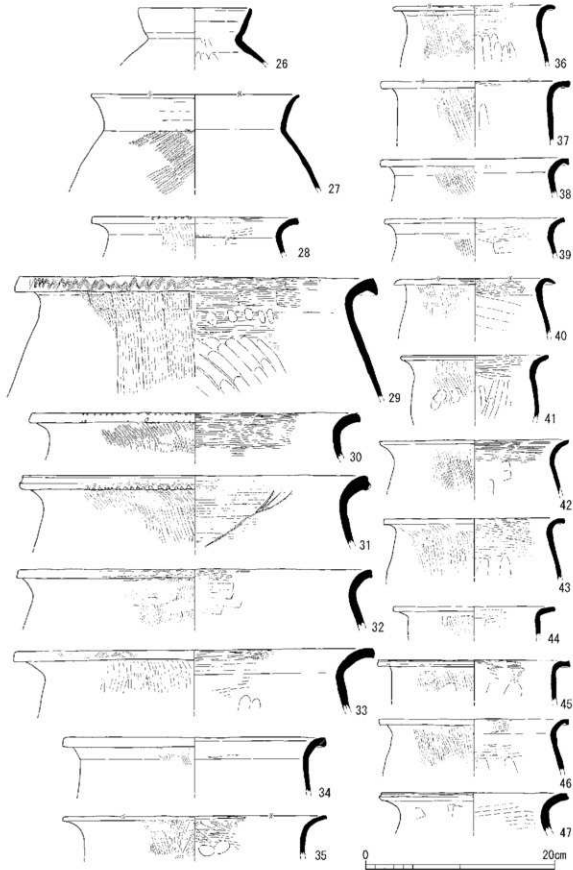
1は銅鏡である。片面に鏡の稜線がはしる。長さ3cm幅0.9cm厚さ0.3cm重量1.6gである。弥生時代後期のものである。4は古墳時代前期の布留式甕で口縁端部を折り返している。口径は17cmを測る。5は同じく古墳時代前期の複合口縁甕である。口径は25.6cmを測る。6は高杯の脚部あるいは蓋である。端部に沈線を入れていることや上部が肥厚の度合いを増さない点から、高杯とみるのが妥当であろう。外面は繊細なタテハケ、内面は粗いヨコハケが施される。色調は内外面とも灰色(5Y6/1)を呈す。7は高杯の下半部片である。8は壺の頸部片である。5条の櫛描直線文および波状文がみられる。10・11は壺口縁部である。10は口径19.8cmで、直立した頸部から口縁部が大きく開く。端部を肥厚させ、内外面に180°回転の連続による扇形文および波状文がみられる。12は口縁端部に波状文を施した広口壺の口縁部である。口径29cmを測る。13は無頸壺である。継ぎ足した粘土紐の接合痕が明瞭にみられる。口径は16cmである。色調は灰黄色(2.5Y7/2)である。

14～17は弥生時代中期前半の大小の甕である。ともに口縁部が弧を描いて大きく反折するもので体部外面にタテハケ、口縁部内面にヨコハケをとどめる。15は端部の面に波状文がつけられている。14は口径16.8cmを測り、色調は内面がにぶい橙色(7.5YR7/4)、外面はにぶい黄橙色(10YR7/3)である。15は口径13.8cmを測り、色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)である。16は口径16.4cmを測り、色調は灰黄色(2.5Y7/2)である。22は外面に右上がりのタタキ痕を有する甕の底部である。23・24・図版第10aは壺または甕の底部である。24は木の葉痕がみられる。25は手焙り形土器の断片である。アーチ状に弧を描く前面の平坦面に、繊細な波状文が描かれている。また周囲をめぐる突帯上には刻み痕がつけられている。色調は灰褐色(7.5YR6/2)である。

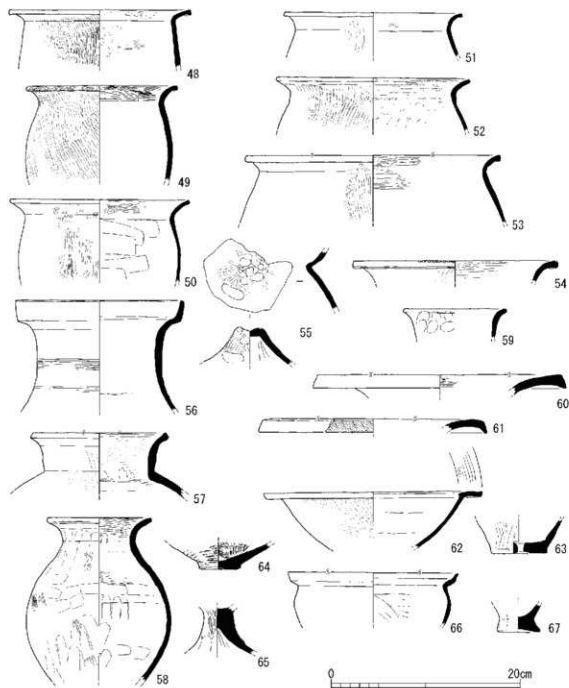
流路4(第12図9・18～21) 弥生時代中期前半の土器類である。9は櫛描直線文の施された壺の頸部である。内面は摩滅が著しい。色調は内面が淡黄橙色(10YR8/3)、外面は灰色(10YR8/2)である。18～21は甕である。18は口径16cmを測り、調整は外面がタテハケ、内面は粗いヨコハケである。色調は外面が黄橙色(10YR8/3)、内面は灰白色(10YR8/2)である。19は口径16cmを測り、調整は外面がタテハケ、内面はヨコハケである。色調は外面がにぶい黄褐色(10YR7/2)、内面は褐灰色(10YR5/2)および明黄褐色(10YR6/6)である。20は口径32cmの大型の甕である。体部外面にタテハケ、口縁内面にヨコハケの調整がみられる。色調は黄褐色(10YR8/3)および明黄褐色(10YR7/6)である。21は口径18cmを測る。調整は体部外面がタテハケ、口縁部内面はヨコハケである。色調はにぶい黄褐色(10YR7/4)である。

包含層(第13～15図)

ここに図示した土器資料は、右京第851次2トレンチの壁面精査や断ち割り作業中に出土したものである。弥生時代中期(第13図28～47、第14図48～56・58～63・68)、弥生時代後期後半～古墳時代前期(第13図26・27、第14図64～67)の土器がある。割合的には弥生時代中期の甕・



第13図 b 2地区 出土遺物実測図(2)



第14図 b2地区 出土遺物実測図(3)

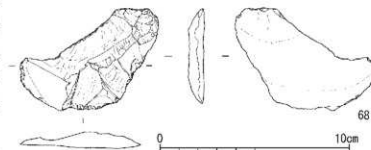
壺が圧倒的に多く出土している。

26・27は土師器の甕である。26は口径11.6cmを測る。口縁部はやや内湾し、端部はまるく納められる。色調は内・外面とも黄灰色(2.5YR5/1)である。27は口径21.8cmとやや大型である。薄い器壁で、体部外面は右上がりの細かなタタキが施される。色調は外面が褐灰色(10YR 8/1)、内面は黄橙色(7.5YR 8/3)および灰白色(10YR 7/1)である。

28～54は弥生時代中期の甕である。口径15～20cm前後のものから37cmを越える大型のものまでである。弧を描いて大きく外反する口縁部は、その端部に面をもつもの、その面に波状文や上・

下縁に連続する刻みをもつもの、丸く納めるものや尖り気味になるものなど多様な形態である。器面の調整は、体部外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケを基本に行っている。

55は中央部を指先で二つ折りにするようにして整形した蓋で



第15図 b2地区 出土遺物実測図(4)

ある。二つの突起が形成されている。外面はハケ目調整される。

56・58～61は弥生時代中期の壺である。56は口径17.6cmを測る。楕直線文のある頸部から口縁部がゆるやかに外反し、さらに垂直に近い角度で立ち上がる端部をもつ。色調は橙色(7.5YR7/6)である。58は体部最大径がやや下半にくる壺である。体部上半外面と口縁部内面にハケ目を施す。内面はケバ立つようなヨコハケである。色調は外面が灰白色(10YR 8/1)および褐灰色(10YR 6/1)、内面は灰白色(10YR 8/2)である。59は口径10.8cmを測り、口縁部がゆるやかに外反し端部を丸く納めている。色調はにぶい黄褐色(10YR 5/3)である。60・61は口縁部がのびやかに外反する広口壺の口縁部である。口縁端部は面をもつ。60は口径25.6cmを測り、色調は灰白色(10YR8/2)である。61は口径24cmを測る。口縁端部の面に細い線状の刻み、下縁辺に9つの小さな刻みを有する。色調は橙色(5YR6/8)である。62は滑らかに球形状に開く杯部から、口縁が水平に拡張された高杯である。口径は23cmを測る。外面にハケ目の調整がみられる。色調は淡黄褐色(10YR8/4)である。63は甕の底部である。底径5.8cmで穿孔されている。色調は外面がにぶい黄褐色(10YR 7/2)、内面は灰白色(2.5Y8/2)である。

57・64～67は弥生時代後期末から古墳時代前期の土器資料である。57は壺である。口径は14cmを測る。直角近くで立ち上がる頸部から、口縁端部はやや外反し面をもつ。体部との境に接合痕がみられる。体部外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケで調整する。色調は外面がにぶい黄褐色(10YR 7/2)、内面は黄灰色(2.5Y6/1)である。64は甕の底部で、底径4.4cmを測る。外面にタタキ目、内面にハケ目がみられ、色調は灰白色(10YR 8/2)である。65は古墳時代前期の高杯の下半部である。外面に細かなミガキ痕がみられる。色調は灰白色(10YR 7/2)である。66は鉢である。口径17.8cmを測る。半球形の体部から屈曲し、上方に摘み上げた口縁部をもつ。体部内面をヘラケズリしている。色調は内・外面とも淡黄褐色(7.5YR8/3)である。67は鉢または壺の台とみられる。底径は4.2cmである。68は横長剝片を素材とする加工痕がある剝片である。周縁部に細かな調整剝離がみられる。石材はサヌカイトで、長軸7.3m、短軸5.4m、厚さ0.8m、重さ25.4gを測る。弥生時代中期のものと思われる。

4)小結

b2地区では複雑に切りあう自然流路を検出した。時期は弥生時代中期前半・弥生時代後期～

古墳時代前期、古墳時代中期、奈良時代、中世である。特に弥生時代中期前半および弥生時代後期の土器が多い。弥生土器は、砂礫の多い流路内からの出土であるにもかかわらず、摩滅があまりすすんでいない。その理由として、近隣で廃棄された可能性が考えられ、a・b地区の微高地上で検出した集落に関する土器群と判断される。

(黒坪一樹)

(3) b3地区の調査

1) 調査概要

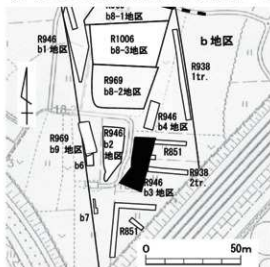
本地区は大量の弥生土器が出土したb2地区の東側に位置する。右京第851次調査4トレンチと5トレンチを包括して広げた調査区である。4トレンチおよび5トレンチでは弥生時代～古墳時代前期の流路を確認できなかった。そして今回も、断ち割り溝で粗砂礫や粘質土の氾濫原の存在は確認したが、弥生土器や古式土師器の出土はみられなかった。ここでは平安時代末から鎌倉時代の区画された水田跡を7面検出した。北側に広がる集落の農作物の生産地に当たっていることが明らかとなった。なお、断ち割り溝から南側は、砂礫を含む面が南に下がっていき、遺構は確認できなかった。

2) 層位(第17図)

基本層位は耕作土直下より、第1層：褐色粘質土、第2層：灰褐色粗砂礫混じり土、第3層：黄灰白色粘質土、第4層：灰色粘質土、第5層：赤灰色粗砂質土、第6層：暗灰色粘質土、第7層：灰色粗砂礫となっている。中世の水田跡の埋土は第2層を掘り込んでいる。

3) 検出遺構(第16・17図)

中世の水田跡を7区画(水田1～7)検出した。各水田区画は直線による四辺形や不定形を呈している。ここでは規模の明らかな水田1・2について記す。



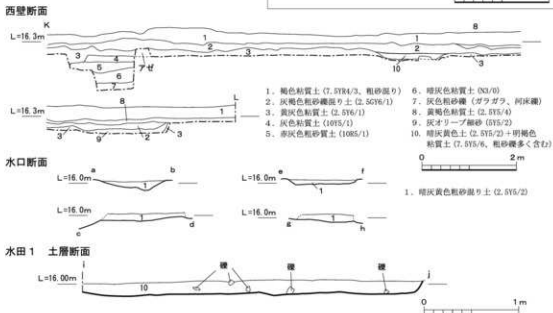
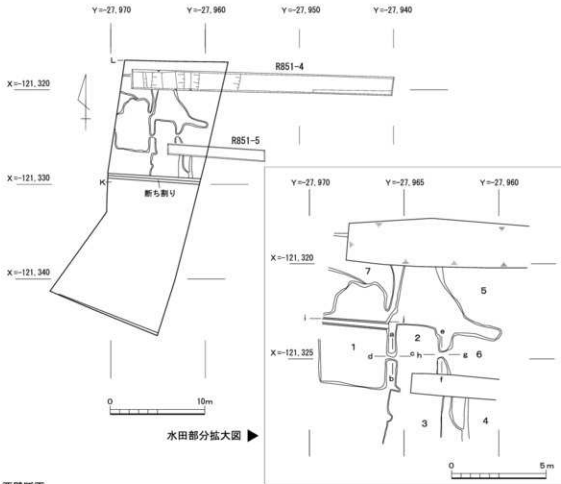
第16図 b3地区 位置図

水田1 調査地中央部西端で検出した水田である。東西5.5m、南北3.5m、深さ15cmの長方形で、埋土は暗灰黄色土・明褐色粘質土である。水田2と隣接し、水口で繋がる。

水田2 水田1の東に隣接する水田である。東西2.5m、南北3.5m、深さ20cmで、埋土は暗灰黄色土である。水口部の埋土は暗灰黄色粗砂混じり土である。

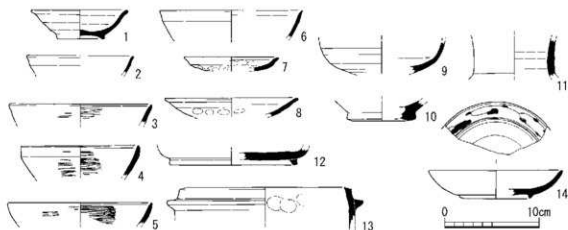
4) 出土遺物(第18図)

水田1・3・5・6(第18図1～7) 1・2は



第17図 b3地区 平・断面図

水田1、3は水田3、4・6・7は水田5、5は水田6からそれぞれ出土した。1は完形品の無釉陶器の杯である。口径10cm、器高3.1cmを測る。回転ナデにより仕上げられ、密な胎土で色調は灰白色(25Y7/1)である。2は中国製青白磁碗の口縁部片である。口径11cmを測る。3～5は瓦器碗の口縁または体部の破片である。口径は3が14.8cm、4が12cm、5が14.9cmである。口



第18図 b3地区 出土遺物実測図

縁端部内側に沈線がはしる。体部は横方向のミガキ痕がこのころ。色調は3が暗灰色(N3/)、4は内面オリーブ黒色(7.5Y3/1)、外面灰色(N4/)、5は暗灰色(N3/)を呈する。6は白磁碗の破片である。口径15cm。口縁に向かう稜が入り、端部はやや反ってシャープである。色調は灰白色(5GY8/1)である。7は土師器皿である。口径9.8cm、残存高1.5cmである。焼成は良好で、色調は淡黄橙色(10YR 8/3)である。

包含層(第18図8～14) 8～14は掘削作業中に包含層から出土したものである。8は土師器皿である。口径8.2cm m器高さ1.7cm mを測る内・外面はナデにより調整する。色調は灰色(10YR 8/2)である。12は須恵器杯Bの底部片である。高台径12.9cmである。色調は灰色(N5/0)である。13は瓦質羽釜である。口径16.7cm mを測り色調は内面黄灰色(2.5Y5/1)、外面灰色(N4/0)である。9・11は中国製の青磁で、9が碗、11は壺である。9の最大径は13.2cm mである。色調はオリーブ灰色(10YR 6/2)である。11は頸部の径8.6cmを測る。色調は明緑灰色(7.5GY7/1)である。10は白磁碗の底部片である。削り出し高台で、底部接地径5.5cm、最大径7.2cmを測る。外面の立ち上がり部分の素地は灰白色(N8/0)、施軸部は灰白色(10YR7/1)を呈す。14は近世磁器の皿である。口径14cm m、器高3cm m、底径7cm mを測る。これは表(耕作土)近くの壁面精査中に出土した。

5) 小結

西側のb2地区で確認した弥生時代中期から古墳時代前期にかけての流路跡は検出されず、中世の水田跡を検出した。弥生時代以降の小泉川の流れや氾濫原による影響は、より南側で激しかったのではないかと考える。

b3地区の中世水田跡検出面から下位は、砂粒と粘土が互層に堆積する自然流路とみられ、ここから弥生土器や古式土師器は出土していない。小泉川に向かって南東方向に傾斜して流れる自然流路(中世以降)により、b2地区の流路群は大きく削られたようである。

(黒坪一樹)

(4) b 4地区の調査

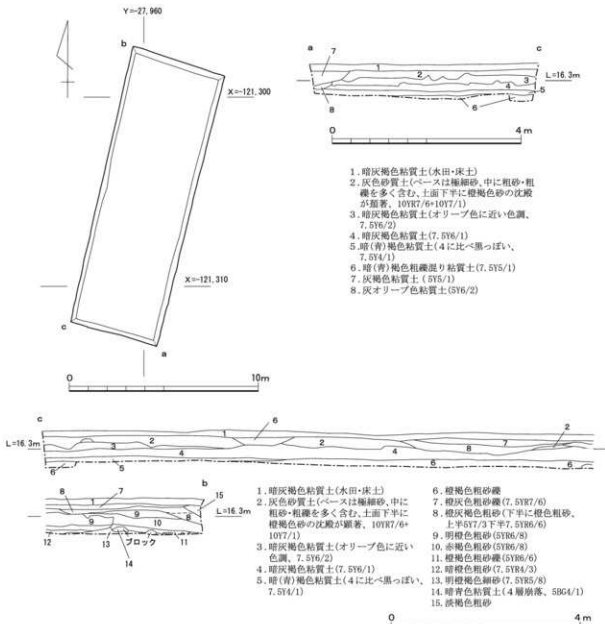
1) 調査概要(第19・20図)

中世の水田跡を検出したb 3地区の北側に設定した地区である。本地区では遺構の存在は確認されず、包含層中から中世の遺物が若干出土したのみである。遺物は摩滅が激しくかつ細片が多いため、図示し得るものがなかった。

基本層位は、第1層：暗灰褐色粘質土、第2層：黄橙色および灰白色砂質土、第3層：灰オリーブ色粘質土、第4層：暗灰色粘質土、第5層：暗褐



第19図 b 4地区 位置図



第20図 b 4地区 平・断面図

色粘質土、第6層：暗青褐色粗礫混粘質土、第7層：橙灰色粗砂礫、第8層：橙褐色粗砂、第9層：明橙色粗砂、第10層：赤褐色粗砂、第11層：橙褐色粗砂礫、第12層：暗橙色粗砂、第13層：明橙褐色細砂である。第6層上面で、平安時代末から鎌倉時代にかけての瓦器椀・土師器皿が出土した。

2) 小結

本地区では遺構の存在は確認されず、包含層中から主に中世の遺物が若干出土したのみである。第11・13層は粗砂礫で、河川の激しい流れや氾濫を示している。6層上面の土器はその影響で南に流されてきたものであろう。

(5) b 5 地区の調査

1) 調査概要 (第21・22図)

b 1 地区の北西に設定した小さな調査区である。

b 1 地区と同様、第2層上面で近世の溝群を確認した。これらの溝群からは中世の土師器皿、瓦器椀が出土した。

基本層位は b 1 地区と同じで、第1層が耕作土：暗灰色土、第2層が暗灰色混じり灰灰色土である。遺構は、第2層上面で中・近世の溝を8条検出した。

2) 出土遺物 (第23図)

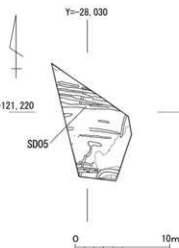
1・2はS D05から出土した。1は土師器皿である。内・外面をナデで仕上げる。口径7cm、器高1.5cmで、色調は淡黄橙色(10YR 8/4)である。2は瓦器椀である。薄い器壁で、内・外面にミガキ痕がみられる。口径15.8cmを測る。色調は灰色(内面N4/、外面N5/)である。

3) 小結

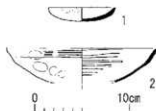
本地区では、中・近世の耕作溝を検出した。a 1・b 1 地区とともに建物など顕著な遺構はなく、中世以降は耕作地となっていたようである。



第21図 b5地区 出土遺物実測図



第22図 b5地区 平面図



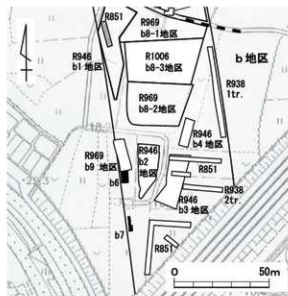
第23図 b5地区 出土遺物実測図

(6) b 6・7地区の調査

1)はじめに

長岡京跡右京第946次調査の一環として、京都第二外環状道路に関連する周辺工事用地進入路に当たる部分を先行して発掘調査を実施した。

発掘調査は、b 6地区が平成21年1月19日から同年1月23日まで、b 7地区は平成21年2月23日に実施し、調査面積はそれぞれ25㎡、18㎡である。現地調査は中川が担当した。



第24図 b 6・7地区 位置図

2)調査概要(第25図)

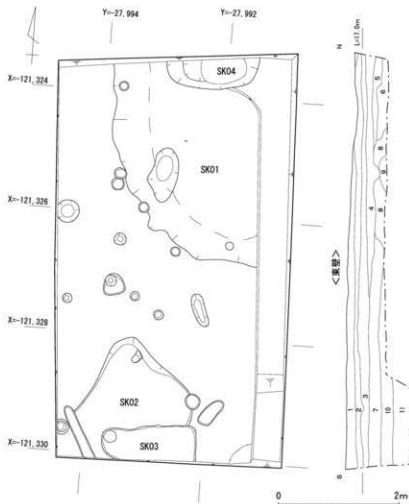
① b 6地区

b 6地区は平成21年度に実施したb 9地区の南側に隣接する調査区である。

基本層位は第25図のとおりで、第9層の灰黄色粘質土・第8層灰黄色礫混粘砂質土・第5層黄灰色砂礫の上面で土坑4基と小規模な柱穴を検出した。

これより上面を掘削中に瓦器椀の破片や土師器・須恵器などが出土しているが、遺構内から出土した時期の明らかな遺物は弥生時代中期の土器に限られる。

柱穴の時期については、出土遺物が存在しないか微細な遺物であ



- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 表土 | 7. 灰黄色(2.5V6/2)粘質土 |
| 2. 浅黄色(2.5Y7/4)粘砂質土 | 8. 灰黄色(2.5V6/2)礫混粘砂質土 |
| 3. 灰白色(2.5Y7/1)粘砂質土 | 9. 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂礫 |
| 4. 暗灰黄色(2.5Y5/2)礫混粘質土 | 10. 浅灰色(5Y7/4)砂質土 |
| 5. 黄灰色(2.5Y5/1)砂礫 | 11. 黄灰色(2.5Y6/1)砂 |
| 6. 灰色(5Y4/1)シルト | |

第25図 b 6地区 遺構配置図

ることから時期を特定することはできなかった。

なお、第7・8層より下位は第10・11層の砂質土・砂が堆積しており、流路内の堆積状況を示している。一部断ち割って下層の状況を調査したが、遺物は出土しなかった。

a. 検出遺構(第25図)

土坑SK01 輪郭が不定形な浅い落ち込みである。検出面からの深さは約15cmである。遺構の多くが調査区外に延びるため規模は確定できなかったが、南北検出長が3.4m、東西が3mである。東壁土層の第4層暗灰黄色礫混粘質土が遺構の埋土となる。遺構内からは弥生時代中期の土器片(第26図2)が出土している。

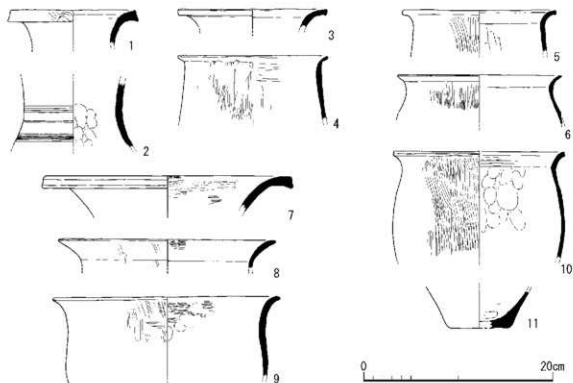
土坑SK02 検出面からの深さが深いところで10cmと浅い土坑で、南側で浅くなり輪郭が判らなくなる。北東辺は1.8m、北西辺は1.7mである。出土遺物は弥生時代中期のもので、図化できる破片は少なかった(第26図1)。

土坑SK03 東西方向に長辺を持つ隅丸長方形の土坑である。検出状況からSK02より新しいことがわかるが、出土遺物が弥生土器の小片のみで時期を特定することができない。長辺約1.5m、短辺0.6m、深さ20cmを測る。

土坑SK04 調査区北側に延びる土坑で、SK01より後に掘削された。検出できた部分での最大長は1.5mで、深さは約20cmであった。出土遺物が細片であるため時期は特定できなかった。

b. 出土遺物(第26図)

土坑SK01 2は弥生土器壺の頸部で、櫛描直線文が施されている。調整は内面ナデ、外面ハケ後ナデが施され、内面には指の圧痕と考えられるくぼみが多数認められた。



第26図 b6・7地区 出土遺物実測図

土坑SK02 1は弥生土器壺の口縁部である。口縁端面には柳描波状文が施されている。内面の調整はナデ、外面は摩滅のため不明であった。

②b7地区(第27図)

b7地区は、b6地区の南約20mに設定した狭小なトレンチで、明確な遺構は検出できなかった。

土層は、第8層がベースの地山と判断され、第5・6・7層中から遺物が出土している。出土した遺物には、比較的多くの弥生土器片が含まれる。

出土遺物(第26図)

包含層から弥生土器が出土した。

3・7は弥生土器の壺口縁部で、両者とも内面ハケ調整、外面は不明である。

4～6・8～10は弥生土器甕の口縁部である。4は内面ハケ及びナデ、外面ハケ調整である。5は内面ナデ、外面ハケ調整である。6は内面が調整不明、外面ハケ調整である。

8～10は内外面ともにハケ調整である。

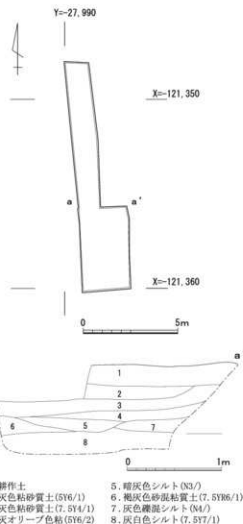
11は弥生土器底部で、内面はケズリで外面の調整は不明である。

3)小結

b地区の南西部に位置するb6・9地区は、b8地区南端と比べて0.5m程度の低い地形となっており、中世以降の水田跡および弥生～古墳時代にかけての流路跡を検出している。b2地区をはじめとして、流路内には比較的多くの弥生土器・土師器が出土しており、b6・7地区においても同様である。

b6・7地区周辺では中世以降に耕作地としての土地利用が行われているが、それ以前の弥生～古墳時代の流路が比較的良好に残っていることから、奈良～平安時代においては弥生～古墳時代の流路が流れを変えて、他の地点に流れていたものと考えられる。

(中川和哉)



第27図 b7地区 平・断面図

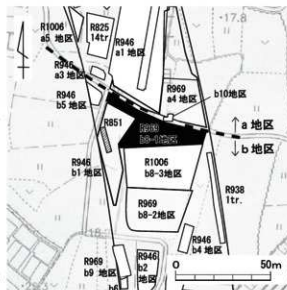
2.長岡京跡右京第969次調査(平成21年度)

(1) b 8-1 地区

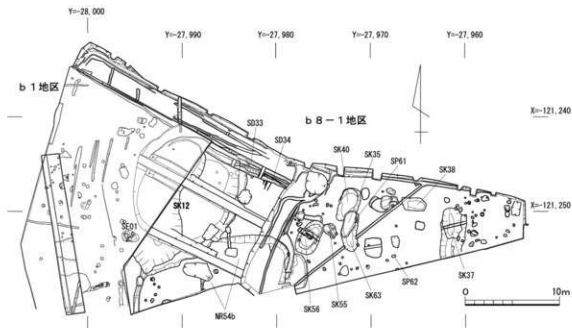
1) はじめに

当該地区は、右京第969次調査として実施した。北側は里道を挟んで a 1・a 4-1 地区、西側は b 1 地区、南側は b 8-3 地区と隣接している。調査区は、東西に長い変則的な五角形を呈し、一部里道に沿って西側へ延びる狭小な調査対象地を含む。

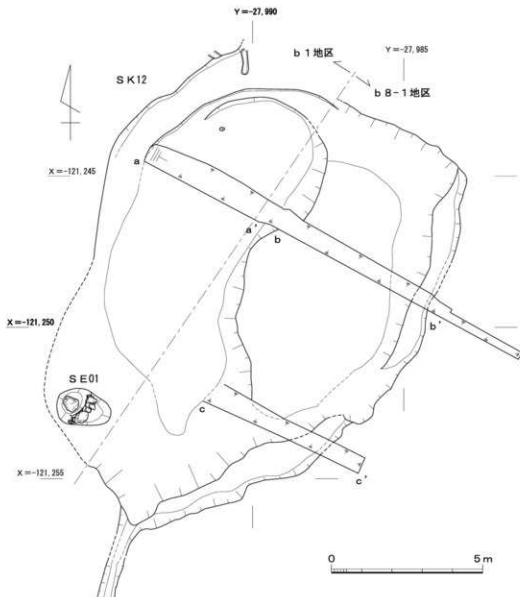
調査地点は、高低差を有する2面の耕作地にわたっており、現標高は西側がおよそ18.3m、東側がおよそ17.7mとなっている。里道をはさんで北側に存在する a 4-1 地区の現標高は18.5mとなっており、それぞれおよそ0.2～0.8mの比高差を有して低位となっている。基本層序は耕作土・床土を除くと、その下層がベースと考えられる明黄褐色砂質土となっていた。a 4-1 地区で確認された褐灰色シルトの堆積は認められず、耕作地の造成に伴い後世に大きく削平を受けたものと考えられる。高低差を有する2面の耕作地ともに、耕作土・床土直下が遺構検出面となり、遺構面は1面を確認したのみである。調査面積は488㎡である。



第28図 b 8-1 地区位置図



第29図 b 8-1 地区 遺構配置図

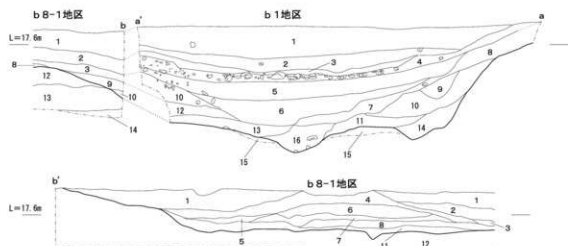


第30図 b8-1地区 池状遺構SX12平面図

2) 検出遺構

① 中世

池状遺構SX12(第30図) 調査地の西端で検出した。長軸15.5m、短軸12.0mを測る大型の池状遺構である。西半は平成20年度に第946次として調査を実施したb1地区に広がっており、21年度に残存する東半部の調査を実施した。南端部には南から流れ込むと考えられる溝が接続しており、南西隅付近には埋没後に井戸SE01が掘削されていた(b1地区で報告)。北端には重複して、溝SD33・34が北西から南東方向に掘削されており、SK12はそれらにより切られていた。北端部は後世の削平により失われたと考えられる。平面形は不整楕円形を呈し、長軸方向が北で東に振れている。埋土は、礫を多く含む砂質土を間層として大きく5層に分けられる。西半が深く掘削されており、検出面からおよそ1.7mを測る。東半は浅く、検出面からおよそ0.6mを測り、平坦面が形成されている。中世段階の遺物(第36図1～16)が出土した。

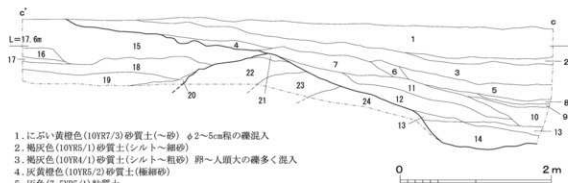


b 1 地区

- | | |
|-----------------------|----------------------------|
| 1. にぶい黄褐色(10YR7/3)粘質土 | 9. にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(粗砂礫) |
| 2. 灰白色(10YR7/1)粘質土 | 10. 灰色(7.5Y5/1)粘質土 |
| 3. 褐灰色(10YR4/1)粘質土 | 11. 灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘質土 |
| 4. 褐灰色(10YR6/1)粘質土 | 12. 褐灰色(10YR6/1)粘質土 |
| 5. 明褐色(7.5YR7/1)粘質土 | 13. 灰色(5Y4/1)粘質土(粗砂混入) |
| 6. 褐色(10YR5/1)粘質土 | 14. オリーブ黄色(7.5Y6/3)粘質土 |
| 7. 黄灰色(2.5Y5/1)粘質土 | 15. 褐色(7.5YR6/8)砂礫(岩盤) |
| 8. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土 | 16. 暗オリーブ灰色粘質土(2.5G7/1) |

b 8-1 地区

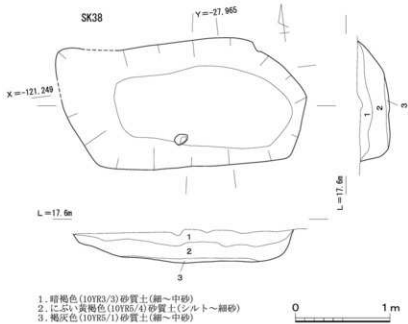
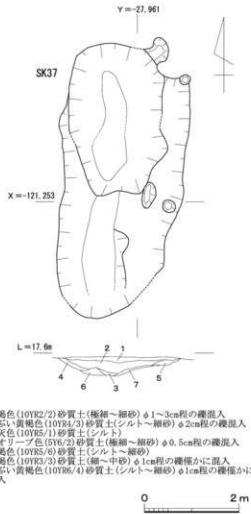
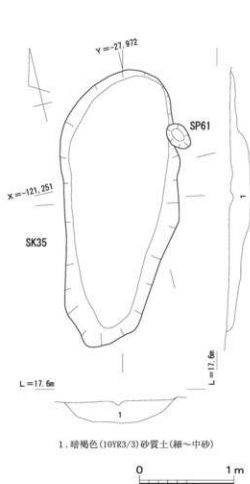
- | | |
|---------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. にぶい黄褐色(10YR7/3)砂質土(細砂)φ2~5cm程の礫混入 | 8. 褐灰色(10YR5/1)砂質土(細~中砂)φ1cm~拳大の礫混入 |
| 2. 褐灰色(10YR6/1)砂質土(細~粗砂)φ1~5cm程の礫混入 | 9. 赤褐色(10YR3/1)砂質土(中~粗砂) |
| 3. 灰色(7.5Y4/1)砂質土(細~中砂)φ2~10cm程の礫混入 | 10. 暗灰色(N3/1)砂質土(細~中砂) |
| 4. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(シルト~粗砂)卵~人頭大の礫多く混入 | 11. 灰色(N3/1)粘質土 |
| 5. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(細~粗砂)φ2~3cm程の礫混入 | 12. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(極細~細砂) |
| 6. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(細~粗砂)φ2~5cm程の礫混入 | 13. 灰色(N4/1)砂質土(細~極粗砂)φ2~3cm程の礫混入 |
| 7. 黄灰色(2.5YR5/1)砂質土(細~極粗砂)φ3~4cm程の礫混入 | 14. 褐色(7.5YR6/8)砂質土(細~粗砂)卵~人頭大の礫混入 |



- | |
|--|
| 1. にぶい黄褐色(10YR7/3)砂質土(中砂)φ2~5cm程の礫混入 |
| 2. 褐灰色(10YR6/1)砂質土(シルト~細砂) |
| 3. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(シルト~粗砂)卵~人頭大の礫多く混入 |
| 4. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(極細砂) |
| 5. 灰色(7.5Y5/1)粘質土 |
| 6. 灰オリーブ色(5Y4/2)砂質土(細~粗砂)φ2cm~卵大の礫混入 |
| 7. オリーブ黒色(5Y3/2)砂質土(細~中砂)φ2cm~拳大の礫混入 |
| 8. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘質土 |
| 9. 灰色(7.5Y6/1)粘質土 |
| 10. 灰色(7.5Y5/1)粘質土 |
| 11. 褐灰色(10YR5/1)砂質土(細~粗砂)φ2~6cm程の礫多く混入 |
| 12. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(シルト~粗砂)φ3cm~拳大の礫混入 |
| 13. 灰色(N4/1)粘質土 |
| 14. 暗灰色(N3/1)砂質土(粗砂)拳大の礫混入 |
| 15. にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(極細~細砂) |
| 16. 褐灰色(10YR5/1)砂質土(粗砂) |

- | |
|-------------------------------------|
| 17. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(細~中砂) |
| 18. 褐灰色(10YR5/1)砂質土(極粗砂) |
| 19. 褐灰色(10YR4/1)砂質土(粗砂) |
| 20. オリーブ灰色(2.5G5/1)砂質土(中砂) |
| 21. 明黄褐色(10YR6/6)砂質土(シルト~極細砂) |
| 22. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土(極細~細砂) |
| 23. 灰色(7.5Y4/1)砂質土(中~粗砂)φ1~3cm程の礫混入 |
| 24. 褐色(7.5YR6/8)砂質土(細~粗砂)卵~人頭大の礫混入 |

第31図 b 8-1 地区 池状遺構 S K 12土層断面図



第32図 b 8 - 1 地区 土坑 S K 35 ・ 37 ・ 38 平・断面図

溝 S D33(第29図) 調査地の標高が高くなる西半部の北寄りで検出した。西側は S K12 を切っており、西端は狭く延ばした調査区へと続いていくが、削平により消失している。東側も標高が低くなる西側との段差を有する地形により失われている。幅はおよそ0.3～0.4m、検出面からの深さは0.1～0.25m程度を測り、残存長は約11.5mを測る。溝底は東へ向かって下がっていた。埋土は灰白色砂質土の単純一層であった。

溝 S D34(第29図) S D33の南側で検出した。S D33とほぼ並行しており、埋土についても同質であった。S K12の埋没後に掘削されており、東側は S D33と同様に西側との段差を有する地形により失われている。幅はおよそ0.7～1.0m、検出面からの深さは0.2m程度を測り、残存長は約9.5mを測る。溝底は東へ向かって深くっており、東端は S D33により切られていた。

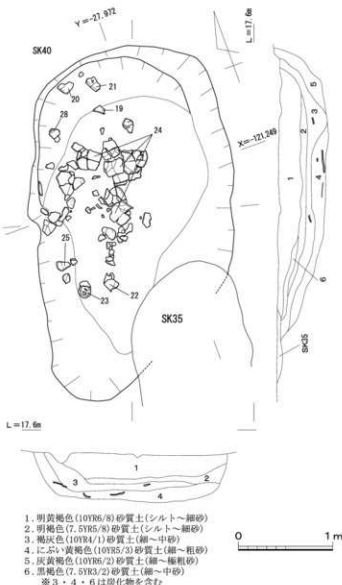
②古墳時代

自然流路 NR54b(第29図) 調査地南端中央付近で検出した流路である。西半は S K12により切られているが、東へ流れた後はほぼ直角に南へと屈曲し、b 8-3地区へと延びている。詳細については b 8-3地区で記述する。

③弥生時代

土坑 S K35(第29・32図) 調査地のほぼ中央で検出した。南北に主軸を取る楕円形を呈し、長軸3.0m、短軸1.2mを測る。検出面からの深さは最深部で0.2mを測り、埋土は暗褐色砂質土の単純一層であった。東辺の北端付近を柱穴 S P61により切られている。

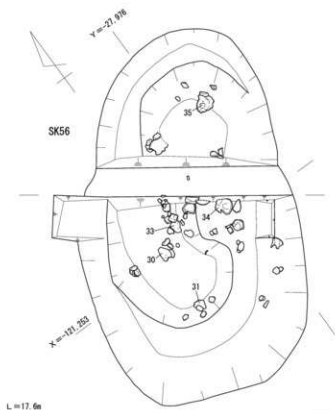
土坑 S K37(第29・32図) 調査地の東端で検出した。主軸をほぼ真南北に取る楕円形を呈し、長軸5.9m、短軸2.6mを測る。南端は b 8-3地区において検出された。北半が二段掘り状に深くっており、検出面からの深さは最深部で0.4mを測る。埋土は7層に分けられ、遺物の多くは第2層から出土した。



第33図 b 8-1地区 土坑SK40平・断面図



1. 褐灰色(5YR5/1)砂質土(極細～粗砂)φ3～5cm程の礫混入



- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト | 5. 淡黄色(2.5Y7/4)粘質土 |
| 2. 褐灰色(10YR4/1)シルト | 6. 淡黄色(5YR/4)粘質土 |
| 3. 灰色(10YR2/1)シルト | 7. 明黄褐色(2.5Y7/6)シルト |
| 4. 灰黄褐色(10YR5/2)シルト | 8. 灰黄色(2.5Y6/2)シルト |

0 1m

第34図 b 8-1地区 土坑SK55・56平・断面図

土坑SK38(第29・32図) 調査地の標高が低くなる東半部中央のやや北寄りで見出した。南北1.4m、東西2.6mを測る楕円形を呈し、検出面からは深さ約0.4mを残す。北西隅付近は現代の暗渠による攪乱を受けていた。埋土は3層に分かれ、第3層である褐灰色砂質土から弥生土器の底部付近が出土した。

土坑SK40(第29・33図) 調査地の中央付近で見出した。南北3.8m、東西2.2mを測る楕円形を呈し、検出面からは深さ0.5m程を残す。南側をSK35により一部切られている。第3・4層から弥生土器(第37図19～28)がまとめて出土した。

土坑SK55(第29・34図) 調査地の中央付近で見出した。南北1.9m、東西1.1mを測る楕円形を呈し、北半が西側へと張り出している。検出面からは深さ0.15m程を残す。埋土は褐灰色砂質土の単純一層である。埋土から弥生土器の甕(第38図30)が出土した。

土坑SK56(第29・34図) 調査地の中央やや西寄りの地点で見出した。南北3.9m、東西2.4mを測る楕円形を呈し、検出面からは深さ0.7m程を残す。埋土から弥生土器(第38図31～36)が出土した。

柱穴SP61(第29図) SK35の東辺北1/3程の位置に穿たれた柱穴である。長軸0.3m、短軸0.2mを測る楕円形を呈する。SK35が埋没した後に掘削されている。

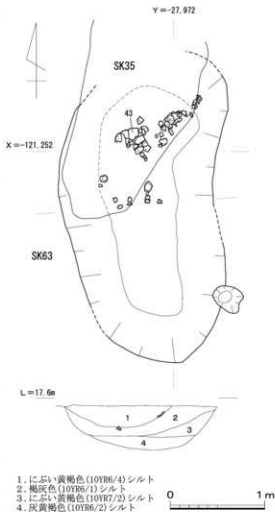
柱穴SP62(第29図) 調査地の中央から南東寄りの地点で検出した。南北0.25m、東西0.4mを測る卵形を呈し、検出面からは深さ0.1m程を残す。

土坑SK63(第29・35図) 調査地の中央やや南よりの地点で検出した。南北3.3m、東西1.7mを測る楕円形を呈し、検出面からは深さ0.5m程を残す。北西側約1/2がSK35により切られている。埋土は4層に分かれ、第4層である灰黄褐色シルトから弥生土器(第38図40～43)がまともに出て出土している。

3) 出土遺物

① 中世

池状遺構SX12(第36図1～17) 1～3は瓦器碗である。1は上半部が1/6程度出土している。口径は12.6cmを測り、口縁部付近をやや外反させる。内面の圈線ミガキは粗である。2は1/8程度が出土している。口径は14.0cmを測り、口縁部に沈線が1条めぐる。断面三角形の低い高台を貼り付けている。内面の圈線ミガキは粗である。



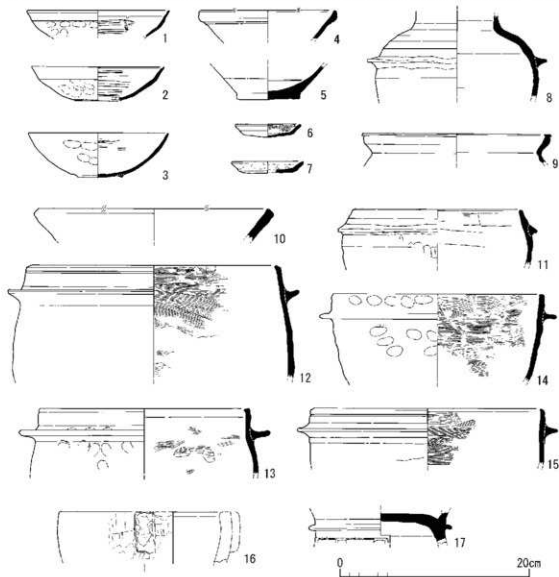
1. しぶい黄褐色(10YR6/4)シルト
2. 極灰色(10YR6/1)シルト
3. しぶい黄褐色(10YR7/2)シルト
4. 灰黄褐色(10YR8/2)シルト

第35図 b 8-1地区 土坑SK63平・断面図
3は1/2程度が出土している。口径は14.7cm、底径は4.6cmを測る。摩滅が激しく調整等については不明瞭である。断面三角形の低い高台が貼り付けられている。4・5は白磁碗である。4は口縁部付近のみが1/10程度出土している。口径は14.0cmに復元でき、口縁は玉縁状を呈する。5は体部下半が出土している。胎土は精良で、焼成は堅緻である。内面に1条の圈線がめぐり、外面下半は露胎である。削り出しの蛇の目高台を呈するが、畳付の削り出しは低くわずかである。外径は6.6cmを測る。6・7は土師器皿である。ヨコナデで仕上げている。6は1/3程度が出土しており、口径は6.8cmを測る。口縁の一部に煤の付着が認められ、灯明皿としての使用が推察される。7は1/2程が遺存しており、口径は7.4cmを測る。成形に伴う指頭圧痕が内外面ともに明瞭に残る。8は須恵器壺と考えられる。頸部から肩部かかる部分が1/4程度出土している。胎土は緻密で、焼成も非常に堅緻である。内外面ともに丁寧なナデで仕上げている。肩部に鐮状の突帯が1条めぐっており、上部の仕上げは丁寧であるが、下部はやや粗く接合部に間隙がみられる。加東市吉馬古窯跡群に類似が知られる。9は壺口縁部である。全体の1/4程が残存している。復元口径は19.7cmである。10は東播磨の須恵器鉢である。口縁付近が1/10程度出土したのみであるが、口径は24.3cmに復元可能である。胎土は密で焼成は堅緻である。11～13は瓦質の羽釜である。

11は1/8程の出土で、口径は17.5cmを測る。鈎の下端に剝離痕が認められ、三足釜であると考えられる。12は口径25.7cmを測り、内面は横方向のハケで仕上げている。13は口径22.0cmを測り、内面はハケで仕上げている。14・15は土師質の羽釜である。14は1/6程出土しており、口径は22.0cmを測る。鈎の下側は全面にわたって煤が付着している。15は口径24.0cmを測り、14と同様に外面に煤の付着が認められる。16は滑石製の石鍋である。口径は9.8cm、体部の厚さは1.2cmをそれぞれ測る。断面長方形を呈する瘤状取手を造り出している。17は圈足円面硯である。全径の1/4程度が出土している。硯面径は10.0cm、外堤径は外堤の先端が欠損しているが、14.0cm前後を測ると考えられる小型品である。1条の突帯を有し、脚部はほとんど失われている。脚柱部には長方形透孔が12か所に穿たれると考えられ、その間隙にはヘラ描き沈線が縦に2～3条入れられている。硯面には、細かな引っ掻き傷が多く認められる。

②弥生時代

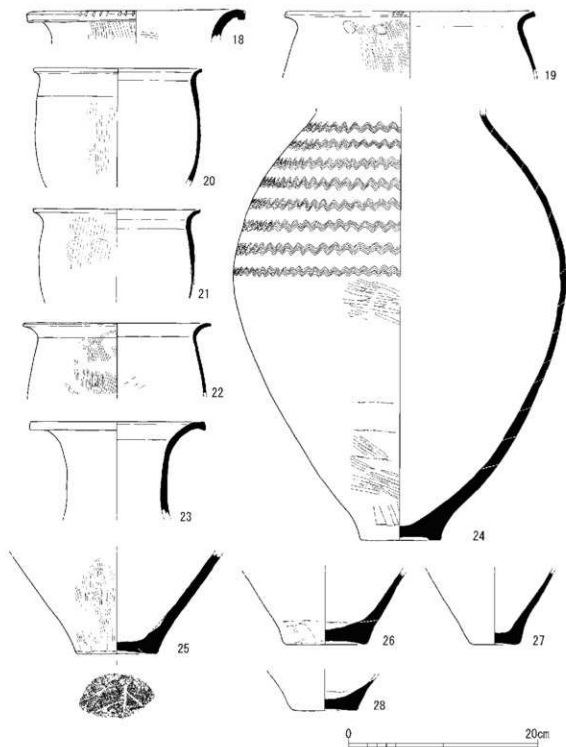
土坑S K37(第37図18) 18は壺の口縁である。口縁部全周の1/8程度の出土であるが、復元口



第36図 出土遺物実測図(1)

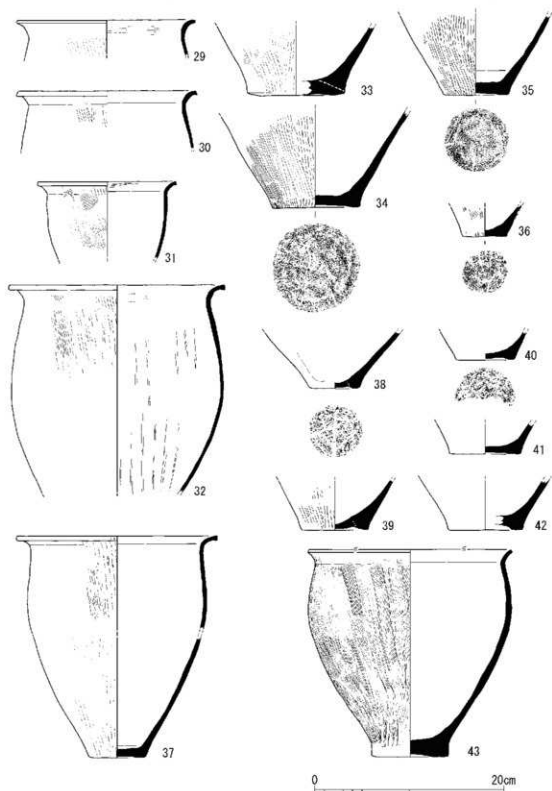
径は21.0cmを測る。外面は粗いハケ調整が施されており、口縁部上端にはキザミ目を有する。

土坑S K40(第37図19～28) 19～22は甕である。いずれもが下半部を欠損する。19は口縁部である。全周の1/7程度が出土した。復元口径は25.4cmを測る。口縁端部にキザミ目を有し、外面はハケ調整で仕上げているが、内面は摩滅により不明である。20は1/4程度が残存する。復元口径は17.6cmを測る。内外面ともにハケ調整を施す。口縁部上端を上方へ軽くつまんでいる。



第37図 出土遺物実測図(2)

21は1/3程度が残存する。復元口径は15.1cmを測る。外面に粗いハケ調整の痕跡が部分的に残存しているが内面調整は摩滅により不明である。器壁下半は内側の剝離により薄くなっている。22は1/5程度が残存する。復元口径は19.8cmを測る。外面はハケ調整で仕上げられており、内面はケズリ調整により仕上げている。頸部から下の部分に黒斑がみられる。23は壺である。頸部から上の



第38図 出土遺物実測図(3)

みて体部を欠損する。口径は18.1c mを測。調整は摩滅により不明である。24は壺である。体部上半に波状文を8条にわたって施している。口縁部を欠損するが、残存高は45.0c mを測り、体部最大径は35.3cm、底径は8.4cmをそれぞれ測る。外面は丁寧なミガキ、内面はナデにより仕上げられている。25～28は底部である。いずれも平底を呈するが、中央部が若干ながら凹んでいる。25は底部付近が1/2程出土している。底径は8.2c mを測り、平底を指向するが、中央付近がわずかに凹む。底面には木葉痕が確認できる。外面をミガキ調整で仕上げるが、内面は摩滅により不明である。26は底部付近が完存する。底径は8.4cmを測り、中央付近がわずかに凹む。外面に黒斑が認められる。27は底部付近が3/4程出土している。底径は7.0c mを測る。摩滅により調整は内外面ともに不明である。28も底部付近が完存する。底径は5.0cmと小径で、体部下端と底面の大部分に黒斑が認められる。

土坑 S K 54(第38図29) 29は甕で、1/6程が出土している。口径は18.8cmを測り、外面をタテ方向のハケ調整で仕上げている。

土坑 S K 55(第38図30) 30は甕で、1/4程が出土している。口径は18.8c mを測る。

土坑 S K 56(第38図31～36) 31は甕で、1/5程が出土している。口径は14.4cmを測る。32は1/4程が出土している。口径は25.2cmを測る。いずれも外面をタテ方向のハケ調整で仕上げている。33～36は底部である。33は1/2程が残存する。底径は10.2c mを測り、外面を粗いハケ調整で仕上げる。34は底部付近が完存する。底径は9.4cmを測り、平底を指向するが、中央付近がわずかに凹み、木葉痕が確認できる。外面をハケ調整で仕上げるが内面は摩滅により不明である。35も底部付近が完存する。底径は6.8cmを測り、底面が34と同様に凹みを有する。外面を粗いハケ調整で仕上げ、底面には木葉痕が確認できる。36も底部付近が完存する。底径は4.7cmと小型である。外面をハケ調整で仕上げるが、内面は摩滅により不明である。

土坑 S K 58(第38図37) 37は甕である。1/4程が出土している。口径は21.0cm、器高は23.5cm、底径は5.4cmを測る。外面はタテ方向の粗いハケ調整で仕上げているが、内面は摩滅により不明である。

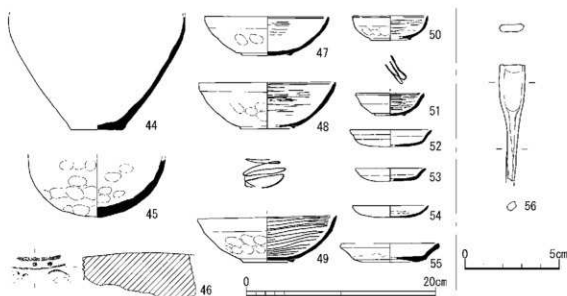
ビット S P 61(第38図38) 38は甕で、底部付近が完存する。底径は5.2cmを測る。中央付近がわずかに凹む平底を呈し、底面には木葉痕が確認できる。外面に黒斑を有する。

ビット S P 62(第38図39) 39も甕で、底部付近が完存する。底径は7.0cmを測る。外面をハケ調整で仕上げるが、内面は摩滅により不明である。

土坑 S K 63(第38図40～43) 40～42は底部である。40は1/2程が残存し、底径は6.1c mを測る。41は1/2程が残存し、底径は7.0cmを測る。42は1/3程が残存し、底径は7.5cmを測る。以上3点はいずれも摩滅により調整は内外面ともに不明である。43は甕である。1/4程度が残存しており、口径は21.3cm、器高は22.0cm、底径は10.2cmを測る。外面はタテ方向の粗いハケ調整で仕上げている。

③その他の遺物(第39図44～56)

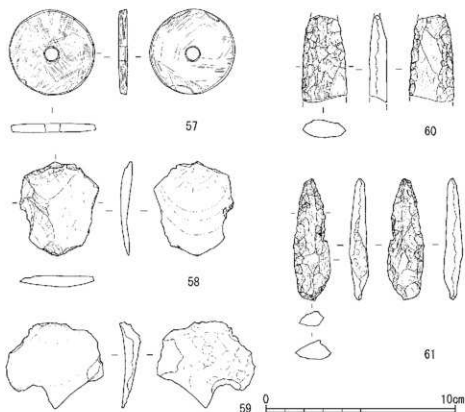
44～55は包含層出土遺物である。44は平底を呈する底部である。1/2程が出土しており、底径



第39図 出土遺物実測図(4)

は5.6cmを測る。摩滅により調整は不明であるが、体部下端には黒斑がみられる。45は壺か。丸底を呈し、器壁も厚みを有する。成形に伴う指頭圧痕が顕著である。外面には黒斑、赤変部位が確認できる。46は軒平瓦である。焼成は堅緻で灰白色を呈する。わずかではあるが、珠文と唐草文の一部が判別できる。47～49は瓦器碗である。47は底部付近は完存するが、体部は1/6程度を残すのみである。口径は13.1cm、器高は4.2cm、底径は5.1cmを測る。断面三角形を呈する低い高台を貼り付けており、口縁部には脆弱な沈線が1条めぐる。48は3/5程が出土している。口径は14.4cm、器高は4.9cm、底径は5.6cmを測る。断面三角形を呈する低い高台を貼り付けており、口縁部には1条の沈線がめぐる。いずれも内面の圈線ミガキは粗である。49は口縁部をわずかに欠損するのみで、ほぼ完存している。断面三角形を呈する高台を貼り付けており、口縁部に1条の沈線がめぐる。内面の圈線ミガキはやや密で、見込みに粗い螺旋状暗文を施す。50・51は小型の瓦器碗である。50は1/3程の出土である。口径は7.9cm、器高は2.6cmを測り、断面三角形を呈する高台を貼り付ける。口縁端部内面に1条の沈線がめぐる。51は1/2程の出土である。歪みが大きい。口径は7.2cm、器高は2.4cmを測る。高台は断面三角形のものが貼り付けられている。口縁端部内面に1条の沈線がめぐり、見込みにジグザグ状の暗文を施している。52～54は土師器皿である。52は1/4程度の出土である。口径は8.6cm、器高は1.8cmを測る。53は2/3程度の出土である。口径は7.4cm、器高は1.4cmを測る。以上2点は口縁部をヨコナデしわずかに反外させる。54は1/4程度の出土である。口径は8.0cm、器高は1.3cmを測る。口縁の1か所に煤が付着しており、灯明皿として利用されたと考えられる。55は青磁皿である。全体の3/8程度の出土である。口径は10.3cm、器高は2.0cmを測る。胎土は緻密で焼成は堅緻である。薄緑色の軸葉がかり、外面下半は露胎である。56は煙管の吸い口である。S D34から出土した。先端部を欠損し、埋没に伴う土圧により扁平に潰れている。

石製品(第40図57～61) 57は紡錘車である。S K56から出土した。粘板岩製で直径4.5cm、厚



第40図 出土遺物実測図(5)

さ4.5mm、孔径8.8mmを測る。IIa類に分類でき、無文である。穿孔は両面からなされている。縁辺部に一部ながら剥離が認められる。58・59はSK40から出土したサヌカイトの剥片である。いずれも片側に自然面が残る。60はSK56から出土したサヌカイト製の打製石剣である。切先と基部を欠損する。残存長は4.6cm、最長幅2.4cm、厚さ9.5mmをそれぞれ測る。61はSD33から出土したサヌカイト製の尖頭器である。全長は6.4cm、最大幅2.0cm、厚さ1.0cmをそれぞれ測る。側辺に一部ながら自然面が残る。

4)小結

b 8-1 地区では、弥生時代中期から近世に至る遺構を検出した。

弥生時代 調査区東半では安定した遺構面が確認でき、a 4-1 地区で検出されたものと同時期となる中期の土坑群を検出した。いずれの遺構も、検出面と埋土の土質に顕著な差異が認められず、埋没に際してはさほど時間を要しなかったと考えられる。また、SK40を除いて、大きく復元することができる遺物の出土は認められず、破損した土器を投棄した状況を示している。こうした状況が、遺構の性格を解明する上で大きな手がかりとなるであろう。

中世 調査区西半で池状遺構SX12を検出した。西半部が東半部に比して深く掘削されており、埋土には礫を多く含む。播磨から搬入された遺物や平安時代の軒平瓦、円面硯等も出土している。

(奈良康正)

(2) b 8-2 地区の調査

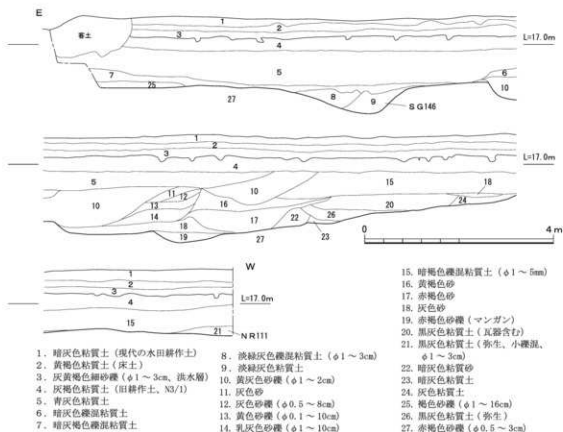
1) はじめに

調査地は、b 8-3 地区の南側に隣接する調査区である。

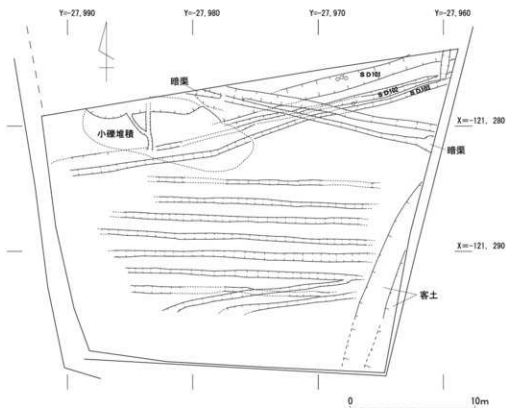
基本土層は、現代の水田耕作土(第1層)、床土(第2層)の下に洪水堆積層(第3層)の砂礫によって覆われた近世以降の水田面(第4層上面)が認められる(第1遺構面)。この第4層を取り除くと第5層および第15層が分布する。南東部に堆積する第5層は水田造成のための入れ土と考えられる。調査地の北西部に分布する第15層の上面では瓦器椀などの中世遺物が出土する溝や土坑を検出した(第2遺構面)。調査地の南東側では、地形が下がり洪水堆積層の砂礫が認められる。第10層から第14層までの堆積は砂礫を中心としており、一過性の洪水により一気に押



第41図 b 8-2 地区位置図



第42図 b 8-2 地区南壁土層図



第43図 b8-2地区 第1遺構面遺構配置図

し流されて堆積した砂礫と判断する。第16層から第19層までの堆積は砂層を中心としており、比較的緩やかな流れによって堆積したものと考えられる。NR111の埋土(第21層)は南壁では流れに平走する断面を、西壁では流れに直交する断面を示している。第20層では中世遺物が出土しており、第21・28層からは弥生土器が出土している。第27層上面では弥生時代末から平安時代の遺構を検出した(第3遺構面)。

2) 検出遺構

① 近世(第1遺構面、第43図)

第4層の上面で第1面の調査を行った。最も新しい遺構は、調査地南東部の落ち込みで、現在の水田区画を造成する段階に客土を行い水田を広げている。次に北西から南東方向の溝と、その南に並行する暗渠の溝がある。この暗渠の溝の南西には5×15mの範囲に小泉川水系に由来する洪水堆積と考えられる小礫が堆積する。

調査地北辺部では水田を区画する3条の溝(SD101・102・103)を検出した。SD101は幅1.2m、SD102・103は幅0.4～0.6m、深さは0.1～0.3mを測る。これらの溝々を境に北と南の水田は段差(10cm)をもっており、南では一筆の水田内での耕作単位を示すと考えられる東西溝9条を検出した。これらの溝は、幅30～60cmを測り、1.3～1.5mの間隔で掘られている。また、全面に砂によって埋まった牛や人の足跡が残っており、水田として土地利用されていた段階で洪水により埋没したと考えられる。

②中世(第2遺構面、第44図)

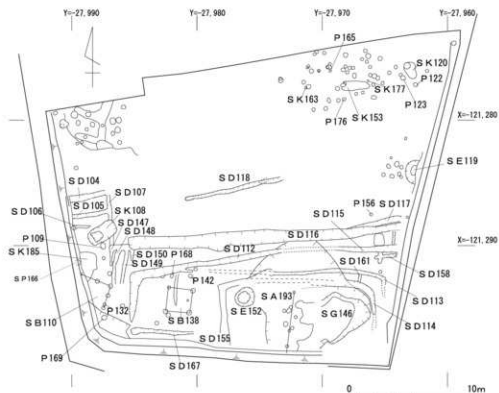
第2遺構面では掘立柱建物跡2棟(SB110・138)、柱列(SA193)のほか区画溝9条(SD112～117・148・155・158)、井戸2基(SE119・152)、池状遺構(SG146)、土坑4基(SK108・120・153・185)などを検出した。

溝SD112・113・115(第44図) 調査地の南半分で検出した。SD112はSB138の北で2条に分かれ、北側の溝は東でSD115に接続し、南側の溝は東でSD113に接続すると考えられる。溝は最大幅1.0m、深さ0.1mを測る。掘立柱建物跡SB138を画するように「L」字に掘削されている。SD112・113によって区画される範囲は東西20.5mを測る。

溝SD114・155(第44図) 調査地の南東部で検出した「コ」字に掘られた溝である。中央部分は洪水によって消失しているが、同一の溝と考えられる。溝の幅は約0.5mで、深さ5～10cmである。区画溝と判断される。区画される範囲は東西12.5mを測る。

溝SD116・117(第44図) 調査地の中央部やや南よりで検出した東西方向の溝である。SD116は幅1.2m、深さ0.2mを測り、西側はSD112の屈曲部のあたりで終わっている。調査地の東端付近でSD117と重複関係にあり、切り合い関係より南側に掘り直したと判断される。SD117は幅0.5m、深さ0.1mで、4m分を検出した。

溝SD104～107・147～150(第44図) 調査地の西側中央部で検出した溝群である。いずれも幅約30cm、深さ0.1mである。溝の間隔にばらつきがあるものの外側の区画と内側の畝状を



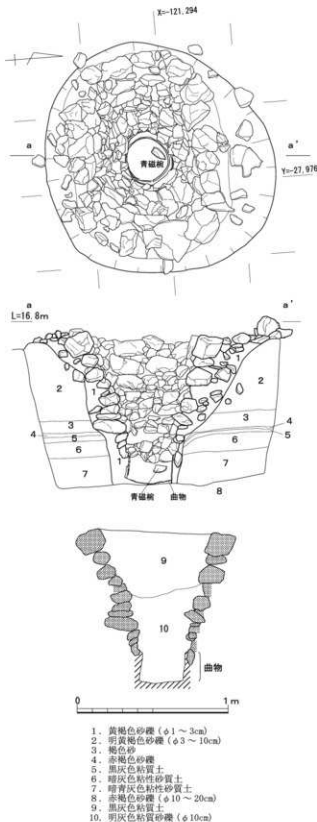
第44図 b 8-2地区 第2遺構面遺構配置図

なしており、耕作に伴うものと考えられる。溝内から瓦器の小片が出土した。

井戸 S E 119(第44図) 調査地の中央部東端で検出した円形の素掘り井戸で、東半は調査地外となっている。復元径約2.0m、検出面からの深さ約1.7mを測る。井戸は礫混じりの粘土層で埋まっており、埋土からは土師器の皿、瓦器、羽釜、須恵器甕などが出土した(第51図21～24)。

井戸 S E 152(第45図) 調査地の中央部南辺近くで検出した石組みの井戸で、掘形は長軸3.2m、短軸3.0m、検出面からの深さ1.05mを測る。井戸底には曲物を設置している。北西側からの土圧を受けて変形しているが、深さ0.6mまでを石を組むために漏斗状に掘削し、以下30cm程度を曲物を設置するため垂直に掘削している。石組みは、断ち割りの断面観察では、10～13段程度の川原石を積み上げている。第4層と第8層の赤褐色砂礫がこの井戸の透水路と考えられる。井戸内からは瓦器皿・碗、青磁碗、羽釜の脚、黑色土器などが出土した(第51図25～27)。この井戸は西と北側を「L」字に曲がる S D 155によって区画されている。

土坑 S K 108(第46図) 調査地の中央部西端で検出した。平面隅丸の長方形を呈し、長軸2.4m、短軸1.2m、深さ約25cmを測る。底面はほぼ水平である。土坑の中央部では一辺約1.1mの範囲に数cmから拳大の川原石が敷き詰められていた。その中央には一辺約20cm大の石を載せている。また、南西の小口中



第45図 b 8 - 2 地区 井戸 S E 152 実測図

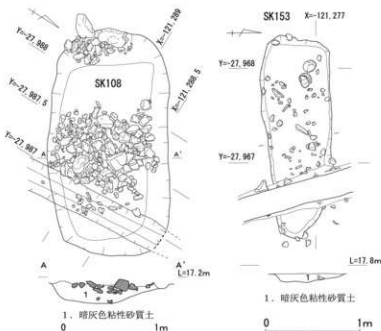
央には長軸30cm大の川原石を短軸に並行に配していた。土坑内からは土師器皿、瓦器碗、須恵器甕の口縁片が出土した(第51図16～18)。

土坑SK153(第46図)調査地の北東部で検出した。平面隅丸の長方形形状を呈し、長軸2.15m、短軸0.75m、深さ約10cmを測る。底面は舟底状である。土坑内からは土師器片、瓦器碗、羽釜の脚、須恵器片が出土した。

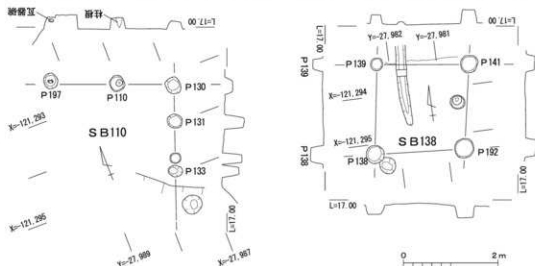
土坑SK185(第44図)調査地の南西部、土坑SK108の南側で検出した。一部は調査地外に広がっており、南北1.2m、東西1.65m、深さ0.3mを測る。土坑内からは弥生土器の底部しか出土していないが、検出した層位から中世の遺構と考えられる。

掘立柱建物跡SB110(第47図)調査地の南西角で検出した東西2間以上、南北2間以上の掘立柱建物跡である。柱穴P197、P110、P130、P131、P133で構成され、柱掘形は直径20～30cm、深さ30cmで、柱間の寸法は0.8～1.2mを測る。柱筋は、座標北に対しN12°Eである。P197からは瓦器碗(第51図30)が出土した。P110では直径5cm、高さ26cmの柱根が、P131では直径10cm、高さ18cmの柱根が遺存していた。

掘立柱建物跡SB138(第47図)調査地南辺やや西寄りで見出した東西1間、南北1間の掘立



第46図 b 8-2地区 土坑SK108・153実測図

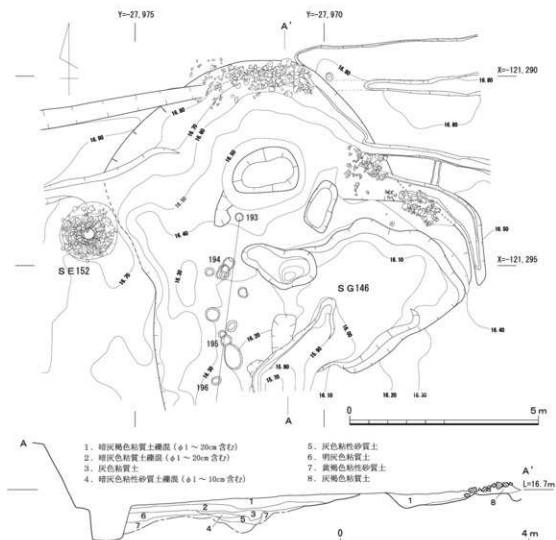


第47図 b 8-2地区 SB110・138実測図

柱建物跡である。柱穴P138、P139、P141、P192で構成され、柱掘形は直径30cm深さ30cmで、柱間の寸法は1.2～1.3mである。柱筋は、座標北に対しN8.5°Eである。この建物は、西側と北側を「L」字に曲がるSD112に、南側をSD167によって画されている。SD167は幅0.3m、深さ0.1mで、5.2m分を検出した。

柱列SA193(第48図) 調査地の南辺やや東側で検出した。池状遺構SG146の埋土掘削中に検出した、南北方向に並ぶ柱列である。柱穴P193、P194、P195、P196で構成され、柱掘形は直径20cm、深さ30cmで、柱間の寸法は1.3～1.8mを測る。柱筋は座標北に対しN8°Eである。

池状遺構SG146(第48図) 調査地の南東部で検出した。平面長方形を呈する人工的に造作された池状の遺構である。長軸9m、短軸7mを測り、北西から南東に主軸を持つ。北西から南東部にかけて徐々に深くなり、最も深いところで深さ1mを測る。北側及び東側には州浜を護岸した川原石の貼り付けが残っており、中央部北側には鳥状の地山の掘り残しが1か所認められることから庭園の池であると考えた。鳥状掘り残しの規模は、東西2.1m、南北1.8mである。池状遺構は暗灰色及び灰色の粘質土によって埋まっており、最下層の堆積層は淡い緑灰色に変色した粘



第48図 b 8-2地区 池状遺構SG146実測図

土層(第48図8・9層)である。遺構を検出した上面が削平されているうえ、南端が調査外に広がるため水口などの施設は確認できない。埋土内からは、土師器杯・瓦器皿・碗、白磁碗、瓦質羽釜、布目瓦などが出土している(第51図1～15、44・45)。

③弥生時代末～平安時代(第3遺構面)

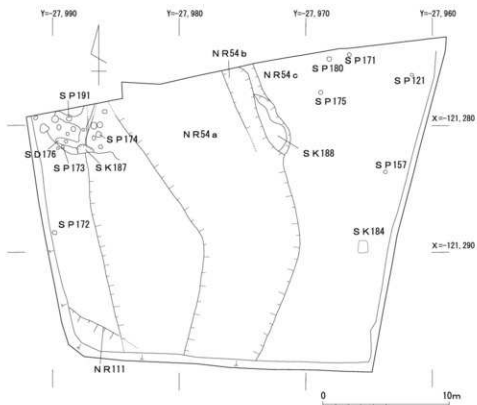
第3遺構面では、中央で平安および古墳時代の流路(NR54a・b)を検出したほか、弥生時代の土坑3基(SK184・187・188)、流路(NR111・54c)やピット(SP121・157・171～175・180・191)を検出した。ピットや土坑は調査地北西部および北東部で検出した。ピットからは弥生土器が出土するが、建物としてまとまるものはなかった。以下主な遺構について記述する。

土坑SK184(第50図) 調査地の中央部東端で検出した。平面隅丸方形で、南北約0.9m、東西約0.7m、深さ0.1mを測る。断面は舟底状を呈する。土坑内からは加飾の二重口縁壺・高杯脚部、受け口状口縁のタキキ甕などが出土した(第52図32～38)。

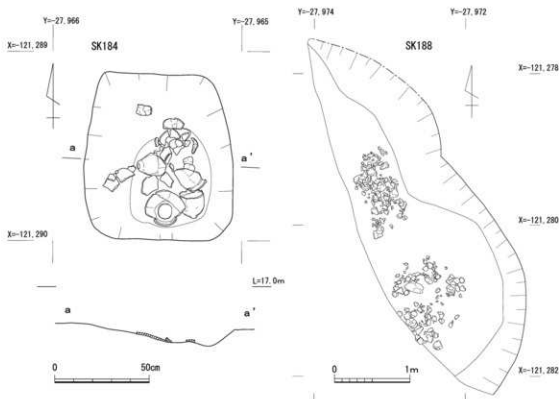
土坑SK187(第49図) 調査地北西部で検出した。南半は削平されている。残存する規模は東西1.3m、南北0.8mを測る。土坑内からは甕が出土した。

土坑SK188(第50図) NR54bによって西半部が削り取られており、全体の形状を把握することはできないが、2基の土坑が重なっているようにも判断される。礫とともに弥生土器の甕などが出土している(第52図39～42)。

NR111(第49図) 調査地南西隅で検出した。埋土は黒灰色粘質土(第42図21層)で、小礫がラミナ状に堆積する。



第49図 b8-2地区 第3遺構面遺構配置図



第50図 b8-2地区 土坑SK184・188実測図

NR54 a (第49図) b8-3地区から調査地中央部を南北に縦断する自然流路である。本調査区では幅8～12m、長さ23m分を検出した。中央部は砂礫の堆積(第42図10層)となっており、西部部の粘質土層(第42図24層)中には弥生土器片が含まれていた。また、NR54 aの北東部で古墳時代の流路NR54 bと弥生時代の流路NR54 cの延長部分を検出した。NR54 bは幅2m、長さ5m分を検出した。西側および南側はNR54 aによって削られているため溝の底面は残っていない。埋土には古墳時代の土器片が含まれる。なお、詳細についてはb8-3地区で記述する。

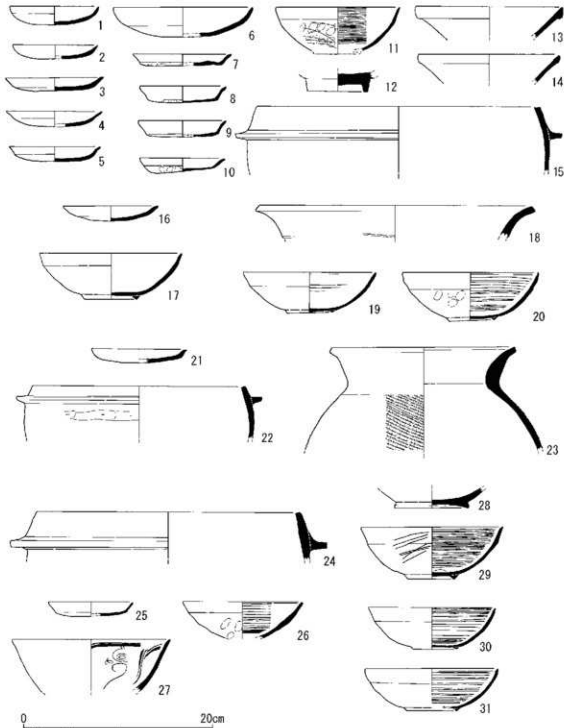
3) 出土遺物

① 中世～平安時代

池状遺構SG146(第51・53図1～15、44・45) 瓦器椀・皿、土師器皿・杯、中国製の白磁碗、瓦質の羽釜などが出土している。1・8～10は瓦器皿で、全体が丸く内湾するもの(1)と平らな底部から外反するもの(8～10)がある。1は口径9.4cm、器高2.0cm、8は口径9.2cm、器高1.3cm、9は口径9.3cm、器高1.7cm、10は口径9.0cm、器高1.6cmを測る。土師器皿(2～5・7)も同様で、丸く内湾もしくは直線気味に立ち上がるもの(2・3)と平らな底部から外反するもの(4・5・7)がある。2は口径9.0cm、器高1.0cm、3は口径10.4cm、器高1.5cm、4は口径10.0cm、器高1.7cm、5は口径9.6cm、器高1.6cm、7は口径10.4cm、器高1.3cmを測る。6は土師器の杯で口径14.5cm、器高3.2cmを測る。11は瓦器椀で、口径13.0cm、残存高5.2cmを測る。12～14は中国製の白磁碗である。12は底部で、高台径6.4cm、高台の高さ1.4cmを測る。13は口径15.3cm、残存高3.3cmを測る。14は口径14.8cm、残存高3.0cmを測る。15は瓦質の羽釜で、口

径30.0cm 残存高5.5cm を測る。18は須恵器甕の口縁部である。口径29.0cm 残存高3.4cm を測る。44・45は平瓦である。44は厚さ2.4cm、残存長10.7cmを測る。45は厚さ2.3cm、残存長11.0cmを測る。これらの遺物はいずれも12世紀末から13世紀にかけての所産である。

土坑S K108(第51図16～18) 16は土師器皿で、口径10.0cm、器高1.6cmを測る。17は瓦器碗で、口径15.0cm、器高5.9cmを測る。これらの遺物はS G146出土遺物同様、12世紀末から13世紀にかけての所産である。



第51図 b 8-2地区 出土遺物実測図(1)

土坑 S K 153(第51図19・20) 19・20は瓦器椀である。19は口径13.9cm、器高4.2cmを測る。20は口径14.2cm、器高5.2cmを測る。これらは12世紀末から13世紀にかけての所産である。

井戸 S E 119(第51図21～24) 21は土師器皿で、口径10.0cm、器高1.5cmを測る。22・24は瓦質の羽釜である。22は口径22.4cm、残存高5.5cmを測る。24は口径18.0cm、残存高5.0cmを測る。23は須恵器壺である。口径19.2cm、残存高11.0cmを測る。12世紀末から13世紀にかけての所産である。

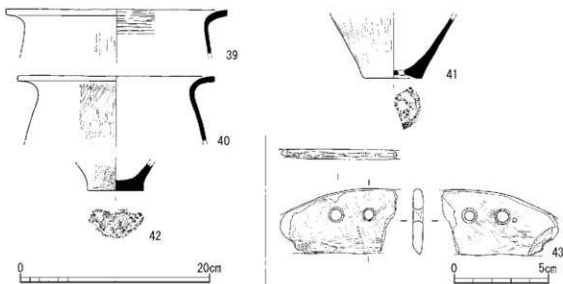
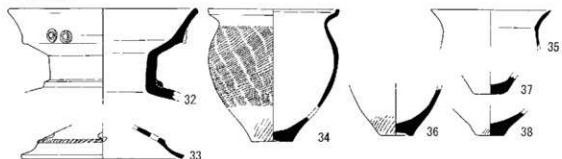
井戸 S E 152(第51図25～27) 25は土師器皿で、口径8.8cm、器高1.6cmを測る。26は瓦器椀で底部を欠損しており、口径12.4cm、残存高3.8cmを測る。27は青磁椀で底部を欠損しており、口径16.6cm、残存高5.6cmを測る。内面劃花文を施している。13世紀の所産である。

柱穴 S P 168(第51図28) 28は緑釉陶器椀の素地である。高台径7.6cm、高台高0.6cmを測る。9～10世紀にかけての所産か。

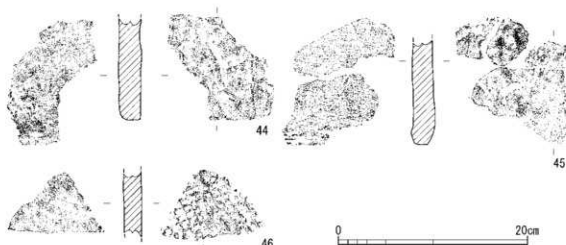
柱穴 S P 166(第51図29) 29は瓦器椀で、口径15.0cm、器高5.6cmを測る。12世紀末から13世紀にかけての所産である。

柱穴 S P 197(第51図30) 30は掘立柱建物 S B 110を構成する柱穴 S P 197から出土した瓦器椀で、口径13.2cm、器高4.5cmを測る。

②弥生時代



第52図 b 8-2地区 出土遺物実測図(2)



第53図 b8-2地区 出土遺物実測図(3)

土坑S K184(第52図32～38) 32は加飾の二重口縁壺である。口径19.6cm、残存高9.6cmを測る。33は高杯もしくは器台の脚部である。径16.8cm、残存高3.4cmを測る。34は甕で、底部との接合部は見いだせないが同一個体と考えられる。口径13.6cm、復元高12.1cmを測る。35は甕で口径12.6cm、残存高3.7cmを測る。36は甕の底部で底径3.7cm、残存高5cmを測る。37は甕底部で底径2.6cm、残存高2.1cmを測る。38は甕の底部で底径2.8cm、残存高2.7cmを測る。弥生時代末から古墳時代にかけての所産である。

土坑S K188(第52図39～42) 39は甕の口縁部で口径23.4cm、残存高4.8cmを測る。40は甕の口縁部で口径20.4cm、残存高6.9cmを測る。41は甕の底部で、底部径6.0cm、残存高6.5cmを測る。42は甕の底部で、底部径6.0cm、残存高3.0cmを測る。弥生時代中期の所産である。

③その他(第51～53図31・43・46)

31は包含層出土の瓦器碗で、口径13.8cm、器高4.5cmを測る。12世紀末から13世紀にかけての所産である。

46は平瓦で、凸面に格子目タタキ、凹面に布目をもつ。

43は粘板岩製の石包丁である。調査地北東部から出土しており、残存長6.0cm、刃部幅3.4cmを測る。直刃で、紐穴は両面穿孔で2か所残っている。1か所途中まで穿孔していた痕がみとめられる。刃部の摩耗は激しく、使用されていたものが破損し捨てられたと考えられる。

4)小結

本地区の調査では、縄文時代の土器片、弥生時代、奈良時代～中世、近世水田跡など各時代の遺構や遺物、各時期の小泉川の旧河道などを確認することができた。

中でも、中世の建物跡や井戸・池状遺構の存在は、この地に中世の池や井戸を持つ屋敷跡があったことを示すもので、周辺地域での調査成果を含め平安時代から中世にかけての調子地区の集落の様子を知る資料を得たといえる。

(戸原和人)

(3) b9地区の調査

1) はじめに

長岡京跡右京第969次調査の一環として実施した発掘調査である。調査面積は100㎡である。

遺構検出面の標高は16.8mで、地表面の標高は17.9mである。堆積層は、上から盛り土が約60cm、続いて旧耕作土が約25cm、灰オリーブ色(5Y6/2)砂質土が10cm、灰色(5Y5/1)砂質土が15cm堆積している。遺構は、遺物が比較的多く出土したSR01とSD02の2遺構のみであった。



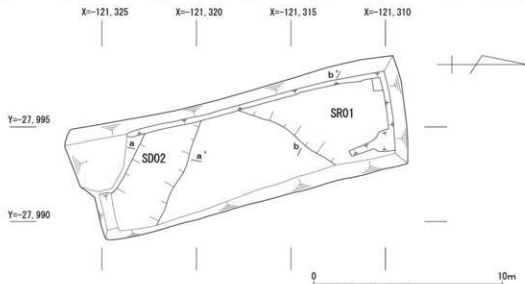
第54図 b9地区 位置図

2) 検出遺構(第55図)

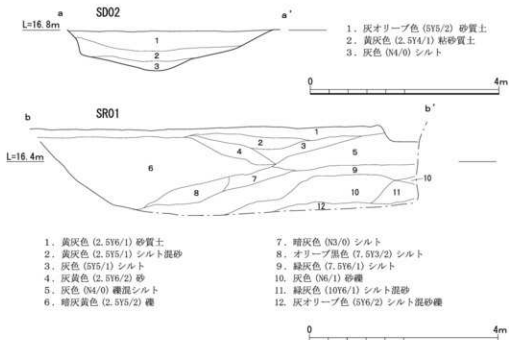
流路SR01 西から東に流れる自然河道の一部と考えられる遺構である。検出面から1.9m程度掘削

したが、西半の底面は確認できなかった。断面観察から流水があったものと考えられるが、部分的に炭化物を多く含むシルト層(7・8層)も見られることから、水の流れが緩やかな時期があったと考えられる。東側に隣接するb2地区で検出した流路の西側部分と考えられ、その流路内から古墳時代前期の遺物がまとも出土している。7層より上位で第57図4・7～9の弥生土器が出土している。この層中の炭化物を2点年代測定した。上部から出土した木片測定番号I A A-93047は1,660±20、下部から出土した木片測定番号I A A A-93048は1,650±20と近い年代を示し、暦年校正年代は4世紀後半から5世紀後半である。したがって、この層中から出土した弥生土器は再堆積であることがわかる。

溝SD02 調査区を北西方向から南東に貫く溝で、幅約4m、深さ60cmである。出土遺物は



第55図 b9地区 遺構配置図



第56図 b9地区 断面図

なかった。西から東に下る流れを有する。

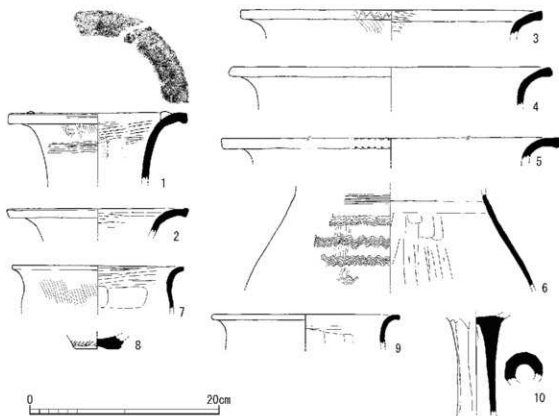
3) 出土遺物

流路SR01(第57図1~9) b9地区の東側に位置するb2地区では弥生~古墳時代の流路跡を検出したが、今回検出したSR01から出土した遺物は弥生土器に限られる。7層より上位から4・7~9の弥生土器が出土した。しかし、上述のようにこれらは、再堆積したものと推測される。4は甕の口縁部で、内外面の調整は不明である。7は弥生土器の甕で、内面はハケ及びナデ調整が施される。8は弥生時代後期の甕底部で、器表面にはタタキが施される。9は弥生土器の甕で、内面はハケ及びナデ、外面の調整は不明である。

1~3・5・6は最下層の12層灰オリーブ色(5Y6/2)シルト混砂礫層中から出土した弥生土器である。弥生時代中期のものに限られる。1は弥生土器の壺口縁から頸部で、口縁部内面に瘤状の突起が存在し、頸部外面には櫛描直線文が施される。内外面ともにハケ調整である。2は弥生土器脚部である。内面はナデ及びケズリ、外面ナデ調整である。3は弥生土器の甕口縁部である。口縁端面には波状文が施され、内外面の調整はハケである。5は弥生土器の口縁部で、口縁端面両端にキザミが施される。調整は内外面ともに不明である。6は弥生土器壺の頸部及び胴部である。器表面には櫛描直線文1条と櫛描波状文4条が施される。調整は内面ナデ、外面はハケ後ナデである。

その他の出土遺物(第57図10) 10は包含層中から出土した奈良~平安時代の土器器高杯脚部である。内外面ともに著しく摩滅しているため調整等は不明であるが、外面は形状からケズリによって面が形成されているものと考えられる。

(中川和哉)



第57図 b9地区 出土遺物実測図

(4) b10地区の調査

1) はじめに

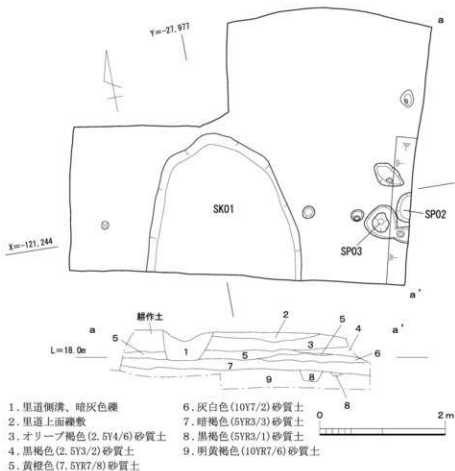
a4-1地区とb8-1地区の間には、調査対象地内を東西方向に横断する里道が存在する。当事業の進行に伴う里道の付け替えに際し、現有の里道下において、京都府教育委員会が立会調査を実施した。

その成果、遺構の広がりが確認された地点において、当調査研究センターが発掘調査を実施することとなった。当地区の調査は平成21年7月22・23日に行った。当初は南北4m、東西3mに調査区を設定したが、遺構の広がりを確認するため、南半部を西側へと拡張した。最終的な調査面積は19m²である。



第58図 b10地区 位置図

当地点は里道として盛り土により嵩上げされており、第6層の灰白色砂質土までが里道造成に伴う盛り土と判断される。その下に堆積した第7層の暗褐色砂質土を遺物包含層と推定したが、遺物の出土が見られなかったため、この層まで重機により掘削した後、遺構精査を行った。遺構はベースと考えられる明黄褐色砂質土上面で検出した。



第59図 b10地区 遺構配置図・断面図

2) 検出遺構(第59図)

土坑SK01 調査地の中央付近で検出した。東西2.4m、南北2.2m以上を測る楕円形を呈すると考えられるが、南半部は調査区外へと広がっている。その部分はb8-1地区に接し、現況の段差によりすでに消失しているため、全容は不明である。埋土はベースと同質の明黄褐色砂質土であるが、それに比してやや鈍い色調を呈していた。土師質の土器片が出土しており、弥生土器の可能性も考えられる。

柱穴SP02 調査地東端で検出した。東半は調査区外へと広がるため全容は不明であるが、東西は0.45mを測る。埋土は黒褐色砂質土の単純一層で、検出面からはおよそ0.2mを残す。土器の細片が出土しているが、時期の比定には至っていない。

柱穴SP03 SP02の南西に隣接する形で検出した。直径約0.3mを測る。土器の細片が出土しているが、時期の比定には至っていない。

3) 小結

当地点での調査は狭小な面積であったが、土坑1基と柱穴数基を検出することができた。しかし、遺構の残存状況は良好とはいえず、里道の敷設に伴い大きく削平を受けたものと考えられる。

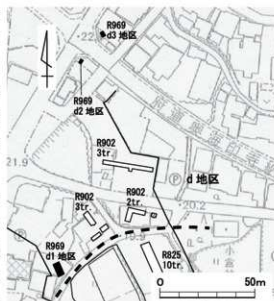
(奈良康正)

5) d1～3地区の調査

1) はじめに

d地区は、新設された府道奥海印寺納所線と府道西京高槻線の交差点付近で、旧西国街道が南で合流する地点にあたる。北は飛鳥時代創建と考えられている鞆岡廃寺の所在する段丘の南側裾部にあたり、南は南流する小泉川の氾濫原に立地している。過去の調査(右京第902次)でも各時期の河道跡が検出されている。

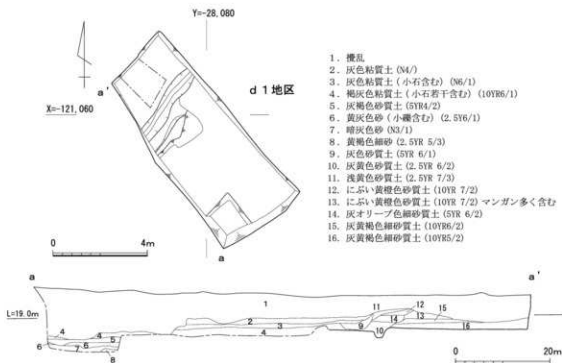
調査は、小倉神社御旅所から馬洗池の南で、調子地区の南西集落に入る町道の西に幅約5.0m、長さ約10.0mの調査区(d1地区)を1か所、府道奥海印寺納所線と府道西京高槻線の交差点で旧西国街道に挟まれた南に幅約1.5m、長さ約2.5mの調査区(d2地区)と、北に幅約2.0m、長さ約3.0mの調査区(d3地区)を設定して調査を行った。



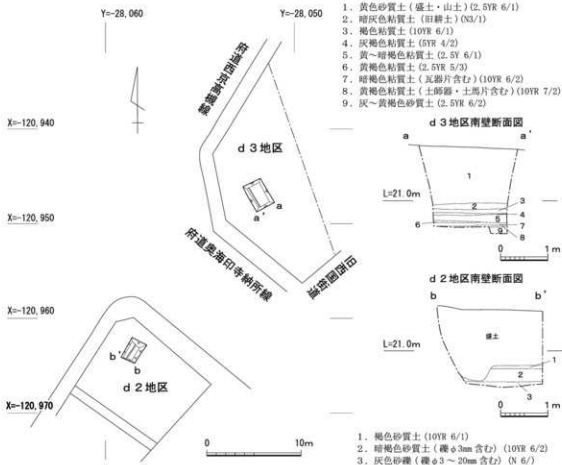
第60図 d1～3地区 位置図

2) 調査概要

① d1地区(第61図) 地表面の標高は19.4～19.7mを測る。調査地の北寄りで検出した地境溝



第61図 d1地区 平・断面図



第62図 d 2・3地区 平・断面図

とその北側で検出した畦畔を境に、北側で標高19.0m、南側で標高18.7mの二枚の耕作面を検出した。南側で行った断ち割りによる確認では、第2層から第4層までは耕作可能な粘質土であったが、第5層から第8層は河川堆積による砂質土および砂礫であった。

調査の結果、顕著な遺構や遺物は検出しなかった。

② d 2 地区(第62図) 地表面の標高は21.52mを測る。標高20.5m付近で検出した厚さ約10cmの褐色砂質土の下に厚さ約26cmの直径約3cm程度の礫を含む暗褐色砂質土の堆積が認められ、以下は河川堆積による灰色の砂礫層であった。暗褐色砂質土中からは、土師器、黒色土器、瓦器片が出土したが、顕著な遺構は検出しなかった。

③ d 3 地区(第62図) 地表面の標高は21.9～22.0mを測る。標高20.8m付近で旧耕作土と考えられる暗灰色粘質土、以下7層の地層を確認した。第7層の暗褐色粘質土中から瓦器片が、第8層の黄褐色粘質土中から律令期と考えられる土師器および土馬の破片が出土した。第9層以下は河川堆積による灰色及び黄褐色の砂質土であった。

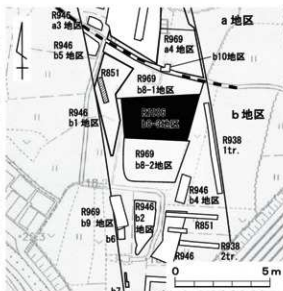
(戸原和人)

3.長岡京跡右京第1006次調査(平成22年度)

(1) b 8-3 地区の調査

1) 調査概要

b 地区の旧地形は、北西部の自然堤防に起因する微高地と、南東部の後背低地に分かれる。自然堤防は北に位置する a 地区から続くもので、b 8-3 地区は同一の自然堤防上に位置する。b 8-3 地区の東側には約 1m の比高を測る後背低地が広がる。b 8-3 地区の調査は自然堤防部での最終的な調査であり、西・北・南の三方をそれぞれ b 1 地区(右京第946次)と b 8-1 地区(右京第969次)・b 8-2 地区(右京第969次)に囲まれる。



第63図 b 8-3 地区 位置図

現地調査は当初、バックホー等の重機を使用して盛り土および耕作土等の除去を行い、その後は人力掘削による遺構の検出・掘削を行った。調査の結果、b 8-3 地区においても隣接調査地と同様に、縄文時代(晩期)から近世に属する多くの遺構や遺物を確認した。検出遺構には、自然流路跡・掘立柱建物跡・柱穴(ピット)・土坑・井戸等がある。

2) 層位

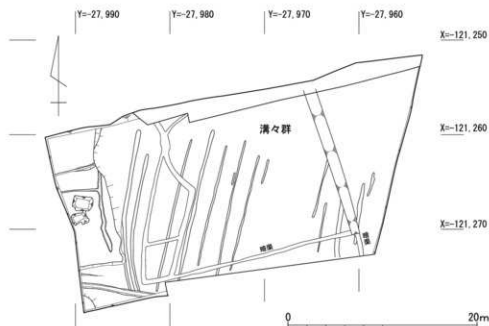
調査地の大半は工事に伴う耕作土の除去と盛り土による基盤改良が行われていたが、調査地北西部と南東部の片隅に僅かに旧地表の耕作土が残っていた。この調査地北西部耕作土面の標高は約18.0mである。黄灰色粘質土の地山面が遺構面であり、北西から南東方向に緩やかに下る状況にある。同遺構面の標高は調査地北部で約17.4m、南東部で17.0mを測る。調査地の北半部分は後世の削平の影響で遺物包含層は失われ、南部には中世土器を包含する灰色砂質土が存在した。

3) 検出遺構

b 8-3 地区では、縄文時代晩期から近世に属する多くの遺構を検出した。遺構は二面で検出し、上層が近世、下層が中世以前のものである。検出遺構の中で多数を占めるものは土坑や柱穴・ピットであるが、時代の特定ができない無遺物の遺構も数多く存在する。ここでは、時期別に主要な遺構および良好な遺物の出土をみた遺構について報告する。

①近世(第64図)

標高17.4m付近から耕作関連の遺構を検出した。この近世段階では、b 8-3 地区は完全に耕



第64図 b8-3地区 上層遺構平面図

作地として利用されていたようである。検出遺構は溝々と暗渠であり、調査地北部では遺構面、南部では中世遺物包含層でもある灰色砂質土を切っている。溝々は幅約0.2～0.3m、深さ0.05～0.1mを測る。直線的に延びる溝々は、一部を除きほぼ2m間隔で並走している。溝々の方位は、北から東に約13°振る。溝々のうち最長の溝は、全長約17mを測る。溝内から中世土器に混じって染付けの破片が出土したことから、溝々の時期は近世に属するとみられる。

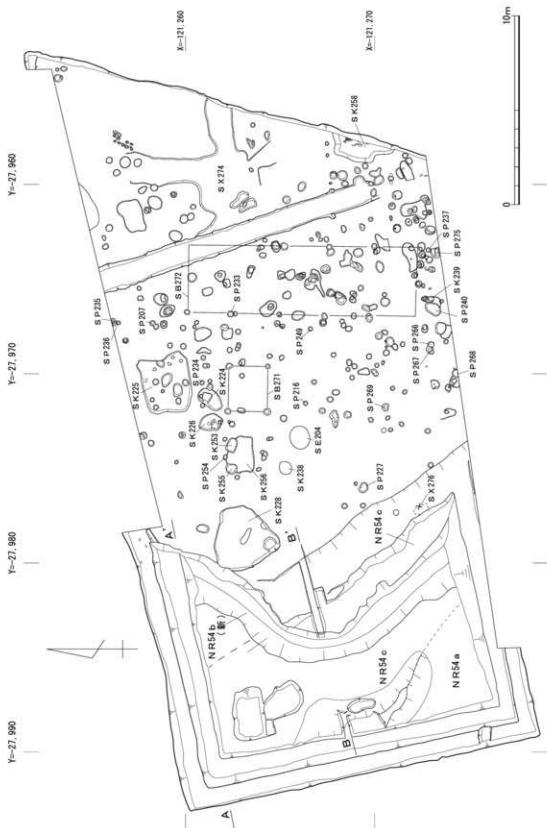
調査地の西部と南部で暗渠を検出した。暗渠は溝々を切る状況にある。暗渠は幅約0.4～0.5m、深さ約0.5mを測り、溝内には10～20c m程度の川原石が充填されている。この暗渠については、近世以降の耕作関連排水施設とみられる。

②平安時代・中世(第65図)

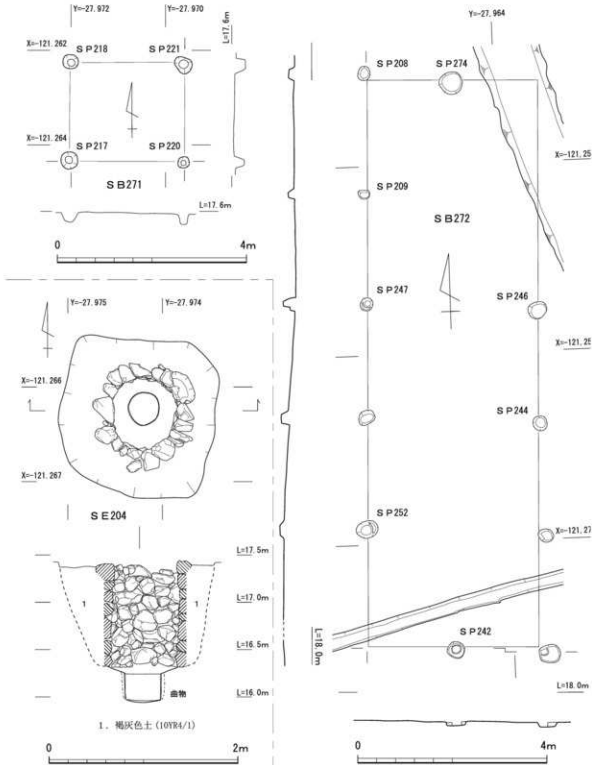
調査地の中央部から東部にかけて、多数の柱穴と井戸・土坑を検出した。また、調査地西部では、平安時代後半頃には完全に埋没していたとみられる自然流路NR54aを検出した。柱穴出土の遺物を検討した結果、b8-3地区では2棟の掘立柱建物跡(SB271・SB272)が復元できた。

掘立柱建物跡SB271(第66図) 調査地中央部のやや北寄りで見出した掘立柱建物跡である。建物規模は1間×1間であり、東西約2.4m、南北約2.1mを測る。建物の方位はほぼ真北(N2°E)である。4基の柱穴(SP217・218・220・221)の埋土は灰褐色系の砂質土である。柱穴SP220は直径約0.25m、深さ約0.2mの規模を測り、埋土中から黒色土器皿(第73図1)・土師器皿(第73図2・3)が出土した。他の3基の柱穴もほぼ同規模で、それぞれの柱穴からは図化できないが黒色土器・土師器皿の破片が出土している。規模・形状等から小規模な建物跡とみられる。時代は、出土遺物の年代観から10世紀後半とみられる。

掘立柱建物跡SB272(第66図) SB271の東で見出した南北棟の掘立柱建物跡で、東西2間(3.6m)、南北5間(12m)を測る。柱穴の心々間距離は、東西の梁間はほぼ1.8m等間、南北の桁



第65図 b S-3地区 下層遺構平面図



第66図 b 8-3地区 掘立柱建物跡SB271・272、井戸SE204実測図

行はほぼ2.4m等間である。建物跡の方位はSB271と同じく、主軸はほぼ真北(N 2° E)である。SB271とSB272の建物間は約2.8mの間隔を測る。

SB272の柱穴は14基のうち11基を検出した。SB272の北東隅とその南の2基の柱穴は、断ち割りトレンチによって失われていたほか、建物南西角の柱穴は後世の削平で失われているようで

ある。柱穴の掘形は円形で、直径が0.2～0.35m規模のものが多数を占めるが、なかには径0.5mを測る柱穴SP274もみられる。柱穴の深さは0.05～0.15mであり、南側に位置する柱穴の底面は浅い傾向にある。柱穴の底面の標高は北端のSP208が17.51m、南端のSP242が17.31mを測る。11基の柱穴のうち、SP208・SP209・SP242・SP244・SP246・SP247・SP252の7基の柱穴から、土師器皿や黒色土器等の遺物(第73図4～14)の出土をみた。出土遺物の年代観から、SB272は10世紀後半の建物跡とみられる。

井戸SE204(第66図) SB271から南西に約4m離れて検出した石組みの井戸である。井戸の掘形は方形であるが、四隅の形状は角張るものと丸みを帯びるものが混在し、整った形状は示さない。掘形の中央部には川原石を円形に組み上げた井戸枠が存在する。川原石は0.2～0.35m大の石材を多用し、隙間を小ぶりの石で充填している。また、大形の石材は平らな面を内側に向けて配置する。井戸枠内法の直径は東西0.65m、南北0.75mを測る。井戸底は井戸枠基礎石の下端部から中央部に向かって緩やかに下がり、中央に曲物を使用した水溜が存在する。曲物は直径約0.38m、深さ約0.28mを測る。井戸の深さは、検出面から最深部まで約1.5m(海拔約15.9m)である。井戸内の埋土は暗灰色系粘質土であり、井戸枠の石材が数個落ち込んでいた。井戸内の転落石の状況から、井戸枠は検出面よりさらに上方に延びていた可能性が高い。井戸内から土師器皿・瓦器椀・瓦質羽釜(第73図26～29)の出土をみた。また、掘形埋土中にも瓦器椀の破片が含まれていた。井戸底に残る曲物は薄く脆弱であったため、取り上げることができなかった。SE204は、出土遺物の年代観から12世紀後半頃と判断される。

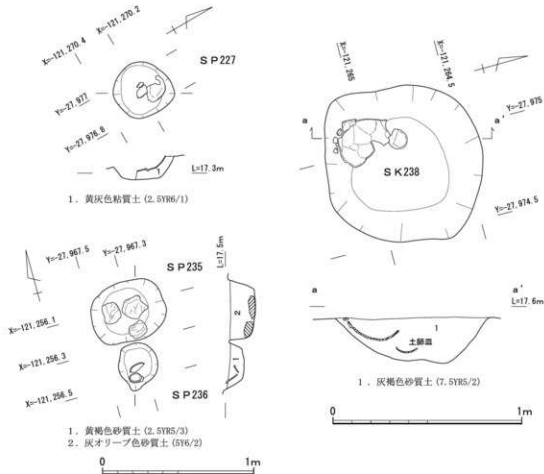
土坑SK238(第67図) SE204から北西に約2m離れて検出した土坑である。土坑の掘形は隅丸方形で、長さ・幅とも0.85m、深さは0.25mを測る。土坑底は緩やかな凹凸をもつ丸底を呈している。埋土は灰褐色砂質土(7.5YR5/2)であり、土師器皿・土師質羽釜(第73図21・31)が出土した。遺物は土坑中央から南西部にかけて集中して出土している。遺物の年代観から、SK238の時期は11世紀初頭頃とみられる。

土坑SK239(第65図) SB272の南側約1mで検出した土坑である。掘形は楕円形で長径0.9m、短径0.6m、深さ約0.15mを測る。埋土中から土師質の羽釜(第73図30)が出土した。

柱穴SP207(第65図) SB272の北西隅より約2m北側で検出した柱穴である。直径約0.25m、深さ約0.2mの規模を測る。埋土は黄褐色砂質土(2.5YR5/3)であり、黒色土器椀の破片が出土した。

柱穴SP227(第67図) SE204から南西に約3.6m離れて検出した柱穴である。掘形の平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.15mの規模を測る。埋土の黄灰色粘質土(2.5YR6/1)から瓦器椀(第73図25)が出土した。破片化した瓦器椀は破片も大きく、ほぼ完形に復元することができた。SP227は、瓦器椀を埋納するなんらかの祭祀に関連した遺構とみられる。

柱穴SP233(第65図) SB272の北西隅から南に一つ目のSP209と切り合い関係にある柱穴である。掘形は円形で、直径0.3m、深さ約0.1mを測る。埋土中から土師器皿(第73図16・17)が出土した。



第67図 b 8 - 3 地区 土坑 S K 238、柱穴 S P 227・235・236実測図

柱穴 S P 234 (第65図) S B 271 の北側約 2 m で検出した柱穴である。掘形は円形で、直径 0.2 m、深さ約 0.1 m を測る。埋土中から土師器皿 (第73図 18・19) が出土した。

柱穴 S P 235 (第67図) S B 272 の北側、調査地北端で検出した柱穴である。掘形は円形で、東西 0.5 m、南北 0.4 m、深さ 0.15 m の規模を測る。平坦な底面上に扁平な川原石 3 石を敷き、柱穴の根石としている。埋土中から土師器が出土した。

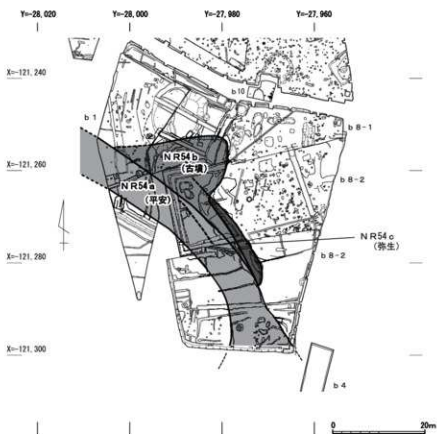
柱穴 S P 236 (第67図) S P 235 の南隣で検出した柱穴である。S P 235 との切合い関係はない。掘形は円形で、直径 0.25 m 前後、深さ約 0.1 m を測る。埋土は黄褐色砂質土 (2.5YR 5/3) であり、黒色土器 (第73図 22・23)・土師質羽釜が出土した。

柱穴 S P 240 (第65図) S B 272 の南側、S P 239 の西で検出した柱穴である。掘形は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.1 m を測る。埋土中から瓦器の破片が出土した。

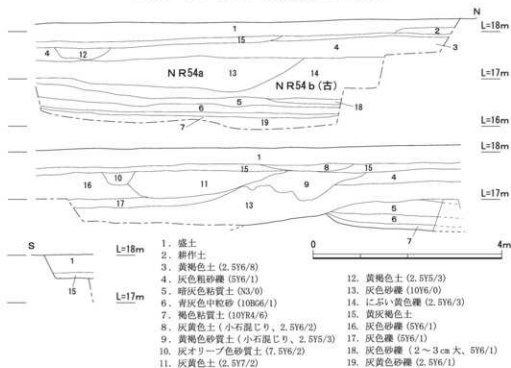
柱穴 S P 266 (第65図) S B 272 の南西で検出した柱穴であり、S P 267 に切り負ける。掘形は円形で、直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m を測る。埋土中から土師器皿 (第73図 15) が出土した。

柱穴 S P 267 (第65図) S P 266 に切り勝つ柱穴である。掘形は楕円形で、長径 0.5 m、短径 0.35 m、深さ約 0.25 m を測る。埋土中から土師器皿 (第73図 20) が出土した。

自然流路 N R 54 a (第68・69図) 調査地西端部の中世遺物包含層下から検出した自然流路跡



第68図 b8-3地区 自然流路NR54変遷図



第69図 b8-3地区 西壁土層図

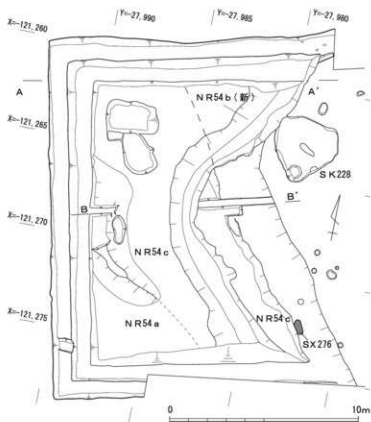
であり、b1地区からb8-1地区とb8-3地区を通過してb8-2地区に跨って検出した。b1地区ではトレンチ調査による流路礫層の断ち割りによって、北東側の河岸を検出している。

NR54aは、b1地区からb8-2地区中央付近にかけての約50m間は北西から南東方向に直線的に延びるが、b8-2地区南部でその流れは南西方向に大きく転じる。特にこの流路跡の痕跡は、右京第969次調査(b8-1・2地区)で撮影した空中写真(図版第22)に良好に残っている。また、b8-3地区からb8-2地区中央部においては、平安時代・古墳時代・弥生時代と時代が下るごとに流路が東から西に移動する状況も確認された。流路跡検出面では、NR54a以外の遺構を明瞭には確認できないが、b8-2地区ではNR54aの埋土を切る石組み井戸SE152を検出した。このSE152との切り合い関係から、NR54aはSE152の構築以前には埋没していたことが明らかである。NR54aの堆積層は砂礫(第69図第13層)であり、土石流によって平安時代末頃には完全に埋まったものと判断される。b8-2地区調査では、NR54aの規模は幅約6~7m、検出面からの深さは0.7mを測る。

③古墳時代

b8-3地区の古墳時代遺構としては、調査地西端の自然流路跡NR54bが該当する。NR54bの東側自然堤防上では、同時期の遺構は確認されない。

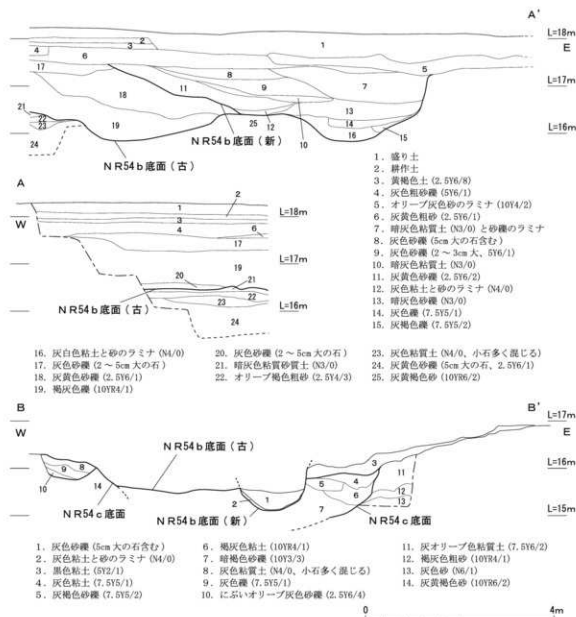
自然流路跡NR54b(第70・71図) 北のb8-1地区から南のb8-2地区にかけて検出した流路跡である。NR54aによって西岸部は広範囲に壊されている。NR54bは、西側のb1地区からb8-1地区西部にかけて



第70図 b8-3地区 自然流路NR54平面図

は東流し、一旦自然堤防に遮られた流路は「T」字状に大きく屈曲した後、南東方向に流れを転じている。b8-1地区からb8-3地区北部にかけての東岸部分は河岸がほぼ垂直に立ち上がり、自然堤防に激しい水流の攻撃面が形成されている。この攻撃面はb8-1地区からb8-3地区中央付近まで、南北約12mの範囲に及ぶ。NR54bのB-B'地点付近(第71図)からb8-2地区中央部間にかけての東岸は、弥生時代包含層(第71図第3層)を切り、その立ち上がりも北側の攻撃面ほどではないが傾斜角は急である。

NR54bの流路は礫層や砂礫層



第71図 b 8-3 地区 自然流路NR54土層図

の観察(第69・71図)から、大きく2時期の流路の痕跡を確認できた。NR54bの西岸は不明な点が多い。第71図A-A'第8層とB-B'21層を切って東に下る斜面が確認できた。この斜面上に堆積した礫層(A-A'第19層)は古い流路NR54b(古)の堆積層である。一方、新しい流路の痕跡としては、東岸寄りの断面「U」字状の底面NR54b(新)が該当する。NR54bの新旧の堆積層の状況は第71図A-A'断面で確認できた。NR54b(新)の流路幅は推定ではあるが約6~7mとみられる。また、深さについては東岸検出面から約1.4mを測る。底面上には灰色粘土と砂のラミナ堆積(A-A'第16層)がみられたことから、流れの弱い時期も一定期間存在したとみられる。NR54b(古)は堆積土の東部を(新)流路で切られることから、流路幅を知ることはできない。深さはおおよそ1.6m程度とみられる。

NR54bの堆積層はほぼ礫と砂礫の堆積である。10数層にも及ぶ堆積状況は、NR54bが頻繁

に土石流に見舞われたことを示している。NR54bは、その埋没過程において流路が暫時東寄りに移動している。

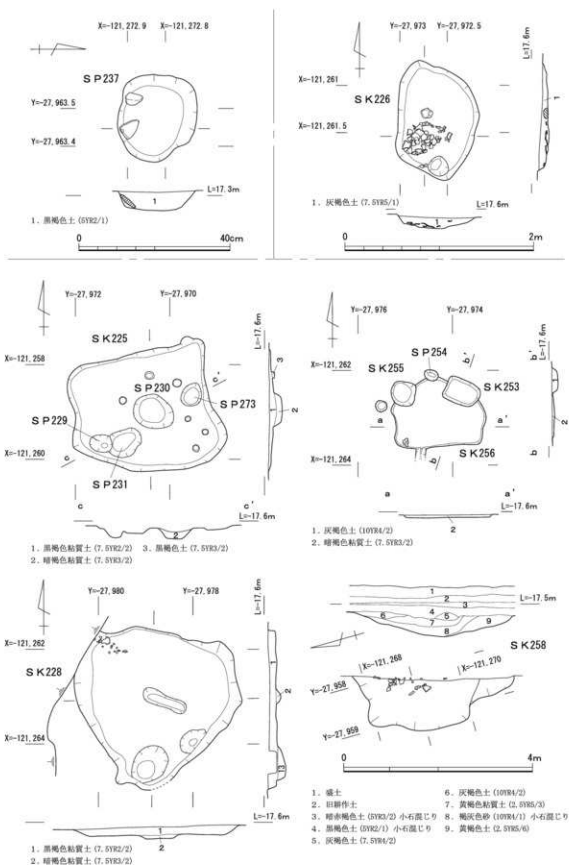
遺物として土師器・須恵器(第74図37～41)が出土した。土器の出土量は僅かであり、ローリングを受けて器壁の摩滅が進行している。出土遺物には弥生土器・布留式甕・須恵器(杯身・壺・器台)などがあり、その時期差は大きく隔たっている。NR54b(新)に関しては、須恵器の杯身や壺等の年代観から6世紀後半頃の埋没が考えられる。NR54bの東岸斜面には弥生時代遺物包含層である第13層の上面から庄内式甕(第74図34～36)が出土している。NR54b(古)は、この第13層を切っていること、流路内に布留式土器が含まれることから、NR54b(古)は4世紀末～5世紀前半頃の自然流路跡とみられる。

④弥生時代(第65図)

調査地中央から東側にかけての自然堤防上で土坑・柱穴を検出したほか、調査地西部で流路跡NR54cを検出した。

土坑SK225(第72図) 調査地中央北端付近で検出した、隅丸方形に近いプランの土坑である。土坑の北辺ラインは直線的であるが、東辺と西辺の壁面は中央部が内側に入り込み、南辺は逆に外側に張り出す。土坑規模は最大で東西約3.2m、南北は2.0mを測る。土坑底は周囲から中央部にかけて緩やかに下り、中央部にSP230の中央ピットが存在する。SK225検出面からSP230の肩部土坑底までの深さは約0.1mを測る。土坑内埋土の黒褐色粘質土(7.5YR2/2)から弥生土器破片、打製土鎌(第77図73・74)が出土した。SP230は楕円形プランで、直径約0.9m、幅約0.75m、深さ約0.2mの規模を測る。壁面の立ち上がりは緩やかであり、底面は平らである。埋土は暗褐色粘質土(7.5YR3/2)であり、土器破片が出土した。SP230の周囲には大小のピットが存在する。直径0.1～0.15mの円形ピットは、深さが0.05m前後と浅い。また、ピットはSP230を取り巻く状況にあるが、SP230の南側にはみられない。SP230の南西側には2基の大型ピット(SP229・SP231)が存在し、相対する北東側にもSP273が1基存在する。楕円形プランのSP229は長さ0.5m、幅0.35m、深さ0.12mの規模を測る。ピットの掘形は周囲より中央部にかけて下がる椀状を呈する。暗茶褐色系の埋土の底付近から、サヌカイト製土鎌(第77図75)が出土した。楕円形プランのSP231は、長さ0.75m、幅0.55m、深さ0.1mの規模を測る。底面は平らである。埋土から弥生土器が出土した。SP273の規模は直径約0.4m、深さ約0.05mであり、遺物は出土しなかった。

土坑SK226(第72図) 調査地の中央部北側、SK225の南西で検出した土坑である。平面形はやや角張った楕円形を呈する。平面規模は全長約1.3m、幅約0.85m、深さ約0.1mの規模を測る。土坑底面は周囲から中央にかけて緩やかに下がる。埋土は灰褐色土(7.5YR5/1)で、土坑の中央付近には直径10cm×高さ5cmの川原石1個が存在した。また、この川原石から土坑南西部にかけての土坑底面上から土器破片(第75図47・48)が出土した。破片の出土状況は、上部に位置する土器には表面を上に向ける破片ばかりでなく、土器の内面を上に向ける例もみられた。また、口縁部の破片の出土位置が大きく離れる状況もあり、土圧で単純に壊れたとはみられない。甕(48)



第72図 b 8-3地区 縄文・弥生時代遺構実測図

は、全体の6割程が出土したに過ぎず、他所で破壊された後に土坑内に投棄されたとものと考えられる。

土坑 S K 228(第72図) 自然堤防の北西部で検出した隅丸の三角形を呈する土坑である。東西は最大幅で3.6m、最小幅で1.2m、南北長3.4mを測る。検出高は0.18mである。土坑の西端部を古墳時代流路 N R 54 b (新)に切られる。埋土は黒褐色粘質土(7.5YR2/2)であり、土坑北西部に弥生土器甕の体部破片の集中がみられた。平坦な土坑底の中央付近には浅くて短い溝状の掘り込みと、南東部壁面付近に2基のピットが存在する。溝状掘り込みは長さ約1m、幅約0.2～0.3m、深さ0.1mを測る。出土遺物はみられない。2基のピットのうち南側隅の楕円形を呈するピットは、直径約0.9m、幅約0.7m、深さ約0.15mを測る。ピットの埋土は暗褐色粘質土(7.5YR 3/3)であり、遺物は出土しなかった。

土坑 S K 253(第72図) 調査地中央部やや北側で検出した。S K 256の北東部を切る小型の土坑である。平面形は方形を呈する。土坑の規模は長さ約0.7m、幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。

土坑 S K 255(第72図) 調査地中央部やや北側で検出した。S K 253の西側で検出した土坑で、土坑 S K 256を切っている。平面形は方形で、一辺約0.5m、深さ約0.15mを測る。埋土中から甕(第75図43・44)や打製石鏃(第77図72)が出土した。

土坑 S K 256(第72図) 調査地中央部やや北側で検出した。S K 253と S K 255、S P 254に切られた浅い土坑である。平面形は方形と円形が合体したような蒲鉾状を呈する。南辺は、直線的に掘割されており、長さは約1.8mを測る。土坑中央部の最大幅は約1.5mを測る。土坑底は平坦であり、深さは最大で0.03mである。埋土は暗褐色粘質土(7.5YR3/2)であり、甕(第75図49)が出土した。

土坑 S K 258(第72図) 調査地南東端で検出した土坑である。土坑の東半が調査地外に位置することから、全容は判明しない。検出範囲での平面形は、歪ながらも東西方向に延びる方形と考えられる。南北方向は約3.2m、東西は1.6m以上、深さは検出面から約0.5mを測る。調査地壁面にみる土坑の横断面は緩やかに中央部が下がる形状を呈する。埋土の断面観察では、土坑は南部から土砂の自然堆積が始まっている状況が見てとれ、時間をかけて埋まったものと判断できる。土坑底付近の第8層の褐色砂層中から甕破片(第75図45・46)のほか、サヌカイト製石鏃(第77図76)の出土をみた。多くの遺物は土坑底からやや遊離した状況にある。

柱穴 S P 268(第65図) 調査地中央部南端で検出した柱穴である。平面形は円形で、直径約0.3m、深さ約0.2mの規模を測る。埋土中から弥生土器の出土をみた。

柱穴 S P 269(第65図) S P 268の北西約4mで検出した柱穴である。平面形は円形で、直径約0.3m、深さ約0.2mの規模を測る。埋土中から弥生土器の出土をみた。

窪地 S X 274(第65図) 調査地東部で検出した溝状の不定形な窪地である。方形周溝墓の溝底部ともみられるが、確証を得られない。検出面から最も深い底面まで、およそ0.1mを測る。周縁部の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色土(7.5YR2/2)であり、少量の弥生土器の破片が出土した。

土器溜り S X 276(第65図・図版第46) N R 54南部の東岸斜面で検出した土器溜りである。斜面に堆積した黒色粘土層(第71図第3層)を掘削中、面的に広がる土器破片の集中地点が見つかった。周辺部で精査を行ったが遺構の掘形は検出できなかった。土器の集中範囲は等高線に沿って、およそ長さ1.0m、幅0.6mである。破片(第75図50～54)はほとんど斜面上にあり、上下に重なる状況にはない。このほか第3層中より、弥生土器に混じって庄内式甕(第74図34～36)が出土した。

自然流路跡 N R 54 c(第70図) 調査地西部を流れる N R 54の弥生時代の流路跡である。N R 54 cは流路東岸斜面下であって、流路跡の大部分は古墳時代の N R 54 bに削られている。弥生時代の流路跡は b 8-3地区から b 8-2地区に跨って検出し、その全長は約24mを測る。b 8-3地区中央部では、西岸斜面の立ち上がりの一部(第71図 B-B' 第14層上面)が確認できた。この標高16m付近における N R 54 cの幅は、約7mの規模を測る。流路内下層には土石流で運ばれた砂礫(4cm～拳大)が堆積し、上層部には灰色系の粘土(B-B' 第4～6層)の堆積がみられた。流路下層の砂礫層(B-B' 第7層)では、石包丁(第77図78)や土器(第76図55～63)が出土した。N R 54 cの埋没後、その上部には東岸斜面上に黒色粘土(第71図 B-B' 第3層)が堆積している。土器の年代観から N R 54 cは弥生時代中期(皿様式)の自然河川跡とみられる。

⑤縄文時代

縄文時代に属する遺構・遺物の分布は薄く、b 8-3地区では南東部でピット2基(S P 237・275)を検出した。

ピット S P 237(第65図・図版42) 平面形は円形で、直径約0.2m、深さ約0.05mの規模を測る。S P 275と切り合い関係にあり、S P 237が切り勝つ。ピットの埋土は黒褐色土(5YR 2/1)である。唯一出土した磨製石斧(第77図81)の出土状況は、壁面に沿わせて基部を底面に置き、刃部を上に向けている。

ピット S P 275(第65図) S P 237と切り合い関係にあるピットである。掘形は方形に近い形状を示すが、1か所の角部は丸みが強い。一辺約0.5m、深さ0.16mを測る。埋土は暗茶褐色土で、遺物は出土しなかった。

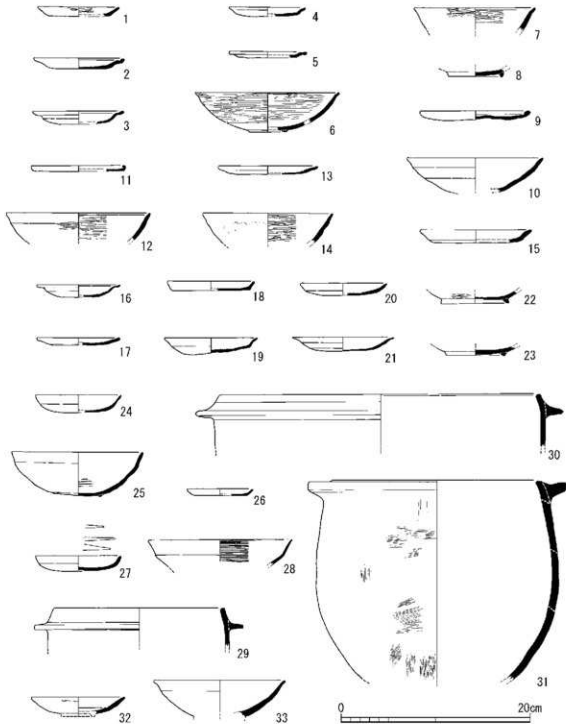
4) 出土遺物

b 8-3地区の調査では、整理コンテナ10箱分の遺物が出土した。遺物には土器と石器があり、時代は縄文時代から近世まで多岐にわたる。なかでも土器は、弥生時代と平安～鎌倉時代の土器の出土が多数を占める。以下、遺構出土遺物を中心に主要な遺物について図示した。

①土器

a. 平安時代～中世(第73図)

掘立柱建物跡 S B 271(第73図1～3) S P 220の埋土中から黒色土器と土師器が出土した。1は黒色土器 B 類の皿である。口径は8.7cm、器高は1.0cmである。口縁部は平坦な底面から外上方へ直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁部内外面はミガキを施す。内外面及び胎土は黒色(10YR1.7/1)である。口縁の残存率は約1/10以下である。2・3は土師器皿である。い



第73図 b 8-3地区 出土遺物実測図(1)

いずれも体部が外反し、端部はつまみあげて丸くおさめる。仕上げはe手法であり、内面と体部外面はナデを施し、底部外面はオサエである。2は口径は9.2cm、器高は1.2cmである。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)である。口縁の残存率は約1/6である。3は口縁部の外反が2より強く、器壁も薄く仕上げる。口径は9.1cm、器高は1.4cmを測る。色調は浅黄橙色10YR 8/3である。口縁の残存率は約1/8である。

掘立柱建物跡S B272(第73図4～15) 掘立柱建物跡を構成する柱穴のうち、多数の柱穴埋

土中から黒色土器と土師器が出土した。

4・5はS P209から出土した土師器皿である。体部は外反し、5の口縁端部はつまみあげる。仕上げは共にe手法である。4の口径は8.0cm、器高は1.0cmである。色調は橙色(2.5YR7/6)である。口縁の残存率は約1/6である。5の口径は8.2cm、器高は0.7cmである。色調は橙色(2.5YR7/6)である。口縁の残存率は約1/8である。6は黒色土器B類の椀である。同一個体と判断されるが接合にいたらず、体部と底部破片に分かれるが、図上で復元した。体部は緩やかにカーブしながら外上方に立ち上がり、口縁端部内側に1条の沈線を巡らせる。底部には断面三角形の高台が付く。体部の内外面は丁寧なミガキを施す。口径は15.2cm、器高は推定4.3cmである。色調は黒色(5Y2/1)である。口縁の残存率は約1/6であり、底部の残存率は約1/4である。

7～10はS P247から出土した遺物である。7は黒色土器B類の椀である。やや外反する口縁端部の内側には、1条の沈線を巡らせる。内外面は丁寧なミガキを施す。口径は12.8cm、残存高は2.5cmである。色調は黒色(10YR1.7/1)である。口縁の残存率は約1/10である。8は黒色土器B類椀の底部である。7の口縁部とは別個体の可能性が高い。内底面は一定方向に丁寧なミガキを施す。底部の貼り付け高台の直径は5.8cmである。色調は黒色(10YR3/1)である。底部の残存率は約1/2である。9はいわゆるコースター形の土師器皿である。扁平な底部の端を内側に巻き込み、肥厚した口縁部を作り出す。口径は11.6cm、器高は1.0cmである。色調は浅黄橙色(7.5YR8/4)である。口縁の残存率は約1/6である。10は土師器の椀である。緩やかなカーブで外上方に立ち上がる体部から続く口縁端部は丸くおさめる。仕上げはe手法である。口径は14.3cm、残存高は3.6cmである。色調は浅黄橙色(7.5YR8/8)である。口縁の残存率は約1/8である。

11・12はS P244から出土した土師器と黒色土器である。11はコースター形の土師器の皿である。平坦な底面の端部を内側に折り曲げて口縁部を作り出す。仕上げはe手法である。口径は10.0cm、器高は0.6cmである。色調はにぶい橙色(5YR7/4)である。口縁の残存率は1/10である。12は黒色土器B類の椀である。体部は緩やかにカーブしながら外上方に立ち上がり、口縁端部内側に1条の沈線を巡らせる。内外面は丁寧なミガキを施す。口径は16.2cm、残存高は2.9cmである。色調は黒色(10YR1.7/1)である。口縁の残存率は約1/10である。

13・14はS P246から出土した土師器皿と黒色土器である。13は土師器皿である。体部が緩やかに外反し、口縁端部をつまみ上げる。仕上げはe手法である。口径は10.6cm、器高は0.9cmである。色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)である。口縁の残存率は約1/8である。14は黒色土器B類の椀である。体部は緩やかにカーブしながら外上方に立ち上がり、口縁端部内側に1条の沈線を巡らせる。口縁部外面は強くヨコナデし、体部外面はオサエである。内面と外面上半は丁寧なミガキを施す。口径は13.8cm、残存高は3.2cmである。色調は黒色(5Y2/1)である。口縁の残存率は約1/8である。

柱穴S P266(第73図15) 15はS P266出土の土師器皿である。口縁端部はやや外反気味に丸くおさめる。仕上げはe手法である。口径は11.8cm、残存高は1.4cmである。色調はにぶい黄橙色(10YR7/2)である。口縁の残存率は約1/8である。

柱穴 S P 233(第73図16・17) 16・17は土師器の皿である。16の体部上端は大きく外反し、口縁部は上方につまみ上げる。器壁の厚みは2mm前後で薄く仕上げる。調整はナデとオサエで仕上げる e 手法である。口径は8.8cm、器高は1.3cm である。色調は灰白色10YR 8/2である。口縁部の残存率は1/4である。17の体部は緩やかに外上方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。仕上げは e 手法である。口径は8.8cm、器高は0.8cm である。色調は浅黄橙色(10YR 8/4)である。口縁の残存率は1/6である。

柱穴 S P 234(第73図18・19) 18・19は土師器の皿である。いずれも仕上げは e 手法である。18は体部が外上方に短く立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。口径は9.2cm、器高は1.0cm である。色調は浅黄橙色(7.5YR 8/3)である。口縁の残存率は1/3である。19は完形品の皿である。体部は大きく外反し、口縁部は丸くおさめる。口径は9.9cm、器高は1.1～1.7cmを測る。色調は灰白色(5YR 8/2)である。

柱穴 S P 267(第73図20) 20は土師器皿である。体部は緩やかに外上方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。仕上げは e 手法である。口径は9.1cm、器高は1.3cm である。色調はにぶい橙色(7.5YR 7/3)である。口縁の残存率は1/8である。

土坑 K 238(第73図21・31) 埋土中から土師器皿(21)と土師質の羽釜(31)が出土した。21の皿はほぼ完形品である。体部は外上方に緩やかに立ち上がり、口縁部はやや外反して終わる。底部の厚みは薄く、器壁は1.5～2mm である。仕上げは e 手法である。口径は10.8cm、器高は1.5cm である。色調はにぶい橙色(7.5YR 7/3)である。31は土師質の羽釜である。体部は丸みをもち、外面の口縁部直下に鈔が付く。鈔は幅広く厚みがあり、先端は垂直の端面をもつ。体部は粘土紐を巻き上げて成形し、体部外面はハケメ調整する。体部内面はナデ仕上げする。体部内面の下部に約3cmの幅で横方向に荒れた器表面が巡っている。この荒れた部分は口縁部からおよそ14～17cm下がった位置にあり、内容物の攪拌(木べら等か)に伴う摩擦とみられる。また、体部内面には所々に有機物の焦げ痕跡が認められる。胎土は粗く、2～4mm 大のチャートを多く含む。口径は20.8cm、鈔部部の直径は26.2cm、器高は不明であるが残存高は21.1cmを測る。色調は灰黄褐色(10YR 4/2)である。口縁の残存率は1/6、体部の残存率は1/2である。

柱穴 S P 236(第73図22・23) 22・23は黒色土器 B 類碗の底部である。22は底部外面までミガキを施す。貼り付け高台の直径は7.2cm、残存高は1.0cm である。色調は黒色(5Y2/1)である。底部の残存率は1/2である。23は器表面が荒れている。貼り付け高台の直径は6.2cm、残存高は0.9cm である。色調は黒色5Y2/1)である。底部は完存する。

柱穴 S P 270(第73図24) 24は瓦器皿である。体部は外上方に緩やかに立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。底部と体部の境は明瞭ではない。口径は9.0cm、器高は1.9cm である。色調は灰色(N4/0)である。口縁の残存率は1/8である。

柱穴 S P 227(第73図25) 25はほぼ完形の瓦器碗である。器表面が荒れるが、体部内面下部に暗文が確認される。体部外面はオサエである。底部には低い貼り付け高台が付く。口径は13.9cm、器高は4.8cm である。色調は灰色(N4/0)である。

井戸SE204(第73図26～29) 井戸内の埋土中から、土師器・瓦器・瓦質土器が出土した。26は土師器の皿である。口径は7.0c m、器高は0.8c mである。色調はにぶい橙色5YR 7/3である。口縁の残存率は1/6である。27は瓦器皿である。やや丸みを帯びた平底から口縁部が緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめられる。底部外面はオサエ、口縁部と内面はナデ調整する。見込み部分にジグザグ状の暗文を施す。口径は9.0c m、器高は1.6c mである。色調は暗灰色N3/4である。口縁の残存率は1/6である。28は瓦器碗である。口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめられる。口縁端部内側に1条の沈線を巡らせる。体部外面には指オサエ、口縁部と内面はナデ調整する。体部内面には丁寧な暗文を巡らせる。口径は15.2c m、残存高は2.9c mである。色調は黄灰色(2.5Y5/1)である。口縁の残存率は1/8である。29は瓦質の羽釜である。体部外面上端部の比較的口縁部に近い位置に鈎が付く。鈎の先端は垂直の端面をもつ。鈎から口縁部を経て内面まではナデ仕上げを行う。体部外面は鈎以下に指オサエが残る。また、体部外面は鈎先端下面まで煤が付着する。口径は18.0c m、器高は4.0c mである。鈎部径は21.1c mである。色調は暗灰色(N4/4)である。口縁の残存率は1/10以下である。

土坑SK239(第73図30) 30は土師質の羽釜である。体部外面上端部の比較的口縁部に近い位置に鈎が付く。鈎の先端は尖り気味で丸くおさめられる。外面の鈎から体部内面まではナデ仕上げを行う。体部外面は鈎以下に指オサエが残る。胎土は粗く、砂粒を多く含む。口径は33.0c m、鈎部直径は39.8c m、器高は不明であるが残存高は5.6c mである。色調はにぶい黄橙色10YR 7/3である。口縁の残存率は1/10以下である。

その他の出土遺物(第73図32・33) 遺構検出作業において多くの土器が出土しており、そのうちの陶磁器2点を図化した。32は白磁の皿であり、底部を欠く。体部は緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸くおさめられる。底部内面に段を巡らせる。体部外面の下端に高台が付く痕跡が確認される。灰白色(10YR 7/1)の釉薬が全体にかかり、内面の口縁端部からやや下がつて軸タレがみられる。口径は9.8c m、残存高は1.8c mである。口縁の残存率は1/10以下である。33は灰軸碗である。体部は緩やかなカーブで外上方に立ち上がり、口縁端部は外反気味に丸くおさめられる。体部外面下端に高台の痕跡を残す。口縁部から内面にかけてはナデ調整、体部外面はヘラケズりする。内面に薄い灰白色(2.5Y7/1)の釉がかかる。口径は13.8c m、残存高は4.0c mである。口縁の残存率は1/8である。

b. 古墳時代(第74図)

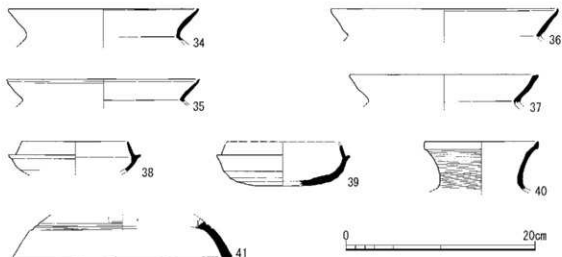
自然流路跡NR54b(第74図37～41) 流路内に堆積した礫層から土師器と須恵器が出土した。37は布留式甕の口縁部である。口縁部は内湾気味に外上方に立ち上がり、面を作る上端部はやや窪ませる。また、口縁端は左右に肥厚気味に終わる。口縁部はナデ仕上げする。口径は10.0c m、残存高は3.1c mである。色調はにぶい黄橙色10YR 7/3である。口縁の残存率は1/10以下である。38・39は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめられる。38の底部外面の回転ヘラケズりは全体の約3/5程度、39は全体の約1/2である。38の口径は11.0c m、残存高は3.3c mである。39は口縁端部と底部を欠くが、口径は推定12.0c m前後、推定高は4.6c m

前後とみられる。40は須恵器壺の口縁である。外反する口縁端部は垂直の面を作る。口縁部外面はカキメを施す。口径は12.0cm、残存高は5.0cmである。色調は灰色(N6/0)である。口縁の残りは約1/6である。41は須恵器器台の脚部である。「ハ」の字に開く脚端部は水平方向に面をもつ。脚の下端から3cm上方に2条の沈線を巡らせ、沈線上端にスカシを設ける。スカシの形状は不明であるが、沈線に沿って長さ3cmの面取りが残ることから、スカシは三角形もしくは四角形かとみられる。脚の直径は23.2cm、残存高は4.2cmである。脚端部の残存率は1/10以下である。

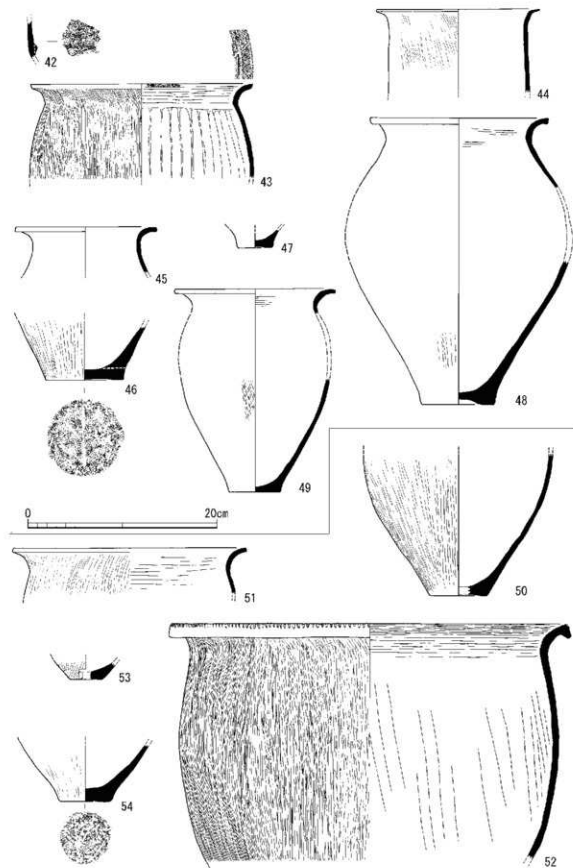
その他の出土遺物(第74図34～36) NR54の東岸斜面に堆積した弥生時代遺物包含層(第13層)の直上から、庄内式甕が出土した。いずれも口縁部のみ出土である。「く」の字に外反する口縁の端部は上方につまみあげ、尖り気味に終わる。体部外面はタタキを施し、体部内面は上端までヘラケズリする。34は口径20.1cm、残存高は3.0cmで、口縁部内面の下端にヨコ方向のハケ調整を施す。色調は浅黄褐色(2.5Y7/3)である。口縁の残存率は1/10である。35は口径20.2cm、残存高2.4cmである。色調は灰黄色(2.5Y6/2)である。口縁の残存率は1/10以下である。36は口径24.1cm、残存高は3.0cmである。色調はにぶい黄褐色(10YR 6/3)である。口縁の残存率は1/10以下である。

c. 弥生時代(第75・76図)

土坑S K 255(第75図43・44) 43は甕である。丸みの弱い体部から口縁が大きく外反し、口縁端部は面を作る。外面は口縁部から体部の全面に縦方向の丁寧なハケ調整を施す。体部内面は縦方向にナデ仕上げする。口縁部内面は、端部付近に波状文を施し、頸部にかけては粗目の工具でヨコハケを施す。口径は23.6cm、残存高は10.0cmである。色調は灰白色(2.5Y8/2)である。口縁の残存率は1/5である。44は甕である。体部は長胴で筒形を呈し、口縁は体部から外反して短く終わる。口縁端は丸くおさめる。口縁部から体部にかけて、外面は縦方向に粗目のハケ調整を施す。器壁の摩滅のため、内面の調整は判別不能である。口径は17.3cm、残存高は8.8cmである。色調は灰白色(10YR 8/2)である。口縁の残存率は1/10である。



第74図 b 8-3地区 出土遺物実測図(2)



第75図 b 8 - 3 地区 出土遺物実測図(3)

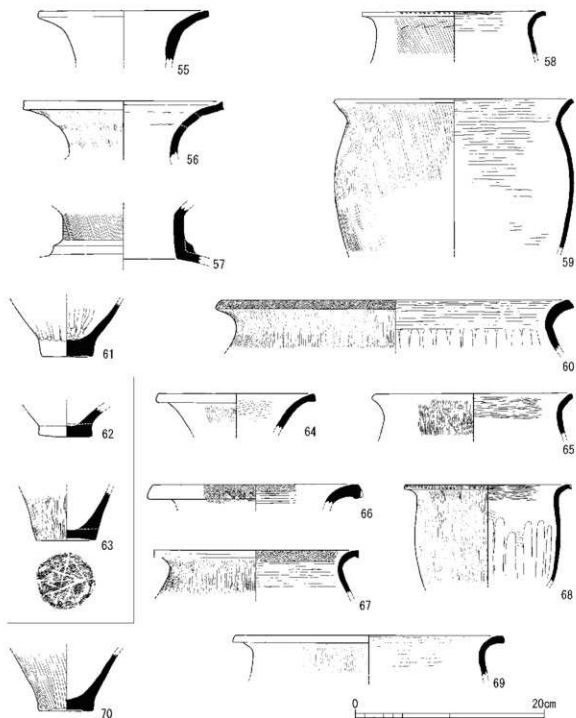
土坑 S K 258(第75図45・46) 45は壺の口縁部である。頸部から口縁にかけて大きく外反し、口縁端部は面を作る。器壁の摩滅により調整・仕上げは判別不能である。口径は14.8cm、残存高は4.8cmである。色調は浅黄橙色(10YR8/4)である。口縁の残存率は1/6である。46は甕の底部である。外面はタテハケによる調整を施す。平らな底面に木の葉の葉脈圧痕が残る。底部の直径は8.2cm、残存高は6.3cmである。色調は橙(5YR 7/6)である。底部は完存する。

土坑 S K 226(第75図47・48) 47は小型の甕の底部である。摩滅のため器壁の調整は不明である。底部は上げ底である。底部の直径は3.8cm、残存高は2.0cmである。色調は褐灰色10YR 5/1)である。底部は完存する。48は甕であり、全体の約5割の破片量が出土した。体部中央やや上方に最大径があり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面を作る。器壁の摩滅が進むが、体部外面は縦方向のヘラミガキを施す。内面は頸部から口縁部にかけて、粗いヨコハケを施す。体部内面はナデ調整する。口径は18.8cm、器高は推定30.3cm前後である。上げ底の底部は直径7.6cmを測る。色調は浅黄橙色(7.5YR 8/3)である。口縁の残存率は1/2である。

土坑 S K 256(第75図49) 49は甕であり全体の約4割の破片量出土した。体部の最大径は上部1/3付近にある。口縁部は大きく外反し、端部は面を作る。底部は平底である。器壁の摩滅が進行するが、口縁部内面は粗目のヨコハケ、体部外面はタテハケを施す。口径は17.0cm、器高は推定21.5cm前後とみられる。色調は灰白色(7.5YR 8/1)である。口縁の残存率は1/10以下である。

土器溜り S X 276(第75図50～54) 50は甕の下半部分である。底部は平底で直径は6.2cmを測る。体部外面は縦方向にハケ調整する。内面は縦方向のナデを行う。色調は灰白色(2.5Y8/2)である。残存高は15.0cmである。51は甕の口縁部である。短く外反する口縁の端部は面を作る。外面はタテハケを施す。内面は口縁から頸部にかけて粗目のヨコハケを施す。口径は24.6cm、残存高は5.0cmである。色調は灰黄色(2.5Y7/2)である。口縁の残存率は1/10以下である。52は甕である。短く外反する口縁の端部は下方に肥厚させ、面を作る。口縁の上端部にはキザミ目を巡らせる。外面の調整は口縁部にまで細かいタテハケを施す。内面は口縁から頸部にかけて粗目のヨコハケを施す。体部内面は縦方向にヘラケズリする。口径は41.8cm、残存高は25.1cmである。色調は灰白色(10YR8/2)である。口縁の残存率は1/2である。53は甕の底部である。底部中央に1か所、焼成前の穿孔が行われる。外面はタテハケを施す。底部の直径は3.4cm、残存高は2.0cmである。色調は灰白色(10YR8/2)である。底部は完存する。54は甕の底部である。外面はタテハケを施す。器壁の摩滅により、内面の調整は不明である。底部は平底で、木の葉の葉脈圧痕が残る。底部の直径は6.4cm、残存高は6.1cmである。色調は灰白色(5YR 8/2)であるが、所々に赤橙色(10R 6/6)がみられる。底部は完存する。

自然流路跡 NR 54c(第76図55～63) 流路内に堆積した礫層中(第71図B-B' 7層)から壺・甕が出土した。55・56は壺の口縁部である。細めの頸部から口縁部は大きく外反する。口縁端部は面を作る。56の口縁端は面の中ほどがやや窪み、上端部はつまみあげて尖り気味に終わる。56の外面はタテハケを施す。また、内面に粘土紐接合痕を所々に残す。55は口径17.8cm、残存高は5.3cmである。色調は浅黄色(2.5YR 7/3)である。口縁の残存率は1/8である。56は口径20.9cm、



第76図 b 8-3地区 出土遺物実測図(4)

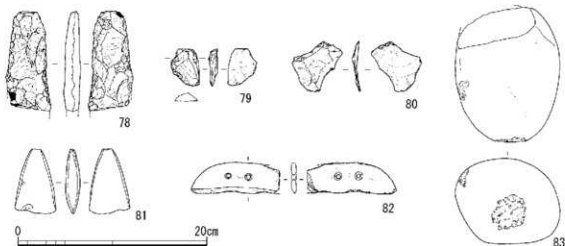
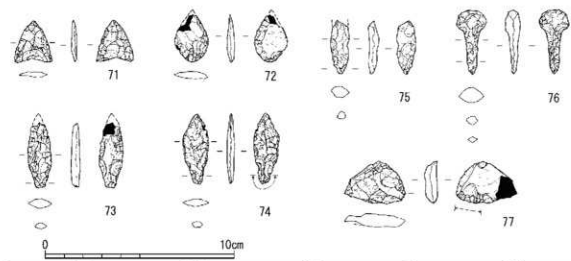
残存高は6.0cmである。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)である。口縁の残存率は1/6である。57は壺の頸部である。筒型で垂直に立ち上がる頸部は直径約12.6cmを測る。口縁部は大きく外反する。頸部と体部の境外面には、貼り付け突帯を巡らせる。突帯は無文である。外面はタテハケする。色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)である。頸部の残存率は1/3である。58は壺の口縁部である。張りの少ない体部から、口縁部は短く外反する。口縁端部は面を作り、上端部にキザミ目を巡らせる。外面はタテハケ、内面は口縁部から頸部にかけて粗目のヨコハケを施す。口径29.2cm、残存高は

4.7cmである。色調はにぶい橙色(5YR7/4)である。口縁の残存率は1/7である。59は甕である。張りの少ない体部から、口縁部は短く外反し、口縁端部は面を作る。外面はタテハケ、内面は粗目のヨコハケを施す。口径24.8cm、残存高は15.9cmである。色調は浅黄橙色(10YR8/3)である。口縁の残存率は1/3である。60は甕の口縁部である。短く外反する口縁の端部は面を作り、波状文を巡らせる。外面はタテハケし、内面は口縁端部から頸部にかけて粗目のヨコハケを施す。体部内面は縦方向のナデ仕上げを行う。61・62は突出する底部である。61は底径5.2cm、残存高は6.0cmである。体部外面は縦方向のヘラミガキを行い、体部内面は縦方向にナデ仕上げする。色調は灰白色(2.5Y8/2)である。底部の残存率は2/3である。62は底径5.4cm、残存高は2.7cmである。内面には底部と体部の接合痕跡が残る。色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)である。底部は完存する。63は上げ底の底部である。外面はタテハケで、内面はナデ仕上げする。底部外面には木の葉の葉脈圧痕が残る。底径は6.2cm、残存高は4.9cmである。色調はにぶい黄橙色10YR 7/2である。底部は完存する。

その他の出土遺物(第76図) N R 54の東岸斜面包含層(第71図B-B'第3層)から壺(64・66)と甕(65・67～70)が出土した。64は口縁部が大きく外反し、端部は面を作る。外面はタテハケし、内面は粗目のヨコハケを行う。口径は16.4cm、残存高は3.9cmである。色調は浅黄色2.5Y7/3)である。口縁の残存率は1/10である。65は甕の口縁部であり、外上方に短く外反して端部は面を作る。外面はタテハケし、内面は口縁から頸部にかけてヨコハケを行う。口径は20.6cm、残存高は4.3cmである。色調は明褐灰色(7.5Y7/2)である。口縁の残存率は1/8である。66は壺の口縁部である。大きく外反する口縁は肥厚し、端部は傾斜する面を作る。口縁端部は波状文を施した後、下部部にキザミ目を巡らせる。キザミ目は意識的に波状文の山部分の下に配置している。口縁部の内面は、口縁端に波状文を施した後、頸部に粗目のヨコハケを行う。口径は21.6cm、残存高は2.2cmである。色調は浅黄色(2.5Y7/3)である。口縁の残存率は1/10以下である。67は甕の口縁部である。短く外反する口縁の端部は面をつくり、中央を窪ませる。外面はタテハケし、口縁部内面には波状文を施す。頸部内面は粗目のヨコハケを行う。口径25.6cm、残存高4.5cmである。色調は浅黄色(2.5Y7/3)である。口縁の残存率は1/8である。68は張りの弱い体部に短く外反する口縁がつく。口縁端部は面をつくり、上端部にキザミ目を巡らす。外面はタテハケし、内面は口縁部を中心に粗目のヨコハケを行う。体部の内面には部分的にヨコハケを行うが、縦方向のナデで仕上げる。口径17.6cm、残存高10.3cmである。色調はにぶい黄橙色(10YR 7/2)である。口縁の残存率は1/8である。69は張りの弱い体部に短く外反する口縁がつく。口縁端部は面をつくる。外面はタテハケし、内面は口縁部から頸部にかけて粗目のヨコハケを行う。体部内面は縦方向のナデで仕上げる。口径28.2cm、残存高4.1cmである。色調はにぶい灰白色(2.5Y8/2)である。口縁の残存率は1/8である。70は甕の底部である。底部は上げ底で、体部は外上方に向かって立ち上がる。底部径5.8cm、残存高6.1cmを測る。色調暗赤褐色(10R 3/3)である。

d. 縄文時代

b 8-3地区では、縄文式土器の破片(第75図42)が1点出土した。42は調査地南東部の精査で



第77図 b8-3地区 出土遺物実測図(5)

検出した突帯文深鉢(船橋式)の破片である。外面肩部に断面三角形の貼り付け突帯を巡らす。胎土には角閃石を多く含み、色調は濃いチョコレート色を呈するいわゆる生駒山西麓産とされるものである。器表面の摩滅が著しく、調整は不明である。晩期の船橋式に比定される。

②石器(第77図)

b8-3地区の調査で出土した石器には打製石器・磨製石器・礫石器がある。打製石器には石鏃・石錐・削器・石剣・剥片があり、磨製石器には定角式磨製石斧・石包丁がある。礫石器には敲石がある。多くは弥生時代に属する石器であるが、削器(77)・磨製石斧(81)・敲石(83)の3点は縄文時代に比定される。

打製石鏃(71～74) いずれもサヌカイト製であり、基部の形状により凹基式(71)・無茎式(72)・凸基無茎式(73・74)に分けられる。71は調査区北西部の遺構検出作業で出土した。両側面を細かく両面調整している。基部の凹みは浅い。縦2.2cm、横2.0cm、厚さ3mmである。重さは1.2gである。72はSK255から出土した。表面は周縁部から細かい調整を行うが、裏面は主刺離面を残

し細かい調整も限定的である。縦2.5cm、横1.8cm、厚さ4mmである。重さは1.7gである。73・74はS K225の底面近くから出土した。両面から側面を粗く調整しただけのものである。73は縦3.4cm、横1.3cm、厚さ5mmである。重さは1.9gである。74は縦3.7cm、横1.3cm、厚さ4mmである。重さは1.8gである。

打製石錐(75・76) 75はS K225内のS P229から出土した。基部を欠損する。両側縁からの両面調整により、断面は楕円形をなす。先端部には使用に伴う回転痕がみられる。縦2.8cm以上、横1.0cm、厚さ5.5mmである。重さは1.8gである。76はS K258から出土した。基部は有頭状で厚く仕上げ、刃部は一定幅の棒状を呈する。周縁部は細かい両面調整を行う。先端部には顕著な使用痕はみられない。縦3.4cm、基部は縦1.1cm、横1.6cm、厚さ8mm、刃部は縦2.3cm、横0.5cm、厚さ5mmである。重さは2.5gである。

刮器(77) 調査地中央南部の遺構検出作業で出土した。横割ぎした剥片の片面を細かく調整し刃部をつくる。縦2.3cm、横3.2cm、厚さ7mmである。重さは5.0gである。

打製石剣(78) 自然流路跡NR54の東岸斜面から出土した。先端部と基部を欠損するが、形状や大きさ等から打製石剣とみられる。両側縁は両面からの粗い調整を行った後、細かい再調整を加えて刃部を作り出す。横断面の形状はほぼ菱形を呈するが、不定形に厚みを増す部分もあることから、本品は製作途中の未完成品の可能性が高い。残存部分は縦10.6cm、横4.7cm、厚さ1.8cmを測る。重さは97.8gである。

剥片(79・80) 遺構検出作業に伴い出土した剥片である。79は破片に厚みがあり、重さは10.0gである。80は厚みが薄く、重さは9.3gである。

定角式磨製石斧(81) S P237から出土した。撥形を呈する石斧は扁平で、中央から刃部側に入った位置に最大厚をもつ。表面は整形に伴い丁寧な磨かれる。刃部は頻繁な使用に伴う研ぎ出して偏りが生じている。また、使用による刃こぼれとみる剥離痕が残る。縦6.9cm、刃部4.3cm、基部1.0cm、最大厚1.5cmを測る。重さは63.6gである。

石包丁(82) NR54cの礫層(第71図第7層)中から出土した粘板岩製の石包丁であり、基部を欠損する。使用に伴うと考えられる剥離痕が刃部に多数認められる。中央に両面穿孔の紐通し穴2個が約2cm間隔で開けられる。刃部の長さは8.4cmを残す。幅3.3cm、厚さは5mmである。

敲石(83) 調査地南東部の遺構検出作業で出土した。卵形の川原石(砂岩か)を利用し、片方の先端部と側面の2か所に敲打痕を有する。敲打痕とは反対側の先端部を欠損する。縦14.4cm、横11.0cm、厚さ9.0cmである。重さは約25gである。

5)小結

b 8-3地区では、自然堤防上から縄文時代から中世にかけての遺構を多数検出した。また、近世においては溝々・暗渠等の耕作関連遺構も合わせて検出することができた。

縄文時代 調査地南部から2基のピット(S P237・275)を検出した。また、遺物では晩期の突帯文深鉢と磨製石斧が僅かに出土したに過ぎない。

弥生時代 自然堤防上では、調査地北部を中心に土坑が分布する。土坑群は北側のb 8-1から連続するもので、その分布の南限はほぼb 8-3地区でおわる。西部で検出した自然流路跡NR54は弥生時代中期から平安時代前期にかけての流路跡であり、幾度かの流路の変遷が認められる。多くの土器はNR54aと河岸斜面の包含層から出土した。

古墳時代 自然堤防上に遺構はないが、西部では古墳時代の2時期の自然流路NR54b(新・古)を検出した。出土遺物から、古段階の流路跡は4世紀末～5世紀前半頃、新段階は6世紀中頃に埋没したと考えられる。

平安時代～中世 10世紀後半の掘立柱建物跡2棟(S B 271・272)を検出したほか、11世紀初頭の土坑SK 238など、平安時代の前期から中期にかけての遺構が自然堤防上に広く分布する。また、13世紀前半では井戸(SE 204)や柱穴(SP 227・270)が確認された。

(竹原一彦)

4. まとめ

調子b地区では弥生時代中期から近世までの遺構を検出した。ここでは時代を追って各時代の遺構について概述し、この調子地区の土地利用についてまとめた。

縄文時代

b 8-3地区では晩期のピットを検出し、b 8-2地区では包含層中ではあるが、突帯文土器が出土しており、周辺に同時期の集落が分布している可能性がある。

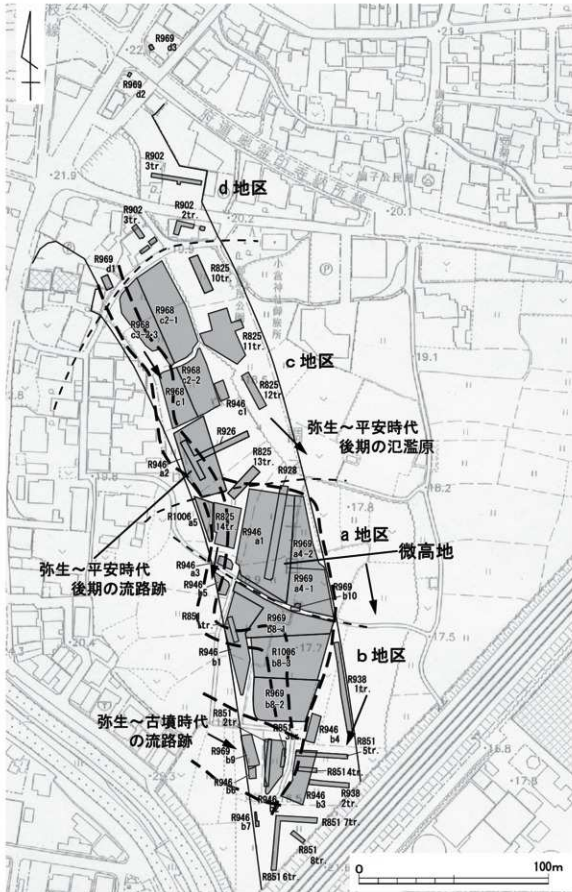
弥生時代

b地区北半にあたるb 1地区、b 8-1～3地区で中期の土坑を検出した。b地区の南半、b 2～4、b 6・7・9地区は、北半のb 1・8地区と比べて1.3～1.5mの低地となっている。調子a 1・a 4地区が微高地のもっとも高所をなしており、ここでは堅穴式住居跡や方形周溝墓、土坑などが検出されている。b 1地区、b 8-1～3地区は微高地のトップから南に下る緩傾斜面をなしており、遺構の分布密度が薄いものであった。居住区からやや離れた集落の縁辺部に位置する状況である。

一方、微高地下の低地であるb 2・6・9地区では、大きくは西から東へ向けての流路跡が確認されている。内部からは多くの弥生土器が出土しており、集落の縁辺である南側の低地を流れる自然流路に廃棄されたものと思われる。

弥生時代末～古墳時代初頭

微高地上のトップである調子a地区では同時期の遺構は確認できていないが、b 8-3地区のNR54、b 8-2地区で土坑、b 2地区で自然流路内から土器片が出土している。微高地から下る緩傾斜面での遺構の分布密度の薄さや低地の自然流路内で土器が出土する状況は、弥生時代の遺構・遺物の分布によく似た状況を示す。弥生時代と同じく、この時期も集落の縁辺部に位置しているものと想定される。低地にあるb 2地区では、西から東に流れる自然流路内に同時期の土器が含まれることから、今回の調査地の北西部分の微高地上、現調子集落下にこの時期の集落本体が位置するものと推定される。



第78図 調子地区 旧流路配置図

古墳時代

b 8-3地区のNR54、b 2地区の自然流路内から、後期の須恵器がわずかに出土しているだけで、同時期の遺構は確認できなかった。調子a地区においても、遺構検出面下の礫層から後期の須恵器片が出土しているだけで、調子地区全体でも遺構は確認できていない。この状況は、弥生時代や弥生時代末～古墳時代初頭の遺構・遺物の検出状況とは異なっている。そのため、今回の調査地周辺に同時期の集落が遺存しているとは想定しにくい。一つは全く異なった地域に分布しているか、もしくは小泉川の河道が後世に変わってしまったため、居住地がすべて削られたというストーリーが想定される。

奈良時代

今回の調査地の北方約500mには鞍岡廃寺が想定されている。同寺の詳細はよくわかっていないが、白鳳期に創建された寺院で、長岡京の「京下七寺」の一つと考えられており、周辺の調査では奈良時代の遺構も確認されている(小田桐1986)。平成17年度に実施した右京第851次調査における調子地区1トレンチでは、柱穴や布目瓦片を確認し、奈良時代に遡る遺構・遺物の検出が期待された。

調査の結果、調子地区全体を見ても奈良時代の遺構は確認できなかった。各地区の包含層から、その可能性が認められる小片が出土しているだけで、全体の出土量もわずかであることを考慮すると、奈良時代の集落はこの地域にまで及んでいないものと思われる。この時期の集落は、鞍岡廃寺の北・東にあたる友岡地区に分布しているものと想定できる。

長岡京期

長岡京条坊復原によると、今回の調査地は右京九条三坊二・三町に当たる。調子地区全体において、長岡京期の遺構は確認できなかった。出土遺物の中には長岡京期と判断してもよいものも散見されるが、確証は得られないものである。しかし、遺構については全く確認できなかった。

調子地区の南半、a地区とb地区の北半にあっては、弥生時代などの遺構が遺存していることから後世にさほど削平を受けているとは考えにくく、長岡京期の遺構が形成されたとしたならば、当然、検出できるものと考えられる。このことから、長岡京関連の造作は、調子地区の南半に及んでいなかったものと判断される。

平安時代～中世

調子地区の北半では、右京第968次調査SD36とこの南延長に当たるa 2地区SD30から平安時代前期から中期の遺物が多く出土した。土器に混じって瓦片、凝灰岩が出土し、a 2地区包含層中からは風招が出土しており、調査地の近隣に古代寺院が存在していたことが指摘されている。

さて、調子b地区における平安時代の遺構は、微高地上である調子b地区の北部のb 1地区で小柱穴・溝、b 8-1地区では柱穴、b 8-3地区では掘立柱建物跡、土坑等を確認した。a・c地区で想定されたような寺院跡を示唆するような成果は得られなかった。今回の調査地から離れた、c地区の西・北西側に寺院が存在する可能性が窺われる。

また、b 1地区、b 8-1～3地区では、自然流路NR54を検出した。この流路は弥生時代か

ら平安時代後半頃までの遺物を含み、弥生時代～平安時代後期にかけて、流路をわずかに変えながら流れていたものである。この流路については、調子地区の調査対象地の西辺に沿うような形で流れ、調子b1地区から南東側に流路を変えてb8地区を縦断しているものと復元できる。

この流路がほぼ廃絶した以降、調子地区の特に北半部が氾濫したようで、c地区では中世以降の水田・畑作遺構が見つかっており、この時期以降に土地利用がなされていることが確認できた。

一方、調子地区の南半の微高地上では集落遺構が検出されている。b8-1地区からb8-3地区では、池状遺構、建物跡、井戸、土坑、a地区では掘立柱建物跡のほか、井戸や多数の柱穴、土坑、木棺墓S T201を検出している。

一方、b地区の南半である微高地の下でも、b3地区でこの時期の水田遺構が確認されており、調子c地区と同じく、田畑としての土地利用がなされたようである。b2-4、b7、b9地区では耕作関係の遺構は確認できていないが、b3地区と大きく異なる地形条件ではないことから、おそらくこの時期以降に耕作地として開発がすすんだものであろう。

このように、c地区の数百mにわたって土地の利用条件が変わっている点を重視すると、この時期に小泉川の管理が十分になされるようになったことが要因として想定できる。

なお、a4地区、b8地区の東辺は1～2mの段差が見て取れ、c地区からb地区東半にかけての氾濫源として、中世以降に幾度も洪水で洗われたものと推定される。そのため、b地区の南半で東西に流れる弥生～古墳時代の流路跡は、そういった水の流れにより削られて消失したものと考えられる。

13世紀以後、b地区では集落関係の遺構は確認できていない。b1地区、b8地区では近世の耕作関連の小溝群や井戸が検出されている。右京第851次調査の7トレンチでは現代の野井戸が確認されており、これはa・c地区でも居住関係の遺構が確認できないという点で同じ状況である。中世の中頃以後、調子地区全域は生産域として土地利用されたと考えられる。

(岩松 保)

参考文献

- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成15年度発掘調査概要」（「京都府遺跡調査概報」第113冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2005
- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」（「京都府遺跡調査概報」第118冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2006
- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査概要」（「京都府遺跡調査概報」第124冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2007
- 岩松保ほか「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡報告書」（「京都府遺跡調査報告集」第133冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2009
- 岡崎研一ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成20年度発掘調査報告」（「京都府遺跡調査報告集」第137冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2010
- 小田桐淳「鞆岡庵寺の沿革」（『長岡京古文化論叢』中山修一先生古希記念事業会）1986

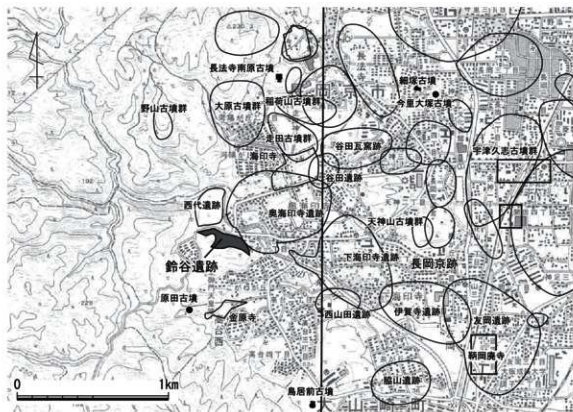
- 古園正浩ほか「境野1号墳」(大山崎町埋蔵文化財調査報告書第34集 大山崎町教育委員会) 2007
- 中川和哉「京都第二外環状道路関係遺跡長岡京跡(長岡京跡右京第927次)・伊賀寺遺跡」(「京都府遺跡調査報告集」第136冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- 中川和哉・高野陽子ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
- 中川和哉・戸原和人「京都第二外環状道路関係遺跡平成18年度発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第126冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008
- 肥後弘幸「長岡京市調子2丁目出土の銅鐸形土製品について」(「京都府埋蔵文化財情報」第111号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- 福永伸哉ほか「鳥居前古墳-総括編-」大阪大学文学部考古学研究室 1990
- 増田孝彦「長岡京跡右京第910次(7ANOI B・NNT-3地区)・941次(7ANOOD-5・OI B・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
- 森島康雄「長岡京跡右京第968次発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第141冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

(2) 鈴谷遺跡(高山・鈴谷地区)

1. はじめに

鈴谷遺跡は、当初、鈴谷窯跡として周知されていたが、平成21年度の確認調査により古墳時代から古代の遺物や小型の横穴式石室を検出したことから鈴谷遺跡として周知されるに至ったものである。今回の発掘調査は、京都第二外環状道路建設事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した。当調査研究センターは、第二外環状道路の計画路線のうち、大山崎町・長岡京市域にかかる範囲において、平成15年度から発掘調査を行っている。本報告は、このうち、平成21年度から平成22年度まで実施した発掘調査についての報告である。調査については、西日本高速道路株式会社(NEXCO)が経費を負担した。なお、各年度の調査体制は以下のとおりである。

本報告で使用した国土地標は、日本測地系(第VI座標系)である。また、土層および土器の色調は、農林水産技術会議監修の『新版標準土色帖』を使用した。調査にあたっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、地元住民の方々にご協力をいただいた。また、特に古墳時代終末期の横穴式石室、高山地区AトレンチS X01の調査については、京都府立大学大学院生(現公益財団法人大阪府文化財センター)笹栗拓氏、財団法人向日市埋蔵文化財センター梅本康広氏にご教示をいただいた。記して感謝します。



第79図 調査地位位置図(S=1/25,000 国土地理院 京都西南部)

〔調査体制等〕

平成21年度(鈴谷遺跡第1次)

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課調査第2係長 森 正

同 調査第2係主任調査員 戸原和人・増田孝彦

調査場所 長岡京市奥海印寺高山・原田・鈴谷

現地調査期間 平成21年10月19日～12月22日(高山地区)

平成22年1月18日～2月25日(鈴谷地区)

調査面積 高山地区600㎡・鈴谷地区250㎡ 合計850㎡

平成22年度(鈴谷遺跡第2次)

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課主幹調査第2係長事務取扱 石井清司

調査第2課調査第2係長 森 正

同 調査第2係主任調査員 中川和哉・森島康雄

同 調査第1係専門調査員 黒坪一樹

同 調査第2係調査員 古川 匠

調査場所 長岡京市奥海印寺高山・鈴谷

現地調査期間 平成22年6月1日～10月28日

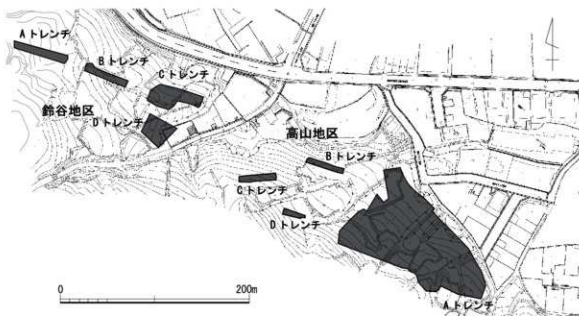
調査面積 2,200㎡

2. 調査区周辺の環境

鈴谷遺跡は、小泉川上流の山裾部に位置する。周辺の古墳時代の遺跡を見ると、小泉川の対岸の丘陵には、陶棺の不時発見によって知られることとなった走田古墳群が立地する。長岡京市教育委員会の調査では、7世紀前半の横穴式石室および組合式家形石棺が検出され、また新たに陶棺が2個体分出土している^(R1)。走田古墳群の西側には大原古墳群が存在する。現状ではその大半が消滅しているが、25基の古墳の存在が確認されていた。昭和28年には2基が発掘調査され、6世紀後半頃から7世紀初頭の横穴式石室墳であることが判明している^(R2)。

鈴谷遺跡(鈴谷窯跡)周辺の首長墳を概観すると、北北東約1.2kmの地点には前期後半の全長62mの前方後方墳である長法寺南原古墳がある^(R3)。調査地から南東約1kmには中期初頭の鳥居前古墳があり、全長51mの帆立貝式古墳であることが判明している。後期になると、首長墳の立地は平野部に移動し、細塚古墳、今里大塚古墳が造営される。

奈良時代頃の創建とされる新岡座寺は、これまで数次にわたる小規模な調査が行われている。建物配置などは明らかでないが、「田辺史牟也毛」という人名のヘラ描き瓦から、渡来系氏族である田辺氏との関連が指摘されている^(R4)。小泉川の下流には、縄文時代から中世の集落遺跡である下海印寺遺跡が存在する。近年の調査で、古墳時代後期の堅穴式住居跡が検出されている^(R5)。谷田



第80図 調査区位置図(S=1/4,000)

遺跡では、古墳時代前・後期の竪穴式住居跡が検出されている^(B6)。また、鈴谷遺跡の北に隣接する西代遺跡では、古墳時代後期の遺物包含層が確認されている^(B7)。

3. 調査の経緯

鈴谷遺跡は、調査着手前は須恵器窯跡と想定されていたが、竹林造成による地形改変が著しく、内容が不明であった。平成21年度に実施した第1次調査では、調査対象地の鈴谷地区にA～Cの3か所、高山地区にA～Dの4か所、計7か所のトレンチを設定した。鈴谷地区Cトレンチでは、竹林造成土下の遺物包含層から、長岡京期の土器片、土馬等が出土した。高山地区Aトレンチでは、調査当初の所見として竪穴式石塚か横穴式石室の可能性がある石組みが検出された。また、この石組み付近では家形埴輪、埴輪円筒部の破片が出土し、トレンチ東端付近では、古墳時代後期の遺物がまとまって出土した。

平成22年度には、鈴谷地区Cトレンチに隣接して鈴谷地区にDトレンチを追加設定した。また、高山地区Aトレンチの調査区を拡張し、調査を進めることとなった。

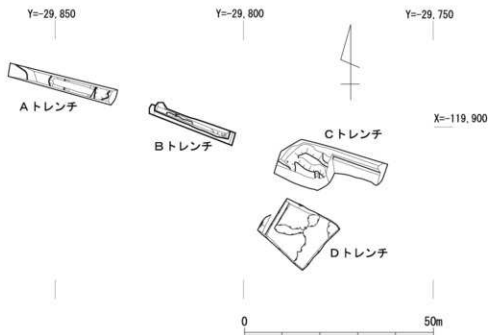
4. 鈴谷地区の調査(第81図)

A・Bトレンチ

地表下1～4mまで竹林造成土が堆積しており、砥石、土師器灯明皿、陶器灯明皿、棧瓦等の近世以降の遺物が出土したが、顕著な遺構は認められなかった。

Cトレンチ

丘陵の鞍部に位置するトレンチである。A・Bトレンチと同様に竹林造成土が堆積し、その厚さは西側では地表下0.5m、東では5.0mに及ぶ。この層の下で、遺物包含層の暗灰褐色砂質土層が認められた。この層から、長岡京期の土馬や土師器壺等が出土した。



第81図 鈴谷地区トレンチ配置図(S=1/1,000)

D トレンチ

C トレンチの成果を受け、平成22年度にC トレンチの南に設定したトレンチである。A・B トレンチと同様に竹林造成土が厚く堆積するが、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

5. 高山地区の調査(平成21年度・第82図)

A トレンチ

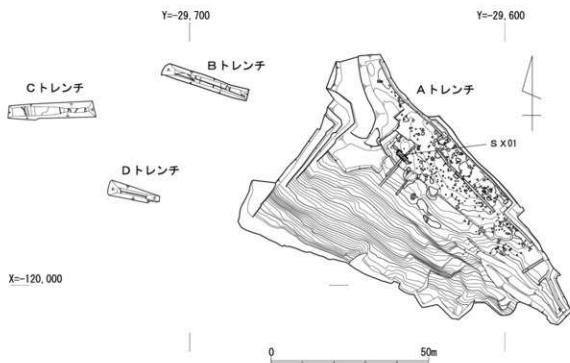
調査地の西端の地点で、現地表下約4mまで堆積する竹林造成土層の下から横穴式石室 S X01 を検出した。石室の周辺では、70基以上のピットと土坑を検出するとともに、家形埴輪片、須恵器杯身・杯蓋・高杯・甕、土師器高杯・甕、長岡京期の土馬等が出土した。遺構の調査は次年度に実施することとした。

B～D トレンチ

各地区とも、地表面下1～4mまでが竹林造成土で、各地区から砥石、土師器灯明皿、陶器灯明皿、棧瓦等の近世以降の遺物が出土したが、顕著な遺構は認められなかった。

6. 高山地区の調査(平成22年度・第83図)

平成21年度の調査成果を受けて、高山地区A トレンチ(以下、A トレンチと表記)を拡張し、21年度の調査範囲も含め、発掘調査を実施することとなった。こうした経緯から、A トレンチは第1次調査と第2次調査で、トレンチの規模と形態が異なる。調査区壁の土層図は、第1次調査のトレンチ壁が土層堆積状況の把握に適しているため、この壁図面を第2次トレンチ壁図面と併用した。調査区の設定及び、土層図の作図場所・範囲は第84図のとおりである。



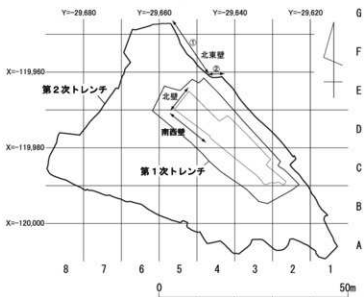
第82図 高山地区トレンチ配置図(S= 1/1,200)



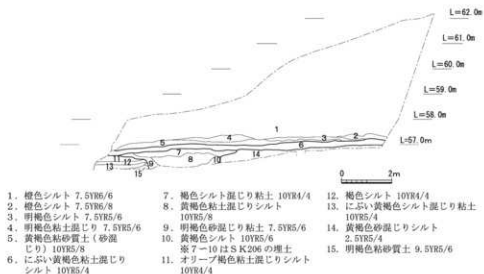
第83図 Aトレンチ平面図

(1)層序と遺構面(第84～86図)

Aトレンチは、調査前は竹林造成によって段築がなされ、最も顕著な地点では4m以上の厚さの客土が堆積していた。重機掘削によって客土を除去したところ、地表面の傾斜に比べると、丘陵斜面の傾斜はかなり急であることが判明した。トレンチの東側は砂礫層を地山とする平坦面であるが、西側はこの平坦面から上り勾配となる斜面地で、斜面を上るにしたがって傾斜は急になる。このような地形的制約から、調査区東半分で遺構が集中するのに対し、西半分の斜面地では遺構の分布密度が低く、斜面下部でピットが散見される以外、ほとんど遺構は確認できなかった。東側の平坦面は、シルト・砂礫層を地山とし、Aトレンチの遺構はほぼすべて、この層の堆積範囲内に分布する。このシルト・砂礫層を断ち割ると、礫層が検出された。この礫層は段丘礫層の可能性がある。シルト・砂礫層は、斜面の裾まで分布するが、斜面の大部分では、竹林造成土直下で大阪層群の粘土層・砂混じり粘土層が検出されている。



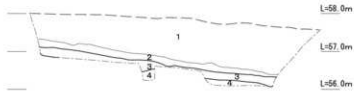
第84図 Aトレンチ地区区割り図・土層位置図



1. 褐色シルト 7.5YR5/6
2. 褐色シルト 7.5YR6/8
3. 明褐色シルト 7.5YR5/6
4. 明褐色粘土混じり 7.5YR5/6
5. 黄褐色粘砂質土(砂混じり) 10YR5/8
6. にぶい黄褐色粘土混じりシルト 10YR5/4
7. 褐色シルト混じり粘土 10YR4/4
8. 黄褐色粘土混じりシルト 10YR5/8
9. 明褐色砂混じり粘土 7.5YR5/6
10. 黄褐色シルト 10YR5/6
11. オリーブ褐色粘土混じりシルト 10YR4/4
12. 褐色シルト 10YR4/4
13. にぶい黄褐色シルト混じり粘土 10YR5/4
14. 黄褐色砂混じりシルト 2.5YR5/4
15. 明褐色粘砂質土 9.5YR5/6

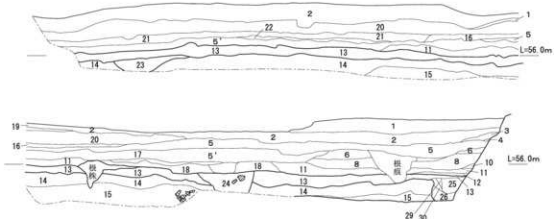
第85図 Aトレンチ南西壁土層図

北壁



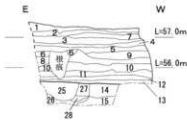
1. 客土 (黄土)
2. 明黄色砂混じり粘土 2.5YR6/8(北東壁5層、南西壁第2層と同じ層)
3. 褐色シルト混じり砂 10YR4/4(礫をやや多く含む、北東壁13層、南西壁第6層と同じ層)
4. 明黄色シルト混じり粘土 10YR6/8(北東壁14層、南西壁第7層と同じ層、地山)

北東壁①



1. 客土 (黄土)
2. 明黄色砂混じり粘土 2.5YR6/8(南西壁2層と同じ層)
3. 褐色シルト混じり砂 10YR4/4(礫をやや多く含む、南西壁6層と同じ層)
4. 明黄色シルト混じり粘土 10YR6/8(南西壁6層と同じ層)
5. 褐色細礫混じり土 10YR4/6
- 5'. 褐色粗礫混じり粘質土 10YR4/4
6. にぶい黄褐色粘土混じりシルト 10YR5/4
7. 褐色シルト混じり粘土 10YR4/4
8. 黄褐色粘土混じりシルト 10YR5/8
9. 明褐色砂混じり粘土 7.5YR5/6
10. 黄褐色シルト 10YR5/6
11. オリヅ褐色粘土混じりシルト 10YR4/4
12. 褐色シルト 10YR4/4
13. にぶい黄褐色シルト混じり粘土 10YR5/4
14. 黄褐色砂混じりシルト 2.5YR5/4
15. 明褐色粘砂質土 9.5YR5/6
16. にぶい黄褐色シルト 10YR5/4
17. 黄褐色シルト混じり粘土 10YR6/6
18. 褐色粘質土 10YR7/6
19. 赤褐色土 5YR4/6
20. 黄褐色砂質土 10YR4/4
21. 褐色粘質土 10YR4/4
22. にぶい黄褐色砂質土 10YR5/4
23. 褐色砂質土 10YR4/6 (S K09 埋土)
24. 暗褐色砂質土 10YR3/4 (粗礫混じり、土坑埋土か)
25. 褐色粘質土 10YR4/6
26. 黄褐色粘質土 10YR5/8
27. 黄褐色土 10YR5/6
28. 褐色粘性砂質土 10YR4/4(灰黄色粘土 2.5Y7/2 筋状に含む)
29. にぶい黄褐色土 10YR5/3
30. 29に類似

北東壁②



第86図 Aトレンチ北壁・北東壁①・②土層図



第87図 A トレンチ構配置図

Aトレンチでは、遺構面を2面確認した。第1面は、東北壁の第13層・西南壁の第6層・北壁の第3層(以下この層を総称して「第13層」と表記)を検出面とし、古墳時代後期のピット、土坑、古墳時代終末期の横穴式石室、そして長岡京期のピットが検出された。第13層の上面では遺構が稠密に分布するが、第13層の中に礫が大量に含まれ、また、遺構埋土の土色、土質が第13層と非常に似ており、第13層と遺構埋土の判別が困難であった。遺物の組成から、第13層の形成時期は古墳時代前期から後期の範囲内におおむね収まるが、出土遺物には、長岡京期の土馬片が少量含まれており、当該期の遺構が存在した可能性がある。

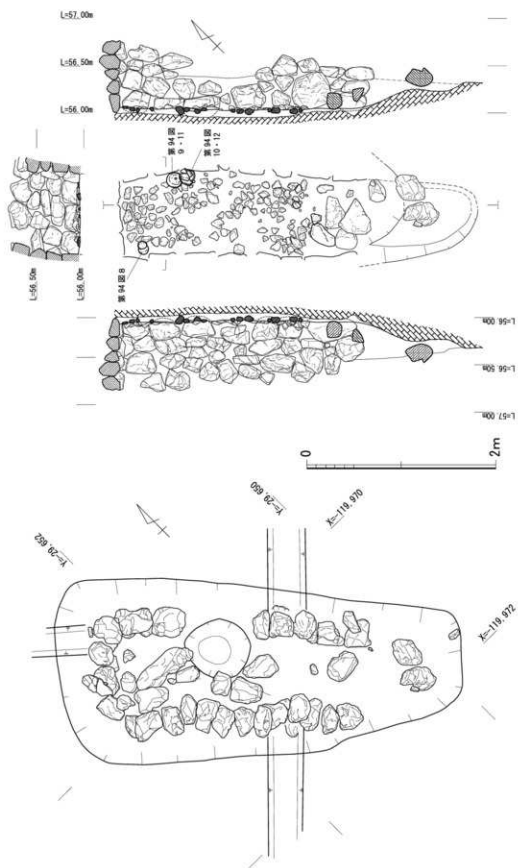
第13層を除去すると、シルト・砂礫層が検出され、この層の検出面が、遺構面第2面となる。Aトレンチの遺構はほとんどが第1面で検出されており、第2面に帰属する遺構は、大型の土坑SK205とSK206のみである。遺物が出土していないため、第2面の時期は不明である。

(2) 検出遺構

ここではAトレンチで検出した主な遺構について記述する。遺構は調査区北東部の丘陵裾の平坦面に集中しており、南東部では第13層の上面で検出されるピット、土坑がやや密に分布している。遺物は、土坑SK90の周辺に集中するが、遺物の出土遺構はSK90以北にもまばらに存在する。また、北部では小型の横穴式石室SX01を検出した。なお、今回の調査で検出された遺構で、時期と性格の明確な遺構は第1面検出遺構のみであるため、後述の遺構は例外を除き、全て第1面で検出された。

横穴式石室SX01(第88・89図) 調査区北寄りの地点で検出した小規模な横穴式石室である。石室の規模は全長約3.5m(玄室長2.0m・羨道長1.5m)、幅約0.6mである。上面が削られているが、残存高は最も残りの良い奥壁部で約0.8mである。玄室と羨道の幅が変わらない無袖式の横穴式石室である。側壁・奥壁の構築材は、主に20～35cmの大きさの石が使われており、残りの良い右側壁・奥壁は、不明瞭ながら目地が通っている。左側壁部は上部が崩れているが、小規模なピットによるものである。このピットは盗掘坑の可能性があるが、床面には到達していなかった。玄室床面には礫が敷かれ、須恵器杯・蓋2セットと土師器甕1点が床面の礫敷直上から出土した。土師器甕は、奥壁右隅の床面に正位置で据えられていた。須恵器杯・蓋は、左側壁の際に左側壁と並行に置かれていた。杯身に蓋がかぶせられた副葬時の状況を保ちながら出土したが、玄門部から見て手前側のセット(第94図10・12)の蓋は割れており、上には小石が乗っていた。上述の盗掘によって、左側壁から落下した石室石材によって破壊された可能性もあるが、落下の衝撃に伴って飛散するはずの蓋の破片が全く動いていないことから、副葬品の配置後に、破砕された可能性もある。土師器甕、須恵器杯は、取り上げ後、中の土をふるいにかけてみたが、遺物は出土しなかった。

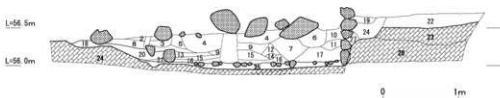
石室の床面からは、鉄釘は出土しておらず、鉄釘を用いない組合式の木棺や木板を使用したか、あるいは床面礫敷への直葬と考えられる。また、石室左側壁の玄門部にはやや大ぶりの石が配されており、石室と羨道部を区分しているようである。袖石の名残であろう。天井石に相当するような大型の石材は、石室内および石室周辺では検出されなかった。



第88図 横穴式石室S X01平面図

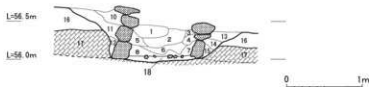
(石室検出画)

〔南北断面〕



- | | | |
|----------------------------|-----------------------------------|---|
| 1. 橙色シルト 7.5YR6/6 | 12. 褐色シルト 10YR4/4 | 21. にぶい黄褐色シルト混じり粘土 10YR5/4(細まり弱い) |
| 2. 橙色シルト 7.5YR6/8 | 13. にぶい黄褐色シルト混じり粘土 10YR5/4 | 22. 黄褐色砂混じり粘土 10YR5/6(礫混じり、北東壁第13層と同一層) |
| 3. 明褐色シルト 7.5YR5/6 | 14. 黄褐色砂混じりシルト 2.5YR5/4 | 23. 明褐色シルト混じり粘土 10YR5/8(礫混じり、地山) |
| 4. 明褐色粘土混じりシルト 7.5YR5/6 | 15. 明褐色粘砂質土 9.5YR5/6 | 24. 第21層と同一層 |
| 5. 黄褐色粘砂質土(砂混じり) 10YR5/8 | 16. にぶい黄褐色シルト混じり粘土 10YR5/4(細まり弱い) | 25. オリーブ褐色粘土混じりシルト 10YR4/3 |
| 6. にぶい黄褐色粘土混じりシルト 10YR5/4 | 17. 黄褐色シルト混じり粘土 10YR6/6 | 26. 黄褐色粘土混じりシルト 10YR5/6 |
| 7. 褐色シルト混じり粘土 10YR4/4 | 18. 黄褐色粘土混じりシルト 10YR5/6 | 27. 黄褐色混じりシルト 10YR5/6 |
| 8. 黄褐色粘土混じりシルト 10YR5/8 | 19. 黄褐色粘土混じりシルト 10YR5/6(石室裏込め) | 28. 黄褐色砂混じりシルト 10YR5/1(地山) |
| 9. 明褐色砂混じり粘土 7.5YR5/6 | 20. にぶい黄褐色シルト混じり粘土 10YR5/4 | |
| 10. 黄褐色シルト 10YR5/6 | | |
| 11. オリーブ褐色粘土混じりシルト 10YR4/4 | | |

〔南北断面〕



- | | |
|---|---|
| 1. オリーブ褐色シルト 2.5Y4/6 | 11. 明黄褐色粘土混じりシルト 10YR6/8 |
| 2. 明褐色粘土混じりシルト 7.5YR5/6 | 12. ややにぶい黄褐色粘土混じりシルト 10YR5/6 |
| 3. 橙色砂混じりシルト 7.5YR6/6 | 13. 褐色粘土混じりシルト 10YR4/6 |
| 4. 明褐色砂混じりシルト 7.5YR5/6 | 14. 黄褐色粘砂質土 10YR5/6 |
| 5. 褐色粘土混じりシルト 10YR4/4 | 15. 褐色シルト 10YR4/6 |
| 6. 明褐色砂混じり粘土 7.5YR5/8 | 16. 黄褐色砂混じり粘土 10YR5/6(20-40mm大の礫を含む) |
| 7. 明褐色シルト混じり粘砂質土 7.5YR5/6 | 17. 黄褐色粘土混じりシルト 2.5Y5/6(20-40mm大の礫を含む、地山) |
| 8. にぶい黄褐色粘土混じりシルト 10YR5/4 | 18. オリーブ褐色粘土混じりシルト 10YR4/3 |
| 9. 南北断面の第25層と同一層 | |
| 10. やや明るい褐色シルト 10YR4/6(10-20mm大の礫を少量含む) | |

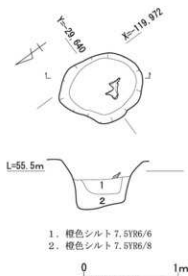
第89図 横穴式石室SX01土層図

羨道は、内庭から玄門にかけて緩やかに下降しており、玄門付近以外の側石は残存していなかった。羨道から玄門にかけては、8個の石材が検出された。SX01検出時に、石室内から8～9点の石材が出土しているが、いずれも埋土の上面から出土しており、後世の地形改変によって、石室側壁の構築石材が倒壊したものと想定される。これに対し、羨道部から玄門にかけての石材は、埋土の上面から床面にかけて出土していることから、玄門部を土や石材によって閉塞した痕跡とも推定される。床面付近に倒れた羨道部の側石が含まれている可能性もあるが、羨道の両側壁が残存するか所の床面にも石が存在することから、閉塞石は5石以上存在したと考えられる。

古墳時代以降の地形改変によるものか、SX01の墳丘規模、形態を示す遺構は発見されなかった。石室の規模からは、全長10m以下の小規模な古墳と推定される。

SX01の近隣には他の古墳が検出されなかった。しかし、SX01の北側が、後世に大規模に削られているため、他に古墳が存在したかどうか明らかでない。周辺の状況から群集墳の一部であった可能性は残されている。なお、SX01が築造された時期の遺物は、周辺から出土しなかった。

ビットSP170(第90図) 調査区中央部の東端付近で検出した。遺構の平面形態を確定後に掘



第90図 ビットSP170実測図

第90図 ビットSP170実測図 深さで、遺構の上端ラインが明瞭であるが、東端では掘形が浅く、遺構の上端ラインが不明瞭である。特に南東隅は、削平も被っているのか、遺構掘形が認識できなかった。

S K90とその周辺では、古墳時代後期の多量の遺物が集中し、Aトレンチの出土物の大部分が出土している。遺物の内訳は、須恵器杯身・杯蓋、土師器高杯などが多いが、製塩土器や土師器の煮沸具も一定量含まれており、集落出土土器群のような組成を示している。こうした状況から、S K90の調査にあたり、堅穴式住居跡の可能性も考慮して調査したが、柱穴や炉跡等の住居に付随する遺構は確認できなかった。

ビットSP130(第87・91・92図) S K90を切りこむ平面規模が約 0.4×0.35 mの浅いビットである。埋土の上部からは、土師器甕、須恵器高杯・杯身が廃棄された状態で出土した。

ビットSP150(第87・91・92図) S K90を切りこむ平面規模が約 0.3×0.2 mの浅いビットである。器種不明の土師器片、細片化した製塩土器片が廃棄された状態で出土した。なお、SP150からは図示できる遺物は出土していない。

ビットSP160(第87・92図) S K90の北東に位置するビットで、一部が調査区外に出る。調査区内で検出された平面規模は約 0.4×0.2 mであるが、完形でも約 0.4×0.5 m程度の規模であろう。土師器甕・製塩土器・高杯、須恵器甕が廃棄された状態で出土した。

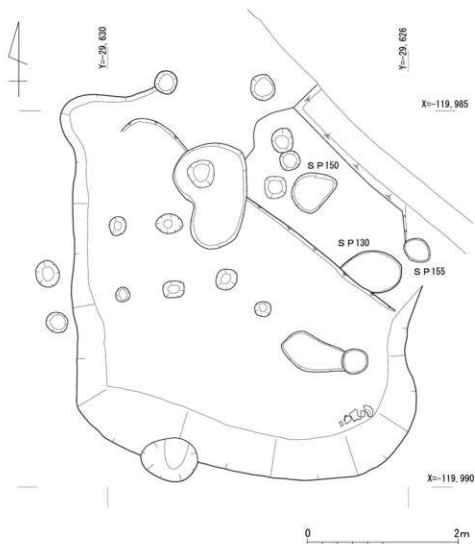
ビットSP175(第87・92図) S K90の西に位置する平面規模が約 0.35×0.35 mのビットである。深さは0.6mで、他のビットと比べると例外的に深い。遺物の出土位置は埋土の上面に限定される。土師器片が一定量出土したが、細片ばかりで接合せず、図示できる遺物はなかった。

土坑S K140(第87・92図) S X01の北側に位置する南北1.6m、東西1.2mのやや不定形な浅い土坑である。土師器高杯・甕・壺等が廃棄された状態で出土した。遺構の残存状況が悪く、土坑底のみ検出した。

土坑S K200(第87・92図) S K90から約10m北で検出した浅い土坑である。約1/2が調査区

り下げた際に、土坑中心から南よりの地点で、南西に向かってやや傾いた状態で、土馬が一点出土した。ビットの底から20cm程高い地点での出土である。ビットを掘り下げて土層を検証したが、柱抜取痕は確認されなかった。祭祀行為に伴い廃棄された遺物と考えられる。SP170周辺の第13層からは、ほぼ同時期と考えられる土馬の頭部が2点出土し、さらに、土馬の脚部と想定される土製品の破片が10数点出土している。長岡京期の遺物は、他に須恵器、土師器がごく少量出土しているが、遺構の分布状況からは、当該期の集落等が存在したとは考えがたく、祭祀空間として活用されていたと想定される。

土坑S K90(第91図) 南北約8.1m、東西約7.5mのいびつな隅丸方形を呈する土坑である。西端では約0.7mの



第91図 土坑S K 90および周辺遺構平面図

外に続くようである。調査区内で検出した規模は 0.9×0.4 mである。S K 200もS K 140と同様に、残存状況はあまり良くない。S K 200周辺では、検出面である遺物包含層、第13層から多くの遺物が出土しており、S K 200と接合する破片もある。

ビットS P 96・111(第87図) 調査区中央部のやや北寄りの地点で検出したビットである。いずれもほぼ同規模のビットで、径約0.2m、深さ約0.3mを測る。同様のビットが周辺に分布するが、S P 96・111のみ図化可能な遺物が出土した。

ビットS P 187(第87図) 径約0.3m、深さ約0.4mを測る。

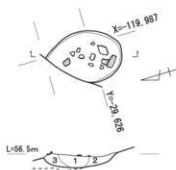
ビットS P 196(第87図) 長岡京期の土馬が出土したS P 170に切られるビットで、平面規模は約 0.6×0.35 mで、深さ約0.4mを測る。

土坑S K 142(第87図) 調査地北東部中央付近で検出した土坑である。平面規模は約 0.8×0.6 mで、深さ約0.3mを測る。

溝状遺構S D 198(第87図) 全長約1.8m、最大幅約0.15mを測る。

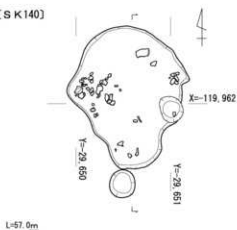
不明遺構S X 105(第87図) 南北7m以上、東西1.5m以上の規模があり、調査区外に広がる。

〔SP130〕



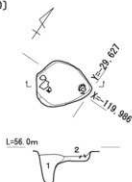
1. 褐色シルト質土 7.5YR4/6 (焼土を多量含む)
2. 黄褐色シルト質土 10YR5/6 (焼土を少量含む)
3. 褐色シルト質土 10YR4/6 (焼土を少量含む)

〔SK140〕



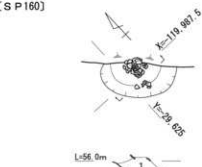
1. 黄褐色シルト質土 10YR5/6(10～15m大の礫含む)

〔SP150〕



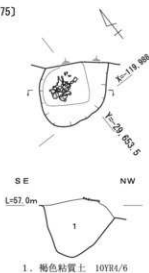
1. 暗褐色シルト質土 10YR3/4
(焼土、5～10mm大の礫を少量含む)
2. 褐色粘質土 10YR4/4(シルト質土混じり)

〔SP160〕



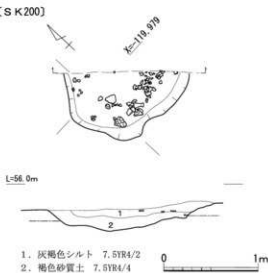
1. 褐色シルト質土 10YR4/6(粘質土混じり)

〔SP175〕



1. 褐色粘質土 10YR4/6

〔SK200〕



1. 灰褐色シルト 7.5YR4/2
2. 褐色砂質土 7.5YR4/4

第92図 ピットSP130・150・160・175、土坑SK140・200実測図

遺物包含層あるいは落ち込み状遺構の可能性がある。

ビットSP131(第87図) SK90の南約4mに位置するビットで、平面規模は約0.5×0.45m、深さ0.4mを測る。この周辺は、傾斜する地形にもかかわらず、周囲にビットが点在する。

ビットSP133(第87図) SK90の南辺を切って掘削されたビットで、平面規模は約0.75×0.5m、深さ約0.4mを測る。

土坑SK205・206(第87図) SK205は平面規模が約2.8×2.5m、深さ約0.5mの土坑で、SK206は平面規模が約2.5×2.3m、深さ約1.1mの土坑である。いずれもAトレンチの他の遺構と比較すると、大型で深い土坑である。安定した自然堆積層の上面で検出されており、これより下層には遺構が存在しない。SK205・206からは遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。また、埋土の堆積状況は均一で特徴がなく、遺構の性格も不明である。

SK205・206の上層の遺構、堆積層からは縄文時代後期の土器が出土している(第100図)。今回の第1・2次調査では、縄文時代の遺構は確認されなかったが、仮に縄文時代の遺構面が近辺に遺存していれば、SK205・206と同一の面である可能性が想定される。

上記の遺構からの出土遺物はほとんど小片である。遺構を検出した第13層にも同時期の遺物が多量に含まれているため、これらの出土遺物は、本来、第13層に伴う可能性がある。

出土遺物のうち、残存状況が良好なもの多くは不明遺構SX105とSK90の間のビット及び小土坑の集中地点から出土している。SK90の周辺からは、古墳時代後期の遺物がまとまって出土している。帰属する遺構が確定できない遺物も多く含まれているが、この一帯の遺構は、時期が近接しており、陶器編年のTK10～TK43型式期と併行する時期にはほぼ限られている。また、遺物の出土状況と遺物の組成も含めて考慮すると、SK90と周辺の一帯は、この時期に集落内の廃棄空間として機能していた可能性がある。所在は確認できていないが、調査区の隣接地点に、この時期の集落が存在したのであろう。

第1次調査では、SX01の南東約10mの地点で、家形埴輪の屋根部の破片が出土した。また、埴輪円筒部の底部破片も出土した。第2次調査でも、遺構のほとんど見られない西側斜面から埴輪片が出土している。今回の調査区では、これらの埴輪が樹立されていた古墳の所在は確認されなかったが、より標高の高い地点に、未発見の古墳が存在する可能性がある。

7. 出土遺物(第93～101図・付表2・3)

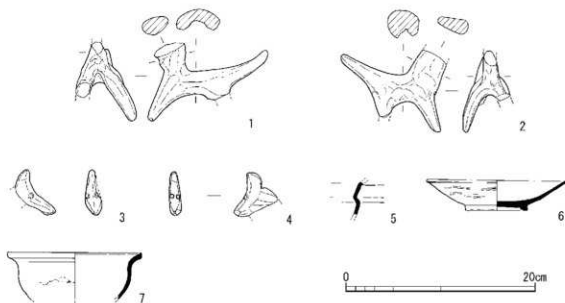
鈴谷遺跡第1・2次調査の出土遺物について記載する。大部分が高山Aトレンチ出土遺物であるが、古代の遺物には鈴谷Cトレンチ出土遺物も含まれる。

①長岡京期以降(第93図1～7)

ビットSP170 2は土馬である。頭部、左前脚、両後脚が欠損する。

包含層 1・7は鈴谷Cトレンチから出土した。1は土馬で、頭部、左前脚、両後脚が欠損する。7は土師器壺Bの破片である。墨書は確認されていない。

3～6は高山Aトレンチから出土した。3・4はSP170の周辺から出土した土馬の頭部である。



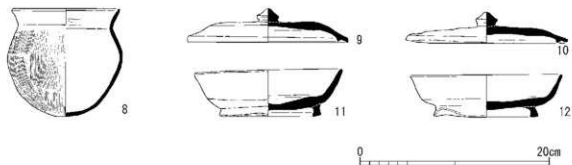
第93図 高山A・鈴谷Cトレンチ出土遺物実測図

4には粘土貼付けで手綱が表現されている。5は須恵器壺Gの肩部破片か。6は灰釉あるいは緑釉素地の椀である。第93図の遺物の時期は6のみ平安時代中頃で、他は長岡京期に帰属する。

②古墳時代

横穴式石室S X01(第94図8～12) 横穴式石室S X01の石室床面から出土した遺物である。8は奥壁右隅に正位置で据えられていた土師器甕である。薄い作りで、口縁端部が部分的に細かく欠けている。9～12は須恵器杯蓋のセットで、9と11、10と12が組み合わせられた状態で出土した。9・10は宝珠つまみの杯B蓋である。器高が低く、内面の反りは退化傾向にあり、突出が弱い。11・12は杯Bである。器形の仕上げがやや粗く、12は高台底部が歪んでいる。須恵器の年代は飛鳥Ⅲ～Ⅳ期に位置付けられる。

土坑S K90(第95図13～21) 13は口縁端部が外反する無稜高杯である。杯部底面に円形の孔があるが、接合技法を示すものだろう。14は口縁端部が内彎する高杯で、器壁が厚めである。15は土師器甕で、内外面にハケが施され、外面のハケは胴の中央部以下に集中する。16は土師器甕口縁部で、口縁端部が垂下する。17は土師器甕の口縁～胴部上半部である。18～21は須恵器である。18・19は高杯脚部で、三方に方形透孔が穿たれる。20は杯蓋、21は杯身である。TK10～



第94図 横穴式石室S X01出土遺物実測図

TK43型式期と考えられる。

土坑SK90周辺(第96図22～28) 土坑SK90周辺で出土した。帰属遺構が判然としなが、SK90に伴う可能性がある。22～25は土師器である。22はほぼ完形の高杯で、杯部が全体に内湾するが、口縁端部付近で直立気味となる。柱状部の外面には、縦方向のケズリが部分的に観察される。23は杯部で、全体的に内湾する。24・25は甕である。24は外面をタテハケ、内面をケズリ、タテハケで器面調整する。25は外面をヨコハケ、斜めハケ、内面を指オサエで器面調整する。26～28は須恵器である。26は高杯の脚部で、三方に方形透孔が穿たれるようである。27は杯身で、底部外面に破片が付着する。28は甕である。口縁部から底面までおおよそ残存する。外面に平行タタキ、カキメが施され、内面に同心円状圧痕が見られる。

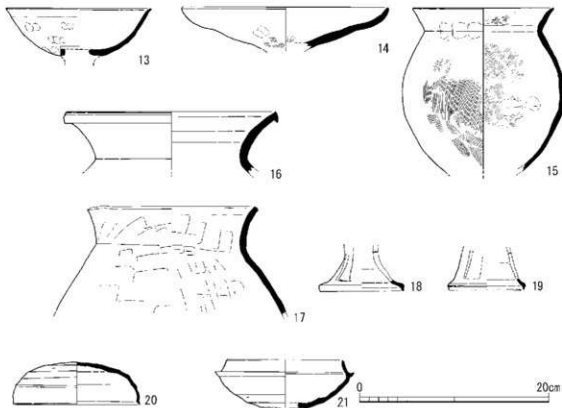
ビットSP96(第97図29) 29は土師器高杯の杯部である。

土坑SX105(第97図30～32) 30は土師器高杯の杯部である。31・32は製塩土器で、外面にタタキが施される。

ビットSP130(第97図33～36) 33の土師器小型甕は、内面にベンガラが微量に付着しており、ベンガラの貯蔵容器として用いられたようである。34は土師器の大型の甕である。35は須恵器高杯の脚部で、四方に方形透孔が穿たれる。36は須恵器杯身である。TK10型式期か。

ビットSP131(第97図37) 37は須恵器高杯脚部で、三方に方形透孔が穿たれるようである。

ビットSP133(第97図38) 38は須恵器杯蓋である。土坑SK90出土資料と接合した。遺構の重複関係からは、SK90に帰属する可能性が高い。



第95図 土坑SK90出土遺物実測図

土坑S K140(第97図40～44) 40～43は土師器高杯、44は土師器壺である。

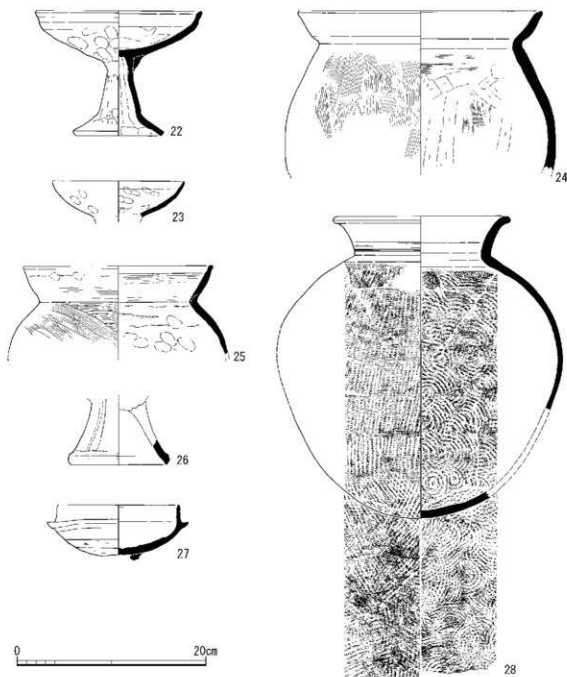
土坑S K142(第97図45・46) 45・46は土師器甕である。

土坑S K160(第97図47～52) 47・48は土師器高杯である。49・50は製塩土器で、外面にタタキが施される。51はやや長胴の土師器甕で、内面はほぼ無調整で粘土紐接合痕が観察される。52は須恵器甕または器台の口縁部で、外面の圏線の間に波状文が薄く施される。

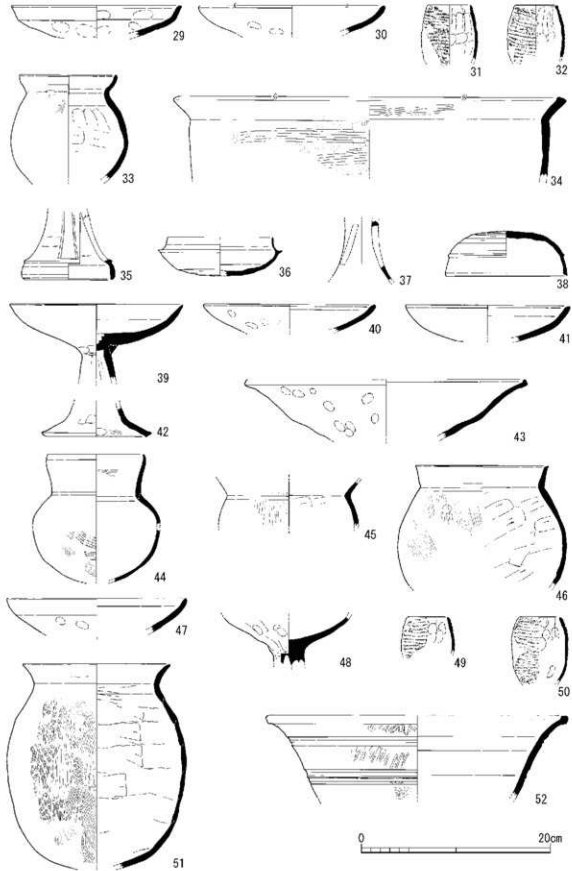
ビットSP185(第98図53) 53は須恵器杯蓋の破片である。

ビットSP187(第98図54) 54は須恵器杯蓋である。

溝状遺構SD198(第98図55) 55は土師器甕である。



第96図 土坑S K90周辺出土遺物実測図



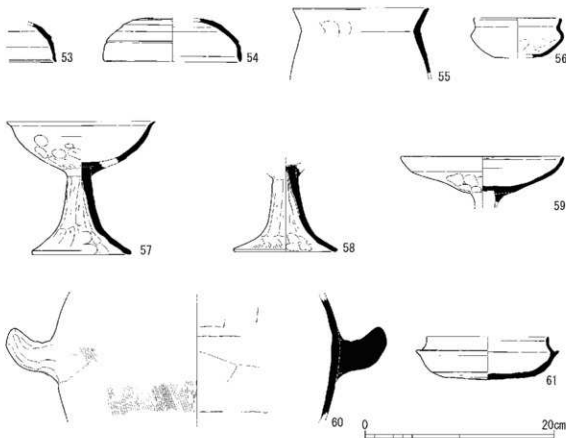
第97図 土坑SK140・160、不明遺構SX105、ビットSP96・133出土遺物実測図

土坑 S K 200(第98図56～61) 56は土師器壺である。57～59は土師器高杯である。57は杯部が全体に内湾し、端部が外反する。57・58の柱状部の外面には縦方向のケズリが観察される。59は杯部の破片で、杯部器高の比率が低く、全体的に内湾している。60は土師器鍋ないし瓶の把手の破片である。器形が丸みを帯びることから、鍋の可能性が高い。61は須恵器杯身である。

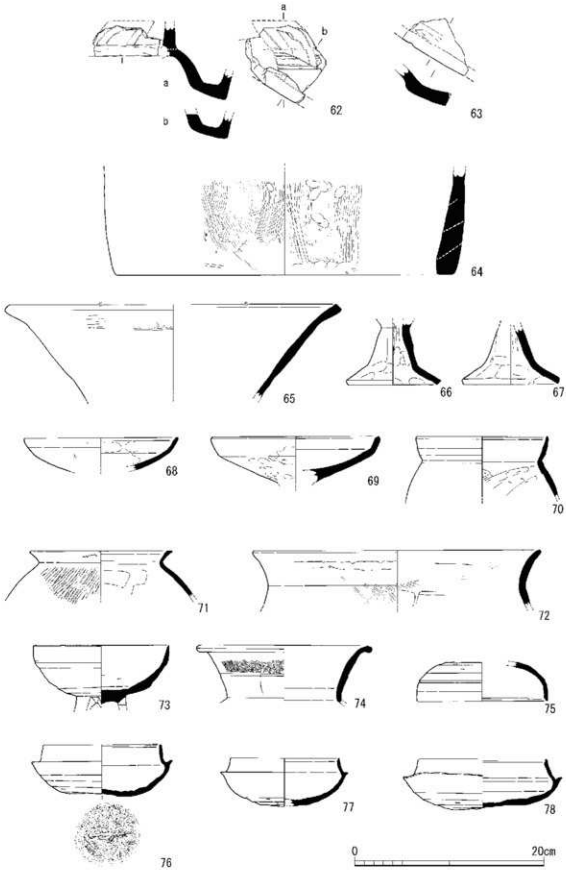
第13層(第97図39・第99図62～78) 62～78は上面が第1遺構面となる遺物包含層である第13層掘削中に出土した遺物である。

39は土師器高杯の杯部から脚部にかけての破片である。接合はしないが、S K 140出土高杯脚部(42)と同一個体である可能性が高い。

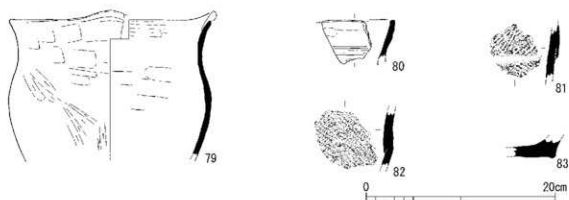
62・63は家形埴輪の破片である。62は棟覆形式の大棟部分の端部と破風板の一部である。大棟の上端には鱗状の棟飾が付けられる。破風板の上にも鱗飾が付けられている。棟飾の線刻内部には朱が残存している。古墳時代前期後葉から中期前葉に比定できる。63は破風板の破片で、62と同一個体の可能性もある。64は円筒埴輪または形象埴輪の円筒部の底部片である。内外面にタテハケが密に施される。胎土、焼成の特徴が62・63と近似し、同一古墳に伴う可能性が高い。65は器種不明の土師質土器であるが、胎土、焼成が62～64と近似し、器形から朝顔形埴輪の可能性が高い。66～69は土師器高杯である。66は脚部で、内外面は丁寧なナデが施される。67も脚部で66と同様の作りであるが、柱状部と裾部の境の屈曲が比較的曖昧である。68・69は高杯の杯部で、68は内湾度が弱い。どちらも丁寧なナデで仕上げられている。70～72は土師器甕である。



第98図 ビット S P 185・187、溝 S D 198、土坑 S K 200出土遺物実測図



第99図 第13層出土遺物実測図



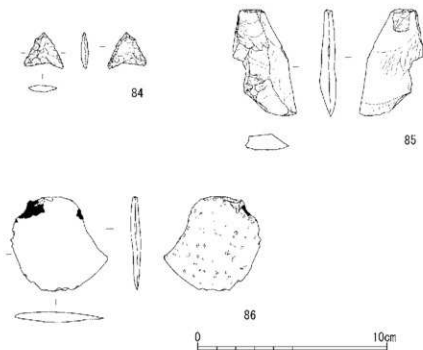
第100図 縄文土器実測図

71は外面にタタキ目が明瞭に残り、器壁が薄く、古相を呈する。73～78は須恵器である。73は高杯で、脚部には三方に方形透孔が穿たれる。74は甕口縁部である。外面の横方向凹線の上に波状文が施され、下には縦方向に工具痕が1条観察される。75～78は須恵器杯身・杯蓋で、76の杯身は底部外面に「一」字状のヘラ記号が施される。

③縄文時代

縄文土器(第100図) 79～83は、Aトレンチから出土した縄文土器である。縄文時代の遺構は検出していないが、遺構面上層の包含層や、古墳時代の遺構から出土している。79は山形口縁の深鉢である。内外面ともに丁寧にナデられているが、外面には部分的に条痕文が観察される。80は深鉢の口縁部破片か。内外面とも、横方向のナデで仕上げられるようである。81・82は深鉢の体部片である。外面に縄文が施文される。83は深鉢の底部である。

石器(第101図) 84～86はAトレンチから出土した石器である。時期は不明であるが、縄文時



第101図 石器実測図

代の可能性がある。84はサヌカイト製の打製石鏃である。表面がやや風化している。85・86はサヌカイトの剥片である。明瞭な刃部が作り出されておらず、実用品としての使用は想定しがたい。

8. まとめ

鈴谷遺跡(鈴谷窯跡)第1・2次調査では、帰属時期が明瞭に判明する遺構は古墳時代後期・終末期のものであるが、出土遺物は縄文時代、古墳時代前期～終末期、そして長岡京期といった幅広い時期のものである。

古墳時代前期後葉から中期前葉に帰属する遺物として特筆すべきは、鱗飾の施される家形埴輪片である。他に埴輪円筒片、朝顔形埴輪と考えられる破片が出土しており、これらの埴輪が樹立する古墳の発見が期待されたが、前述のとおり、今回の調査では検出されず、調査区より標高の高い地点に存在したと考えられる。近隣には周知の古墳はや古墳状の隆起地形は確認されていない。竹林造成によって破壊されたか、埋没しているようである。

遺物の出土量が最も多かったのは古墳時代後期で、特に6世紀中頃から後半頃に比定される遺物が大多数を占めた。出土遺物の組成は、集落的な様相を示すが、住居跡は今回の調査区では確認できなかった。また、遺物の多くは、遺物包含層や土坑、ピットから出土している。こうした状況から、集落の縁辺の様相であるとはいえ、例えば廃棄空間などとして、積極的に土地利用された地点と考えられる。こうした土地利用はごく短期間で終わったようで、集落の廃絶もしくは移動が想定される。

古墳時代終末期になると、土地利用は一変し、墓域として用いられるようになるが、横穴式石室S X01が1基検出されたのみであるため墓域の規模は不明である。横穴式石室S X01は、副葬される須恵器杯身・杯蓋の型式より飛鳥Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられる。乙調地域全体で見ても突出して新しい時期の古墳であり、古代寺院・鞍岡廃寺の創建と前後する可能性がある。鈴谷遺跡と鞍岡廃寺では立地がやや離れるが、横穴式石室S X01の被葬者と鞍岡廃寺の造営主体には、何らかの関連性があるのかもしれない。横穴式石室S X01の特徴として、奥壁隅に土師器の甕が副葬されることが挙げられるが、こうした習俗は渡来系氏族の墓域と考えられる群集墳でよく見られることから、渡来系氏族の葬送儀礼に関連することが近年指摘されている⁽²⁸⁾。鞍岡廃寺の創建に深く関与した田辺氏も渡来系氏族であり、横穴式石室S X01は田辺氏と関連する人物の墓であった可能性がある。しかし、近隣で群集墳の築造が確認できなかったことから、氏族の墓域と解釈するのには問題が残る。

長岡京期の遺物は、斜面地や斜面下の平坦面で土馬等がごく少量出土したにとどまった。遺構に伴うのは、S P170出土の1点のみであり、他の資料は、原位置を保っているのか斜面から転落してきたのか判然とはしない。調査地周辺が長岡京外の丘陵地として、祭祀行為の対象となっていたことを示す資料と考えられる。

(古川 匠)

- 注1 山本輝雄「走田古墳群第1次・海印寺跡第3次(7CKPME-3地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第36冊 長岡京市教育委員会) 1997
- 注2 三上貞二「奥海印寺大原古墳群調査報告書～阪急住宅経営地域内～」(『長岡京市文化財調査報告書』第1冊 長岡京市教育委員会) 1973
- 注3 大阪大学南原古墳調査団「長法寺南原古墳の研究」(『長岡京市文化財調査報告書』第30冊 長岡京市教育委員会) 1992
- 注4 高橋美久二・辻林寛宏「長岡京跡右京第70次調査」(『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 長岡京市教育委員会) 1982
- 注5 竹井治雄「長岡京跡右京第862次・下海印寺遺跡第24次・西山田遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第124冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007 などで報告されている。
- 注6 小田桐淳「谷田瓦窯群第4次・谷田遺跡第2次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成8年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1998
- 注7 木村泰彦「西代遺跡第1次調査(4LNPN1地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第55冊 長岡京市教育委員会) 2011
- 注8 深谷淳「横穴式石室の奥壁隅に土師器を据える行為」(『古代学研究』第189号) 2011

付表2 出土遺物観察表(土器)

図番号	地区	遺構・層位	器種	器形	口径 (底径)	器高	残存率	胎土	焼成	色調	備考
1	鈴谷 Ctr	土馬埴	土師器	土馬	-	8.3	-	密	良	7.5YR 6/8 橙色	
2	高山 Atr-D3	S P 170	土師器	土馬	-	8.7	-	密	良	7.5YR 7/6 橙色	
3	高山 Atr-D3	第13層	土師器	土馬	最大幅 1.7	4.75	-	密	良	7.5YR 6/6 橙色	
4	高山 Atr-D3	第13層	土師器	土馬	最大幅 4.6	4.7	-	密	良	10YR 7/6 明黄褐色	
5	高山 Atr-C 2	土器 18	須恵器	壺	-	(3.65)	1/12 以下	密	良	2.5Y7/1 灰白色	母模遺構不明
6	高山 Atr-D4	D 4 第13層	無釉陶器	皿	14.15	5.9	高台完存・口径 1/10	密	良	2.5Y7/2 灰黄色	
7	鈴谷 C tr	根張区堀灰 色砂質土	土師器	壺 B	14.1	(5.0)	1/7	密	良	10YR 7/6 明黄褐色	
8	高山 Atr-E 5	S X 01 石室内	土師器	甕	11.4 ~ 12.7c m (楕円形)	6.4	ほぼ定形	やや粗	やや良好	10YR 7/6 明黄褐色 7.5YR 6/6 橙色 (顔料)	
9	高山 Atr-E 5	S X 01 石室内	須恵器	杯 B 蓋	16.9	3.6	ほぼ定形	密	堅緻	5Y6/1 ~ 4/1 灰色	
10	高山 Atr-E 5	S X 01 石室内	須恵器	杯 B 蓋	17.1	3.4	口径部 11/12	密	堅緻	外) 5Y6/1 ~ 5/1 灰色 内) 2.5Y6/1 ~ 5/1 黄灰色	
11	高山 Atr-E 5	S X 01 石室内	須恵器	杯 B 身	15.6	5.1	完形	密	堅緻	5Y6/1 ~ 4/1 灰色	
12	高山 Atr-E 5	S X 01 石室内	須恵器	杯 B 蓋	16.0	4.6	口径部 9/12	密	硬	5Y5/1 灰色 2.5Y6/2 ~ 6/3 灰黄 ~ に ぶい黄色	
13	高山 Atr-C 2	S K 90 南 西部・南東 部	土師器	高杯	15.2	(5.0)	杯部(11/12 完形)	密	良	5YR 6/8 橙色	
14	高山 Atr-C 2	S K 90・東 断5割り	土師器	高杯	21.7	(4.4)	1/10	やや粗	良	外) 2.5YR 6/6 橙色 内・断) 7.5YR 7/4 にぶ い橙色	
15	高山 Atr-C 2	S K 90	土師器	甕	14.8	(17.3)	1/4	やや粗	やや軟	7.5YR 7/6 橙色 (外面に スス付着)	
16	高山 Atr-C 2	S K 90・S P 203	須恵器	甕	22.0	(6.6)	1/4	粗	やや不良	7.5Y7/2 灰白色	
17	高山 Atr-C 2	S K 90 南 西部②・S K 90	土師器	甕	17.3	11.2	ほぼ定形	やや粗	良好	内・外) 7.5YR 7/4 にぶ い橙色 断) 7.5 Y R 1.7/1 黒色	
18	高山 Atr-C 2	S K 90	須恵器	高杯	9.0	(4.4)	1/3	精良	硬	7.5YR 5/1 褐灰色	
19	高山 Atr-C 2	S K 90	須恵器	高杯	8.0	(4.0)	1/6	精良	硬	外) N 3/ 暗灰色 内) 7.5YR 5/1 褐色	
20	高山 Atr-C 2	S K 90	須恵器	杯蓋	-	4.5	4/5	粗	良好	内・外) 10B G 4/ 暗青灰 色 断) 7.5YR 4/6 褐色	
21	高山 Atr-C 2	S K 90	須恵器	杯身	12.2	5.1	1/6	精良	硬	外) 7.5Y7/1 灰白色 内) N 6/ 灰色	

図番号	地区	遺構・層位	器種	器形	口径 (底径)	器高	残存率	胎土	焼成	色調	備考
22	高山 Atr C 2	SK90 周辺	土師器	高杯	17.2 (90)	133	3/5	やや粗	良好	5YR 7/6橙色	
23	高山 Atr C 2	SK90 周辺	土師器	高杯	14.0	(395)	1/6	密	良	5YR 5/8明赤褐色	
24	高山 Atr C 2	SK90 周辺	土師器	甕	25.6	(170)	1/3	やや粗	良好	外・断) 7.5YR 8/6黄褐色 内) N 3 暗灰色	
25	高山 Atr C 2	SK90 周辺	土師器	甕	(20.0)	(91)	1/4	やや粗	良好	外) 10YR 6/4にふい黄褐色 内) 2.5Y6/4にふい黄色	
26	高山 Atr C 2	SK90 周辺	須恵器	脚部	(10.0)	(68)	-	やや粗	不良	2.5YR 7/6明黄褐色	
27	高山 Atr C 2	SK90 周辺	須恵器	杯身	10.8 ~ 12.6	5.35	14(2定形)	密	良	5Y7/1灰白色	
28	高山 Atr C 2	SK90 周辺	須恵器	甕	17.8	31.9	7/10	やや粗	良好	5B 6/1青灰色	
29	高山 Atr C 3	S P96	土師器	高杯	-	(335)	1/6	やや粗	やや軟	5YR 6/6橙色	
30	高山 Atr C 2	S X 105	土師器	高杯	19.4	(30)	1/12	密	良	7.5YR 7/6橙色	
31	高山 Atr C 2	S X 105	土師器	製塩土器	4.4	(58)	-	密	良	2.5Y5/2暗灰黄色	
32	高山 Atr C 2	S X 105	土師器	製塩土器	4.4	(56)	-	密	良	外) 10YR 6/6明黄褐色 内) 2.5Y5/3黄褐色	
33	高山 Atr C 2	S P 130	土師器	甕	10.2	(113)	2/5	粗	やや軟	7.5YR 7/4にふい橙褐色	
34	高山 Atr C 2	S P 130	土師器	甕	(40)	(84)	1/5	やや粗	良好	内・外) 5YR 6/6橙褐色 断) 10YR 7/4にふい黄褐色	
35	高山 Atr C 2	S P 130	須恵器	高杯	(9.2)	(695)	1/2	精良	硬	2.5G 5/1 オリーブ灰色	
36	高山 Atr C 2	S P 130	須恵器	杯身	11.5	(41)	1/3強	精良	堅緻	10B G 6/青灰色	S K 90 と混合
37	高山 Atr B 2	S P 131	須恵器	高杯	-	(62)	1/12 以下	精良	硬	外) 5Y4/2 灰オリーブ色 内) 5Y3/1 オリーブ黒色	
38	高山 Atr C 2	S P 133・S K 90	須恵器	蓋	12.85	3.8	1/8	密	良	内) N3/ 暗灰色 外) N6/ 灰色	
39	高山 Atr D3	第13層	土師器	高杯	18.2	(80)	2/5	密	良好	2.5YR 6/8橙褐色	
40	高山 Atr E 5	S K 140	土師器	?	17.6	(29)	1/12	密	良	5YR 5/6明赤褐色	
41	高山 Atr E 5	S K 140	土師器	高杯	(17.4)	(38)	1/4	やや粗	良好	外) 7.5YR 7/8黄褐色 内) 7.5YR 6/4にふい黄褐色	
42	高山 Atr E 5	S K 140	土師器	高杯	(10.2)	(33)	1/4	密	良好	2.5YR 6/8橙褐色	
43	高山 Atr E 5	S K 140	土師器	高杯	29.2	(62)	1/8	密	良	5YR 5/6明赤褐色	

図番号	地区	遺構・層位	器種	器形	口径 (底径)	器高	残存率	胎土	焼成	色調	備考
44	高山 Atr・E 5	S K 140	土師器	壺	10.0	(17.5)	2/5	やや粗	やや軟	5YR 6/6褐色 (部分的に 5YR 4/1)	
45	高山 Atr・C 3	S K 142	土師器	甕	130 (頸部)	(4.7)	1/7	やや粗	良	外) 5YR 6/6褐色 内・断) 10YR 7/4にふい 黄褐色	
46	高山 Atr・C 3	S K 142	土師器	甕	139	12.8	1/5弱	密	良	10YR 7/6明黄褐色	S K 201、D3 第13層、E 4第 13層と接合
47	高山 Atr・C 2	S K 160	土師器	高杯	18.7	(3.7)	1/8	密	良	7.5YR 6/6褐色	
48	高山 Atr・C 2	S K 160	土師器	高杯	3.2	(5.0)	-	密	良	7.5YR 6/6褐色	
49	高山 Atr・C 2	S K 160	土師器	製塩 土器	4.0	(3.8)	1/4	密	良	10YR 5/4にふい黄褐色	
50	高山 Atr・C 2	S K 160	土師器	製塩 土器	4.05	(6.95)	-	密	良	7.5YR 8/8黄褐色	
51	高山 Atr・C 2	S K 160	土師器	甕	15.6	(21.6)	1/3	やや粗	良	外・断) 7.5YR 7/4にふ い褐色 内) 5YR 6/6褐色	
52	高山 Atr・C 2・E 第13層	S K 160・ 第13層	須恵器	甕	31.3	(8.8)	1/10	密	良	内) 10Y5/1灰色 外) N5/灰色	
53	高山 Atr・D3	S P 185	須恵器	蓋	-	(4.2)	1/12	密	良	N6/灰色	
54	高山 Atr・E 4	S P 187	須恵器	杯蓋	14.3	4.55	1/5	密	良好	5B 5/1青灰色	
55	高山 Atr・E 4	S D 198	土師器	甕	14.2	(7.0)	1/4	やや粗	良	10YR 7/4にふい黄褐色	
56	高山 Atr・D3	S K 200	土師器	甕	9.0	(4.2)	1/12	やや粗	良	外) 5YR 6/8褐色 内) 5YR 6/8明赤褐色	
57	高山 Atr・D3	S K 200	土師器	高杯	15.7 (10.4)	(14.0)	杯部2/5 脚部3/5	密	良	内・外) 2.5YR 6/8褐色 断) 5YR 7/6褐色	
58	高山 Atr・D3	S K 200	土師器	高杯	(10.6)	(9.2)	1/5	密	良好	内・外) 2.5YR 6/8褐色 断) 2.5YR 4/3にふい赤 褐色	
59	高山 Atr・D3	S K 200	土師器	高杯	17.1	(5.0)	1/5	やや密	やや軟	内・外) 2.5YR 6/8褐色 断) 2.5YR 4/2灰赤色	
60	高山 Atr・D3	S K 200	土師器	罎	-	(13.8)	不明	密	良	10YR 7/6明黄褐色	
61	高山 Atr・D3	S K 200・ 第13層	須恵器	杯身	12.8	4.6	1/12	密	良	7.5Y7/1 灰白色	
62	高山 Atr・E 4	断ち割り北 西	埴輪	家形 埴輪	-	(8.2)	-	粗	良好		
63	高山 Atr・E 4	断ち割り北 西	埴輪	家形 埴輪	-	(6.0)	-	粗	良好		
64	高山 Atr・E 4	断ち割り北 西	埴輪	円筒 部	-	(10.7)	1/16	密	良	外) 7.5YR 7/8黄褐色 内) 5YR 7/6褐色	
65	高山 Atr・D3	第13層	埴輪 /土師 器	胡瓶 形埴 輪小	34.4	(9.9)	1/12	やや粗	良	外) 2.5YR 7/6褐色 内) 7.5YR 7/6褐色	
66	高山 Atr・E 5	第13層	土師器	高杯	(9.2)	(6.6)	2/3	密	良	5YR 6/6褐色	

図番号	地区	遺構・層位	器種	器形	口径 (底径)	器高	残存率	胎土	焼成	色調	備考
67	高山 Atr・D3	第13層	土師器	高杯	(100)	(5.8)	1/4	やや粗	良	外) 5YR 7/6橙色	
68	高山 Atr・C2	東断ち割り	土師器	高杯	-	(3.5)	1.8	やや粗	やや良	5YR 7/6橙色	
69	高山 Atr・D5	第13層	土師器	高杯	17.4	(4.8)	1/4弱	密	良	5YR 6/8橙色	
70	高山 Atr・D3	第13層	土師器	甕	13.7	(6.3)	1/4	やや粗	やや軟	外) 10YR 4/6赤～ 25YR 4/6赤褐色 内) 25YR 3/3暗赤褐～ 7.5YR 2/1黒褐色	
71	高山 Atr・D3	第13層	土師器	甕	14.7	(5.0)	1.7	密	良	内) 10YR 8/4黄褐色 外) 10YR 7/4にぶい黄褐色	
72	高山 Atr・D3	第13層	土師器	甕	30.1	(5.8)	1.7	密	良	外) 5YR 6/8橙色 内) 10YR 7/8黄褐色	
73	高山 Atr・D3	D3第13層	須恵器	高杯	14.3	(6.5)	1/4	粗	軟	外) N3暗灰色 内・断) 5Y6/1灰色	
74	高山 Atr・D3	D3第13層	須恵器	甕	17.5	(6.1)	1/5	やや粗	良好	内・外) N3暗灰色 断) N6褐灰色	
75	高山 Atr・E5	石室西田表土・第13層	須恵器	蓋	13.6	(4.15)	1/4強	密	良	内) 7.5Y7/1灰白色 外) 7.5Y4/1灰色	
76	高山 Atr・E5	石室南東田表土・第13層	須恵器	杯身	12.3	5.5	ほぼ定形	密	良	内) 5B4/1暗青灰色 外) 5PB4/1暗青灰色	
77	高山 Atr・E5	石室西田表土・第13層	須恵器	杯身	11.2	5.1	1/12以下	精良	硬	外) 7.5Y6/2灰オリーブ色 内) 5B3/1暗青灰色	
78	高山 Atr・E5	石室北西隣接部 第13層	須恵器	杯身	13.4	5.4	4/5	やや粗	良好	5B5/1青灰色	
79	高山 Atr・D4	S P 111・196	縄文	深鉢	20.9	(14.4)	1/4	粗	良好	外) 2.5YR 3/6暗赤褐色 内) 10YR 2/1 赤黒色	
80	高山 Atr・A2	第13層直上	縄文	深鉢	-	-	-	やや粗	良好	10YR 3/1黒褐色	
81	高山 Atr・D5	北東壁第5層	縄文	-	-	-	-	粗	良好	外) 10YR 7/4にぶい黄褐色 内・断) 10YR 6/1褐灰	
82	高山 Atr・D5	北東壁第5層	縄文	-	-	-	-	粗	良好	10YR 7/4にぶい黄褐色	
83	高山 Atr・D5	北東壁第5層	縄文	深鉢底部	-	-	-	粗	良好	外) 10YR 7/4にぶい黄褐色 内・断) 10YR 5/1褐灰	

付表3 出土遺物観察表(石器)

図番号	地区	遺構・層位	器種	全長 (cm)	幅 (cm)	器厚 (cm)	石材	
84	高山 Atr・B2	遺構面精査	打製石器	石鏃	1.95	2.05	0.4	サヌカイト
85	高山 Atr・D5	第1層	打製石器	刮片	6.6	2.8	0.85	サヌカイト
86	高山 Atr・C2	東断割	打製石器	刮片	4.9	5.1	0.5	サヌカイト

2.長岡京跡右京第1031次(7ANKSM-17地区)

・開田遺跡・開田古墳群発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、京都府建設交通部が実施する平成23年度都市計画道路御陵山崎線地方道路交付金(街路)事業に先立ち、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。調査地は長岡京市開田地区に所在し、長岡京跡右京六条一坊十六町(新条坊)に相当する。また、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、平安時代から近世にわたる集落遺跡である開田遺跡及び古墳時代中期から後期の古墳が展開する開田古墳群の範囲内にも含まれている。

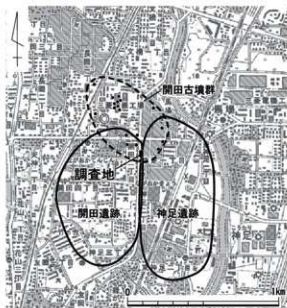
当調査研究センターでは、同事業に関連して右京第750次^(R1)・第781次^(R2)・第863次^(R3)・第995次調査^(R4)を実施している。これまでに、弥生時代の成果として中期の方形周溝墓を検出し、神足遺跡の墓域の広がりを考察する資料を得ている。長岡京跡に伴う成果としては条坊側溝を検出しており、その他に、南北総延長130mに及ぶ中世の堀跡等も検出している。今回の調査地点の南側隣接地で実施した第995次調査では、一辺約12mを測る方墳を1基検出しており、墳丘及び埋葬施設はすでに削平されて残存していなかったが、周溝内から古墳時代中期の遺物が出土している。検出地点は開田古墳群の範囲に含まれており、南側に散在する一群は東羅支群と捉えられている。国土座標は、既往の調査成果との整合性を図るため日本測地系(第Ⅶ座標系)を使用している。土層の注記には『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を用いた。

現地調査に当たっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会並びに財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの御指導・御助言をいただいた。

また、地元開田地区に御高配を賜った。記して感謝します。なお、調査に係る経費は、京都府乙調土木事務所が全額負担した。

【調査体制等】

現地調査責任者	調査第2課長 水谷壽克
調査担当者	調査第2課調査第2係長 岩松 保 同 調査員 奈良康正
調査場所	長岡京市開田2丁目
現地調査期間	平成23年10月24日 ～11月25日
調査面積	120㎡



第1図 調査地周辺主要遺跡配置図
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

2. 調査成果

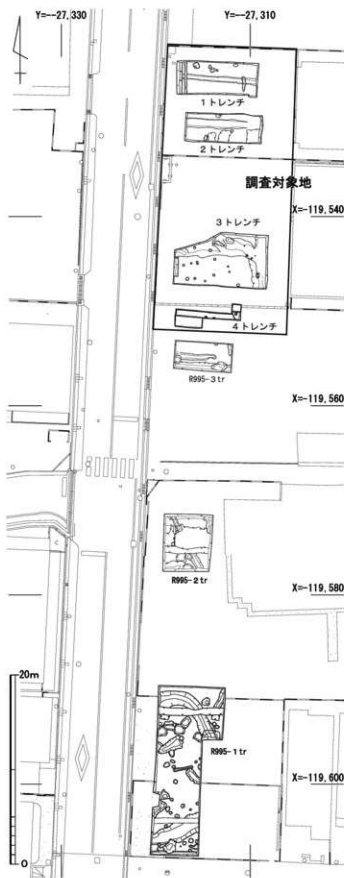
今回の調査は、府道拡幅工事に先立って実施することとなったが、調査対象地内には上下水道、ガス管等が埋設されていることから、調査区を分割して設定することとなった。

調査区は北から1～4トレンチとした(第2図)。現標高は19.5～20mを測り、北から南へと緩やかに下がる傾斜となっている。

(1) 1トレンチ(第3・4図)

調査対象地の北端に設定した。調査面積は31㎡である。過去に行われた宅地造成の際になされたと考えられる攪乱と既存施設の撤去工事による攪乱が激しく、第1～4層までがそれらに伴う埋土である。その下層で確認した第5層の灰黄褐色砂質土は、今回の調査対象地全体で確認でき、近世以降の遺物を僅かに含んでいた。この下層が地山面となり、遺構はこの面で検出した。調査は重機により第5層までを除去した後、人力により遺構精査を行い、その検出に努めた。

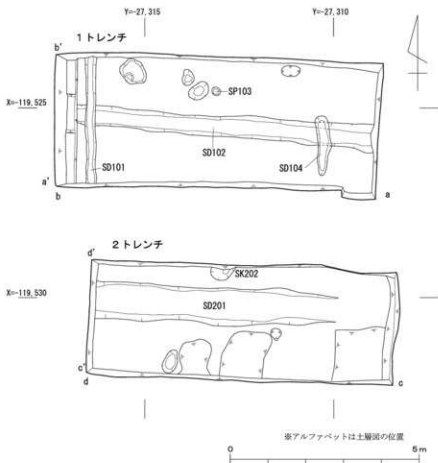
溝SD101 調査区の西端で検出した南北方向の溝である。ほぼ正方位を向く。検出面での溝幅は0.4m、残存深は0.07～0.09m、検出範囲での残存長は3.3mを測る。調査区東端付近に同一方向の溝状遺構の残欠(SD104)があり、互いの心々間はおよそ6.1mを測る。SD102埋没後に掘削されている。遺構埋土は直上に堆積する第5層の灰黄褐色砂質土



第2図 トレンチ配置図

であり、遺物は出土していない。

溝SD102 調査区の中央を東西に横断する溝である。検出面での溝幅は0.5～0.7m、残存深は0.3～0.5m、検出範囲での残存長は8.1mを測る。断面は逆台形を呈し、一様ではないが西側が東側に比して溝底の標高が低くなっている。主軸は西でやや北に振れている。溝底に暗オリブ褐色砂質土(第4図第6層)が厚く堆積していたが、明黄褐色砂質土が混入する暗灰黄色砂質土で短期間に埋没したようである。近世以降の陶磁器類が出土している。



第3図 1・2トレンチ遺構配置図

色砂質土が混入する暗灰黄色砂質土で短期間に埋没したようである。近世以降の陶磁器類が出土している。

柱穴SP103 調査区中央の北よりの地点で検出した。直径0.2m前後を測り、深さは0.1mほどを残す。摩滅の著しい土師器の細片が出土しているが、器種、時期等は不明である。

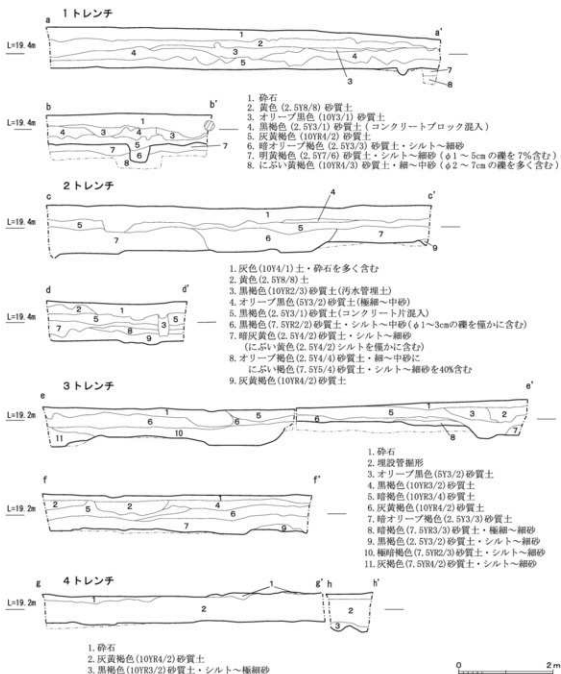
(2) 2トレンチ(第3・4図) 1トレンチの南側に隣接して設定した。本来ならば1トレンチと一体で調査することが望ましい地点であったが、個人住宅居住者の往來を確保するためと、中央に上下水道が東西方向に埋設されていること等から、分割して行わざるを得なかった。調査面積は26㎡である。当地点も1トレンチと同様の層序となっていた。第7層までが既存施設の撤去工事等に伴う堆積であり、遺構検出は地山面で行った。調査区南半は大きく攪乱を受けており、検出できた遺構も僅かに溝1条と土坑2基であった。

溝SD201 調査区の中央を東西に横断する溝である。検出面での溝幅は0.6～1.0m、残存深は0.1m前後、検出範囲での残存長は6.4mをそれぞれ測る。大きく削平を受けており、東端では徐々に浅くなり消滅している。埋土は灰黄褐色砂質土の単純一層である。近世以降の遺物が僅かに出土している。

土坑SK202 調査区北端の中央付近で検出した。北半は調査区外へと広がるため、全容は不明である。東西0.65m、南北0.4m以上、深さ0.45mをそれぞれ測る。遺物は出土せず、遺構の時期・

性格等は不明である。

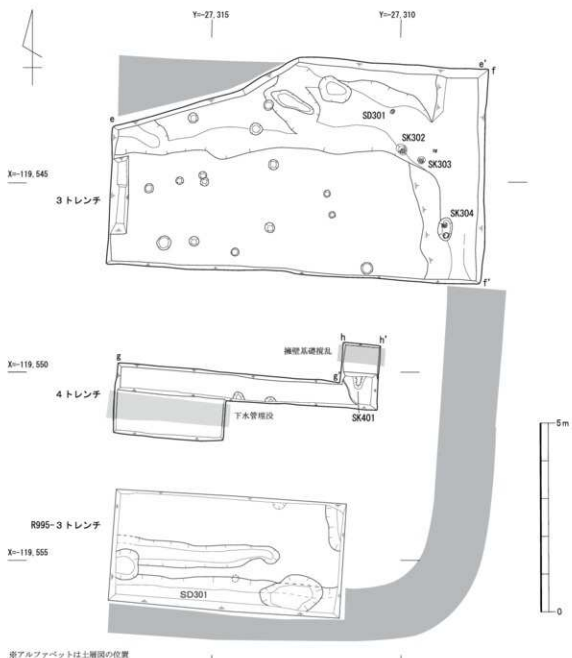
(3) 3トレンチ(第4～6図) 集合住宅居住者の通路を確保するため、2トレンチの南側におよそ10mの余地を残して設定した。当地区は直近まで駐車場として利用されており、深く基礎工事を要する構築物は造られていなかったことから、遺構の検出が期待された。ガス管の埋設地点を避けたため、北西隅部を欠いた変則的な五角形となった。調査面積は53㎡である。第7層までは現代の掘削であり、第8層が1・2トレンチでも確認した近世以降の遺物包含層である。調査はこの第8層まで重機により除去し、その後、人力による遺構精査を行った。遺構検出面は地山面である。遺構精査の結果、溝1条と柱穴15基を検出した。また、溝底からは土坑4基を検出し



第4図 各トレンチ土層断面図

た。柱穴は直径0.2m～0.4mを測る。埋土はいずれも暗褐色砂質土の単純一層で、遺物は出土しておらず、時期等は不明である。ただし、溝の上面でもこれらの柱穴は検出されており、相対的な前後関係は捉えることができる。

溝SD301 調査区北端で検出した東西方向の溝である。軸線は東で南へ振れており、東端が僅かに南へと屈曲していく傾向が見て取れ、幅2.2m、残存長は8.5mを測る。東端で南へと屈曲した先は、後世に大きく削平を受けていたが、底付近は僅かに削平を免れており、調査区の南端まで延びていくことが確認できた。平成22年度に実施した右京第995次調査の3トレンチで検出



第5図 3・4トレンチ遺構配置図

された S D301と一体の遺構となる可能性が高いと判断され、この成果に基づく、溝の心々間でおよそ14mを測る方墳に復元することができる。また、北辺のほぼ中央にあたる部分が、東西3.0m、南北1.5m以上の範囲で周辺よりも0.2～0.3m程度であるが一段浅く掘り残されており、この部分が通路として機能していた可能性が考えられる。

土坑 S K302

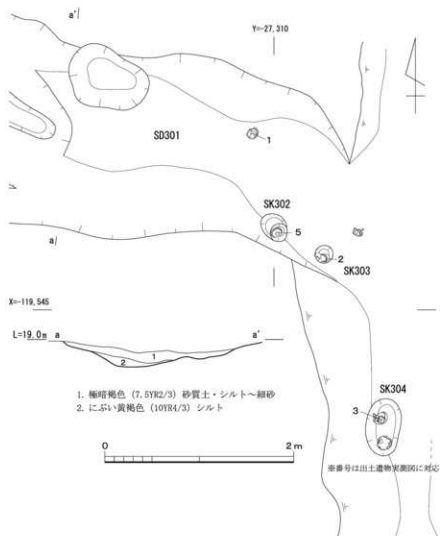
S D301東端が南へ屈曲した地点

で、溝の埋土を掘削した後に検出した小型の土坑である。主軸が北で西へ振れる楕円形を呈し、長軸0.35m、短軸0.25m、深さ0.15mをそれぞれ測る。南西部を直径0.2mの柱穴状に深さ0.1m程度二段掘りにしており、その部分に甕がほぼ正位で据えられていた(第6図)。

土坑 S K303 S K302の南東で検出した。直径0.2mを測り、深さ0.1m程を残す。内部には、隙間なく土師器の小型鉢が正位で据えられていた(第6図)。

土坑 S K304 調査区南東隅付近で検出した。長軸0.6m、短軸0.4mを測る楕円形を呈し、深さ約0.1mを残す。この地点は大きく攪乱を受けていたが、S K304を検出した深さまではその掘削が及んでいなかった。削平を免れた土坑内からは、土器2個体が出土している(第6図)。そのうち一つは壺の下半と考えられるが、図示することはできなかった。

(4) 4 トレンチ(第4・5図) 3 トレンチで方墳を確認したことから、埋葬施設の検出を目的に設定した。3 トレンチとの間隙には、排水管が埋設されており、その南にはかつて敷地境界の擁壁が巡っていた。調査着手に先立つ擁壁基礎の撤去工事に立会い、それが遺構面よりも深く掘削されていることを確認していたので、その部分を避け、南側に設定することとした。掘削は人



第6図 溝 S D301遺物出土状況図・土層断面図

力により行ったが、南側に新たに排水管の埋設を確認し、その部分の掘削は中止した。調査面積は10㎡である。1～3トレンチでも確認した灰黄褐色砂質土が地山面直上まで堆積していた。遺構精査を行った結果、柱穴2基と土坑1基を検出した。しかし、方墳の埋葬施設と考えられる遺構は調査範囲内では検出することができず、すでに削平を受けたものと考えられる。

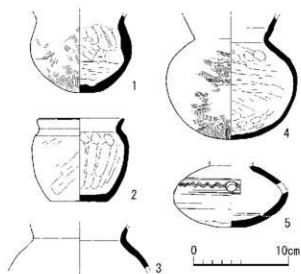
土坑SK401 調査区の東端で検出した。東西0.8m以上、南北0.7m以上、深さ0.1～0.2mをそれぞれ測るが、遺構の大半が調査区外へと広がっているため、全容は不明である。埋土は黒褐色砂質土の単統一層で、内部には掘り残した高まりが存在する。瓦器碗の細片が出土している。

3. 出土遺物(第7図)

今回の調査で出土した遺物は、遺物コンテナにして2箱分である。1はSD301を掘削中に出土した土師器の小型丸底甕である。口縁部を欠損し、体部は1/2が残るのみである。体部最大径は10.7cm、残存器高は8.3cmを測る。外面はハケ調整の後、粗いナデで調整されている。成形は粗雑で器壁の厚みも一定せず、内面には粗くナデ調整の痕跡が残る。2はSK303から出土した土師器の小型鉢である。口縁部は一部を残してほとんどが欠損するが、体部は完存していた。口径は8.8cm、器高は8.9cmをそれぞれ測り、平底を呈する。口頸部はヨコナデ、体部外面はケズリの後、ナデ調整しており、体部内面は丁寧にナデ調整されている。3はSK304から出土した土師器の壺である。口縁端部を欠損し、体部はおよそ1/2が残存する。体部最大径はほぼ中位にあり、13.9cmを測る。体部外面はハケ、内面はケズリによる調整である。4はSD301を掘削中に出土した土師器の壺である。頸部から肩部にかけての一部が残存するのみである。摩擦により調整等は不明である。5はSK302から出土した須恵器の甕である。口頸部を欠損しているが、体部は完存する。算盤玉形を呈し、残存器高は6.1cm、体部最大径は12.0cmを測る。肩部に2条の沈線を施し、その間に波状文を施文する。

4. まとめ

今回の調査は、府道の拡幅工事に先立ち4地点において実施した。1・2トレンチでは、後世の攪乱や削平を受けたことにより、地山面上で近世以降の溝を検出するに止まった。3トレンチにおいても同様に大きく削平を受けていたものの、調査区の北端において東西方向の溝1条を検出した。この溝SD301は東端で南へと屈曲して延びていくため、右京第995次調査の3トレンチで検出された溝SD301と一体の遺構になるものと判断した。その結果、一辺およそ14



第7図 出土遺物実測図

mに復元可能な方墳を新たに1基検出することとなった。しかし、墳丘に関しては、すでに削平を受けたためか、検出することはできなかった。4トレンチは、3トレンチで検出した方墳の埋葬施設の確認を目的に調査区を設定したが、中世の土坑を1基と柱穴2基を検出したのみで、墳丘と同様に埋葬施設についても検出することはできず、すでに消滅したものと判断される。また、今回の調査対象地は、長岡京右京六条一坊十六町に該当し、近接して実施された右京第863次調査では、六条条間小路の南北両側溝を検出するなど成果が得られているが、今回はいずれの調査区においても当該期の遺構を検出することはできなかった。現代までの土地利用の間に削平を受け、消滅したと考えられる。

今回の調査で検出した方墳は、開田古墳群東羅支群に属すると考えられる。当支群では、付表に示したとおりこれまで11基が確認されており、それに新たな1基を追加する成果を得た。開田古墳群の基数は調査成果の蓄積により増加しており、その分布域も拡大傾向にある。開田古墳群の内容を整理する必要性は高まっており、複数支群の設定が適当とする見解も示されている。

(奈良康正)

- 注1 藤井 整「9、長岡京跡右京第750次(7ANMHK-6地区)・神足遺跡発掘調査概要」(「京都府遺跡調査報告概報」第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注2 松井忠春・高野陽子「3、長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足遺跡発掘調査概要」(「京都府遺跡調査報告概報」第112冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004
- 注3 戸原和人「6、長岡京跡右京第863次(7ANKSM-15地区)・開田遺跡・神足遺跡発掘調査概要」(「京都府遺跡調査報告概報」第119冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006
- 注4 村田和弘「3、長岡京跡右京第995次(7ANKSM-16地区)・開田遺跡・開田古墳群発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第142冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
- 注5 中島皆夫「右京第600次(7ANKYD-2地区)調査概報」(「長岡京市埋蔵文化財センター年報」平成10年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 2000

付表 開田古墳群東羅支群一覧

長岡京跡調査次数等	所在地	時代	備考	
R 66	六条一坊九町	神足1丁目	古墳後期	一辺16mの方墳・周溝幅1.5～2.0m・須恵器
*	*	*	古墳後期	一辺11mの方墳・周溝幅1.0～2.0m
R 301	五条二坊三町	開田2丁目	古墳後期	径10.5mの円墳・周溝幅0.9～1.6m
R 398	六条一坊十六町	*	古墳中期	一辺10.5m以上の方墳・周溝幅0.9～1.6m
*	*	*	不明	規模不明・方墳・周溝幅1.0m・須恵器
R 490	五条一坊十一・十四町	馬場1丁目	古墳後期	径13mの円墳、または一辺12mの方墳・須恵器・埴輪
R 496	五条一坊十三町	開田1丁目	古墳後期	一辺6m以上の方墳・周溝幅1.8m・埴輪
R 554	五条二坊四町	開田1丁目	不明	規模不明・円墳・周溝幅0.5～0.8m
R 618	五条一坊十二町	馬場1丁目	不明	規模不明・埴輪
R 669	六条一坊九町	一里塚2丁目	古墳後期	規模不明・方墳・周溝幅3.0m・埴輪・古墳群内に土蔵墓あり
R 995	六条一坊十五町	開田2丁目	古墳中期	一辺12mの方墳・須恵器

※「長岡京市遺跡地図(第5版)」(平成18年2月)遺跡地名表を一部改定・追加

3.長岡京跡右京第1027次(7ANSMD-10地区)

・松田遺跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、西日本高速道路株式会社関西支社京都工事事務所の依頼を受けて、京都縦貫自動車道整備事業に伴い実施した。

調査対象地は、乙訓郡大山崎町字円明寺小字松田地内にあり、大山崎中学校グラウンドの西側に位置している。この地点は長岡京条坊復原図によれば、旧条坊では右京九条二坊十四町にあたるが、新条坊では長岡京城外となる。また、京都府・大山崎町遺跡地図によれば、縄文時代から中世にかけての遺跡である松田遺跡の南西部にあたる(第1図)。

今回の調査対象地周辺では数多くの調査が行われている(第2図)。大山崎中学校が京都縦貫自動車道建設に伴い、東側に移転することになり、平成20年度に大山崎町教育委員会により新校舎建設予定地の発掘調査が実施された(長岡京跡右京第933次調査)。この調査で縄文時代から弥生時代の流路跡、土坑、古墳時代から飛鳥時代の竪穴式住居跡10棟、掘立柱建物跡4棟、流路、溝、土坑、中世から近世の溝、掘立柱建物跡3棟などが検出されている^(註1)。

平成22年度に京都縦貫自動車道整備事業に伴い右京第997次調査が行われ、中世の掘立柱建物跡4棟、井戸2基、柵列、溝などが検出されている^(註2)。また、右京第997次調査地の東側で、主要地方道大山崎大枝線新設改良工事に伴い右京第1008次調査が行われ、中世の柱穴、井戸、溝、古墳時代後期の竪穴式住居跡1棟が検出されている。

平成21年度には大山崎中学校の南側で長岡京跡右京第971・974次調査が行われ、古墳時代中期・後期の竪穴式住居跡3棟、土坑2基が検出されている。

今回の調査対象地は、右京第997次調査地に接した南部および南東部分である。本報告で使用した国土座標は、日本測地系(第Ⅵ座標系)である。土層の色調は農林水産技術会議監修の『新版標準土色帖』を使用した。

現地調査および整理作業にあたっては、多くの方々の参加を得た。また、京都府教育委員会、大山崎町教育委員会、京都府乙訓土木事務所等の関係機関、大山崎中学校、地元自治会、近隣住民の皆様をはじめ多くの方々にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝します。なお、調査に係る経費は、全額西日本高速道路株式会社関西支社京都工事事務所が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克
調査担当者 調査第2課調査第2係長 岩松 保
同 調査第3係調査員 石尾政信
調査場所 乙訓郡大山崎町字円明寺小字松田

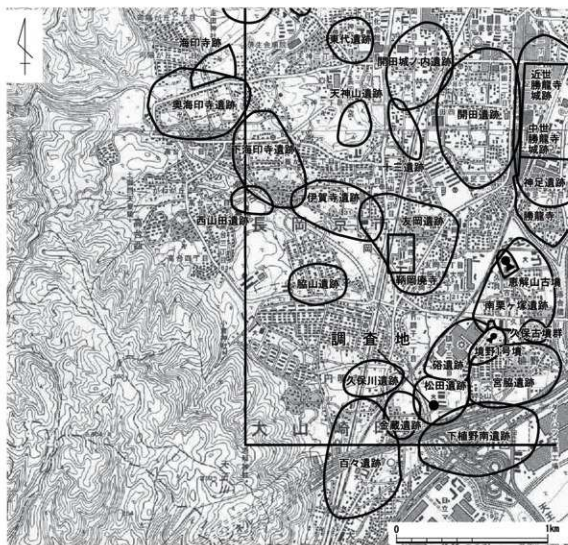
現地調査期間 平成23年8月1日～10月6日

調査面積 350(上場：600)㎡

2. 位置と環境

大山崎町は、京都盆地の南西部に位置し、大阪府に接する。丹波地域から流れる桂川と琵琶湖からの宇治川と京都府南部から北流する木津川の三川が大山崎町の南側で合流し、淀川となって大阪湾へと注ぐ。大山崎町の西側には、京都盆地の西側を囲む山地の南西部にあたる西山山地が迫る。山地の裾部には丘陵と段丘が分布し、その東側には桂川とその支流である小泉川によって形成された沖積地が広がる。松田遺跡は小泉川下流にあたり、その沖積地の中にわずかに広がる微高地上に立地する。

調査地周辺の遺跡を概観すると、小泉川中流の左岸に旧石器の遺物散布地として知られる下海印寺遺跡では、古墳時代の竪穴式住居跡、平安時代の掘立柱建物跡、中世の城館跡などが検出されている。下海印寺遺跡に接して縄文時代中期から晩期の多量の土器や石囲い炉をもつ住居跡、

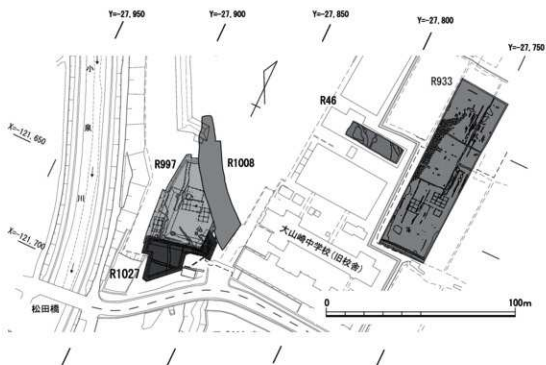


第1図 調査地及び周辺遺跡位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

火葬骨が埋納された土坑などが検出され注目を集めた伊賀寺遺跡がある。伊賀寺遺跡では弥生時代後期の竪穴式住居跡、古墳時代の竪穴式住居跡、長岡京期の遺構・遺物も検出されている。その南東に縄文時代中期の土器が出土し、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である友岡遺跡と、奈良時代前期の新岡廃寺がある。小泉川右岸には長岡京期の土馬・ミニチュアカマドが大量に出土した西山田遺跡、サヌカイトのナイフ形石器が出土し、弥生時代中期の土坑が検出された脇山遺跡、中世の掘立柱建物跡・井戸などが検出され、古墳時代から中世の土器と奈良時代の墨書土器が出土している久保川遺跡がある。

松田遺跡の北側には旧石器～中世の複合遺跡である^{はざま} 階遺跡があり、その東にある境野1号墳は、最近の調査成果から3段築成で葺き石と円筒埴輪を持ち、古墳時代前期後半(4世紀後半)の前方丸円墳で全長78～83mの規模と推定されている。境野1号墳の南東に宮脇遺跡があり、近年の調査で古墳周溝が検出され、各時期の遺物が出土する縄文時代～近世の複合遺跡である。宮脇遺跡の北には国指定史跡の恵解山古墳、縄文時代～弥生時代の土器が出土し、弥生時代中期の方形周溝墓が検出された南栗ヶ塚遺跡がある。

松田遺跡の南には東西1km、南北800mの下植野南遺跡があり、弥生時代中期の方形周溝墓群、古墳時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡群、平安時代初期の掘立柱建物跡が検出され、縄文時代から中世の遺物が出土する大規模な複合遺跡であることが判明している。小泉川の右岸には、古墳時代の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡などが検出された算用田遺跡がある。その北に中世の土師器・瓦器・陶磁器が出土する金蔵遺跡がある。府道大枝大山崎線(西国街道)沿いに広がる百々遺跡では、平安時代前期の側溝・掘立柱建物跡・井戸などが検出され、土師器・須恵器・緑釉陶器・



第2図 調査地配置図

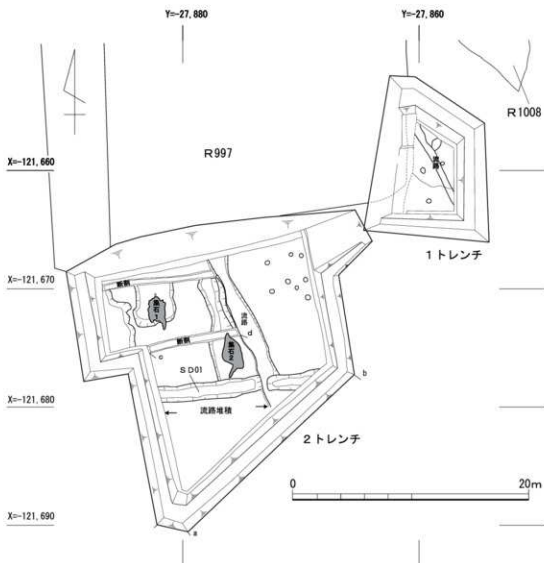
輸入陶器・黒色土器・瓦・輸入銭・木簡・墨書土器などの多彩な遺物が出土している。

3. 検出遺構

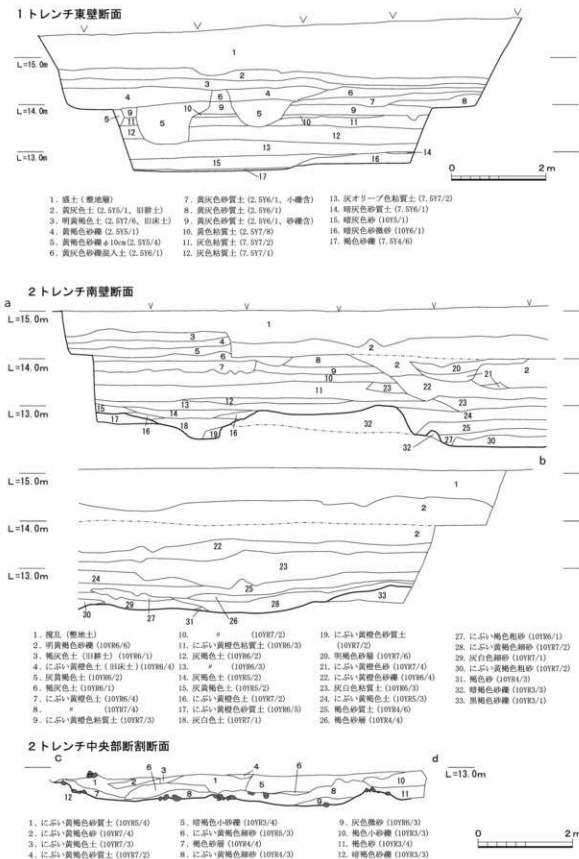
今回の調査地は右京第997次調査地の南東部と南部に隣接しており、南東部に1トレンチを南部に2トレンチをそれぞれ設定して調査を実施した(第2図)。

(1) 1トレンチ(第3図)

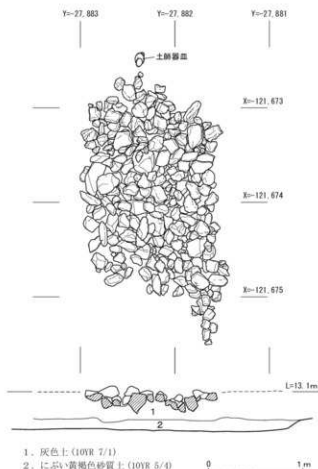
1トレンチでは地表下約2.5mの標高13m付近まで掘り下げ、遺構検出に努めた。断面観察から現代整地層の下に旧耕作土・旧床土、その下に砂礫混じり土・砂質土(第6～9層)が堆積し、一部に小泉川氾濫による砂礫層(第4・5層)が認められ、粘質土(第10～13層)下層に砂層(第15・16層)が堆積していた(第3図)。この第15・16層の砂層の上面で柱穴3基と砂が堆積した浅い流路跡を検出した。柱穴の一つは長岡京跡右京第997次調査で検出された欄列S A35の延長にあたり、柱穴から瓦器碗片が出土した。



第3図 1・2トレンチ遺構配置図



第4図 1・2トレンチ土層断面図



第5図 2トレンチ 集石1実測図

破片が出土している。また、平坦面の西側には南北方向に流れる幅2m前後のにぶい黄褐色砂質土が堆積した流路跡があり、これより西側は暗褐色砂礫土を挟り込んで砂質土・砂・小砂礫が流路状に堆積する。この堆積層上面で集石1・溝S D01を検出した。また、北部の中央から北西部には灰色土が堆積し、土師器皿・瓦器碗・瓦質羽釜などが出土した。

北西部では灰色土の中に東西1.4m、南北約2mの範囲に石が積み重なっていた(集石1)。中央部でも石の集合した場所(集石2)を検出した。集石2の南で東西方向の素掘り溝(S D01)を検出した。これより南では遺構を検出していない。以下主な遺構について記述する。

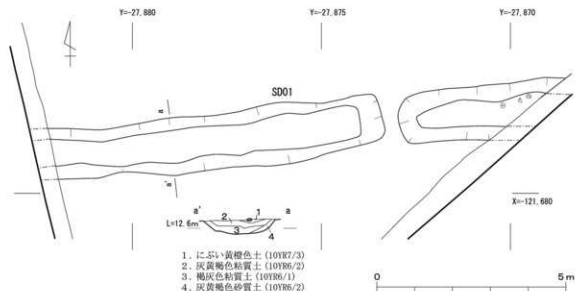
集石1(第5図) 2トレンチ北西部で検出した集石である。東西1.4m、南北約2mで一部が飛び出した形状である。石は概ね2段に重なり、最大30cm、平均20cm程度のもが多い。集石の北側に土師器皿が重なり斜めに立った状態で検出された。周囲を慎重に精査したが掘形は確認できなかった。集石の範囲が限定的なので何らかの意図で人為的に集められたものと推定される。集石の周囲が僅かに窪むこと、右京第997次調査で検出された溝S D86の延長部分にあたるので、周辺の石を集積しただけとも考えられる。周辺から土師器皿・瓦器碗・陶磁器・輸入銭1枚などが出土している。

集石2 トレンチ中央部で検出した集石である。範囲が不定型で、石の重なりが少ない。集石

(2) 2トレンチ(第4図)

2トレンチは小泉川堤防に向けて道路面が高くなっており、その隣接地が住居として利用されていたため旧表土から約2mの盛土層があった。事前に重機を使用して盛土層を除去し、さらに重機により厚さ2m、標高13m付近まで掘り下げ、遺構検出に努めた。北東部と南部では堆積状況が異なる。南部では小泉川の氾濫による砂礫層が1m前後あり、その下に第22～28層粘質土・砂質土・砂が堆積し、この下に黒褐色の砂礫(第33層)が認められた(第4図参照)。

2トレンチ北東部は第32層の暗褐色砂礫層が広がって平坦面となっている。この層に掘り込まれた直径40cm程度の円形柱穴7基と隅丸方形の柱穴1基を検出したが、建物跡に復元できるものではなかった。また、柱穴の底部に石を置いたものもあった。柱穴の一部から瓦器碗の小



第6図 2トレンチ SD01実測図

1に比べて石はややまばらであった。

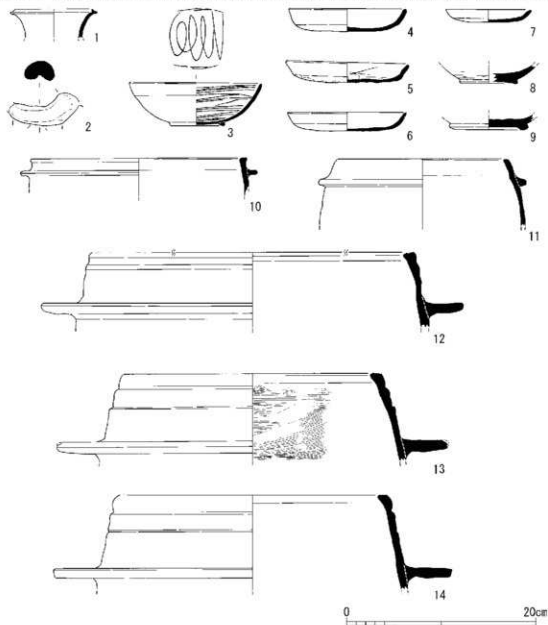
溝SD01(第6図) 2トレンチ中央で検出した東西方向の素掘り溝である。幅1.3～1.5m、深さ0.3mを測り、東西14mにわたって検出した。東北部のベースである砂礫層の一部を幅約0.4m掘り残し、土橋状の通路を設ける。西側では灰色土・灰色砂質土の下層に砂が堆積していたので流れがあったことがわかる。この通路から東では西側よりやや深く、東方に向かって下がる。SD01はE9°Nの振れをもつ。埋土から土師器皿・瓦器碗・瓦質羽釜などと、摩滅した土馬の体部が出土した。

4. 出土遺物(第7・8図)

出土遺物は、土師器・瓦器・陶磁器・須恵器・輸入銭などが整理箱に5箱分出土した。

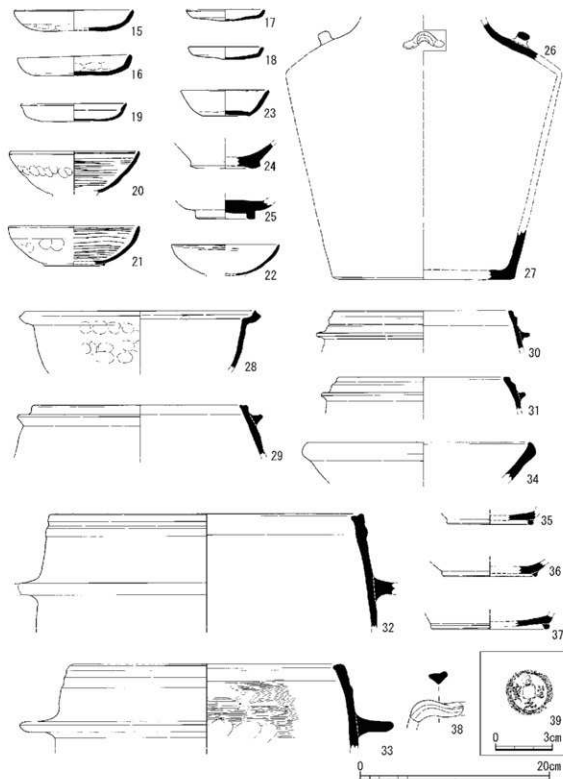
溝SD01(第7図1～14) 1は須恵器壺の口縁部である。口径8cmを測る。焼成が良好で胎土が密で、内面が灰色を呈し外面に自然釉が掛かる。2は土馬の体部である。表面が磨滅していることから周辺から流入したものであろう。1・2とも8世紀末から9世紀前半までのものであろう。3は瓦器碗である。口径13.6cm、器高4.55cmを測り、底部に断面が逆三角形の高台が付く。口縁部外面に指押さえ痕跡がみられるが暗文がなく、口縁部内面に粗い暗文と内面底部に粗い螺旋状の暗文を施す。焼成が良く胎土が密で色調が暗灰色を呈す。溝の東部から出土した。4は土師器皿である。口径12.1cm、器高2.4cmを測る。口縁部の内外面をヨコナデし、底部外面に工具によるナテが残る。焼成が良好で胎土に石英・長石・雲母、2mm以下の青灰色砂粒が混じり、外面がにぶい黄褐色、内面が褐灰色を呈す。溝の東部から出土した。5は土師器皿である。口径12.75cm、器高2.1cmを測る。口縁部内外面をヨコナデし、底部外面は未調整である。焼成が良好で胎土に石英・長石・雲母を多く含み、外面がにぶい黄褐色、内面が褐灰色を呈す。6は土師器皿である。口径12.4cm、器高2.0cmを測る。焼成が良く胎土に石英・長石を含み、内外面とも

にぶい黄橙色を呈す。7は土師器皿である。口径8.8cm、器高1.35cmを測る。焼成が良く胎土に石英・長石・雲母・青灰色砂粒を含み、内外面ともがぶい黄橙色を呈す。8は無軸陶器碗の底部である。底部径6.0cmを測り、高台は削り出しである。残存部分にヘラミガキは見られないが緑軸陶器の素地であろう。焼成が良く胎土が密で石英・長石を含み、内外面とも灰色を呈す。9は白磁碗の底部である。底径7.2cmを測る。内面に灰白色の釉葉が掛かかり、外面が灰白色を呈す。焼成が良好で胎土は緻密である。10は瓦質の羽釜である。口径22.5cmを測る。垂直さみの口縁で端部はほぼ水平で、短い鈎が巡る。焼成が良く胎土に石英・長石・雲母・青灰色砂粒を含み、外面が灰色内面が灰白色を呈す。11は瓦質の羽釜である。内湾する口縁部で端部は丸くおさめる。口縁部はヨコナデで短い鈎が巡る。焼成が良く胎土は密で石英・長石・青灰色砂粒を含み、内面が灰白色、外面が灰色を呈す。12は瓦質の羽釜である。口径34.1cmを測る。わずかに内傾する口



第7図 出土遺物実測図(1)

縁部の外面はヨコナデにより緩やかな凹凸があり、端部が肥厚し頂部を浅く窪ます。焼成が良く胎土に石英・長石・雲母を含み、外面がオリーブ灰色、内面が灰白色を呈す。13は瓦質の羽釜である。口径27.0cmを測る。わずかに内鑿る口縁部の内外面をヨコナデし、外面に2段の凹線を巡らし、端部を内側に肥厚させる。口縁部内面に工具による横方向のハケ目が残る。口縁部から



第8図 出土遺物実測図(2)

7cm下に広い鏝を巡らす。焼成が良く胎土に長石・雲母・青灰色砂粒を含み、外面が灰色、内面にぶい黄橙色を呈し一部に黒褐色の煤が付着する。14は瓦質の羽釜である。口径28.1c mを測る。13とよく似た形状の口縁部を持つ。13のような口縁部内面にハケ目は見られない。胎土がやや密で焼成が良く胎土に長石・雲母・青灰色砂粒を含み、外面が灰色、内面が黄灰色を呈す。

溝S D01出土の土器は、少量の8世紀末から9世紀前半(1・2)、9世紀(8)、12世紀(9)のものが混じるが、土師器皿・瓦器椀は13世紀後半～14世紀前半のものである。

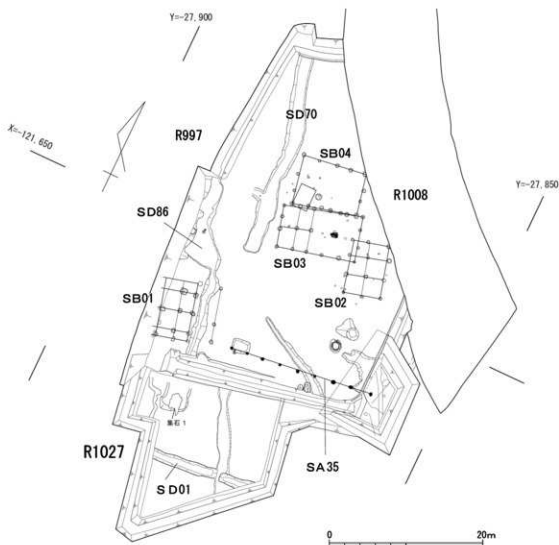
その他の遺物(第8図15～39) 15～18は集石1の北隣で重なって出土した。15は土師器皿である。口径12.4cm、器高2.15cmを測る。口縁部内外面をヨコナデし、口縁部下半から底部をナデる。口縁部外面の下半に指押さえ痕跡が残る。焼成が良く胎土に石英・長石・雲母・茶色の砂粒を含み、内外面ともにぶい橙色を呈す。16は土師器皿である。口径12.0c m器高2.05c mを測る。口縁部内外面をヨコナデし、口縁部下半から底部をナデる。口縁部内面の下半に指押さえ痕跡が残る。焼成が良く胎土に石英・長石・雲母・茶色の砂粒を含み、内外面ともにぶい橙色を呈す。17は土師器皿である。口径8.0cm、器高1.2cmを測る。口縁部内外面をヨコナデし、底部内外面もナデる。焼成が良く胎土に石英・長石・雲母・茶色の砂粒を含み、内外面ともにぶい橙色を呈す。18は土師器皿である。口径7.8cm、器高1.4cmを測る。焼成が良く胎土に石英・長石・雲母・茶色の砂粒を含み、内外面とも橙色を呈す。19は土師器皿である。口径11.0c m器高1.9c mを測る。口縁部をヨコナデしわずかに外反する。焼成が良く胎土に赤茶色の砂粒を含み、外面がぶい橙色、内面が橙色を呈す。集石1周辺の灰色土から出土した。20・22は集石1周辺の灰色土から、21は包含層から出土した。20は瓦器椀である。口径13.5cm、残在高4.4cmを測る。口縁部上半から内面をヨコナデし、口縁部外面下半に指押さえ痕跡が残る。口縁部内面に粗い暗文が見られる。底部外面に逆三角形の高台を貼り付けた痕跡が見られる。胎土は密であるが焼成がやや悪く、外面はオリーブ黒色、内面は黒褐色を呈す。体部外面下半に指押さえ痕跡が残る。口縁部内面に粗い暗文が見られる。底部外面に逆三角形の高台を貼り付ける。胎土は密であるが焼成がやや悪く、内外面ともオリーブ黒色を呈す。21は瓦器椀である。口径13.6cm、器高4.2cmを測る。口縁部はヨコナデし、体部外面には指押さえ痕跡が残る。内面には暗文がある。底部外面には逆三角形の高台を貼り付ける。22は瓦器椀である。口径11.2cm、残存高3.25cmを測る。口縁部上半から内面をヨコナデし、口縁部外面上端に粗い暗文があり、下半に指押さえ痕跡が残る。口縁部内面に暗文が見られるが焼成が悪く明瞭でない。底部外面に逆三角形の高台を貼り付けた痕跡がある。胎土は密であるが焼成がやや悪く、内外面とも灰色を呈す。23は口禿げの白磁皿である。口径9.1cm、器高2.75cmを測る。口縁部は露胎で、一部に煤が付着している。底部は露胎である。胎土は緻密で焼成が堅緻、内外面とも灰白色を呈す。集石1の北東部の灰色土から出土した。24・25は集石1周辺の灰色土から出土した。24は白磁椀の底部である。底径6.0cmを測る。胎土は緻密で焼成が堅緻、内面にぶい黄橙色の釉薬が掛かる。25はいわゆる白磁椀の底部である。底径5.9cmを測る。胎土は緻密で焼成が堅緻、内外面に灰オリーブ色の釉薬がかかる。26は集石1周辺の灰色土から、27は集石1西側の包含層から出土した。26は褐陶陶器四耳壺の肩部と推定

される。胎土は緻密で焼成は堅緻である。外面には黒褐色の釉が掛かり、内面はにぶい黄橙色を呈す。27は褐釉陶器の底部と推定される。底径19.2c mを測る。外面の釉薬がにぶい褐色であるが、内面の色調と胎土がよく似ているので26と同一個体と推測される。28は瓦質の鍋である。口径24.1c mを測る。口縁部を外側に折り曲げ、端部を上方に摘み上げる。全体をナデで仕上げ上げるが、体部外面に指押さえ痕跡が残る。胎土が密で焼成も良く、内面がにぶい褐色、外面が褐色を呈す。集石1周辺の灰色土から出土した。29～32は集石1東側の灰色土から、33は集石1の周辺から出土した。29は瓦質の羽釜である。口径21.6c mを測る。内傾して立ち上がる口縁部直下に短い鐙が巡る。全体をナデで仕上げ上げる。胎土が密で焼成も良く、内外面が黄灰色を呈す。30は瓦質の羽釜である。口径18.0c mを測る。わずかに内湾する口縁部の外面がヨコナデにより丸く段が付き、端部を平坦に仕上げ上げる。段の下方に短い鐙が巡る。胎土が密で焼成も良く、内外面とも黄灰色～灰白色を呈す。31は瓦質の羽釜である。口径18.1c mを測る。内湾する口縁部の外面がヨコナデにより丸く段が付き、端部を平坦に仕上げ上げる。段の下方に短い鐙が巡る。胎土は密で焼成も良く、内面が灰色、外面は灰黄色を呈す。32は瓦質の羽釜である。口径32.4c mを測る。内傾する口縁部は強いヨコナデにより外面に段が付き、端部の中央はわずかに窪む。口縁部から6.5cm下に鐙が巡る。胎土が密で焼成は良好である。33は瓦質の羽釜である。口径28.1c mを測る。わずかに内傾する口縁部の内外面をヨコナデし、外面の上半に緩やかな段が付き、端部を内側に肥厚させる。口縁部内面に工具による横方向のハケ目が残る。胎土に石英・長石・雲母を含み、焼成が良く、外面は暗灰色、内面が黒灰色を呈す。34は須恵器の練り鉢の口縁部である。口径23.5c mを測る。口縁部を上方に引き上げ丸くおさめる。胎土はやや粗く焼成も良く口縁部外面が暗灰色、それ以外が灰色を呈す。包含層から出土した。35は須恵器杯の底部である。底径9.0cmを測る。底部に断面が方形の輪高台を貼り付ける。胎土は精良で焼成も良好であり、内外面とも黄灰色を呈す。2トレンチ南東壁断ち割りて出土した。36は須恵器杯の底部である。底径9.7cmを測る。底部に断面が逆台形の輪高台を貼り付ける。胎土は精良で焼成も良好であり、内外面とも灰白色を呈す。37は須恵器杯の底部である。底径12.3c mを測る。底部に断面が逆台形の輪高台を貼り付ける。胎土は精良で焼成も良好であり、内外面とも黄灰色を呈す。36・37は1トレンチの断ち割りて出土した。38はミニチュアカマドの上半部の一部である。集石1の西側の包含層より出土した。39は輸入銭の「至道開寶」（初鑄995年）である。集石1周辺の灰色土より出土した。出土遺物のうち土師器皿や瓦器碗、瓦質羽釜の特徴から13世紀後半～14世紀前半のものと推定される。断ち割りて出土した須恵器杯は8世紀末～9世紀前半のものと推定される。

5. まとめ

今回の調査で長岡京に関連した遺構は検出していないが、断ち割りなどでごく少量の8世紀末～9世紀前半の遺物が出土しているため、周辺には同時代の遺構が存在していたと推測される。

今回の調査では右京第997次調査のS A35に連なる柱穴を検出した(第9図)。東西方向の素掘り溝S D01より南側に遺構はなく、997次調査で検出された中世居館の南限の溝と推定される。



第9図 周辺調査地遺構配置図

ちなみに中世居館の掘立柱建物跡・橋列の振れ角が北に $8 \sim 15^\circ$ で、今回検出したSD01の振れ角が $E 9^\circ N$ であり、一連のものと判断される。

調査地はやや安定した北東部の砂礫層から西および南西方向に砂・砂質土が互層に堆積した流路堆積が広がり、2トレンチの断ち割り等から下層に古墳時代の竪穴式住居跡などの遺構が存在しないことを確認した。右京第971・974・1008次で住居跡が検出されているので、古墳時代の集落は今回調査地の東側及び南側に展開するものと考えられる。なお、古墳時代集落は下植野南遺跡に含まれるものである。(石尾政信)

注1 古関正浩ほか「松田遺跡」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第41集 大山崎町教育委員会) 2011

注2 岡崎研一ほか「長岡京跡右京第997次・松田遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第144冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011

注3 中川和哉ほか「下植野南遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

4.長岡京跡左京第547次(7ANYHD-1地区) 発掘調査報告

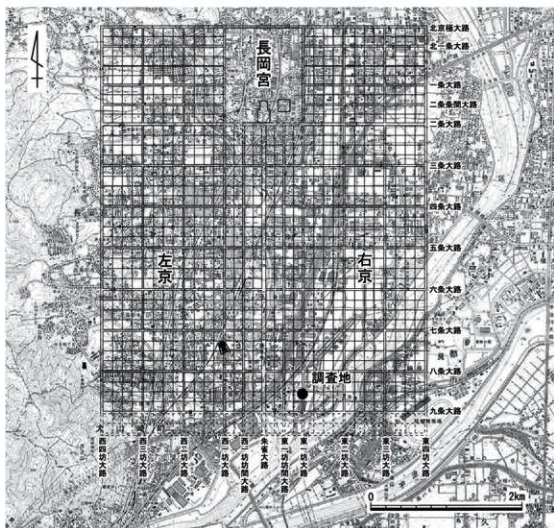
1. はじめに

今回の発掘調査は、平成23年度桂川右岸流域下水道幹線管渠工事(雨水南幹線)に伴い、京都府流域下水道事務所の依頼を受けて実施したものである。

今回の調査地は、長岡京跡左京城南端の九条域にあたり、長岡京跡の条坊復元案では朱雀大路の東にあたる東一坊大路の推定ライン近く及び左京九条一坊十三町域にあたる。

周辺の調査状況は以下のとおりである。

平成20年7・8月に京都府流域下水道事務所内で発掘調査(左京第527次調査^(注1))を実施し、中世段階において水田等の広がりを確認した。また、平成10年度に今回の調査地の北側で実施された



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

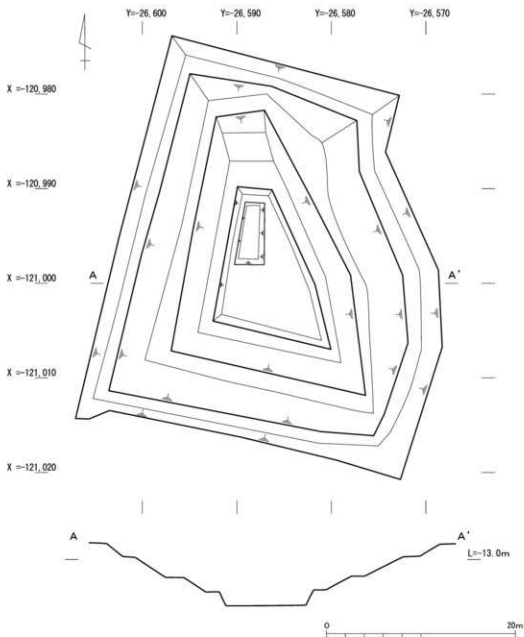
長岡京跡左京六・七条三坊(京都市清掃局敷地内)の調査では、長岡京期の墨書人面土器を含む祭祀の跡が検出された^(9.2)。このように、調査地点の近辺において、古代から中世にかけての遺構が検出されていることから、調査を実施することとなった。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会をはじめ京都市文化市民局、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、京都府流域下水道事務所などの関係諸機関にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝します。なお、調査に係る経費は、京都府流域下水道事務所が全額負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克

調査担当者 調査第2課主幹調査第3係長事務取扱 石井清司



第2図 調査地平面図

同 次席総括調査員 田代 弘

調査場所 京都市伏見区淀大下津町(京都府流域下水道事務所内)

現地調査期間 平成23年8月17日～10月27日

調査面積 500㎡

2. 調査概要(第2図)

調査地点には、2m以上の盛り土がなされ整地されていた。そのため、調査に先立ち、この盛り土層を除去する必要があると、そこで、掘削機械と土砂搬出用の大型重機を投入し、旧表土まで土砂を除去した。

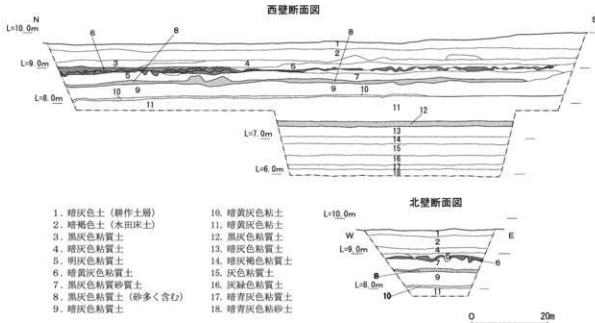
旧表土である水田面、以下の堆積土を遺構や遺物の有無を確認しながら、慎重に掘削を行った。安全斜度を保ちながら、最終的には、現地表下約6mまで掘削した。この面の高さが標高約8mである。この面まで、途中、人力による精査を繰り返しながら、遺構・遺物の有無を確認した。

この間、二つの土層において、植物の生息痕跡を認めることができた。ただし、蛙や畝など人工的な痕跡を認めることはできず、この植物が水田や畑作に伴うものであるかどうか、何の植物に由来するものであるかどうかなどについては明らかにすることができなかった。

標高8m地点まで掘削を行ったが、この深さが安全斜度を保てる限度であり、この面を最終的な面として精査を実施したが、遺構・遺物は認められなかった。この後、さらに2m掘り下げ、標高6mの地点まで精査したが、灰色粘土が堆積するのみで、遺構・遺物は確認できなかった。

3. 土層の堆積状況(第3図)

最上層に厚くおかれた整地土がある。この整地土は近年の盛り土である。盛り土除去後に旧耕



第3図 土層断面図

作土層を検出した。この土層以下、最終検出面までの間に確認した土層の堆積状況、色調等について略記する。

基本層序は、以下のとおりである。第1層は暗灰色土、第2層は暗褐色土である。これらは、旧水田耕作土層である。第3層は、黒灰色粘質土である。有機物を多く含む粘土質土層である。これ以下は、色調が灰色系の粘性の高い水性堆積物とみられる。

第4層には、先に記したような植物の根株の痕跡と見られる楕円形の痕跡が認められた。この痕跡は砂で覆われている。この砂は洪水により運ばれてきたものと推測される。

第5層、第7層、第9層は、黒灰色～暗黄灰色系の粘土あるいは粘質土である。砂の混入の粗密はあるが、類似する堆積環境であったことが想定される。第6層と第7層は、黒色系の土層である。この土層が堆積した時期には、陸化が進み、植物が繁茂して土壌化した様子がうかがえる。

4. まとめ

以上のように、今回の調査は、中世の水田痕跡あるいは長岡京期の遺構・遺物の検出を目指して実施したものだったが、上記のように、人工的な明確な遺構の痕跡あるいは遺物を検出することはできなかった。土層堆積の観察の結果からは、調査地点周辺は、淀川に近接して形成された湿地あるいは荒蕪地として存在した可能性が高いと考えられる。水田などとして利用されたが、居住地など人々の生活の場として利用されたことはなかったと考えられる。

(田代 弘)

注1 松井忠春「長岡京跡左京第527次(7ANYSK-1地区)発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第132冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

注2 長宗繁一ほか「水垂遺跡 長岡京跡左京六・七条三坊」(「京都市埋蔵文化財調査研究所調査報告」第17冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究所) 1998

5. 椿井遺跡第5次発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、京都府農林水産部が実施する平成23年度府営基幹農道整備事業山城2期地区に先立ち、京都府山城土地改良事務所の依頼を受けて実施した。同事業施行地は、山間及び里山地に位置し、竹林・田畑等の自然環境が良好に残存する地域である。また、地域の交通事情としては、主要道路である国道24号線及び府道への接続が西側を南北に縦断するJR線により分断され、中・大型車両の通行が困難となっている。そのため、山間・里山地の農地とを結ぶ農作物輸送路の整備が早急に望まれることから、本事業は計画されることとなった。

事業対象地には、椿井遺跡をはじめ多くの埋蔵文化財包蔵地が所在している。京都府教育委員会と京都府農林水産部は、それらの取り扱いについて協議を行い、埋蔵文化財包蔵地がやむを得ず影響を受ける部分については、当調査研究センターが記録保存調査を実施することとされた。

今年度については、椿井遺跡及び松尾古墳群での発掘調査を実施する運びとなった。

椿井遺跡では、これまでに同事業に関連して当調査研究センターが4次にわたって発掘調査を実施しており、今回が第5次調査となる。また、近接地では山城町教育委員会(現木津川市教育委員会)が、天上山古墳及び松尾廃寺^(R1)の発掘調査を実施している。

第1次調査 平成16年9月21日から平成17年2月10日にかけて、遺跡範囲の北半に所在する丘陵上において880㎡の調査を実施した^(R2)。縄文時代から近世に至る各時期の遺構を確認した。標高60m前後を測り、平野部との比高も30mを有する地点で弥生時代後期中葉の竪穴式住居跡を2基検出したことから、平野部を見わたす高地性集落の存在が明らかとなった。

第2次調査 平成17年4月17日から同年5月30日にかけて、第1次調査地点と谷を挟んで南側に所在する丘陵上において320㎡の調査を実施した^(R3)。弥生時代後期の溝跡や遺物包含層、近世以降の耕作溝等を検出したが、地形の改変により多くの遺構はすでに削平されたと判断された。

第3次調査 平成21年10月28日から平成22年2月18日にかけて、遺跡範囲の中央やや南よりの丘陵上において1,200㎡の調査を実施した^(R4)。弥生時代後期の溝・土坑、飛鳥時代の掘立柱建物跡・溝、中世以降の土坑等を検出した。飛鳥時代の遺構は、同遺跡では初検出であり、調査地東側にその存在が想定される松尾廃寺の造営に関連する遺構の可能性が指摘されている。

第4次調査 平成22年8月10日から同年11月21日にかけて、遺跡範囲の南端に所在する丘陵先端部とその裾部において1,050㎡の調査を実施した^(R5)。丘陵頂部には寒光坊古墳群が所在しており、新たに未周知の石室を2基検出した。いずれも横穴式石室で、築造時期は古墳時代後期と判断された。また、丘陵裾部では旧石器時代のナイフ形石器が出土しており、南山城地域での数少ない旧石器の類例を加えることとなった。松尾古墳群では、これまでに発掘調査が行われたことはない。松尾神社南側の丘陵斜面において、損壊の著しい石室及び散乱する石材が確認されており、

石室実測調査の際に、遺物が採集されているのみである。^(註6)

本報告で使用した国土座標は日本測地系(第Ⅵ座標系)である。土層の注記には『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を用いた。

現地調査に当たっては、京都府教育委員会並びに木津川市教育委員会のご指導・ご助言をいただいた。また、地元椿井区には御高配を賜った。記して感謝します。なお、調査にかかる経費は、全額京都府山城広域振興局が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克

調査担当者 調査第2課調査第2係長 岩松 保
同 調査員 奈良康正

調査場所 木津川市山城町椿井松尾・松尾崎地内

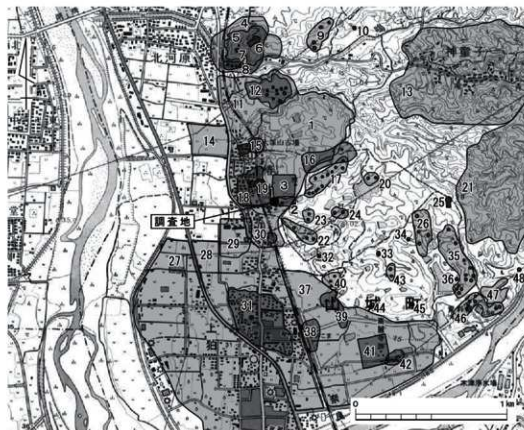
現地調査期間 平成23年7月11日～8月19日

調査面積 201㎡

2. 位置と環境(第1図)

椿井遺跡は、木津川右岸の段丘上に立地する縄文時代から古墳時代及び中世の遺物散布地・集落跡として、遺跡台帳に登録された周知の埋蔵文化財包蔵地である。同遺跡の範囲内には、前期古墳である椿井大塚山古墳、天上山古墳並びに御霊山古墳が所在している。また、今回の調査対象地の北東には、松尾神社が鎮座する。当社は上粕・林・椿井の3集落の鎮守社として信奉を集め、本殿は国重要文化財に指定されている。また、拝殿・表門及び境内社御霊神社本殿の3棟は府登録有形文化財に登録されており、境内地は府文化財環境保全地区の決定を受けている。平成7年度には、表門解体修理工事に伴い山城町教育委員会により発掘調査が実施され、現存する土塀の構築時期が鎌倉時代後期と判明するとともに、さらに古い段階の版築構造を有する築地塀跡が確認された。当社の土層に白鳳期の瓦が混入することは夙に有名で、過去に境内地において7～8世紀代の瓦が採集されていることから、この築地塀跡が白鳳期に存在した松尾廃寺に伴う可能性が示唆されている。^(註7)松尾神社の南側丘陵斜面には、松尾古墳群が所在する。

木津川が形成した沖積地にはいくつかの集落跡が所在する。上粕北遺跡^(註8)では、平成21・22年度に当センターが発掘調査を実施しており、古墳時代、奈良時代、中世の遺構・遺物が検出された。奈良時代の遺構としては、総延長100mに及ぶ南北方向の溝跡やそれにより区画された掘立柱建物跡群が検出されており、木簡や墨書土器などの文字資料も出土している。これらの成果は、恭仁京域を復元する際の手がかりになるものと考えられている。上粕東遺跡^(註9)では、高麗寺の伽藍方位と一致する掘立柱建物跡、区画溝、欄列等が検出されている。これらの遺構群の存続時期は高麗寺とも重なっており、同寺の造営氏族の居館を含む広域の経済基盤をなしていた施設と捉えられている。国指定史跡である高麗寺跡は、飛鳥時代創建の寺院跡である。法起寺式の伽藍配置を有し、木津川を南側に睥睨する河岸段丘上に占地する。地元教育委員会により数次にわたる発掘



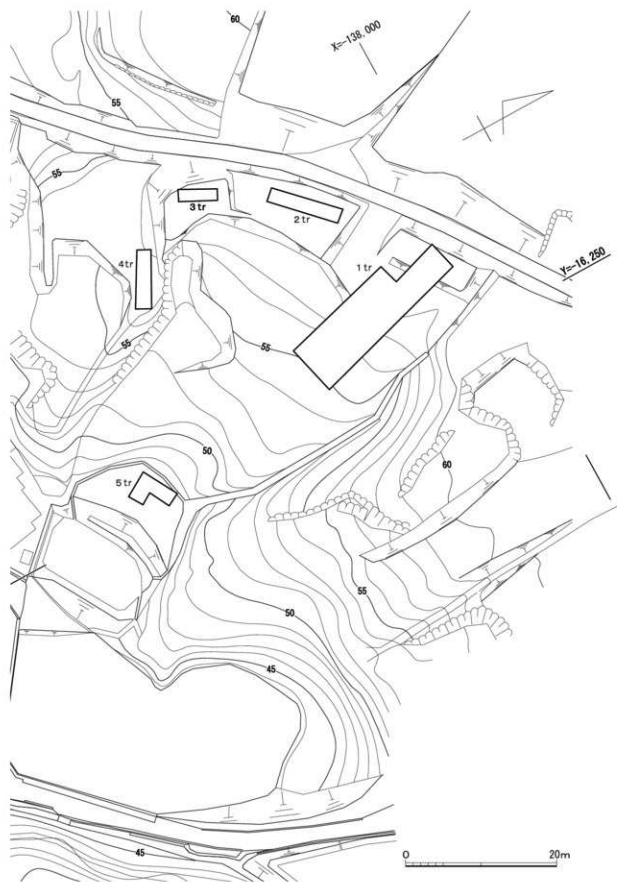
- | | | | | | |
|----------|------------|-----------|----------|-----------|----------|
| 1 梅井遺跡 | 10 萩谷古墳 | 19 天上山古墳 | 27 上狛西遺跡 | 35 蓮池古墳群 | 44 清盛山古墳 |
| 2 松尾古墳群 | 11 堂ノ上遺跡 | 20 田護平古墳群 | 28 上狛北遺跡 | 36 蓮池古墓 | 45 平野畑古墳 |
| 3 松尾原寺 | 12 西ヶ峰古墳群 | 21 東山城跡 | 29 柳田遺跡 | 37 上狛東遺跡 | 46 千両岩古墳 |
| 4 今城跡 | 13 神童子遺跡 | (旧高之林城跡) | 30 御霊山古墳 | 38 野田芝遺跡 | 47 千両岩遺跡 |
| 5 城山遺跡 | 14 坂ノ下遺跡 | 22 寒光坊古墳群 | 31 始城跡 | 39 高井手瓦窯跡 | 48 魚谷古墳 |
| 6 平尾城山古墳 | 15 梅井大塚山古墳 | 23 切ヶ敷古墳群 | (大里環濠集落) | 40 天竺堂古墳群 | |
| 7 稲荷山古墳 | 16 ムナガイ遺跡 | 24 高築山古墳群 | 32 天教堂古墳 | 41 高麗寺跡 | |
| 8 北谷横穴群 | 17 宮城谷古墳群 | 25 松谷古墳 | 33 小杉谷古墳 | 42 高麗寺瓦窯跡 | |
| 9 北原古墳群 | 18 梅井城跡 | 26 猿谷古墳群 | 34 金村古墳 | 43 袋谷古墳群 | |

第1図 調査地及び周辺遺跡位置図(国土地理院 1/25,000 田辺・奈良)

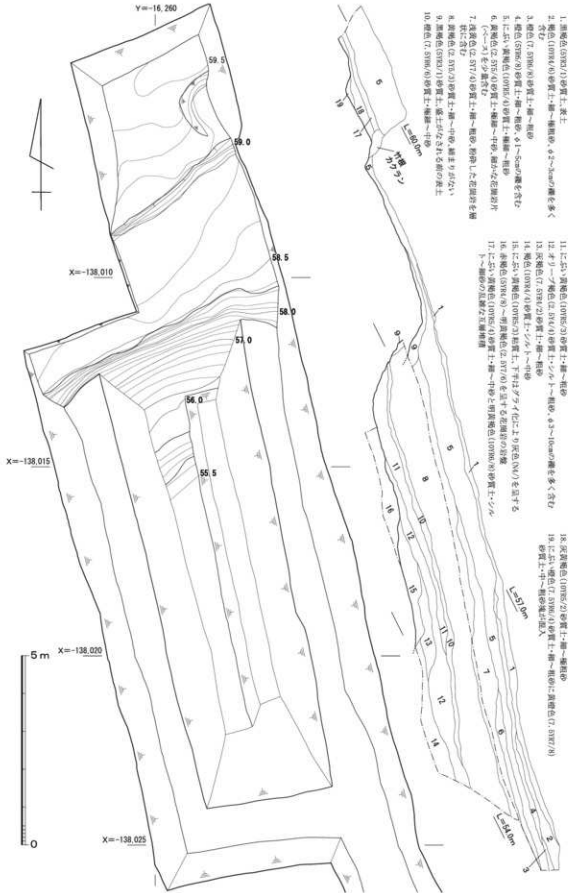
(810) 調査が実施されており、近年では史跡整備事業に向けた発掘調査が精力的に実施されている。高麗寺跡の寺域東南に隣接して構築された高麗寺瓦窯跡は、高麗寺専用の瓦窯で、窯室である1・2号窯、半地下式のロストル式平窯の3号窯の計3基が確認されている。(812) いずれも南向きの段丘傾斜面に構築されており、1・2号窯は伽藍整備Ⅱ期の操業を、3号窯は修理用の軒九瓦を生産していることから平安時代初頭の操業がそれぞれ比定されている。また、高麗寺専用の瓦窯として高井手瓦窯跡が知られている。町道新設に先立ち発掘調査が実施され、平安時代初頭に高麗寺補修用の瓦を生産した窯跡を2基検出している。(813)

3. 調査成果

調査対象地は北西から南東に傾斜する丘陵縁辺部で、標高は47.6～60.5mを測る。現況は竹林であり、古墳状隆起が数か所に確認される。調査に当たっては、事業の施行により大きく削平を受ける地点を中心に5か所の調査トレンチを設定し、顕著な遺構を確認した時点で調査範囲を拡張することとした(第2図)。



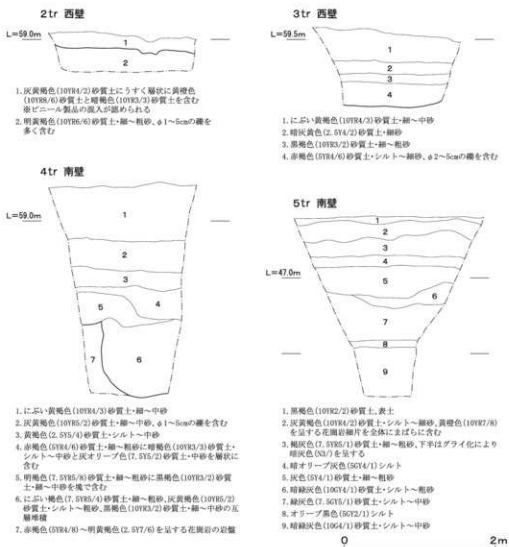
第2図 調査トレンチ配置図



第3図 1トレンチ 平・断面図

(1) 1トレンチ(第2・3図) 調査対象地北東部の南向き緩斜面に設定した。当初は東西7m、南北16mとしたが、北端の隆起が古墳の墳丘である可能性を考慮し、その地点まで調査区を拡張した。最終的な調査面積は140㎡である。北端の盛土は比高1.3mを測り、最も標高が高い地点である。堆積状況を確認しながら人力により掘削した結果、およそ1.0mに及ぶほぼ単一の盛土層を確認し、古墳ではないことが判明した。また、その際に検出した平坦面は、およそ7mで途切れ、花崗岩の岩盤を削りこんだ比高2.4m前後を測る崖状地形となっていた。そこから先は南側へ向かって緩やかに傾斜していたが、現地表から深さが3mを超えたため、安全対策上、掘削を中止した。この崖線は、現況で東西に確認される崖状地形の延長線上にあり、本来の地形が埋められていたと考えられる。岩盤直上で検出したにぶい黄褐色粘質土(第15層)以外は締まりのない堆積であること、古い時代の遺物が含まれないことから、この埋没は新しい時期になされたと判断される。

(2) 2トレンチ(第2・4図) 調査対象地の北西端の平坦面に東西10m、南北2mの範囲で設定した。調査面積は20㎡である。灰黄褐色砂質土を0.2mほど除去すると地山面となり、部分的



第4図 2～5トレンチ 土層断面図

に旧表土と考えられる黒褐色砂質土が薄く残存していた。遺物は出土せず、遺構も検出できなかった。灰黄褐色砂質土(第1層)には、ビニール製品が含まれることから、新しい段階に削平を受け、盛り土されたものと考えられる。

(3) 3トレンチ(第2・4図) 2トレンチを設定した平坦面の南西側に存在する高まりに設定した。東西5m、南北2m、調査面積は10㎡である。現標高は59.6m前後を測る。古墳の墳丘を想定して掘削を行い、4層にわたる堆積を確認したが、黒褐色砂質土(第3層)は旧表土と判断でき、その上層は新しい段階の盛り土と考えられる。その下層の赤褐色砂質土(第4層)から遺物は出土せず、0.3m程で2トレンチと同様に地山面となり、北東から南西へと緩やかに下る傾斜を確認した。遺構は検出できなかった。

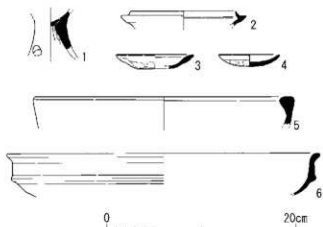
(4) 4トレンチ(第2・4図) 調査対象地の南西端に東西2m、南北8mにわたって設定した。調査面積は16㎡である。狭い丘陵尾根筋が南東方向に延びており、古墳の存在が推測された。調査の結果、当地点は北から南に傾斜する段状地形となっており、南西側に平坦面を形成するため、その段状地形に盛り土を行っていたことが判明した。この盛り土も竹林の土入れに伴うと考えられる。

(5) 5トレンチ(第2・4図) 調査対象地の南端の最も低位となる地点に設定した。調査面積は15㎡である。北側丘陵裾部分の平坦面で、直近まで耕作地として利用されており、丘陵裾からは常時、湧水が認められた。現地表から2.5m下まで掘削を行ったが、砂質土とシルトの水平な互層堆積が確認でき、丘陵からの土砂流れ込みによる埋没を示していた。安定した遺構面の確認には至らず、古墳時代から近世にわたる遺物が出土した。

4. 出土遺物(第5図)

今回の調査で出土した遺物は、遺物コンテナ1箱分である。いずれも細片である。

1は高杯の脚柱部片である。弥生時代後期に属すると判断される。摩滅により器面調整等は確認できないが、透かし孔を3方向に穿っている。1トレンチのにぶい黄褐色粘質土(第15層)から出土した。瓦器碗の細片が同一層から出土している。2は須恵器杯身である。5トレンチから出土した。全体の1/20程の残存であるが、復元口径は11.2cmを測る。胎土は緻密で、焼成は良好である。その特徴からTK209に比定される。3・4中世のは土師器皿である。3は3トレンチから出土した。1/4程度が残存する。口径は8.2cm、器高は1.5cmを測る。4は4トレンチから出土した。1/4程度が残存する。口径は6.4cm、器高は1.3cmを測る。5は焙



第5図 出土遺物実測図

烙である。4トレンチから出土した。口縁部付近がわずかに残存するのみであるが、体部が垂直に立ち上がり、端部を肥厚する。復元口径は27.2c mを測る。外面には煤の付着が認められる。6は焙烙である。1トレンチで実施した断ち割りの最下層となる褐色砂質土(第14層)から出土した。1/10程度が残存する。体部は垂直に立ち上がり、口縁部が強く外反する。底部との境界には突帯を一条めぐらせる。復元口径は33.0c m割り、外面には煤の付着が認められる。

5. まとめ

今回、調査を実施したいずれの地点においても、顕著な遺構を検出することはできなかった。竹林としての利用に際し、丘陵部は削平されるとともに、土入れがなされ、さらに大規模な土取りが行われたことにより、複数の所で崖状地形が残るなど、大きく改変されたことが判明した。そのために、遺構は削平され消滅してしまっただと考えられる。しかし、1トレンチでは、遺物包含層からではあるが弥生時代後期の遺物が出土しており、これは北西側で実施された第3次調査で検出された遺構と時期を一にするものである。また、5トレンチの遺物包含層からは、細片ではあるが古墳時代後期の遺物が出土しており、松尾古墳群と時期が一致する。今回の調査により、かつて丘陵上には、松尾古墳群を構成する古墳が存在していたと推察される成果を得ることができた。

(奈良康正)

- 注1 上田真一郎「I. 椿井天上山古墳 第1次調査 II. 松尾廃寺 第1次調査」(「山城内発掘調査概報」IX 山城町教育委員会) 2000
鳥軒 満「椿井天上山古墳 第2次調査」(「山城内発掘調査概報」XI 山城町教育委員会) 2001
- 注2 柴 晩彦・高野陽子「4. 椿井遺跡第1・2次発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006
- 注3 注2に同じ
- 注4 松尾史子・黒坪一樹「4. 椿井遺跡第3・4次発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第146冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
- 注5 注4に同じ
- 注6 川西宏幸「第2章第3節 国家の形成」(「山城町史 本文編」) 1987
- 注7 中島 正「第3章第3節 発掘調査」(「京都府登録有形文化財(建造物)松尾神社表門修理工事報告書」松尾神社) 1997
- 注8 筒井崇史「木津川市上粕北遺跡(第2次)の発掘調査」(「京都府埋蔵文化財情報」第115号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
- 注9 中島 正「上粕東遺跡」(「山城内埋蔵文化財発掘調査報告書」第24集 山城町教育委員会) 2000
- 注10 中島 正「史跡高麗寺跡」(「山城内埋蔵文化財発掘調査報告書」第7集 山城町教育委員会) 1989
- 注11 中島 正「史跡高麗寺跡第6次～第10次発掘調査概報」(「山城内埋蔵文化財発掘調査報告書」第36・38集 山城町教育委員会・「木津川市埋蔵文化財発掘調査報告書」第3・4・8集 木津川市教育委員会) 2006～2010
- 注12 注10に同じ
- 注13 中島 正・鳥軒 満「高井手瓦窯跡」(「山城内埋蔵文化財発掘調査報告書」第23集 山城町教育委員会) 2000

圖 版



(1) b 1 地区空中写真(上が北)



(2) b 2・3・4 地区空中写真(上が東)



(1) b 2 地区井戸 S E01 検出状況
(北から)



(2) b 2 地区井戸 S E01 掘削状況
(北西から)



(3) b 2 地区溝 S D05 (東から)



(1) b 2 地区流路跡(南から)



(2) b 2 地区流路跡完掘状況(南から)

京都第二外環状道路関係遺跡 図版第 4

長岡京跡右京第 946 次



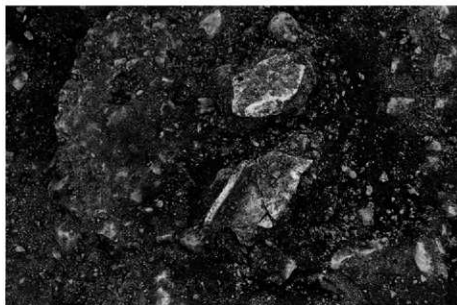
(1) b 2 地区流路跡土層断面(北西から)



(2) b 2 地区流路跡土層断面(南西から)



(1) b 2 地区流路 4 (南東から)



(2) b 2 地区流路 4 内弥生土器
出土状況(南から)



(3) b 2 地区流路 4 最下底掘削状況
(北東から)



(1) b 3 地区中世水田跡検出状況(東から)



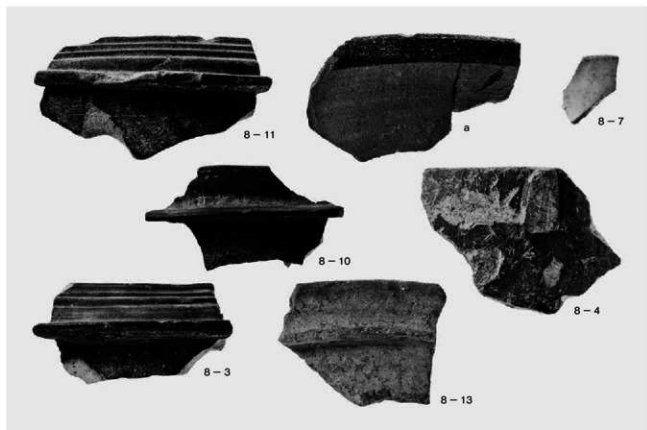
(2) b 3 地区水田跡1 (東から)



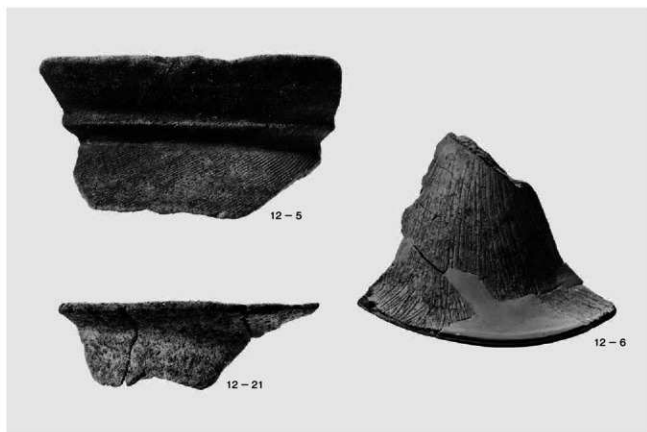
(1) b 4 地区完掘状況(北から)



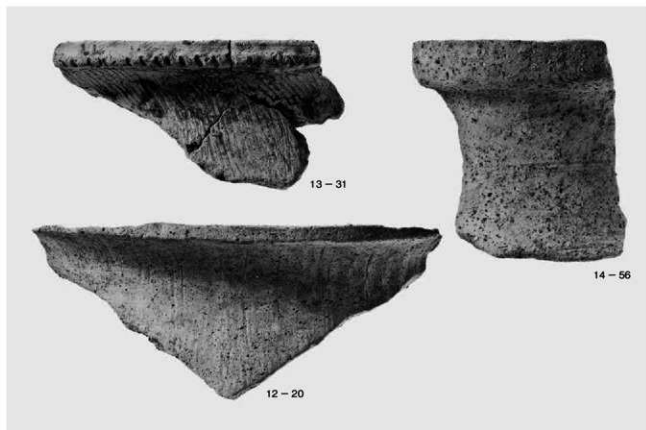
(2) b 5 地区完掘状況(北から)



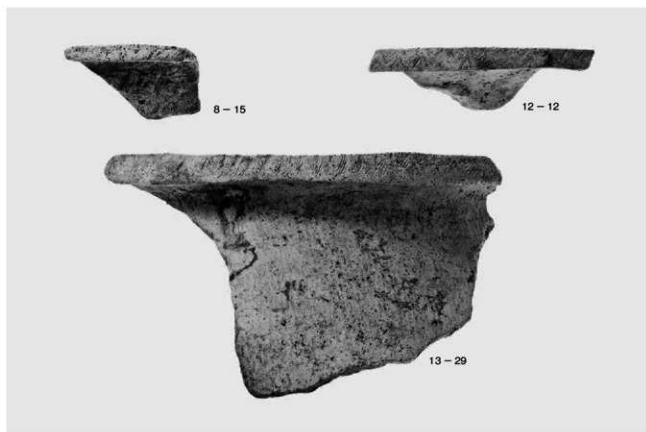
(1) b 1 地区出土遺物



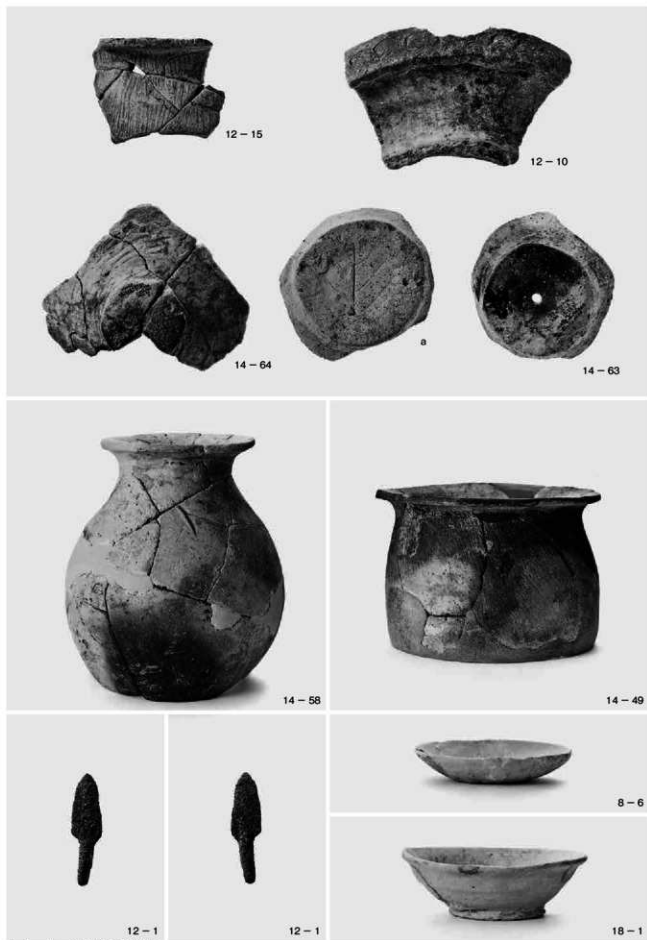
(2) b 2 地区出土遺物



(1) b 2 地区出土遺物



(2) b 1・2 地区出土遺物





(1) b 6 地区全景(西から)



(2) b 6 地区全景(南から)



(3) b 7 地区全景(東から)



調査地全景(上が北)

(1) b 1 地区 S K12完掘状況
(上が東)



(2) b 1 地区 S K12完掘状況
(北から)



(3) b 8 - 1 地区 S K12完掘状況
(南東から)





(1) b 8 - 1 地区SK12
北側土層断面(北から)



(2) b 8 - 1 地区SK12
南側土層断面(北から)



(3) b 8 - 1 地区SK12
南端溝状遺構(南から)

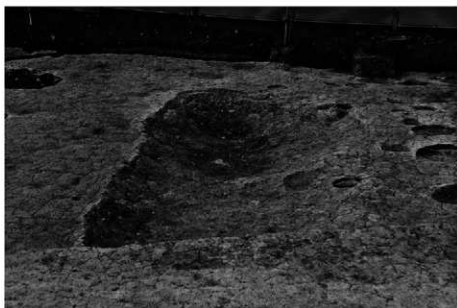
(1) b 8 - 1 地区 S D33・34 全景
(北西から)



(2) b 8 - 1 地区 S K35・S P61
完掘状況(南から)



(3) b 8 - 1 地区 S K37 完掘状況
(南から)





(1) b 8 - 1 地区 S K 38 完掘状況
(北から)

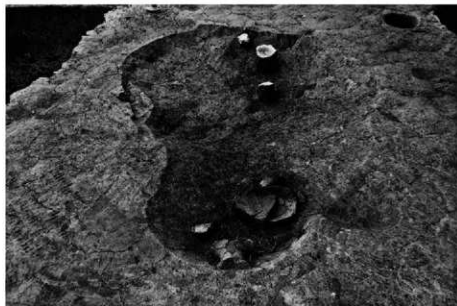


(2) b 8 - 1 地区 S K 40 完掘状況
(北から)



(3) b 8 - 1 地区 S K 40 遺物
出土状況(南から)

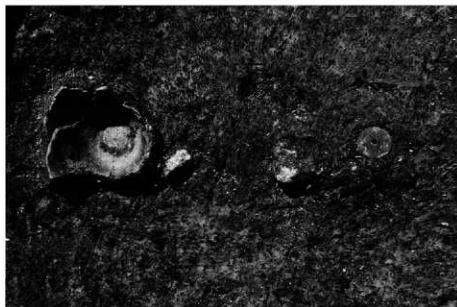
(1) b 8 - 1 地区 S K 55
遺物出土状況(南東から)



(2) b 8 - 1 地区 S K 56完掘状況
(北東から)



(3) b 8 - 1 地区 S K 56
遺物出土状況(北西から)





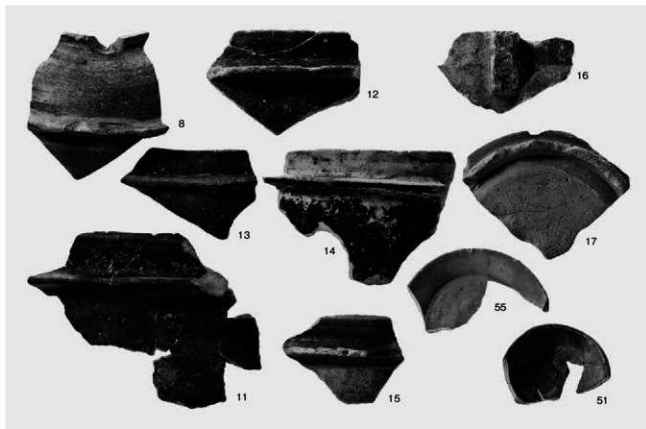
(1) b 8 - 1 地区 S K 57・58
完掘状況(南から)



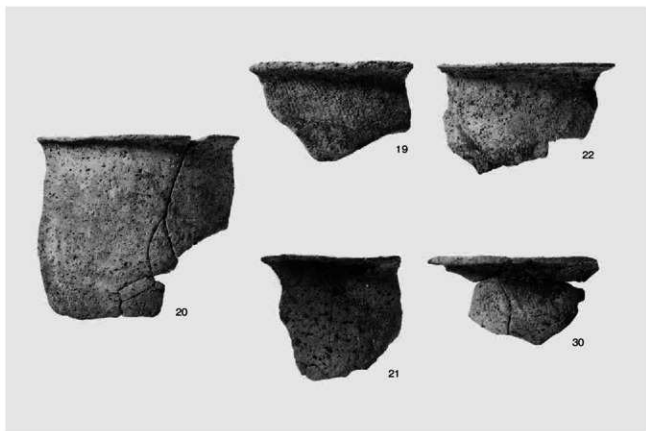
(2) b 8 - 1 地区 S K 63完掘状況
(南から)



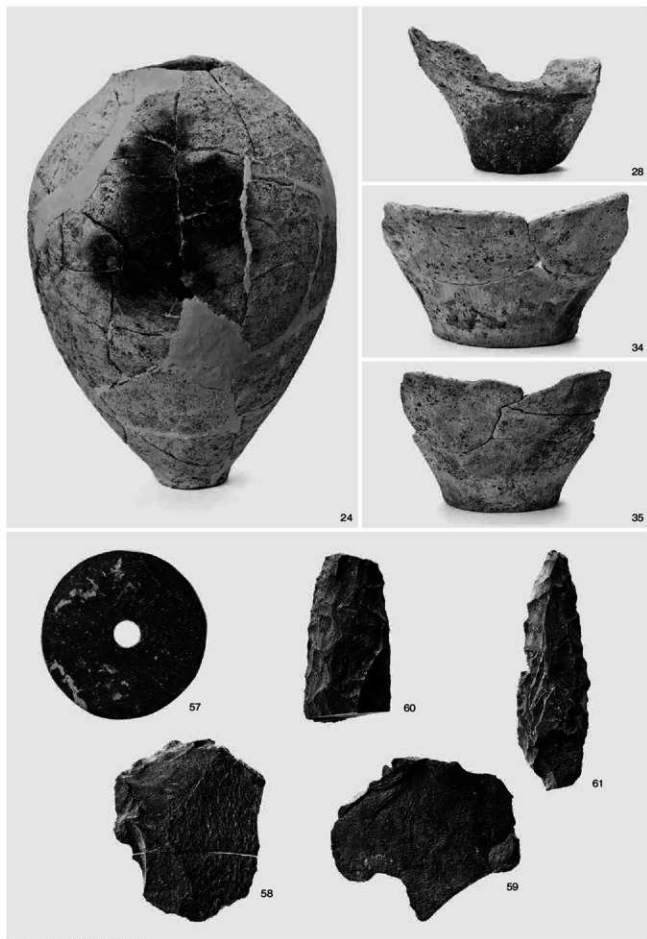
(3) b 8 - 1 地区 S K 63
遺物出土状況(西から)



(1) b 8 - 1 地区出土遺物 1



(2) b 8 - 1 地区出土遺物 2

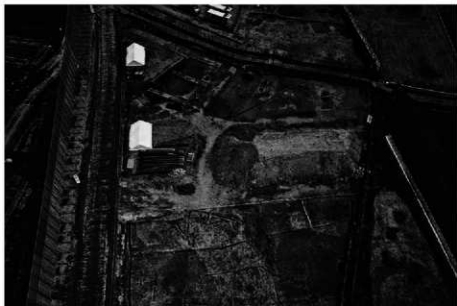




(1) b 8 - 2 地区全景(上が東)



(2) b 8 - 2 地区全景(上が南)



(1) b 8 - 2 地区全景(上が北)



(2) b 8 - 2 地区全景(上が西)



(3) b 8 - 2 地区第 1 遺構面
(東から)



(1) b 8 - 2 地区南西部(北から)



(2) b 8 - 2 地区南半部(西から)



(3) b 8 - 2 地区南東部(南から)



(1) b 8 - 2 地区池状遺構SK146
(北から)



(2) b 8 - 2 地区南半中央部
(東から)



(3) b 8 - 2 地区井戸SE152
(東から)

(1) b 8 - 2 地区井戸 S E 152
下段検出状況(東から)



(2) b 8 - 2 地区井戸 S E 152
曲物検出状況(東から)



(3) b 8 - 2 地区井戸 S E 152
井戸底検出状況(東から)





(1) b 8 - 2 地区井戸 SE119
検出状況(北から)



(2) b 8 - 2 地区土坑 SK108
検出状況(東から)



(3) b 8 - 2 地区土坑 SK184
遺物出土状況(南から)

(1) b 8 - 2 地区井戸 S E 119
完掘状況(南から)

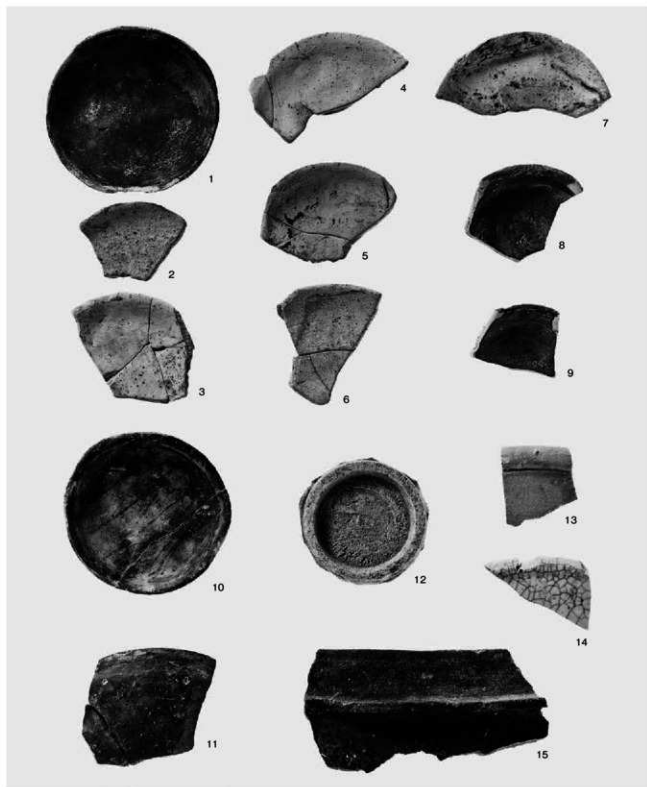


(2) b 8 - 2 地区土坑 S K 185
完掘状況(東から)

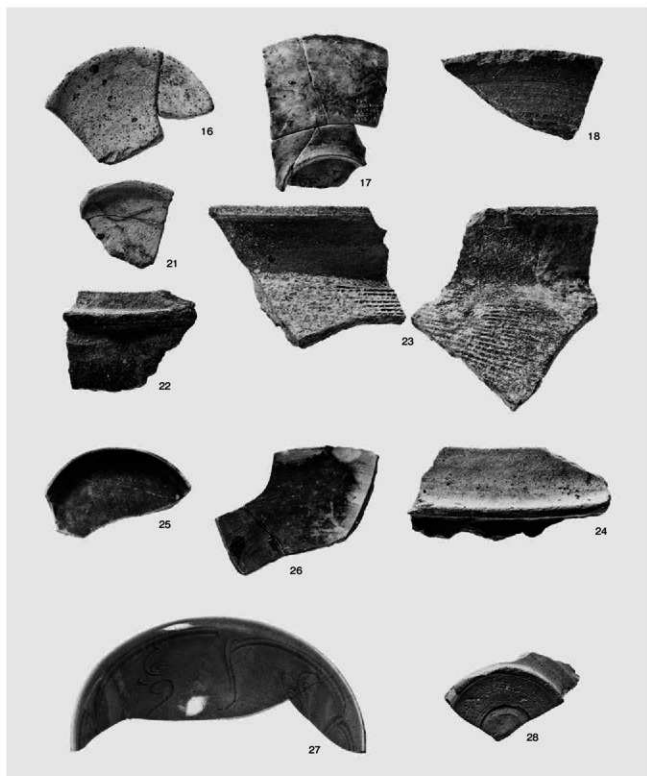


(3) b 8 - 2 地区土坑 S K 187
完掘状況(南から)

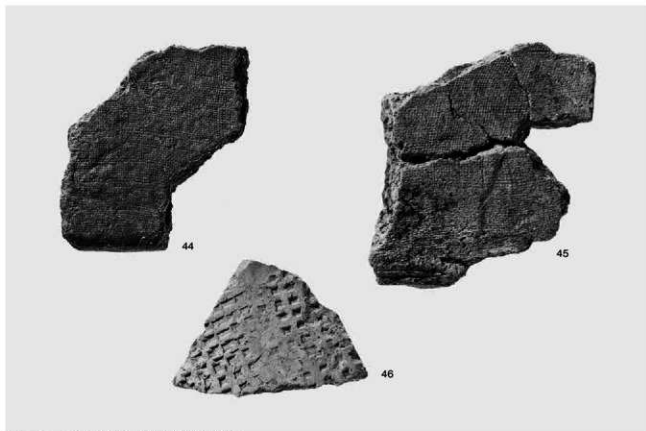




b 8 - 2 出土遺物 1 (番号は挿図に対応)



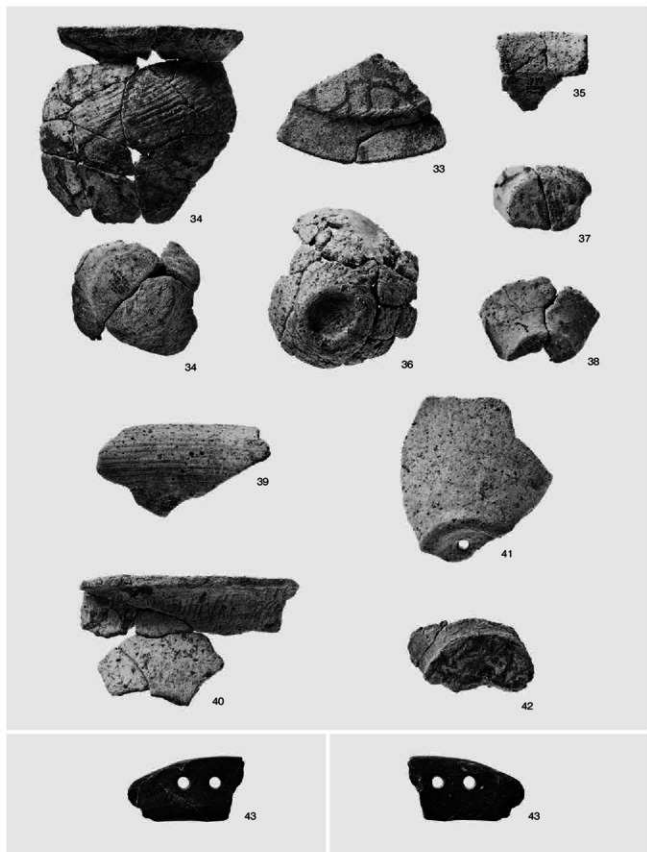
b 8 - 2 出土遺物 2 (番号は挿図に対応)



(1) b 8 - 2 出土遺物 3 (番号は挿図に対応)



(2) b 8 - 2 出土遺物 4 (番号は挿図に対応)



b 8 - 2 出土遺物 5 (番号は挿図に対応)



(1) b 9 地区全景(北西から)



(2) b 9 地区全景(南から)



(3) b 9 地区 S D02 断面(北西から)

(1) d 1 地区重機掘削状況
(南から)



(2) d 1 地区調査地全景
(北西から)



(3) d 1 地区地境溝検出状況
(北東から)





(1) d 2 地区重機掘削状況
(南東から)



(2) d 2 地区調査地全景
(南西から)



(3) d 2 地区調査地全景
(北西から)

(1) d 3 地区重機掘削状況
(南東から)



(2) d 3 地区調査地全景
(北東から)



(3) d 3 地区南断面(北西から)





(1) b 8 - 3 地区全景(北西から)



(2) b 8 - 3 地区全景(南から)



(1) b 8 - 3 地区自然流路 N R54 (左が北)



(2) b 8 - 3 地区南東部遺構分布状況 (南から)



(1) b 8 - 3 地区近世遺構面
調査状況(北西から)



(2) b 8 - 3 地区近世遺構面溝々群
(南西から)



(3) b 8 - 3 地区掘立柱建物跡
S B271(北から)

(1) b 8 - 3 地区井戸 S E 204
調査状況(南から)

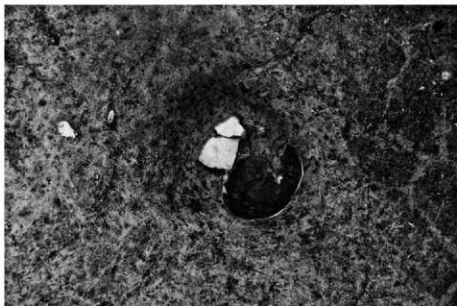


(2) 井戸 S E 204完掘状況(南から)



(3) 井戸 S E 204石組み状況
(南から)

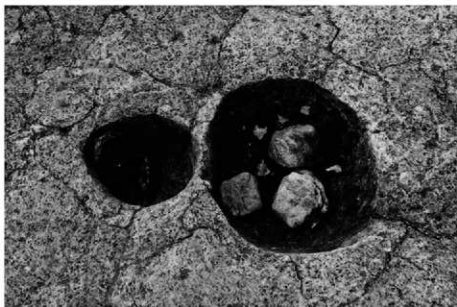




(1) b 8 - 3 地区柱穴 S P 227
(東から)



(2) b 8 - 3 地区土坑 S K 238
(東から)



(3) b 8 - 3 地区柱穴 S P 235
(東から)



(1) b 8 - 3 地区西部遺構検出状況
(北東から)



(2) b 8 - 3 地区土坑 S K 225
(東から)



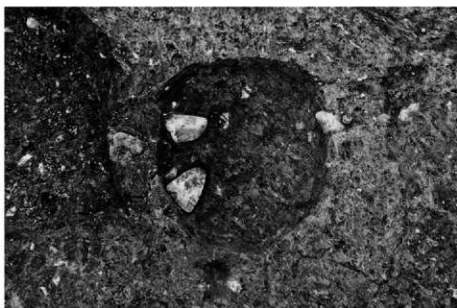
(3) 土坑 S K 225 完掘状況 (北から)



(1) b 8 - 3 地区土坑 S K 226
(東から)



(2) b 8 - 3 地区土坑 S K 258
(西から)



(3) b 8 - 3 地区ピット S P 237
(東から)

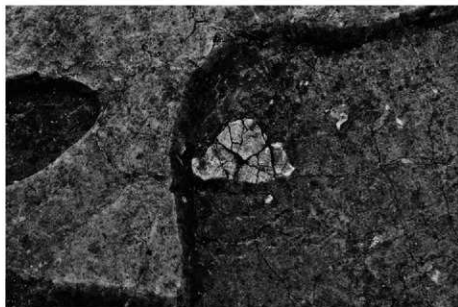
(1) b 8 - 3 地区中央西部遺構
検出状況(北東から)



(2) b 8 - 3 地区土坑 S K 228
(北から)



(3) 土坑 S K 228 西北部遺物
出土状況(南から)

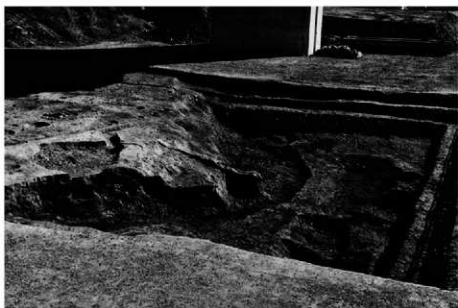




(1) b 8 - 3 地区自然流路 NR54b
調査状況(西から)



(2) 自然流路 NR54b (古墳時代)
完掘状況(北東から)



(3) 自然流路 NR54c (弥生時代)
完掘状況(北西から)



(1) b 8 - 3 地区自然流路N R54 c
全景(南から)



(2) 自然流路N R54 c
横断面B - B' 東岸(南から)



(3) 自然流路N R54 c
横断面B - B' 西岸(南から)



(1) b 8 - 3 地区自然流路 NR54
東岸斜面遺物出土状況(西から)



(2) 自然流路 NR54 c 弥生土器
出土状況(西から)



(3) 自然流路 NR54 c 石包丁
出土状況(北から)



21



19



25



31



52



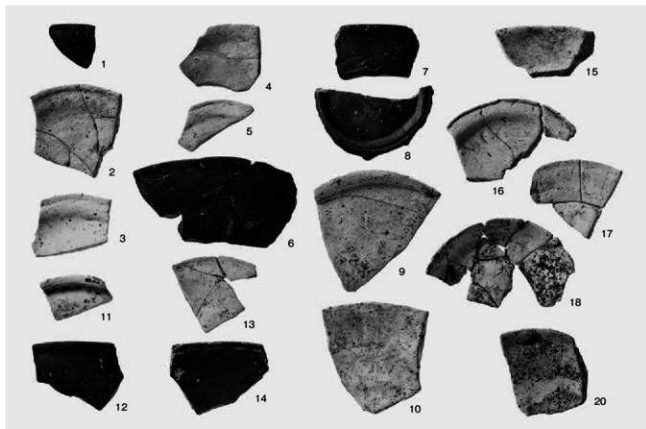
43



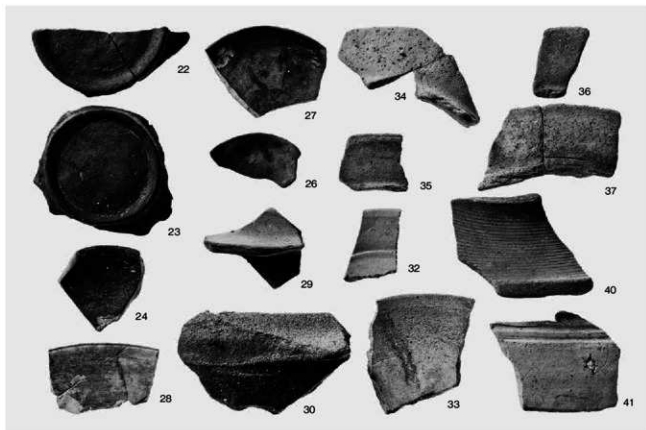
46



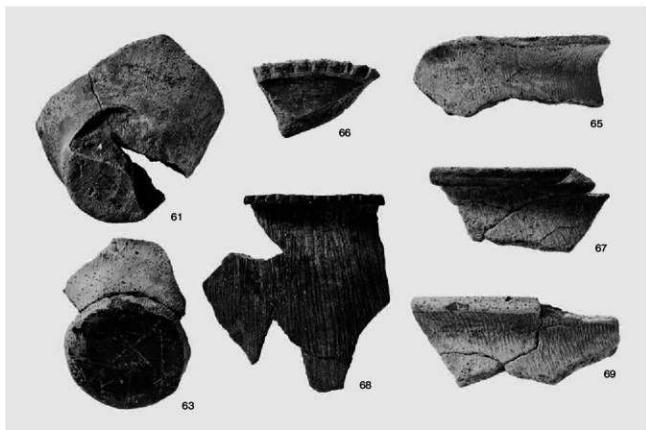
54



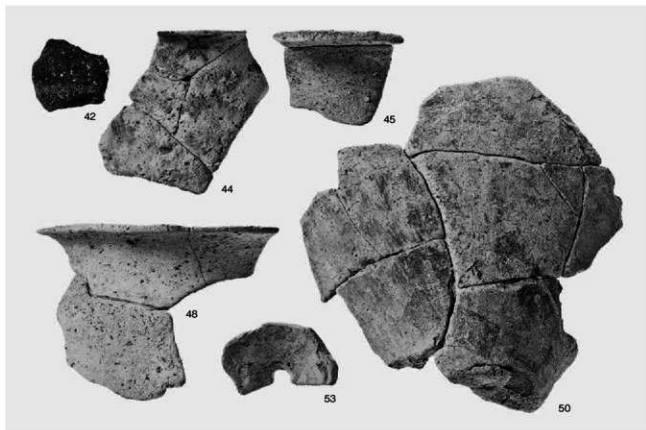
(1) b 8 - 3 地区出土遺物 2



(2) b 8 - 3 地区出土遺物 3



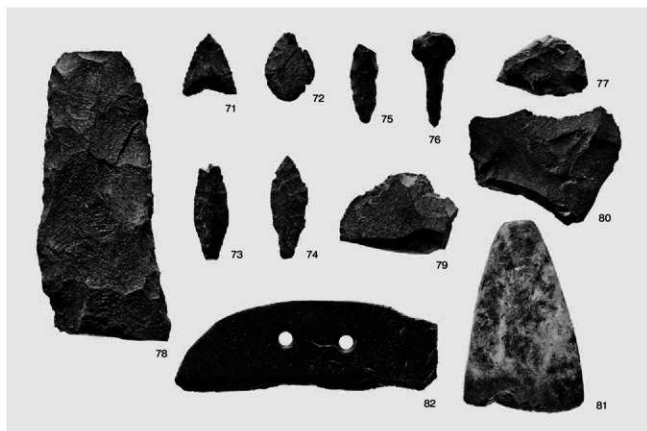
(1) b 8 - 3 地区出土遺物 4



(2) b 8 - 3 地区出土遺物 5



(1) b 8 - 3 地区出土遺物 6



(2) b 8 - 3 地区出土遺物 7



(1)高山Aトレンチ全景(南東から)



(2)高山Aトレンチ全景(下が南東)

鈴谷遺跡第 1・2 次



(1) 横穴式石室 S X01 全景 (南東から)



(2) ピット S P170 土馬出土状況 (南東から)

(1) A トレンチ横穴式石室 S X01
床面検出状況 (南東から)



(2) A トレンチ横穴式石室 S X01
左側壁検出状況 (南西から)



(3) A トレンチ横穴式石室 S X01
右側壁検出状況 (北東から)



鈴谷遺跡第 1・2 次



(1) A トレンチ横穴式石室 S X01
左奥隅角検出状況 (北西から)



(2) A トレンチ横穴式石室 S X01
右奥隅角検出状況 (東から)

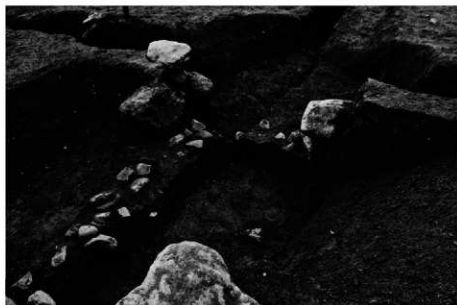


(3) A トレンチ横穴式石室 S X01
奥壁検出状況 (南東から)

(1) A トレンチ横穴式石室 S X01
遺物出土状況(南東から)



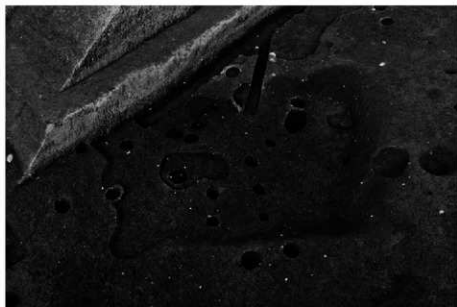
(2) A トレンチ横穴式石室 S X01
床面断ち割り状況(東から)



(3) A トレンチ横穴式石室 S X01
完掘状況(南東から)



鈴谷遺跡第 1・2 次



(1) Aトレンチ土坑SK90完掘状況
(西から)



(2) Aトレンチ土坑SK140
遺物出土状況(北西から)



(3) AトレンチピットSP150
遺物出土状況(南西から)

鈴谷遺跡第 1・2 次

(1) A トレンチピット S P 160
遺物出土状況 (南東から)



(2) A トレンチピット S P 170
半截状況 (北西から)



(3) A トレンチピット S P 175
遺物出土状況 (北西から)



鈴谷遺跡第 1・2 次



(1) A トレンチ土坑 S K200
遺物出土状況 (南東から)



(2) A トレンチ調査区南西壁
(北東から)



(3) 鈴谷 C トレンチ完掘状況
(南東から)





33



15



60



51



74

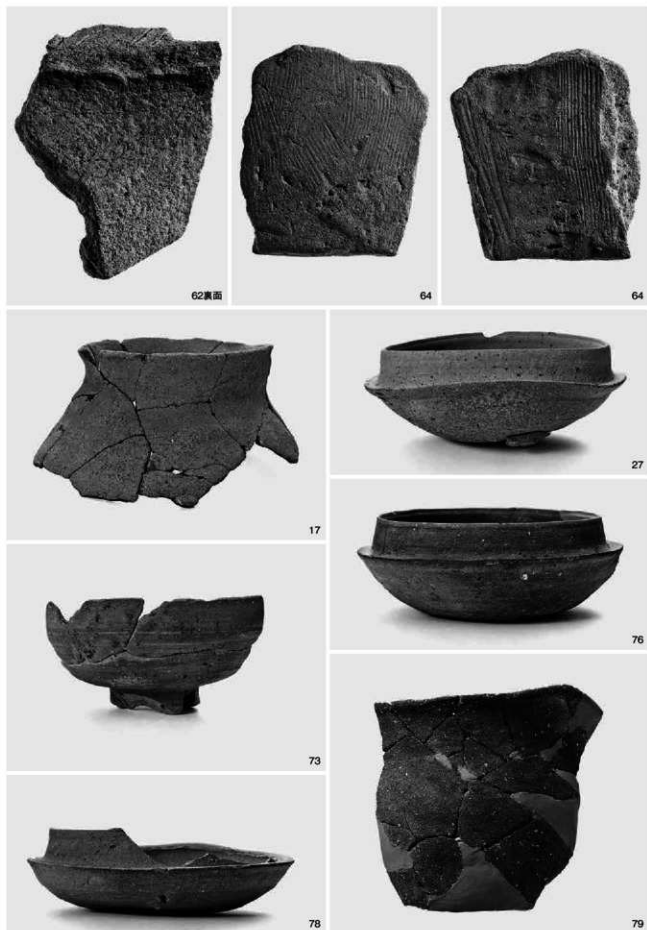


13



25





(1) 1 トレンチ遺構検出状況
(東から)



(2) 1 トレンチ完掘状況(東から)



(3) 1 トレンチ西壁土層断面
(東から)





(1) 2トレンチ遺構検出状況
(東から)



(2) 2トレンチ完掘状況(東から)



(3) 2トレンチ西壁土層断面
(東から)

(1) 3 トレンチ遺構検出状況
(南から)



(2) 3 トレンチ北壁土層断面
(南から)



(3) 3 トレンチ東壁土層断面
(西から)





(1) 3 トレンチ完掘状況(南東から)



(2) 3 トレンチ S D301土層断面
(東から)



(3) 3 トレンチ S D301北辺中央
掘り残し部分(東から)

(1) 3 トレンチ S K302
遺物出土状況(北西から)



(2) 3 トレンチ S K303
遺物出土状況(北西から)



(3) 3 トレンチ S K304
遺物出土状況(東から)





(1) 4 トレンチ完掘状況(西から)



(2) 4 トレンチSK401土層断面
(南から)



(3) 出土遺物



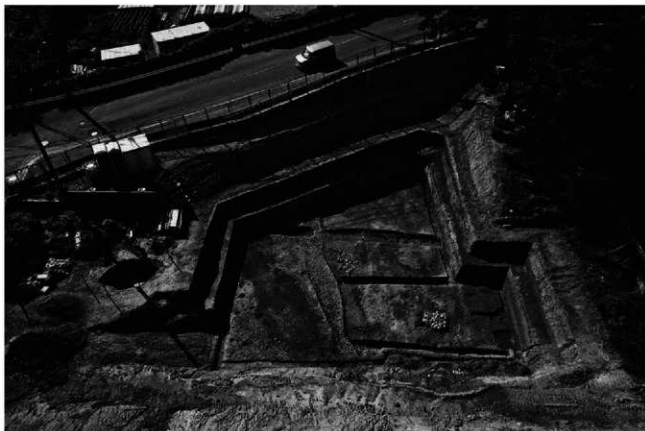
(1) 空中撮影写真(東から)



(2) 2トレンチ全景 空中撮影写真(南から)



(1) 2 トレンチ空中撮影写真(東から)



(2) 2 トレンチ空中撮影写真(北から)

(1) 1 トレンチ全景(北から)



(2) 1 トレンチ全景(西から)



(3) 1 トレンチ東壁断面(西から)





(1) 2トレンチ全景(北から)



(2) 2トレンチ集石1(西から)



(3) 2トレンチ集石1北隣
土器出土状況(西から)

(1) 2 トレンチ溝 S D01(西から)



(2) 2 トレンチ溝 S D01(東から)

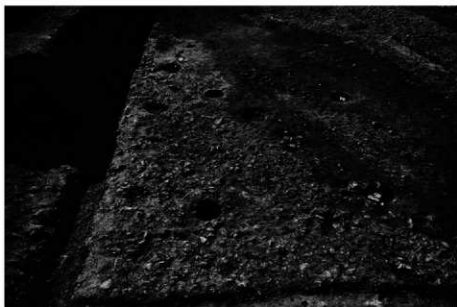


(3) 2 トレンチ溝 S D01アゼ断面
(東から)





(1) 2トレンチ西部完掘状況
(北から)



(2) 2トレンチ東部柱穴群(北から)



(3) 2トレンチ中央断面(北から)



11



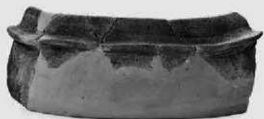
11



22



23



11



2



4



5



6



15



18



19



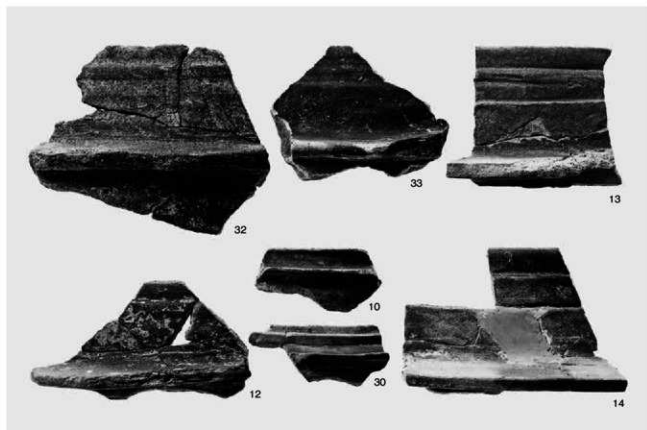
7



17



18



(1)出土遺物 2



(2)出土遺物 3

(1) 重機による表土掘削・
除去作業の状況(西から)



(2) 調査地内への基準点
設置作業状況(東から)



(3) 土層堆積状況の検討と
実測図作成状況(南西から)





(1) 調査トレンチ土層の堆積状況
(北東から)



(2) 土層堆積層序の状況(南から)



(3) 植物の生息痕跡とみられる断面
の状況(南から)

(1) 掘削作業状況(北東から)



(2) トレンチ完掘状況全景
(南東から)



(3) トレンチ完掘状況全景(北から)





(1) 重機による深部掘削状況
(北西から)



(2) 重機による深部掘削状況
(西から)



(3) 深部掘削断面の状況(西から)



調査地遠景(北から)



(1) 調査地全景(上が東)



(2) 1トレンチ全景(南から)

(1) 1トレンチ北端拡張区全景
(南西から)



(2) 1トレンチ東壁土層断面北半
(西から)



(3) 1トレンチ東壁土層断面南半
(西から)





(1) 2 トレンチ全景(北東から)



(2) 2 トレンチ西壁土層断面
(北東から)



(3) 3 トレンチ全景(北東から)

(1) 3トレンチ西壁土層断面
(北東から)



(2) 4トレンチ全景(北西から)



(3) 4トレンチ南壁土層断面
(北西から)

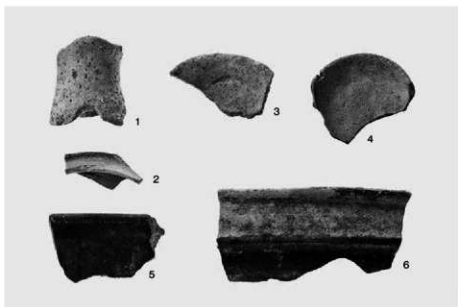




(1) 5トレンチ全景(北西から)



(2) 5トレンチ南壁土層断面
(北西から)



(3) 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第149冊
編著者名	
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番03 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2012年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯		東経		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	' ' "	' ' "				m ²	
だいにそとかんじょうどうろかんけいせいせきながおかしやうあとうきやうだいきゅうひやくよんじゅうろく・きゅうひやくろくじゅうきゅう・せんろくじ・すずたにいせき	ながおかしやうしちょうしにちやうめ、ともおか、おとかいいにじたかやま・はらだ・すずたに	26209	107	34° 54' 32"	135° 41' 24"	20080617 ～ 20090217、 20090408 ～ 20091222、 20100823 ～ 20101110、 20091019 ～ 20091222 20100118 ～ 20100225、 20100601 ～ 20101028	9250	道路建設		
京都第二環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第946・969次・1006次・鈴谷遺跡	長岡京市調子二丁目、友岡、奥海印寺高山・原田・鈴谷									
ながおかしやうあとうきやうだいでんせんさんじゅういちじ・かいでんいせき・かいでんこふんぐん	ながおかしやうしかいでんにちやうめ	26209	63 80 107	34° 55' 32"	135° 41' 20"	20111024 ～ 20111125	120	道路建設		
長岡京跡右京第1031次・開田遺跡・開田古墳群	長岡京市開田二丁目									
ながおかしやうあとうきやうだいでんせんじゅうななじ・まつだいでんせいせき	おとくにぐんおおやまぎきやうあざえんみやうじおあざまつだ	26303	18 23	34° 54' 20"	135° 41' 29"	20110801 ～ 20111006	350 (上場： 600)	道路建設		
長岡京跡右京第1027次・松田遺跡	乙訓郡大山崎町字円明寺小松田									
ながおかしやうあとうきやうだいでんひやくよんじゅうななじ	きやうとしふしみくよどおおしもづちやう	26109		34° 54' 31"	135° 42' 33"	20110817 ～ 20111027	500	下水道		
長岡京跡左京第547次	京都市伏見区淀大下津町									
つばいせいせきだいでん	きづがわしやましろうちやうつばいまつお・まつおぎき	26214	42	34° 45' 33"	135° 49' 02"	20110711 ～ 20110819	201	道路建設		
梅井遺跡第5次	木津川市山城町梅井松尾・松尾崎									

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
京都第二環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第946・969・1006次・鈴谷遺跡	集落跡 集落跡 集落跡 都城跡 集落跡	縄文 弥生 古墳 長岡京期～平安 中世	ビット・土坑・流路 小型横穴式石室・ビット・土坑 井戸・溝・掘立柱建物跡・池状遺構	縄文土器・石器 弥生土器・紡錘車・石器・銅鏃 土師器・須恵器・埴輪・製塩土器 土師器・須恵器・土馬・瓦・無軸陶器 土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・石鍋	
長岡京跡右京第1031次・開田遺跡・開田古墳群	古墳	古墳	古墳の周溝・土坑	土師器・須恵器	開田古墳群東羅支群の1基
長岡京跡右京第1027次・松田遺跡	集落跡	中世	ビット・溝・集石・流路	土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・銭貨	
長岡京跡左京第547次	都城跡	長岡京期	顕著な遺構なし	顕著な出土遺物なし	
梅井遺跡第5次	集落跡	弥生～中世	顕著な遺構なし	顕著な出土遺物なし	

所収遺跡名	要 約
京都第二環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第946・969・1006次・鈴谷遺跡	<p>調子b地区の調査は平成20～22年度にかけて実施し、縄文時代晩期・弥生時代中期から近世にいたる遺構・遺物を検出した。調査は微高地とその周辺の低地で行い、微高地上では縄文時代晩期のビット、弥生時代中期の土坑、平安時代は掘立柱建物跡、土坑、小柱穴、溝、中世段階の池状遺構、建物跡、井戸、土坑、近世の耕作関連の小溝群や井戸を検出した。それぞれの時期で生活が営まれたことが判明した。微高地下の低地では弥生時代から中世にいたる流路跡や氾濫原を検出した。また、微高地の西側を巡るように、自然流路を検出した。この流路は弥生時代～平安時代後期にかけて、流路をわずかに変えながら流れていたものである。この流路がほぼ廃絶して以降に、微高地下の低地が離水したようで、水田・畑作地として土地利用されている。13世紀以後、微高地でも集落関係の遺構は確認できず、調子地区全域は生産域として土地利用されたと考えられる。なお、調査地は長岡京条坊復原によると、右京九条三坊二・三町に当たるが、長岡京期の遺構は検出できなかった。弥生時代の遺構が遺存していることから後世にさほど削平を受けているとは考えにくく、長岡京関連の造作はこの地に及んでいなかったものと判断される。</p> <p>鈴谷遺跡(鈴谷密跡)の調査では、古墳時代後期のビット、終末期の横穴式石室を検出した。出土遺物には縄文時代、古墳時代前期～終末期、長岡京期のものがある。近隣には鈴谷密が周知されているが、関連する遺構・遺物は確認できなかった。古墳時代前期から中期の遺物としては、円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪片が出土した。今回の調査で古墳は確認できず、近隣でも周知の古墳は確認されていないことから、同時期の未知の古墳が埋没しているか、もしくは後世の土地利用により破壊された可能性が考えられる。古墳時代後期のものとしてはビットを検出し、遺物もこの時期のものが主体をなす。遺構・遺物から類推すると、集落的な様相を示しているが、住居跡は確認できなかった。古墳時代終末期になると、横穴式石室が造られ、墓域として利用されている。長岡京期の遺物は、斜面地や斜面下の平坦面で土馬等が少量出土した。長岡京外の丘陵地として、祭祀行為を行う場所となっていたことを示す資料と考えられる。</p>
長岡京跡右京第1031次・開田遺跡・開田古墳群	<p>調査は4地点において実施した。1・2トレンチでは、後世の攪乱や削平を受けており、近世以降の溝を検出しただけである。3トレンチでは、調査区の北端において東西方向に走り、東端で南へと屈曲して延びてゆく溝1条を検出した。この溝は、右京第995次調査で検出した溝S D301に続いていくものと判断し、一辺14mの方墳を新たに1基確認することとなった。4トレンチでは、この方墳の埋葬施設の確認を目的に調査したが、中世の土坑を1基と柱穴2基を検出しただけであった。以上のように、調査地は、長岡京右京六条一坊十六町に当たるが、長岡京期に関連する遺構を検出することはできなかった。今回の調査で検出した方墳は、開田古墳群東羅支群に属すると考えられるもので、これまでに11基が確認されている。今後、開田古墳群の支群を整理する上での貴重な資料が得られた。</p>

長岡京跡右京第1027次・松田遺跡	調査により、右京第997次調査で検出した櫛列に連なる柱穴を検出し、その南で東西方向の素掘り溝を検出した。この溝の方位は右京第997次調査で検出した中世の居館の掘立柱建物跡や櫛列と同じであり、しかも南側に遺構はないことから、居館の南を限る溝と推定される。これ以外には南北方向の流路跡を検出したに止まり、長岡京に関連した遺構や古墳時代の堅穴式住居跡などの遺構は確認できなかった。長岡京については京外に位置するためと考えられ、古墳時代の集落遺構は小泉川の流路により削平されたためと考えられる。
長岡京跡左京第547次	今回の調査では顕著な遺構・遺物は確認されなかった。土層の堆積状況からは、淀川に近接して形成された湿地あるいは荒蕪地であったと考えられ、水田など耕作地として利用されたが居住地としての利用はなかったと考えられる。
椿井遺跡第5次	今回の調査では顕著な遺構・遺物は確認されなかった。出土遺物から松尾古墳群を構成する古墳が存在していたと推察されるが、竹林として利用された際に削平され消失したと考えられる。

京都府遺跡調査報告集 第 149 冊

平成24年 3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141